明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

明治四十二年六月一日發行
（每月一回一日發行）

女學世界



第九巻
第八號

美顔水

美顔料として世界に名高き美顔水

品質精良にして色を白くしきめをこまかにつやを出す効力は天下類なし

又おしろいのとき水として化粧に用ゆれば巧妙なる作用にておしろい濃く淡く心の儘にのび常に用ゆれば花の顔ばせ雪の肌となる眞に美顔料として重寳なる發明品なり

定價＝拾五錢、廿五錢、特別製五拾錢なり

○本品御購求の節は化粧用美顔水と御指名を乞ふ

▲東京市内は勿論日本全國各地到る所の有名なる化粧品小間物店にて販賣す



淑女令嬢方は常に美顔水を愛用す

女學世界第九巻



第八號目次



新製

御料たつた

純無鉛白粉

◉此白粉出で、ことしの夏こそ



◉お顔の艶の一際見違ふべく候

束髪模型陳列會

六月一日より

束髪研究の爲當時交際社會の女王と仰がれ玉ふ某々貴夫人を始め都下有名の御婦人幷に名妓等の結ばるゝ最新のスタイルを功妙なる模型と寫眞にて御高覽に供し猶御目新しき束髪用品及び季節向の小間物袋物るい夥多取揃へ陳列致候間何卒賑々敷御光來の榮を賜はり度伏て奉願上候

六月一日より十五日まで　改築一週年紀念大賣出し

御買上高五圓毎に甲福引券一葉贈呈（一等五十圓・二等拾圓・三等五圓・四等一圓・五等半圓何れも商品切手・六等風呂敷・七等銀貨入

御買上高一圓毎に乙福引券一葉贈呈（一等拾圓・二等五圓・三等一圓・四等半圓何れも商品切手・五等石鹼・六等タヲル・七等ハンカチーフ

京橋南傳馬町

大西白牡丹

電話本局三十番、三千番
振替口座九二九三

女（いの二）

女(いの二)

現今各家庭ノ最大問題ハ髪ノ油ハ何ヲ用ユベキカニ在リ

みやけ油は全國中最良の純粹椿髪油にして村井弦齋先生の賞賛を博したる帝國中唯一の最優等品なり

(此の商標に御注意)

みやけ油

登録商標



◎偽物四方に顯れたり

東京人形町通三宅堂本舖

電話浪花六二〇番

振替口座東京八七五一番

御注意◎三美人商標の下に東京人形町通三宅堂本舖となきは偽物也

定價

純粹椿みやけ油	特大 八十五錢	大 四十五錢
	中 二十五錢	小 十五錢
香入みやけ油精製	大 三十錢	中 二十錢
	小 十三錢	
高等みやけ香油	大 四十五錢	中 二十五錢
	小 十五錢	

◎送料孰れも十二錢郵券代用一割増

販賣は全國重なる小間物化粧品賣藥店に有之候

みやけ油の特色

三宅油を不斷にお用になればまつ黒に光澤麗しく産後髪毛が拔ける場合等に用ゐて毛の發育を速やかにし濃い髪を得る事が出來ます。また老年になりても白髪を生じません等はみやけ油に限ります

やせる藥ヨヂピン

は余が多年苦辛の結果創製せる新藥にして有病と無病とを問はず肥大せる人々に對して卓効を奏し兼て肥大より起る諸他の危險症を防止し容姿を美ならしむ一大靈藥たる事を告白す

醫術開業試驗委員陸軍三等軍醫正

從六位勳四等醫學士

田村化三郎

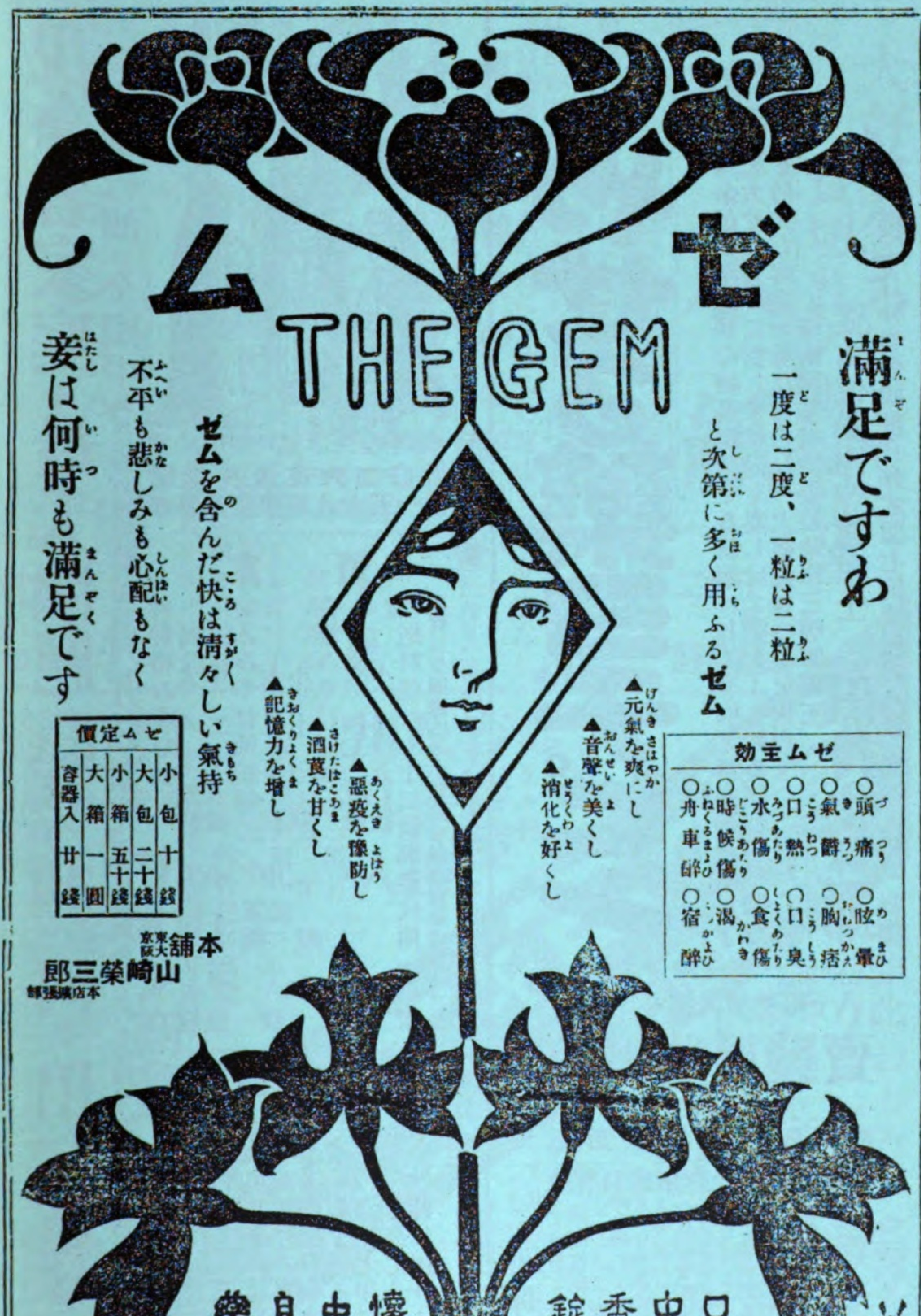
◎藥價(十日分金壹圓卅日分貳圓七拾錢送費八錢)郵券代用一割増

東京日本橋區檜物町十八

龜田藥局發賣

電話本局一一四五番

振替口座東京一八六九五番


ゼム
THE GEM
満足ですわ
一度は二度、一粒は二粒
と次第に多く用ふるゼム
▲元氣を爽にし
▲音聲を美くし
▲消化を好くし
▲悪疫を豫防し
▲酒莨を甘くし
▲記憶力を増し
ゼムを含んだ快は清々しい氣持
不平も悲しみも心配もなく
妾は何時も満足です
ゼム主効
○頭痛 ○眩暈
○氣欝 ○胸痞
○口熱 ○口臭
○水傷 ○食傷
○時候傷 ○渇
○舟車酔 ○宿酔
ゼム定價
小包 十錢
大包 二十錢
小箱 五十錢
大箱 一圓
容器入 廿錢
本舗 東京 大阪 山崎榮三郎
本店販賣部
口中香錠
懐中良藥

初夏の山村



田中製版所三色版

●婦人の涙

（其原因は男子の罪なり）

近來癪に苦み常に不妊を嘆つ病婦の到る處に見るが其最も多き病狀は下腹痛み鼻汁の如き白帶下あり腰筋張り顔色蒼白にて從前の病歷を聞に始め必ず「せうかち」に罹たりと云ふ其病名が子宮病血の道などに云程でも皆痳毒の爲なれば現に永引て治らぬが第一の證據である曩に痳病の病原見後婦人病の大部分は痳性疾患が其原因と成る事が學者の研究に依て證明されて其治療上に一大革新を與へたれば最初「せうかち」の時に十分の手當最も肝要なり凡そ痳病梅毒を根治するには必ず唯一丸に限る唯一丸は現世唯一の驅毒藥を以て最も親切に調劑したれば實に面白き程効力ありて拭ふが如く根治すべし故に多毒質の人は是非服用の必要がある

根治完能唯一丸藥價三日分四十錢●七日分八十錢●十四日分一圓五十錢●三十日分三圓（内地遞送無料）

●本病患者の爲に其病理養生及治療法親切に詳述せる冊子無代施本送料三錢要す

發行所 東京市本郷區湯島天神表門中坂上 藥劑師 **中西莊吉** （振替貯金東京口座千五百番）



女（その二）

は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる秘密薬を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し之に最近の發見に係る生毛に關する新説を参考し最新薬を配合したる世界無比の學理的最新薬なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き薬が山師的に無責任の廣告を以て販賣する賣薬品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する亮丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗悪の賣薬にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脱毛するを防止し抜毛の再生を早めナケド、デキモノ、ハツホー、キリキズ等の禿に生毛せしむる事請合薬價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割増の事

●●●取次所ナキ地方ハ直接本舗へ注文アレ●●●

三河國碧海郡刈谷町済世館薬局主
醫科大學卒業薬劑士 中島龜之丞鑑製
本舗 從七位勳六等

●大取次左ノ通リ● ●大取次附近ノ各薬店ニアリ●

東京市
本郷六丁目赤門前 瓜生薬局
麹町區紀尾井町三 齋藤薬局
日本橋檜物町十八 龜田薬局
京橋區八官町八 野田薬局
神田淡路町二の四 森田薬局
芝田町四の一二 加藤薬局
芝愛宕下町一ノ二 岩本支店
赤坂田町四の一 竹内薬局
同青山北町五 西井薬局
本所吉岡町廿五 小島薬局
四ッ谷大傳馬町二 永野薬局
高松市片原町 新明薬局
堺市大寺南門東入 一色薬局
京都市上京區寺町通り石薬師角
京都市下京區五條通り富小路行當り

大阪市平野町二 丹平商會
丸龜市本町 櫻井薬局
名古屋京町三丁目 飯田藤七
同同同 荒川長太郎
同鐵砲町三丁目 谷田薬局
神戸元町一丁目 西村關東局
廣島市橋本町 萬代春堂
神奈川青木七軒町 水崎薬店
仙臺市新傳馬町 櫻井薬局
岡山市橋本町 加藤薬店
弘前市下土手町角 菊地薬店
大津市菱屋町 磯崎薬局
福知 薬局
安江洋反物店

肺病患者の福音

醫科大學薬學專攻 薬学得業士金澤凝著

著者肺病全快の經驗と最近の學説に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本

●東京市下谷區上根岸町 衞生書院



堅牢無比懐中
手風琴
本品は最も優美且高尚の小形なる手風琴にして音律の正確なる音聲の强大なる事舶來手風琴に異なる事なし左れば旅行散歩等には至極輕便なり獨習書附屬す

正價 上製金壹圓八拾錢 並製金壹圓五拾錢

送料拾錢切手代用一割増

大阪市東區和泉町貳 視商會

振替口座大阪拾九番

蹄鐵印

シヤタ―リヨン葡萄酒

●藥用飲料並食卓用進物トシテ最モ妙ナリ

●至ル處取次店アリ

發賣元 東京本町 鈴木洋酒店



女(ろの二)

女(ろの三

女ろ（の四）

繪合



松風



一條成美画
三宅花圃筆


煉香油
パール
スミレ香水
發賣元
東京市 平尾分店 横山町
(はの二)

女(はの一)



最優秀なる

ピアノ
ヴヮ井オリン
オルガン

其他西洋樂器各種

東京銀座
松本樂器合資會社

目錄郵券二錢送付次第進呈

電話新橋二二九八番
振替口座東京一三五〇五番

女(はの三)

子宮病の夫人令孃に

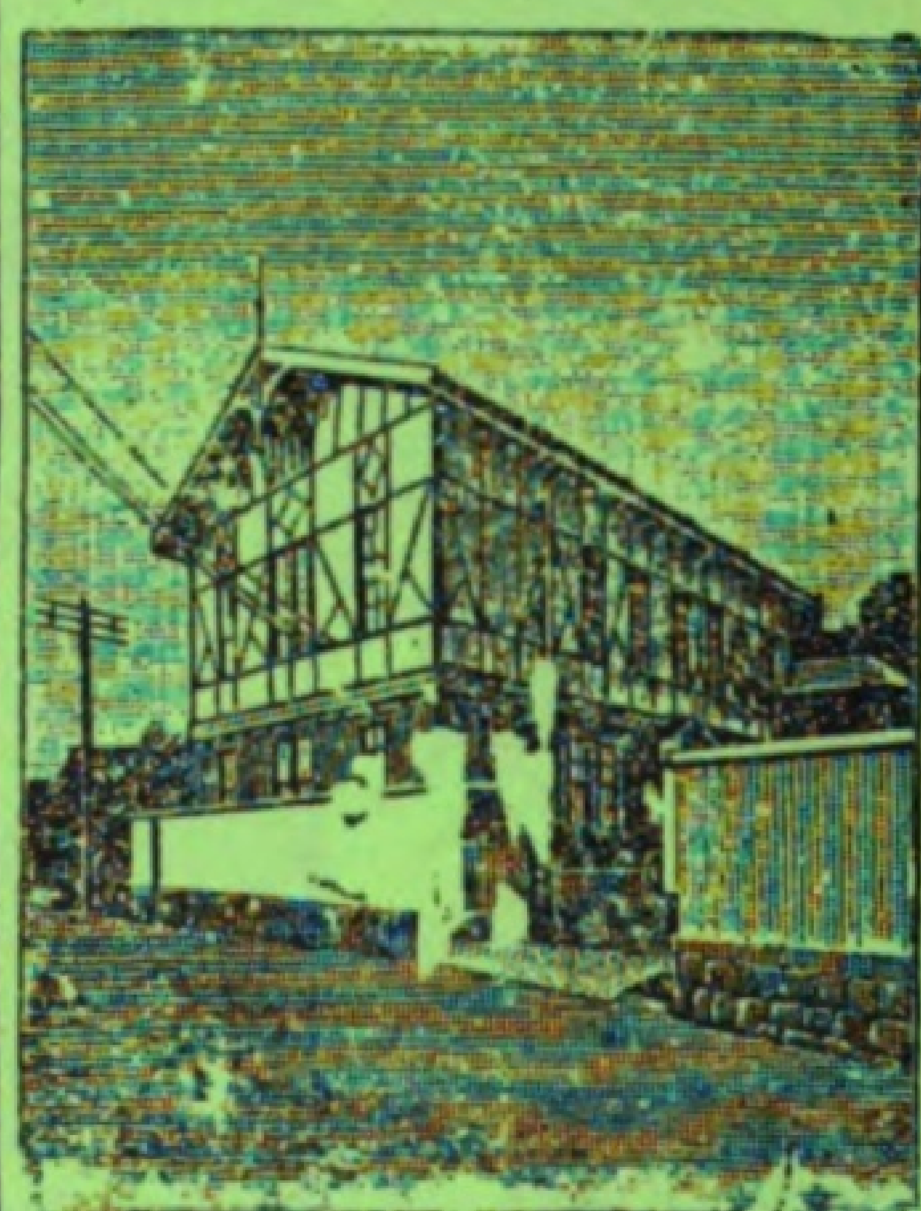
赤白帯下
子宮内膜炎
ながちゑち血

婦人向き雜誌の衞生欄を見るに此病氣にて御困りの方が大分有升が局所丈に遠慮せらるゝ夫人令孃も多數なるべし婦人科醫は患者の弱點に附込み可成長く引付け置んとして猥に夫人令孃の神聖を汚すとは東京朝日を看られよ本院は大學病院の組織同樣醫藥全く分立し本病に對しては殊に搔把タンポン挿入洗滌等の羞耻を與へず四六時中接觸する夫も知らぬ間に全治せしむる簡便秘治の自宅療法を敎り頭重氣懶肩凝胸苦手足腰冷經痛甚く惡臭液出で股爛痒痛等皆是が元なり本院は通信療法を以て天賦の快樂を得せしむ夫人令孃の喜び此上なし切手四錢送れ親切に詳報す

無限責任 **震天堂醫藥院** 岩代國伊達郡梁川町
製劑主任 藥劑師 海上龜壽

エハガキとアルバム

東京小石川
日本葉書會



生徒募集

東京神田裏猿樂町

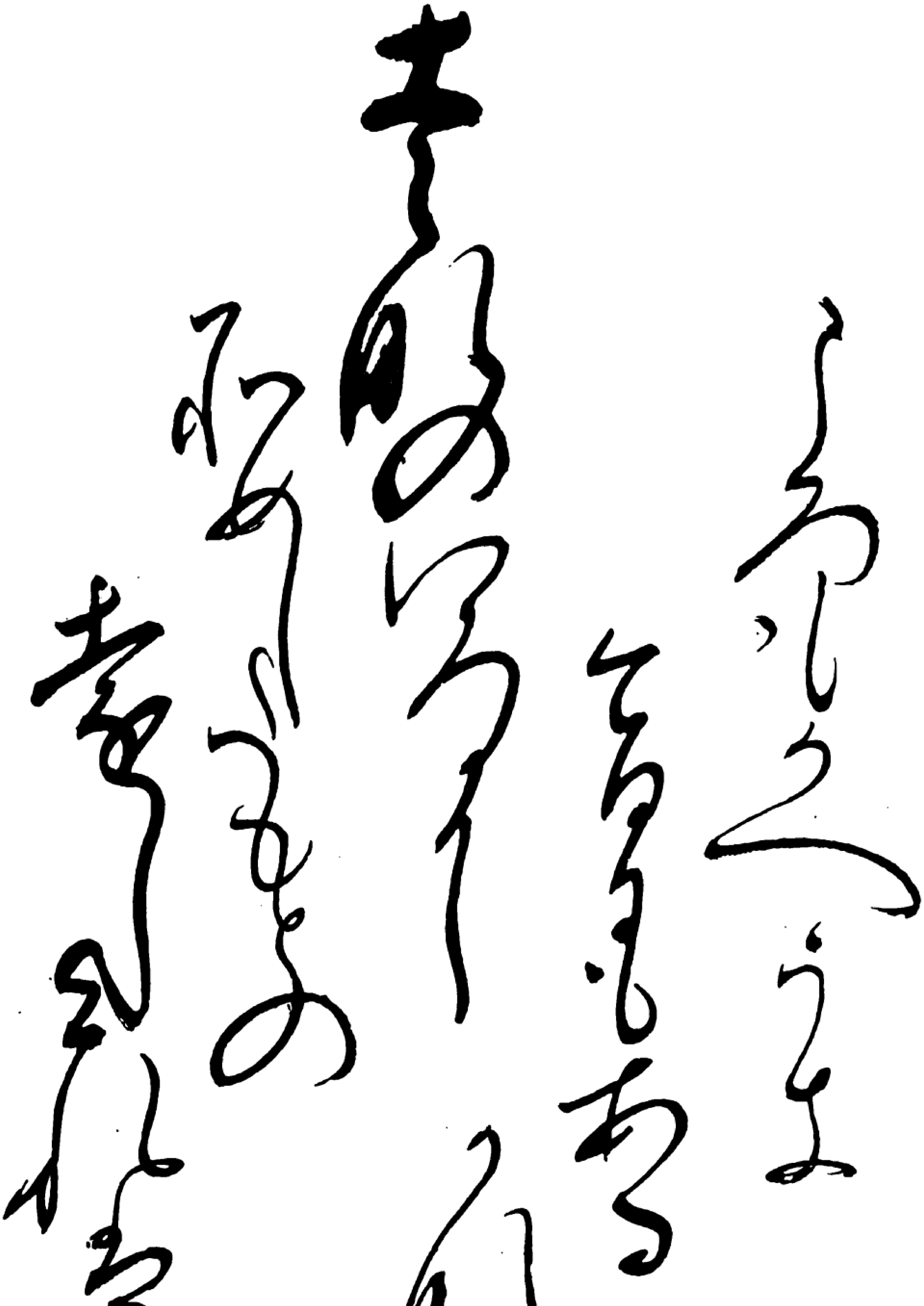
東洋音樂學校

科目
唱歌
オルガン
ピアノ
バイオリン
其他樂器…敎授

さみだれ



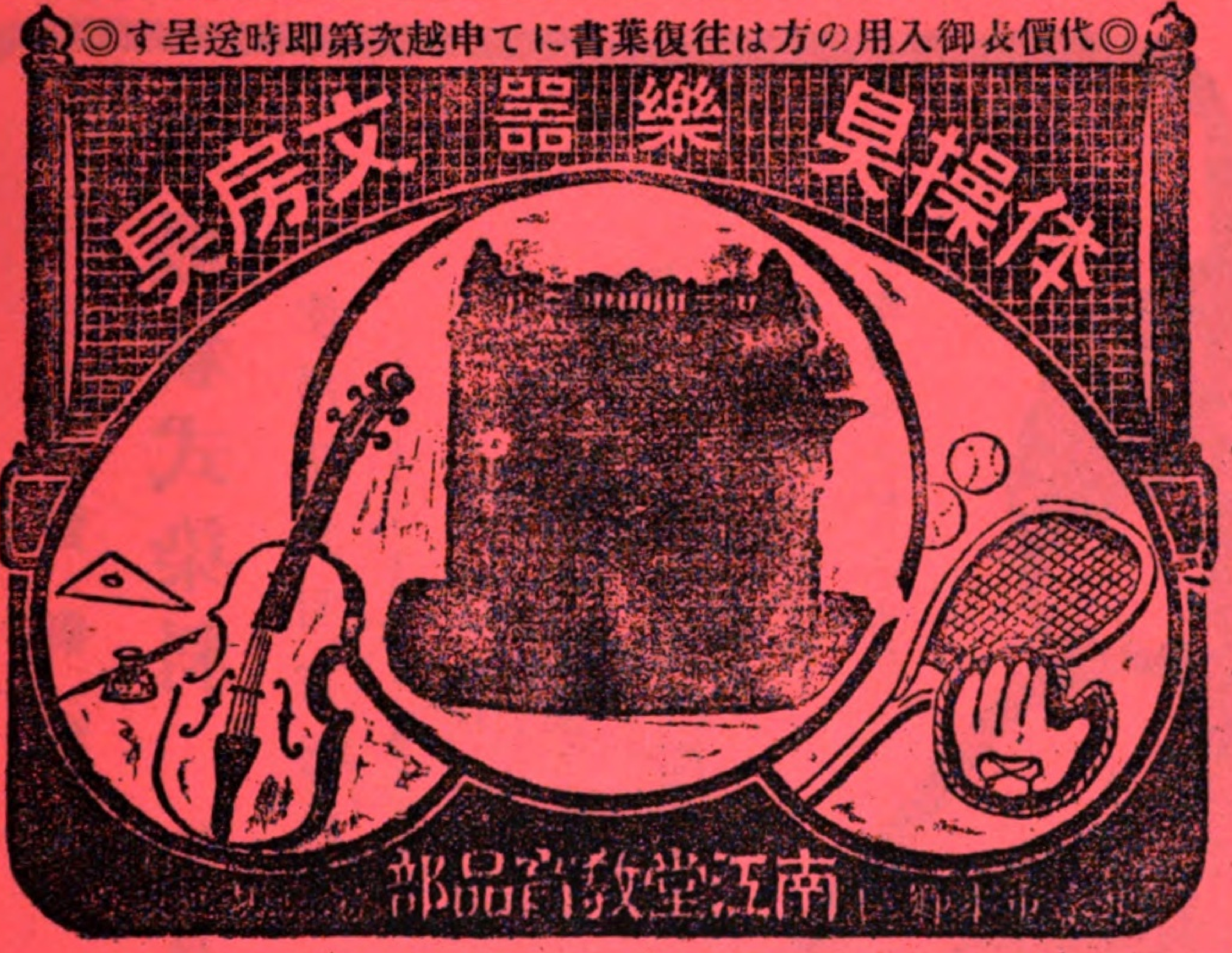
水野秀方筆



青木歌子筆


發賣御案内
最新式染料
拾貳種及拾八種
使用法說明書添附
天野卯兵衛商店
東京市日本橋區橫山町一丁目拾六番地
（電話浪花一六四三番
（振替口座四九七〇番
營業案内は郵送料
四錢封入御申込あれ
美術造花材料

女（にの一）



電話下谷一三三〇番

根治確證

わきが

新治療藥ラピヨン

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を清潔驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特製を用ひよ

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脱せよ

丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢送料拾五錢

毛のはへる

毛髮生長液 原名ヘグネス

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ有力なる最新液にして早く毛をはやしたき人試みられよ◎ぬけ毛落毛を止めはへぎわうすき人◎まゆ毛◎口ひげ◎其他の所に毛なき人用ひよ毛髮增生す◎頭などにはげのあるのは見苦しき者也

化學製品

色の白くなる

防ハンドコロン溶液

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料拾五錢本劑は貴紳淑女粹士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝をし盛に皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

最良 月さらゑ メソルピン

メソルピン此藥は子宮を痛ず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は効能極て強烈なるも毫も身體に害なくたやすく下る、月經不順より起る血の道を全治し古血を一掃す子宮血の道治し價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製貳圓卅錢送料拾貳錢◎電話下谷二五三五

專賣 東京神田區小川町東明館前 オリエンタル藥館

女（にの二）

家庭と文學（調和）無類（好評）雑誌（内容は實物に就て御覧下さい）

女子文壇

六月一日發行　每月（一回）　五卷第八號　一冊拾五錢　郵税壹錢五厘　半年（八冊）壹圓參拾四錢

▲本號主なる記事

●故山川登美子女史の歌……與謝野寛
●（英文）記憶すべき格言　河井道子
●いらいらする時の虹　加藤介春
●新樹……金子薫園
●美文の作法……西村醉夢
●花言葉……水野葉舟
●靜に暮るゝ春の夕　人見東明

本文百七十頁、美麗口繪十葉

●心の働きを正しくする手近な智恵……羽仁もと子
●最初の接物……永井荷風
●小説を讀むには批評眼を養へ……宮田脩
●一風變つた清國の結婚式……清藤秋子
●婦人に確信を持たせたい……田添幸子
●文字に傳へがたき東京の空氣……河井醉茗
●女をチャームする三越呉服店……みやこどり
●巧妙なる男子の手段を看破した事實……原の女
●青春の女子が熱血を注げる文章＝詩歌無慮數百篇雑誌界唯一盛観
＝投稿自由懸賞確實
▲衛生問答　醫學士北島孝夫擔任

（その三）

發行所　東京京橋區大鋸町　女子文壇社（振替貯金口座壹九七貳番　電話本局六〇七番）
賣捌所全國到處にあり

大懸賞

あててごらん

はがき一枚で金側時計

この白粉は評判の高い大流行の無鉛白粉であります



この白粉はドコの化粧品店にても販賣されてあります

はがき一枚で寶石入指環

賞品

◎一等
婦人持十八金側時計　貮人

◎二等
寶石入金製指環　五人

◎三等
貴婦人持絹張洋傘　拾本

◎四等
最新佛國式鹽瀬織オペラバック　三拾人

◎五等
貴婦人用懐中鏡　三百人

問題

(一)この大學帽を着た美人の持てる白粉は何と云ふ名の白粉ですか?

(二)この美人の持てる丸い白粉瓶のレッテルの中に何と云ふ文字が書てありますか?

規定

前記の二問題を「はがき」に書き見た雑誌名を付記し六月十日迄に左の所へ出せばよろしいのです。正解の「はがき」は東京大阪各新聞社立會の上嚴正なる抽籤法を行ひ當籤者は六月二十日以後の各新聞で發表いたします

回答申込所

東京日本橋區三代町五番地
矢野芳香園廣告部出張所

(二〇四)

花あやめ



川田男爵令妹　道子



岡部子爵令嬢　榮子

雙葉會の送別

女子英語雙葉會のウエストン女史が歸國に付送別の紀念撮影



毛髮を黒く長くふさ〳〵する
椿油にて精製したる
女學世界愛讀者に限り本店は一割引

ランラン香油

毛髮の營養には椿油ほど好い者はありませぬこれは衞生大家及び毛髮を大切にせらるゝ御婦人方の實驗證明せらるゝ處でありますが此普通の椿油は厭らしき臭氣がありますから之を除去せねばなりませんランラン香油は最も純良なる椿油に毛髮の營養に必要なる藥劑を加へローズバイオレットの高貴なる香料を以て彼の惡臭を防ぎ毛髮の助育を專一としたる香油也

發賣元 大阪西區新町通三丁目 福田源次郎商店 電話西千六百壹番 振替口座六〇八六番

東京販賣所
日本橋區通旅籠町 佐野大和屋
日本橋區横山町 森本支店
日本橋區檜山町 脇田盛眞堂
神田區橋本町 松井號支店



色を白く肌を艶麗ならしむる
レモン牛乳にて製せる
兩種共一瓶定價各廿五錢送料八錢づゝ

ランラン化粧水

皮膚の營養には牛乳に勝るものなきことは皆樣の御承知のことでありますが近頃亦レモン液の肌を純白ならしめ殺菌の効あること發見せられましたランラン化粧水は牛乳とレモン液とを調配したる最新最良の美顏劑を加へて色を白くし小皺を伸し吹き出ものを除き夏季の日燒け冬季のあれを防ぐ特効ある化粧水なり

女(ほの一)

女（ほの七）

女(つぼの三



畏き邊りの
御料に召させ給ふ
高貴御化粧料
御園白粉
東京芝
製造本舗
伊東胡蝶園
發賣元
東京日本橋區橋町四丁目
丸見屋商店
御園白粉
御園クレーム
御園の蕾
高等化粧水
御園の露
御園なでしこ
濃厚化粧水
御園四季の花
高等香水油
御園香油
高等香水
御園香水
高等はみがき
御園齒磨

(其の四)

薫風



右 男爵原田一道氏令孫信子
左 子爵松平直和氏令孃信子
中 佐藤暢氏令孃千代子



右 鍋島侯爵若夫人禎子
左 前田侯爵夫人渼子

綠蔭



都の花石鹸

石鹸界の白眉

美人は何を用ゐて其美を増せしか
曰く都の花石鹸の力を藉つて其艶を發揮せり



芳香の高雅にして品質の純良なるは
紳士淑女の愛用と名譽の金牌とに依り知らる

大阪
本舗　野村外吉

◀全國到る處の化粧品雑貨店に販賣せり▶

女（への二）



ムレー及ランマン製「フロリダ、ウオーター」はハンカーチーフに撒らし又は化粧、沐浴等の使用に向つて最も高尙適當なる上品にして香氣優雅常に心身爽快を感ずるを以て洽く世界各國に高評を博せる香水なり



本品は芳香馥郁なる花卉及薫氣を蒸溜して採取せる純粹の原料を精選して鑒造せるものなれば四時其香氣を變ずるの憂あることなし、是れ本品が殆ど過去一百年間貴紳淑女間に其聲名を認識せられ世界的流行の高等化粧品として賞讚愛用せられし所以にして決して偶然に非るなり

近時本品の成効を羨み粗惡品を僞造し廉價を以て之を市場に販賣せんとする奸商輩出し本社が古來貼用し來れるレッテル即ち蝶と小鳥とが花の飾環に息ひ中央の花壇上に噴水奔騰し右方には一青年の音樂を奏し左方には一少女の小鳥と遊べる等の繪畫を僞造し且つ英文にて印刷しある「フロリダ、ウオーター」、ムレー及ランマン、紐育市ランマン及びケンプ特製」等の文字の配置を巧みに模倣するに至れり

之に依つて本社は前記の弊害を防がんが爲め玆に圖を以て示せる如く「ランマン及ケンプ登錄商標」と記せる白色のレッテルを各瓶毎に貼付せり御購求の際は深く御注意あらんことを希望す

本社製造の「フロリダ、ウオーター」は日本帝國の各都市に於ける化粧品販賣店及び西洋小間物店等にて販賣す

女（への二）

見よ 最近絶好の新療法
讀め 醫界空前の大成功

從一位侯爵久我閣下題字、腦神經專門醫學士常持先生述

腦神經衰弱ヒステリー療法

事業家、學生、試驗前の無理勉强其他過度に精神を勞し故なく煩悶を事とする腦神經衰弱ヒステリー患者の救命主は即ち本書也

送費貳錢送れ 進上

施本所 東京京橋區弓町二十二番地 弘濟院



佛國土産の最新白色新劑

色黑き、にきび、そばかす等にて困悶の士女よ本院特得の文明的新秘法により速に圓滿なる幸福を得られよ如何に其効能の神秘なる論より證據郵券二錢送れ美容のしるべ呈して敎ゆ

東京市東兩國小泉町二十七番地 愛隣藥院

二大奇法

ちゞれもくせも もはへうけあい

妾の手がけた方で此病にて諸種の買藥して癒えぬ人悉く治りし故夫れで皆樣の勸めにより世間に廣く御披露せし處一人として御喜び遊ばさぬ方なし御問合せ往復はがき

女髮結師 東京麴町區飯田町四の十六 安部歌子

にきび

吹出及其根跡黑きシミ有る人は返信料送れば余が至治せるクヷルーの絶對的必治法を詳報す

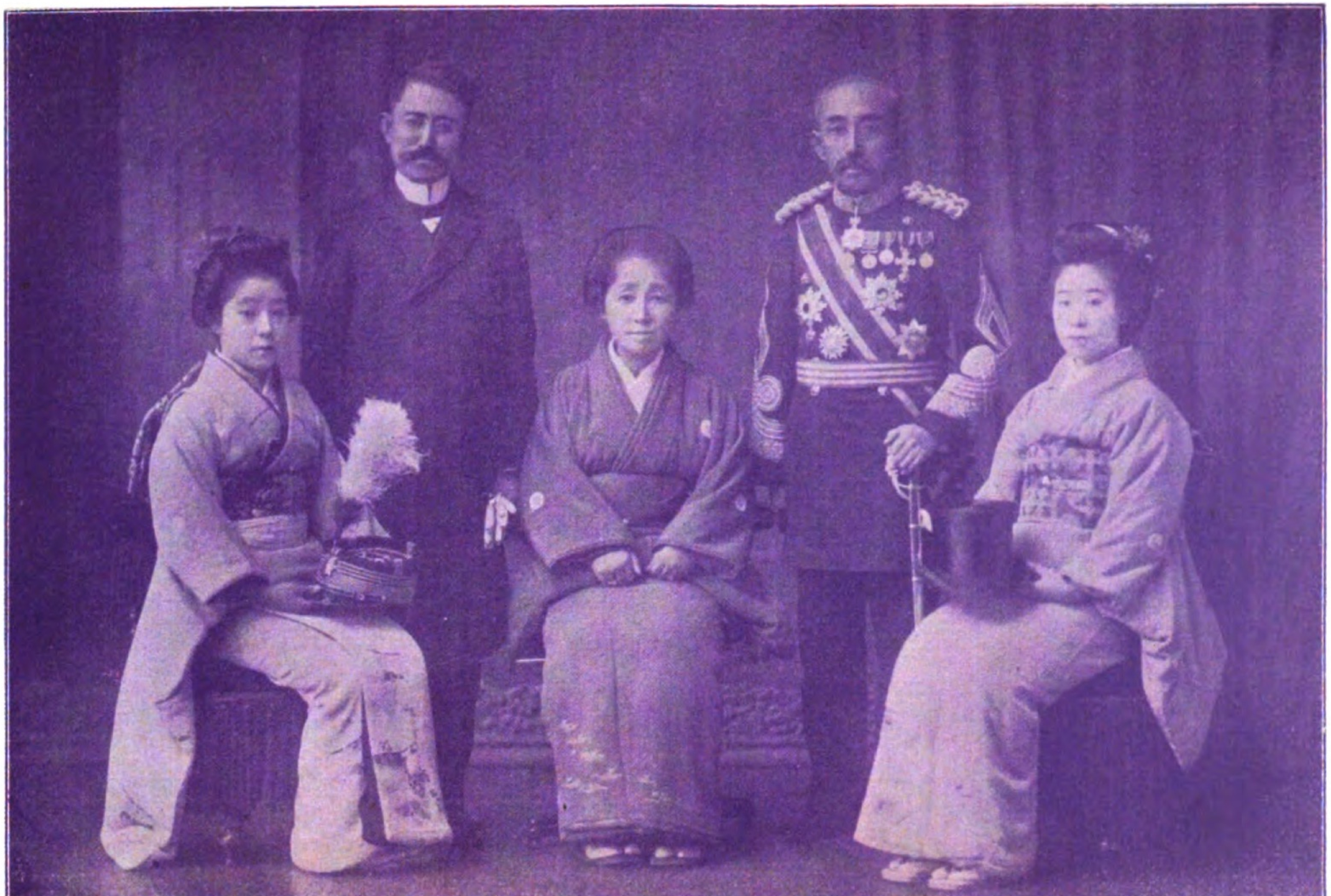
東京下谷區初音町日本女子美術學校前 長田



女(への三)

女(への四)

佐藤男爵の家庭




享和元年創業
日本ニ於ケル時計商之元祖
宮内省
御用達
卸小賣
營業品
概目
時計附屬品、指環、簪、
帯留、ブローチ、手釦
紀念品一式
最新の流行品目録郵券
六銭封入御申越次第進呈す
D.K.
東京市京橋區八官町九番地
小林時計店
電話新橋一〇〇三
電信略語コ(又ハ)コハ
振替口座七八〇七
紀念品
賞牌メタル
迅速廉價

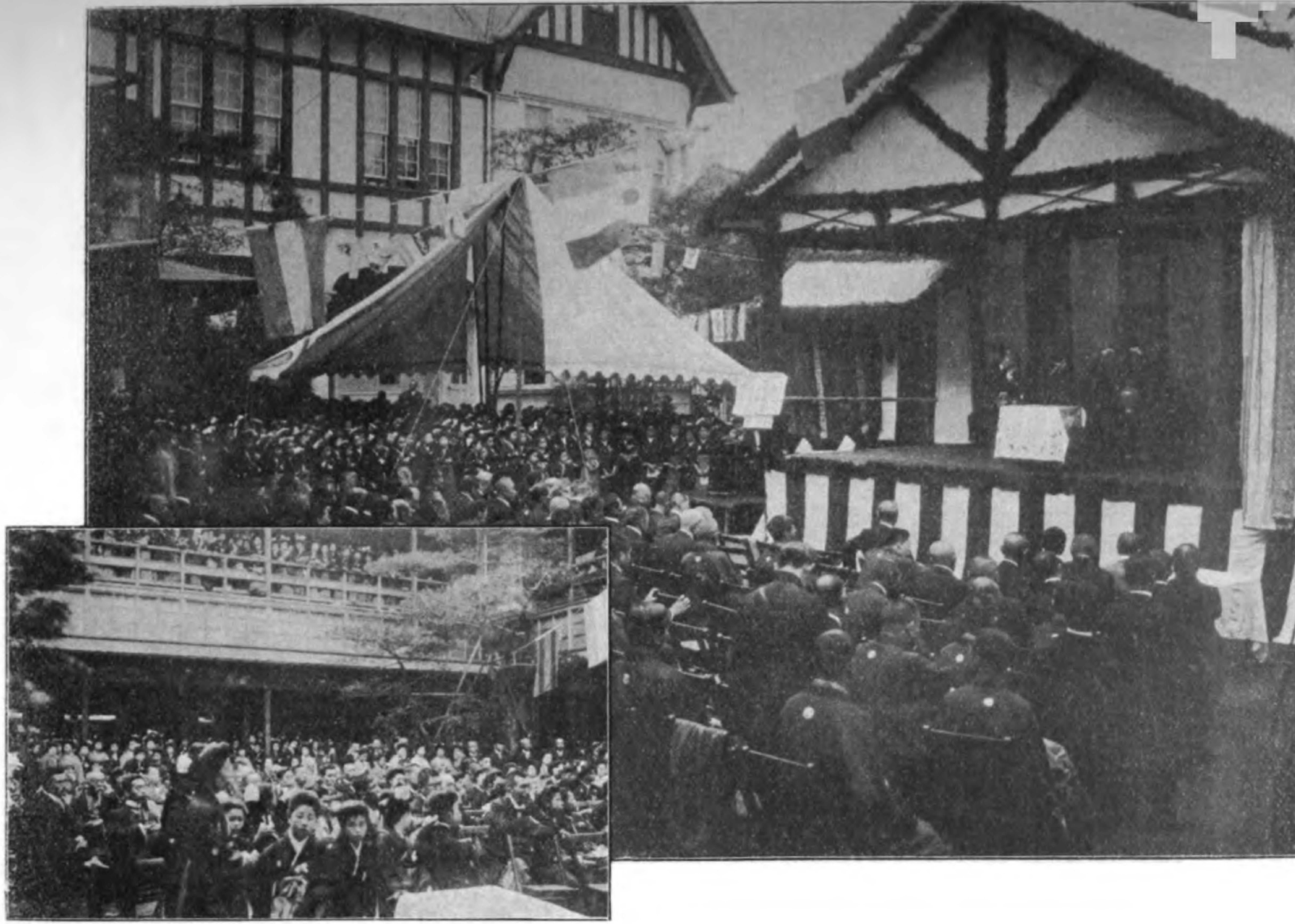
女（その二）

女(その三)



女（との四）

跡見花蹊女史の賀莚



五月九日日本橋倶樂部に於て

五十倍の効力ある

原名　ビユーチーフワイングメヂシン

美顔　ビユウテイ

乳白色化粧水の原料

小　金參拾錢
中　金五拾錢
大　金壹圓

◉其一滴は五十倍となり金盥の湯水に三四滴たらして用ゆれば

いろつや美白を呈しニキビ、タムシ、ハタケ、ナマヅ、ワキガ吹出物一切を全治しおしろいのりをよくし鉛毒を消し皮膚病を治し**見ちがふ程の美人となる**

科學進歩の賜最新流行の美白劑ビユテイなり

發賣元　東京神田區花房町　山崎帝國堂藥局

支舗　大阪高麗橋一丁目　山崎兄弟商會



(その一)

六月一日より

寄せ切れ、見切反物、其外

薄衣(うすぎ)大賣出し

各種小間物取揃へ置申候

大丸

日本橋區通旅籠町

大丸呉服店

電車ナレバ人形町

(ちの二)

實踐女學校の清國留學生



（卒業生）



校長 下田歌子女史



副校長 靑木文造氏



第一學年
講義開始

女子大學講義

好評嘖々

毎月二回講義發行
一回雜誌家庭配布
會費一ヶ月五十錢
何人も入會歡迎す

會員募集

女(りの二)

御婦人方は必ず讀で下さい

●本講義は本邦女學の淵叢たる日本女子大學校の編纂に成れり
▲現代家庭の事情を酙酌したれは如何なる女子にも悉く必要也
●加之何人にも能く了解するといふ標準を以て主旨特色とす
▲故に境遇事情に因り本講義の効果には決して増減ある事なし
●講義正確教育的なるは本講義が尊貴の御愛讀を忝ふせる所以
▲端書又は電話にて見本付規則書を請求して詳細を知らるべし
●機會は諸君の眼前に在り入會の好機何時にても初號より送る
▲家庭の幸福を希ひ圓滿なる主婦たらんとせば本日直に申込め

●婦人に高等教育を通信教授するものにて日本女子大學校內女子大學通信教育會の編輯にして毎月二回宛發行するものなるが成瀨校長の實踐倫理、福來博士の心理學、大澤博士の生理學、浮田博士の應用社會學を始め家事料理及び裁縫等にも一々專門の大家に依て叮嚀に講述せらるゝを以て地方在住の諸孃は本講義に依り高等の學術技藝を修得するの便あるべし(東京時事新報)……(大阪時事新報)

●各教授其他博士學士等が極めて親切に平易に必要な科目を講義して毎月二回發行し尙他に月一回家庭なる雜誌を發刊して其缺を補ひ其の修了年限は二ヶ年で僅かに一ヶ月の都會遊學費で優に全科を修了することが出來る地方女子敎育の爲には極めて好良なる機關である(やまと新聞)

○各科擔任講師の講義は精細に入る芳賀博士「日本童話傳說」は興味多し(國民新聞)

發行兼申込所 東京小石川區久堅町一〇八 精美堂 電話番町九三二 振替口座二八三八

世界無比

最新發明藥

あざ

入墨は廿日ほくろ
そばかす、なまず
いぼは拾日

目に必ず美麗に除去す痕跡なさず

ること保險附新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完うせよ來館者へは山の如き全治者の感謝狀及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なます、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模様を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢つゝにて郵券代用貳割增し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを徳用とす)着金即刻小包郵送す

●色白特効 ペーアス石鹸

此石鹸は世界第一等の眞品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を揭げん皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質を治するは此石鹸獨特の靈効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは箱主の實驗保證する所なり乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する內國製の粗惡品と玉瓦混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御註文を望む)

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

●毛の必ず生る確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぽうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、其他に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮蒼蒼と發生する特効あること確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉瓦混同視すること勿れ

藥價特別製分五圓卅錢▲大瓶貳圓卅錢▲中瓶壹圓廿錢

●奏効確證 美容新劑 やせる藥

本劑(藥名ヨードチリン錠)は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり。あぶらぶとり。酒ぶとり。顏赤くほてり。のぼせ症。卒中症等にて肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脫し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢着金即刻送藥す

●美き聲の出る新藥

▲藥名……ウエーヌス

▲聲美くしくして…淑女は窈窕たり▲聲麗しくして…男子に威嚴あり▲聲は人格を高尙ならしむる要素なり…謠曲家、演說家、音樂家、藝人は聲音即ち其人の生命なり。發聲藥は古來世に甚だ多し然れども其確効あるものは恐らくは疑はし。獨り此「ウエーヌス」の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり。「ウエーヌス」は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑なり。特別製分を服すれば直に充分なる美聲を發すること確證す。

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓廿五錢

腦病を根治し記憶力を增進する靈劑

滋腎回春記憶增進丸

(藥價)七週分參圓五拾錢五週分貳圓六拾錢參週分壹圓六拾錢壹週分六拾錢(送料)各拾錢宛

本劑は獨逸大醫スクリーボルト氏の新處方に基き醫學的の元理に徵し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば腦病、神經病を根本的に根治し精神爽快智力活潑となり記憶力大に增進し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記憶力缺乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記憶力大に增進すること誓て確證する所なり論より證據實試一番速に其卓絕顯著なる奇効を知れ

以上六種 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

女(りの三)

今は子供洋服の好季なり

男女の子供に洋服の恰好するは四季を通じて異なる所なきも取分け夏季が最も着用に都合よく容姿も優美に見ゆるやうである殊に稚兒には**ベビーボックス**が洗濯もき丶清潔にも見え甚徳用である唯に損德の點より打算した譯でなく近時一般育兒に注意せらる丶結果洋服が和服より幼兒の發育上利方なるを看破せられ社會は勿論地方より續々御注文を蒙ること唯に弊店のみの幸福に止まらざるなり弊店はこの御愛顧に酬ひ併せて此好時季を逸せず新柄にして體裁よろしく堅牢にして格安なる男女子供洋服幷に**ベビーボックス**を澤山取揃へてありますから何卒御來店の上お子供衆に恰好の品御撰み下されお買上げの程願上げます又東京市内御注文のお方は、電話本局二九〇一番、端書ならば神田鍛冶町廿七番地へ御申越し下さらば、畫形と切れ地見本を持參早速御伺ひ、御容姿に恰好いたすやう、調進いたします。



中野屋洋服店東京出張所圖

注意

地方の御方は御年齡と豫算とを御知らせ下さいますれば最も流行なる形で作つて御送り致し升

ベビーボックス目錄御入用の方は御申越次第贈呈

中野屋洋服店

（本　店）…橫濱市辨天町通り四丁目八十番地（電話三四四番）

（東京出張所）東京市神田鍛冶町廿七番地（電話本局二九〇一番）

（韓國出張所）…韓國京城……

女（べりの四）

山脇高等女學校卒業生





女(その二)


SIN
月賦販賣
和服モ縫ヘル繡ヒ取リモ出來ル
新式シンガーミシン
東京、京都
大阪、横濱 無報酬出張教授
裁縫書
進呈
横濱山下町
神戸明石町
大阪心齋橋
東京市銀座
シンガーミシン會社

幼年畫報
第四卷第八號 增刊



六月十五日發行

東京本町
博文館
振替口座番號
東京二四〇

さゝなみ作
岡野榮畫

ビショ〳〵ビショ〳〵雨が降る。どうしてこんなに降るのだろ。三日も四日も降り續く。ほんとに雲めわ憎い奴。お日樣如何にもお氣の毒。雲めが邪魔して顏出せぬ。僕等も外では遊べない。學校え行くにも不愉快だ。テレ〳〵坊主やテレ坊主。お前も雨には困るだろ。體わ一面紙だもの。ぬれたら死んだも同じ事。テレ〳〵坊主やテレ坊主。照らせや〳〵日を照らせ。照つたら褒美が貰えるぞ。テレ〳〵坊主よテレやテレ。

(ねの二)

新輸入 肉體美容料 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色**に**變化**し艶美の容貌となる確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

飲んで色白くなる特効新藥 サーサパリラ

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑强なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒、痳毒リウマチス等の病毒及び男女體内の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の内服水劑なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候)色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

價壹劑貳圓七拾錢參劑七圓五拾錢五劑拾貳圓廿錢也

らい病根治新劑

癩病患者の新福音――最新發見藥――(レプロイス)

藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製拾圓拾錢着金即刻小包密封送る

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多研究を重ね數千患者の實驗に徵し苦辛經營の末今回始めて完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すると到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚説に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絶し生涯永久の榮華を完ふせよ、輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

血塊流下 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衞生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑及び以上各藥の**大盛**を羨み近時續續怪しき無効なる**類似僞藥**紛はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんとを乞ふ



わきが 腋臭 根治確證新發見藥

從來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者は速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脱せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば**誓って根治**することを確證す殊に本劑にて一旦全治せば決して再發或は他病に變ずる患ひ無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる類藥と異なる處の本劑一種獨特の靈効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌せる病根を斷絶せよ實に不思議の新發見奇劑なり▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲(藥價)輕症根治分藥價送料共六拾錢▲重症根治分同上壹圓貳拾錢▲頑固慢性症根治分同上貳圓參拾錢▲切手代用は必ず二割增しの事▲着金即刻送藥す

以上五藥 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**

女(ぬの三)



時は經過す

櫻花爛熳とさいて須臾、花ふゝきと散りぬ。

春逝いて不如歸、また青嵐に白衣の人を見る。

嗚呼、時は刻々と經過す。過ぎてゆく瞬時は、われ等の責任なり。

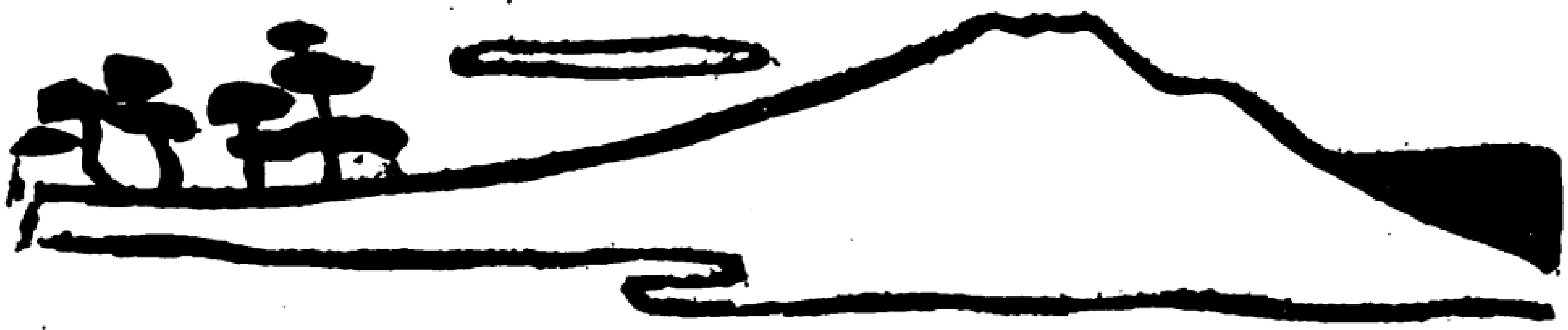
年少、能くパーリツトは、彼れが鐵工場の勞働中零細の時間をつみて、十數ヶ國の國語に精通せり。

ヘールは旅行汽車の中に、かの傑作を著はせりときく。

多く有爲の若き婦人、刻々、一刻を忘れて、悠々得るなき分時の有らざるは無きや。

進歩と退歩の分岐點は、必ずや、此の分時の裡に存せん。

萩花

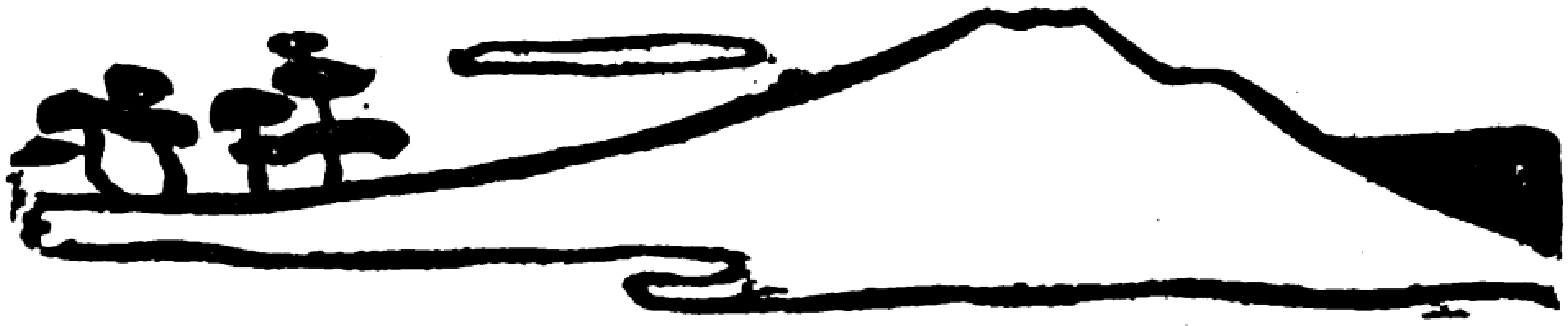


活きた世の中に働らく婦人

法學博士　天野爲之

△婦人ばかりで經營する大銀行

今から二三年前のことでした。私の友人がニューヨークから一冊の雜誌を送つて與れた。それは金融狀況に關する雜誌の臨時號であつたので、それには、丁度其時に亞米利加全體の銀行家幷にトラストの代表者がニューヨークに集つて一つの會を開き、そこで五分間乃至十分間位の極簡單な演說を皆それ〴〵にした。其の筆記が載つて居た。其れを見るとミツリー、ステートと云ふ處にあるショップリンと云ふ銀行の代表者が出て來て、矢張り演說をして居る。此の銀行は三十萬弗位の資本で、左程大きいものではありません。其の代表者と云ふのは其の銀行の出納係のチヨルスと云ふ婦人で、年は二十七八位だと書いてある。が、此の婦人は却々面白い事を話して居る。其人の話に依ると、其の銀行は、頭取が男子でカンニングハムと云ふ人であるが、そこには澤山の婦人を使つてあつて、重なる仕事は皆婦人がしてゐると云ふ事である。此のチヨルス自身の出納係と云ふ役目なども殆んど支配役と同じやうな者で、銀行の代表者として現はれて來る程それ程肝要な地位を實際に占めて居るのである。其人の話を讀んで見ると、其の銀行にはまだ五六人斯樣な地位に坐つて立派に仕事をやつて行く婦人があり、又小さな仕事をさせる爲にも澤山婦人を使つてあると云ふ事である。



△商業上に見る婦人の特長

今日世間では男が婦人に向つて自分勝手にいろ〳〵の惡口を言つて居るが、それは女に對して唯々感情的のことを言つたに過ぎないので、學問上から穿鑿して見れば、どつちが惡いと云ふ事はない。婦人が嘘をつくとか、男子が正直だとか云ふけれ共、實際は分るものでは有りませんたゞ今日は男が現在いくらか實權を有つて居るから、其勢力を濫用して婦人を壓迫してゐるのではないかと思はれる、で其の婦人の言ふには、銀行業などに從事する者は第一極めて行儀正しく禮儀正しくしなければならぬ。禮儀正しくすればお客をおこらす樣な事がないから、營業上に大に好都合である。不禮な言葉を遣つて金を貸さないと客はおこつて直ぐに喧嘩を始めると云ふことは能くある例であるが、婦人が應對して居ればそんな事は起らない。此の點に於て先づ男子よりも女の方が銀行業に適して居る樣である。それから正直、廉潔と云ふことが必要である。會社の金を取つて相場をすると云ふ樣な事では迚も仕事を任して置く事が能きない。然るに斯う云ふ惡い事をするのは矢張男子で、女子はなか〳〵さう云ふことをやらない。此の點に於ても女子の方が男子よりも適して居る。そして女子は人の邪正を見別くる直覺的の力をもつて居る。あの人は怪しい人間である、是は正直な人であると云ふことを見る直覺的の力をもつて居る。固より間違ふこともあるけれども、隨分能く見別けるものである。古來立派なる男子で婦人の此の力に依つて禍ひを免れた例が澤山ある。であるから、銀行の業務の如きは立派に女子が務めて行ける譯のものである。

△局長課長位の仕事は女子で十分なり

頭取のカンニングハムは其事を悟つたから自分の會社に女子を澤山雇つて、それを段々昇進させ進級さして、重要な地位に就かせると云ふことを始終やつて居る。それが爲に初めは五千弗か六千弗の僅な資本でやつて居つたが、十年ばかりの間に三十萬弗の銀行になつた。金額は僅であるけれども、進歩は非常な進歩である。自分なども初めに簿記者として帳面付けとして雇はれたのであるが、十年の間帳面付けをしたり、其他の仕事を手傳つたりして居る間に現在の地位に上げられたのである。自分はこゝに適當であるかどうかは別として、兎に角女子が銀行業に適せぬと云ふことはないと思ふ。男子の方はどうかと云ふと、之れも決して適せぬと云ふ譯はない。男子にも夫々特徴がある。即ち自分等が男子に對し大に尊敬する所は大體に通ずると云ふ點である。又一つの永遠の計畫を立てゝ之をドシ〳〵遂行して行くと云ふ事も女の及び難い點である。けれ共此大體の方針が定まつて斯うしろ、あゝしろと云ふ風に旣に定まつた項目を實行して行くべき一局一課の長のする仕事位なれば女子でもつて十分に務まつて行く、と云ふことを演說して居る。そしてお終ひの所へ行つて、喋々男子でなければならぬものは重い帳簿などを擔いで歩くと云ふ樣な事で、恁う云ふ事は男子が最も適任の樣であると皮肉な事をも言つて居る。亞米利加が今日の富を致したのは如何云ふ譯かと言へば、是にはいろ〳〵原因がありませうが、其最も大なる原因は即ち國民が生產的に能く働いて居ると云ふことである。殊に海軍や陸軍に人を使ふ事が尠ないから、國民は皆生產的に活動する事ができる。そして銀行などにも女子が今言ふ通りに仕事をして居る位であるから、純粹の商店などに女子が働いて居るのは勿論である。のみならず一家の經濟に就ても夫々經濟の智識をもつた女子が之れに當つてゐる多數の男が生產的に働くばかりでなくして、女子が皆商業なり、工

業なり、農業なりに關係して行く。之れが亞米利加をして今日の大を致さしめた原因であると思ふ。

△日本人の坐食して居た時代

所で日本の有樣を考へて見ると、日本は維新前にあつては、此の生産勞働者の數は非常に少かつた、國民は澤山あつたけれども、農業なり、商業なり、工業なりで働いて居る者の數は實に少かつたのである。其の著しい例を擧げて見れば、全國で四十萬人の士族があつたと云ふ事である。なか〳〵大なる數でせう。それに妻子も眷屬もある。それらの士族が何もせずして唯々百姓から米を貰つてそれを食つて居て、何も生産的に活動はして居らない。其外に三百の大名がある。此の大名は非常に贅澤な生活をして居たけれども、何物をも生産しない經濟上から見れば全く遊んで居た人であつた。其の大名の家に養うて居た眷屬の數も亦非常に大きなもので、それらも百姓から取つた所の租税で養つて居たのである。其外に大なる寺、大なる社などがあつて、是は朱印だとか、墨付などを以つて幕府なり、其他の殿樣から米を貰うて生活をして居たが、其米も矢張り百姓の作つたもので、自分達は少しも生産的に働いて居らない。又江戸あたりでは旗下八萬騎……もつと餘計あつたかも知れないが、是れも何もしないで食つて居た。恁う云ふ厄介者が維新前に澤山あつて、何もせずに、人の作つた米を食つてブラ〳〵遊んで居たのである。尤もこれらの人と雖も何か他に働きがあるならば兎も角、例へば經濟上に働かないでも他に教育の事に從事するとか、或は軍事上とか、何か他に働いて居れば、同じやうに國家に盡して居るのだから差支へはないけれども、其時の士族の大部分、旗下の大部分と云ふものは何もしない。戰爭があつてもそれらの者は少しも役に立たないやうな事實があつた程でマルで遊んで居た。それが維新の改革と共に、其人達の常祿を取上げて了つて、今まで米をやつて居たのを、すつかりやらない事にして了つた。やらない事にして了つたから此者が生産的に働き出して來た。當時

は江戸では急に祿を取り上げられた旗下が食ふに困つて先祖累代の刀を賣るとか、或は寶物を賣るとかして其日其日の生活をしたり、或は汁粉屋をしたり蕎麥屋をしたりしていろ／＼失敗をしたけれ共、併しながらそれらは矢張り大部分生產的の何か働く所の人に變化した。

△近來の好傾向

士族の間に起つた此の變動は一方から見れば悲むべく憐むべきことではあるが、又一方から見れば國の富を增す上には非常に結構なことで、明治の經濟史中最も注意すべき大變化である。此の澤山の遊んで居た者が一時に生產的勞働者に化したと云ふのは、知らず識らずの間に日本の富を增す原因を爲してゐる。例へば日本は維新の時は僅に一億足らずの外國貿易が、今日では十億になつて居る。そして總てのものがそれに準じて嵩まつてゐるので富は非常に殖えて居るのである此等の事實は右等の事が必ず其の大原因でなければならない。

それから近來に至つては若い男子は非常に生產的に傾いて居る。今から十年ばかり前殊に二十年ばかり前の人は、法律とか、政治とか、文學とか云ふものに傾いて居つたが近頃はさうでない。皆商賣の方、其外實業の方へ行く傾をもつて居る。それから又其方の學校がなか／＼餘計出來て居る。高等の學校も又中等の學校も、極低い學校も澤山出來て、中學の生徒の數よりも實業學校の生徒の數が多い。實業夜學校までも近來は餘程多くなつて來て居る。さう云ふ風に人が多く實業の方に向つて居ると云ふ事は、日本の富を增加すると云ふことに就て最も著しい現象である。

△婦人の經濟的智識

次には日本では今まで女子はあまり生產的に關係して居らない。尤も田舍などに行つて見ると、夫を助けて女が畑などに出て働いて居る者もあり、海岸に出て漁をして居る者もあり、山に行つて夫と共に木を伐つ

て居る者もある。又常州邊に行くと昔から機織などは女がして居つたものである。さう云ふ風で、幾らか關係はして居たけれ共、到底今日の樣ではなかつた。それが近頃に至つては工業などは大抵女がやつて居る。紡績でも、製絲でも、總てのものは大抵女が働くやになつて、女が男子と競爭をして生産社會に活動すると云ふことが夥しくなつて居る。それだけ矢張り生産勞働者が殖えた譯である。殊に今までは婦人はあまり商業教育を受けるなど云ふことはなかつたらうが、それが今度さう云ふことさへ始まつて來たので、男子の方では少しく恐慌を來して居る樣な狀態である。方々へ私の方の男の卒業生を持つて行つても却つて女子の卒業生のために大變邪魔をされることがある、其點に於ては甚だ迷惑であるけれども、併ながら一國の利害から見れば、男子も働き、女子も働きして行くと云ふことが非常に國の富を增す譯であるから、大に喜ぶべきことである。尤も女子が商業の智識を受けると云ふことは必らずしも自ら商業に從事することを要することではない。即ち良妻賢母となつて一家の政を執つて行く上に於ても、此商業の智識と云ふものは最も必要なものである。のみならず一家の主婦たる者が商業の智識をもつて居ると云ふことは、間接に非常に國の富をなすと云ふことに勢力のあるものであるから、婦人が直接に商業に從事するにしても、亦主婦となつて、一家を經綸するにしても、此の商業智識が婦人社會に普及すると云ふことは、國家の爲めに慶すべきことで、是れも矢張り政治歷史の上に特筆すべきものであらうと思ふ。

△勳章を男に與へるは一の方便に過ぎず

最後に尙ほ一言して置きたい事がある。女子が一家の主婦となると、大抵婦人自らはかなむやうなことが日本では能くある。此次には男子に生れ變つて來たいと云ふことを能く言ふ人がある。女はつまらない。隱れて居つて男子の爲めに蔽はれて居る。勳章も貰へ

なければ、國會議員にもなれぬ。總て男の世の中、女子はつまらぬものだから、此次には男になつて生れて來たいと云ふ考へを持つて居られる人がある。是等は大なる間違である。つまり社會は分業である。即ち女子には女子の常職があり、男子には男子の常職がある。此の勳章を貰ふとか、國會議員になるとか、位を貰ふとか言ふことは社會の方便である。女子の方に與へると云ふことにしても差支へはないので、便利上男子の方に與へてゐると言ふ迄である。國柄によつて男尊女卑の處もあり、女尊男卑の所もある。どつちでもよろしいが、たゞ兩方立てると云ふ譯には行かない。例へば床の前に坐らせると云ふ場合には、どつちか上席に坐らせなければならぬ。國の習慣に依つて男子を上席に据ゐても宜いし女子を上席に据ゐても宜い。さういふ事は社會の方便であつて、何も悲しむべきことではない。たゞ各々自分の天職を盡し、國家に對して十分の働をすることが出來るや否やと云ふことが、世の中に生れたかひがあるや否やと云ふことの標準となるのである。人爲的、社會的のいろ〳〵名譽とか、勳章とか云ふものは決して論ずべき値打のあるものではない。故に先づ女子は如何に社會に尊ぶべきものであるか、女子が居らなかつたならばどうかと云ふことを考へて見なければならぬ。女子が社會になくなつて仕舞つたらどうかと云ふことを考へれば、女子の尊いことが分る。子供も教育しなければならず、財產も管理しなければならぬと云ふことになつたら、迚も男子は働き得るものではない。そこで分業が必要になつてくる故に公平に考へて見れば、女が居らなかつたならば世の中が闇になつて仕舞ふ、それを男の顏を立てゝ置くと云ふのは一つの方便である事を思はなければならぬのである。

△婦人には七つの階級がある

嘗て私が佛典を讀んだことがある。舊いことでハッキリ覺えて居らぬけれでも、或る時お釋迦さまに婦人が說教を請つたことがある。其說教の中に斯う云ふこ

とがある。婦人……細君に七つの等級がある。一つは母婦、即ちおつかさんで、それは夫を自分の子供の如くに愛し、子供の如くに保護する。是は餘程えらい婦人である。それから師婦、即ち夫の方が弟子で、細君の方が先生、之を師婦と云ふ。それから友婦、即ち友達の關係を有つて居る婦人である、それから妹婦と言つて、丁度妹が兄さんに事へるが如き關係の婦人である。其次には婢婦と云ふのがある。即ち下女が主人に事へるやうな鹽梅に夫に事へる所の細君である。是は日本などに隨分澤山あるやうである。其次には怨婦と云ふのである、着物がきたなくて困るとか、あれが欲しいが買つて貰へないかとか、頻に怨むのである。それから最も甚しいのは賊婦と云つて、夫が死ねば自由になるとか、夫の保險金が這入つて來るとか、早く夫が死ねば宜いがとか云ふ風の事を考へて居るのであると言つて居る。一國が進歩して行くと細君の性質が段々良くなつて行かなければならぬ。賊婦や、怨婦などが澤山あつたり、それ程でなくつても婢婦即ちたゞ命令されたことだけをやると云ふ樣な者が澤山あつては、第一家が富まない、國が富まない。故に或る方面は男子の師となり、友となりすると云ふ師婦、友婦即ち外部のことは男子に任せるけれども、一家の經濟については自分が師となつて男子に命令して行く位の婦人にならなければならぬ、止むを得ずんば唯々内助ばかりでなく外助をやつても宜い。さう云ふ風に細君の品位が段々上つて來ると云ふことは、國の爲め家の繁榮のために極めて必要であらうと思ふ。

商業教育を婦人が受けると云ふやうなことは、是は大抵の場合に於て婦人をして師婦とならしめ、或は母婦とならしめる所の準備と云つていゝもので、實に喜ぶ可きことである。

右は博士が日本女子商業學校の卒業式に演べられた主旨の大要を筆記したものです。

高等教育と結婚

女子高師教授　篠田利英

▲高等教育と姙娠力

女子に高等な教育を授けるのは、生理上から言ふと宜くない、婦人が頭腦を使ひ過ぎると、姙娠に必要なる體力を減じ、生れた子も強壯でない、とは毎々聞く議論であります。所が米國の女子大學がポストンの統計部に囑託して調べて貰つた統計に據ると、敎育程度の高い婦人ほど姙娠力も強く、生兒も強壯に育つて居るとが確かであると云ふのは、敎育ある婦人ほど衞生上の智識が發達して居るから、自分の身體や子供の發育に就て充分精細な注意を拂ふ爲めでありましやう。勿論、衞生上の智識のある婦人でも、中には醫者の不養生と云つたやうなのが無いとは言へません。けれども、少數者が失敗した爲めに、全體を斷定することは出來ますまい。生嚙りの衞生智識は却て婦人を虛弱にし、子供の體育を害する場合も實際ないとも限りますまいが、此智識が眞正に深く修養されて居れば、完全な結果を得るに相違ないと思ひます。日本の生活程度から言つても、今日の女子敎育が高過ぎると云ふ心配はないでせう。これが小學敎育のやうに一般の義務敎育となると如何か知らんが、高等女學校ぐらゐならば、親が敎育費に困らず、本人が入學を希望する限り、決して差支ない事と思ひます。又卒業後も身分敎育の程度の相應した者に配するのであるから、其受けた敎育が無用の長物となつて了ふ心配はないと思ひます。

▲結婚年齡にも差支ない

目下我日本で女子に高等教育を授けて居るのは、女子大學か高等師範あたりでせうが、女子大學は、高等女學校程度が五年で大學が三年、女子師範の方は高等女學校が四年で師範科が四年。そこで合計どちらも八年間になりますが、先づ大抵十七八歳で高等女學校の方を了へ、二十一二歳で全科卒業と云ふ事になります。醫者の方でも、婦人の結婚期は二十歳からが適當と認めて居るのですから、丁度好い都合になつて居るので、婚期の後れると云ふやうな心配は決して無いのです。

▲高等師範出身者の身上

女子高等師範に入る者は、教員となつて母親を養ふとか、弟妹を教育するとか、一身に降りかゝつた責任を負ふた婦人が多いのですが、卒業後其責任を果すと結婚して了ふのが多いのです。卒業後三年乃至五年の内には、大抵責任を果し得るものと見え、其頃までには大抵片付いて居るのは事實であります。

▲獨身生活とは少婦の口癖

昔の女學生も獨立々々と言つたのですが、今の女學生も「私なぞは結婚したとて駄目ですから、獨身で暮す積りです」などゝ大に覺悟したやうに言ふ者が幾らもあります。けれども是れは本心から言ふので無い。若い女が自ら「私は御嫁に行く積りです」と言ふのはキマリが惡いから、斯樣な事を言つて見るのです。實際これが當然の事なので、教育を受けた爲めに獨身生活を望むやうになつては困るのである。賢母良妻を養成するのは高等下女教育だなどゝ云ふ說もある樣ですが、賢母良妻が淺薄な教育で出來るものではありますまい。何と言つても、賢母良妻となるのが婦人の天職で、第二の國民を作る基礎となるのですから、賢母良妻の養成を目

的として教育するのが至當であると思ひます。

▲生活問題と獨身の傾向

教育者の主義も、被教育者の希望も、賢母良妻に在るのですが、近來獨身婦人が追々殖える傾きのあるのは、畢竟生活問題から起るのです。一寸例を擧げると官吏の俸給なぞは、二十年前の最下級が十二圓。今日もたしか十五圓ぐらゐですが、物價は三四倍になつて居るでせう。それで二十年前の十二圓は妻帶しても遣れたが、今の十五圓は獨りでも足りない。妻を貰ふとなれば、少くも五六圓ぐらゐの家賃を拂はなければならぬ始末であるから、如何しても妻帶は出來ないのです。先づ一般の財政が斯樣な風に六ケしくなつて來たのですから、結婚は勢ひ見合せざるを得ない。所へ婦人の職業と云ふものが範圍を擴げて來たので、婦人の方でも餘程安全な相手を見出さない限りは結婚を急がず、何か衣食するだけの仕事をしながらユックリ相手を捜して居る。斯くて一般に晩婚となるのみならず、獨身で終る人も追々增加するから、目下の所では日本の人口に影響は無いが、追々此傾向が甚しくなると、或は佛蘭西のやうになりはせぬかと案じられるのです

▲獨身女教師の感化力

獨身の女教師は、一部婦人の職業としては相應でもあり、斯る婦人中に才德兼備の名流もあるが、唯一つ遺憾に思ふのは生徒に及ぼす感化力の點です。婦人の獨身者も三十歲位までは旣婚者と格別性情に變りは無いやうであるが、それから晩年になると、意志の力が强くなると同時に情が冷かになつて來るやうです。勿論悉く左樣でもないが、何樣も其方が多い。斯樣に情の冷かな教師が、生徒に溫良貞淑優美を奬勵しても感化力の乏しいとは爭はれない。良人や子に對する愛情や、これに就ての忍耐などは、幾ら想像を逞しくしたつて局外者に解らぬ點があるもので、これに接觸した婦人の感化力は非常である。教育に從事しやうとする婦人は家庭を持たねばならぬと考へます。

▲卒業生の案外な結果

この生徒ならば舅姑にも從順であらう、この生徒ならば良人の片腕となり得るに相違ないと確に目星を付けて置いた婦人が結婚してから案外の不結果を見ることもあり、却てこれはチト主婦に不向であらうと案じた婦人が、琴瑟和合して居ると云ふ實例は、同窓會などに集つた時往々發見するのであります。是れは深く詮議して見たらば、其婦人に何か長所か缺點があるかも知れないが、配偶が都合よく其婦人の趣味に適すると案ずるより生むが易いと云ふ好結果を得るのだと思ひます。學校出の婦人に離婚沙汰があると、女子教育の弊害などを唱へる向もありますが、配偶の如何が大關係を持つて居るのであるから、一概に女子の側ばかりを批難すべきではありますまい。

▲無理もない離婚

私の知つて居る者の中に、離婚の實例が六つ七つもありますが、大抵男子の方に無理があつたらしいのです。尤も主に婦人の方の訴を聞いたのであるから、確に左樣だと斷言は出來ないが、初めから雙方を善く知つて居たのが一つある。それは高等女學校卒業の性質の善い婦人が或紳士に嫁したのであるが、其男の方は別にこれと云ふ惡い道樂もないけれども、經濟思想が皆無で、締りなくダラ〱と金を消費し、收支の均衡が取れない。妻の方が諸拂ひの滯りを心配して、月末收入のあつた際に、家賃や米代を拂はうとすると、其樣な物を規帳面に拂ふ奴があるものかなどゝ大層怒り付けると云ふ風で、終に妻の持つて來た衣類を悉皆質入したと云ふ始末。妻も忍耐し切れなくなつて、離婚を言ひ出したのです。何樣な良人に對しても添ひ遂げるのが婦德であるには相違ない。けれどもそれは非凡な婦人でなければ出來ない註文で、實際良人を感化するなど云ふ事は、普通の若い細君に出來る藝當でないのだから、右の一例の如き離婚は婦人の無理とも思へません。私にしたところで、自分の娘が若し斯樣な境遇に立つたら考へ物だと思ひます。實際末の見込が無いのですから。(談話筆記)



白館に於ける大統領夫人の生活

在華盛頓　波涙生

△永く交際して益々味の出る人

新大統領タフト氏の内閣が米國の政治史上何の大統領の時代よりも、立派な内閣であると云ふ事は、古今を通觀して居るワシントン交際社會の多數の意見である。斯くの如く多數の親任を受くるに至つたのは、素より大統領タフト其の人の手腕にもよるべけれども更に大に力あるは夫人ウイリヤム、ワード、タフトの内助の功によると云ふ。殊に夫人の性格、嗜好、及び抱負などが大なる基礎となつて居ると云ふ事である。

最初夫人に面會する者は誰れでも先づその侵すべからざる威厳と、愼み深き態度に打たれる。相當の見識ある人でも夫人を一見した丈では大抵冷靜の人と評するのが常のやうである。律々しく重味ある其の緑色の眼は、誠に夫人の愼重な徳を表はして居る。所謂思慮に富んだ人で、一つ事を幾度も幾度も考へた上でなければ却々判斷を下されないと云ふ風である。其の代り口から出づる事は往々人の驚嘆を買ふやうなことがある。而かも外觀極めて嚴肅で謹直に見える此の夫人はその清楚なる衣の下に誠に女らしい優しい温情と鋭い感覺とを包んで居られる。それ故夫人と永く交際する人は、最初夫人に對した時とは全然變つた考を持つ樣になつて、非常に夫人と親しくなるさうである。世の中には一寸見て慕はしく思はれる人と、永く交つて益益味の出る人とあるが、夫人は即ち其の後者に屬するのである。

△一面は世話女房、一面は大政治家

夫人の日常生活は非常に多忙であるが、家事萬端に興味を持つて居られるので、良人タフト氏や令息令嬢

の事などは一切人手を借らずに皆自分でやられるし、又良人や子供の爲に伴侶となつて何事によらず相談相手となつて助けて居られる。一面に於ては斯の如く世話女房然として家庭の極細かい面倒な事迄よく氣を注けて主婦としての責を十分果して居られるが、又一面にはタフト氏の公生涯にも携さはつて、政治上にも種種名意見を吐かれると云ふ事である。元來夫人は所謂かジル方であるから、よく讀書もされるし、又觀察も却々鋭い方で、意見を述べる丈の智識と見識とは十分之を備へて居られるのである。タフト氏に若しこの賢明なる補助者が無かつたならば、氏は白館の人となることは或は出來なかつたかも知れない。夫人は常に氏の公務にも立ち入らるゝから、自然側を離れると云ふことが少なくて、事情の許す限りは何のやうな旅行にも必ず同行し、妻として又相談相手として氏を助けて居られると云ふ事である。先年氏がフイリツピンに行かれた時なども矢張り夫人同伴であつたが、政策上にも色々意見を出されたので、彼の地に於ける氏の成功の一半は正しく夫人に歸すべきものであると迄言つてゐる人もある。誠にタフト氏夫妻の相親まれるのは恰度仲の好い同窓の友のやうなものである。夫妻の間に令孃ヘレンと令息ロバート、チヤールスの三人の子供がある。これ等の子女に對する夫人の態度は妻として良人に對するのと少しも違はない、いつも親切な同情を持つて敎育して居られるが、夫人の一意專心望まれる所はやはり出來る丈立派な出來る丈大きな人物に育てあげやうといふのである。そして何事によらず令息令孃のやつて居られる事は十分成功するやうにと勵まして居られる。

△夫人の趣味と事務的才能

又夫人自身も人に負けるのが大嫌で、何事でも一通りは心得て居られる、特に美術趣味に富んで居られて油繪とか彫刻物とか云ふものゝ鑑定はなか〳〵上手だと云ふことである。又音樂なども夫人の最も愛する所で、暇さへあれば研究して居られる。併し事務の方も

知々確かなものである。先年或音樂會の會長に選ばれて七年間程その事務を取つて居られたが、やはり夫人獨特の忍耐と手腕とを以て立派に其の職を果された。そして期滿ちて職を辭される時には、その會の監査役から見事な銀盃を贈り、又會員一同からも同樣の贈物をして夫人が多年の功勞を謝したと云ふ事で、今尚夫人はこれ等の品を大切に保存して居られる。夫人の秀でた技倆は又經濟上にもよく表はれて居る。元來タフト



氏は祖國の爲に議會の爲に又フィリッピンの爲に盡された功績はなか〳〵大きかつたがその割合に報酬は多くなかつたので餘り有福な方ではなかつた。それで夫人はこれ迄いつも自分で幾何かづゝ働いて家計の足にして居られた。而して比較的少ない收入をよく切り廻して、自分でも決して品格をおとすやうな風采はせられず令息や令孃達にもいつも立派な風をさしてあつた。今でも子供の出世の爲と云へば惜しまずどし〳〵財をつ

かつて、出來る丈好い機會と境遇を與へようと心懸けて居られる。實に感心な人である。そして誠に平民的の人で、ワシントンに居られた頃などは、平氣で市場へ出て、普通の妻君と同様に自分でドシ〳〵買物などせられたものである。夫人は一體に戸外の運動が好きで、天氣のよい時などはよく輕裝して馬などに乘つて居られる。然し一番好きなのは散歩で、ワシントンに居られた時などは令息や令孃達を伴つてよく公園などを歩かれたものである。

△未來の大統領でなければ嫁に行かない

夫人が未だ娘時代の頃、當時の大統領のお客分となつて數ケ月白館に遊ばれたことがある。その頃夫人は十六歳であつたが、その時此の白館が餘程氣に入つたと見えて、歸つてから或る友達に「私は合衆國の大統領になる丈の人でなければ決して嫁には行かない」と云はれた相である。夫人は今やその望を達して光榮ある新大統領夫人として交際場裡に大に雄飛すべき時とはなつた。そして實際夫人はどの點より見てもこの榮譽ある地位を占むる夫人として少しも遜色する所が無い。

△白館に於ける最初の晩餐會

從來白館の玄關番は長い間巡査が受付や給仕まで兼ねてやつて居つたものであるが、タフト夫人の代となつてから、直ちに巡査を廢して通常の受付とし、巡査や、給仕の仕事も確然ときめて、公私の區別をも明らかにされた。而して此の改革は、毎日タフト氏の友人や夫人への訪問者に對して、御役所的に巡査に誰何せられて入るよりも、何となく家庭的にして溫かい感を與へてゐると云ふ事である。

大統領就任式以來、夫人は親懇の友人や、特別の關係者より祝賀の訪客と手紙を數限りなく請けてゐる。其の外電報やら電話やら實に應接に遑なしと云ふてもよい位であるが、其の多數に對しても決して缺禮をし

ない。そして訪問客のある時は、前大統領も使つて居た赤室に導いて應接される。全體白館には、我が皇居や離宮の中にも錦鷄間とか鳳凰間とか云ふ名を付けてある如くに赤室、緑室、淺黄室など云ふ室があつて、其内赤室は最も家庭風に出來て居るのである。此の室からは直ちに食堂へ行かれるやうになつて居る。其の廊下は自然界の美しい草花を以て充たされ、壁間には世界有名の畫工によつてなれる油繪や肖像畫が澤山に飾られてある。こゝは午後の來客



に接するに、適する樣に出來てゐる。去る數日前官舍に引越して間もなく大統領と夫人とが此の食堂に入つて初めて夕食をたべた。其の席に陪して御客となつたのはたゞニコラスロングオース夫人即ち前大統領ルーズベルト氏の娘一人のみであつた此のロングオース夫人は前大統領ルーズベルトの娘としてよりも寧ろ敏腕なる家政家としてタフト夫人との間に互に相許し合つた親密の間柄である。尤も此の二人は遠い親類となつて

居るとも聞いてゐる。のみならずタフト夫婦はロングオース夫人の爲めには、所謂緣結神ともいふべき地位にある事は尙ほ諸君の記憶に新たなる所であらう。

△輪奐の美を盡せる各室

却說赤室には、歷代大統領內閣員の肖像其他一代の名畫を壁間にかけ、前の大統領の時に擬つてあつたもの迄も取り出して飾りつけ、尙ほ夫人自から水晶や銀製の花瓶にバラや各種の花を挿して、室の裝飾に力めて居らるゝから、其の立派なる事は實に驚くばかりであると云ふ。そして淺黃室を除くの外は、代々の大統領が用ゐ來つた椅子卓子を其儘使用してあるし、又何千弗かを投じた立派なピヤノが此室に備へられてあると云ふが、夫人の樂才と相應じて定めて光彩を放つであらう。

白館に於て殊に眼を射るものは、佛國大統領より故マツキンレー大統領に贈られた二個の藍模樣の大花瓶で、今尙ほ大切に保存せられて、東の大廣間の裝飾となつて居るさうである此の大廣間なども、其他に有名などピヤノ製造會社の献納した大ピヤノが黃金色を放つて室の裝飾となつてゐるさうだし、其の附近の廊下にも、世界各國の名畫や貴重な美術品が澤山に陳列してあるさうで、矢張り毎日多數の來客の爲に宛てゝある。

大食堂は西南の隅にあつて、毎日晝食と晩餐とに使用されてゐる。朝食は官舍の入り口の小綺麗なる室に於て簡單な服裝をなして濟すのが例である。

タフト令孃は二階の西北隅の一室に控へて居られる之れは前大統領ルーズベルト孃が居た室と同じである此の室の附近及び二階には重に大統領夫婦が、世界各地を旅行して得たものや、自分の私有品を悉く陳列してある。現在の白館は、前の大統領ルーズベルト氏が就職して二年目に、五十萬弗をかけて大修繕を加へ、一國の大統領として、最も愉快に、最も便利に、且つ威嚴を作つて居らるゝ樣にとつくつたのであるけれども、愈々新大統領が移轉して、思ひ通りに夫人の設計

を實施して見ると、尙ほ未だ足らざる所があると見えて、其の官舍の表側の所に大修繕を加へて居られると云ふ事である。

△夫人の繁劇と秘書役

タフト夫人には夫人自身の秘書役を置いて毎日の用事を便ずる事になつて居る。此の秘書役の選任は夫人自から、大統領の選擧が濟むと同時に取りかゝつて適當の人を選ばれたものである。此れ等の秘書役や其他夫人の補助ともなるべき女中等は、却々多忙なものであるが、孰れも嚴肅に用事を取り扱ひ、若し手紙でも來りし時には、最も叮嚀にして間違を生ぜしめざらん事に注意をしてゐるさうである。夫人の交際方面に働く女中は、通常の小間使よりももつと其の業務が繁劇である。夫人は交際上の關係よりして、時としては公共の方へも働かねばならぬ事がある。夫人が斯の如くにしてワシントンの交際社會を操縦するには、最も熟達せる判斷と、多くの經驗を有しなければならぬであらうが、而かも毫も失策を見ない。何れも皆夫人としての禮儀に則り、偏頗の處置を取つて自分勝手の行に出る樣な事は決してされない。而して



其の總ての用務を決して行かれるには裁決恰も流るゝが如くであると云ふ事である。眞に交際社會の大建物である。

一旦自分のやつた事で、不適當の事があり、又は他人の道理ある忠告に對しては、之れを採用するに於て少しも吝んで居られない。所謂誤つて改むるに憚るなかれと云ふ風である。そして此繁劇なる地位にあり乍ら、官舍に起つて、夫人の身邊に湊合して來る仕事を決して人任せにせずして、皆自分で處置して行かれる實に其の器量は常人の迚も企及すべからざる所である。

夫人の秘書役はミスプレッチと云ふ婦人であるが、獨逸に生れて門閥ある家庭に育てられた人で、英語は勿論、佛蘭西語も西班牙語も話すし、其他家政にも通ずれば交際社會の事も知つて居つて、なか〳〵の働き手である。此の人が午前九時より出勤して、午後の四時まで一生懸命に夫人の仕事を助けて居る。

△社交界空前の德望家

タフト夫人が仕事されるのは極めて簡單で敏速である。外出するにも澤山のお伴をつれて高ぶる樣な事はない。買物に行くには今でも一人で出て行かれる。子供や伴をつれられる事は極く少ない方である。其他通常住んで居るにも、質素を旨として居らるゝ事は、交際家たるに似合はない位である。

而かもタフト夫人の如く多數の友人を有して白館に這入つたものは未だ嘗てない。夫人は實に社交界に於ては空前の德望を以て居らるゝ婦人である。夫人は本年四十六歲。我國などでは最早五十の坂に近いと言つて段々老へる時代であるが、其の若々しい事、壯健な事は、却々壯者も及ばないと云ふ事である。其の行動は今後大に見るべきものがあらうと思ふ。

心配する事の多い中等社會の婦人

三輪田元道

單に社會の階級といふ上からいへば、中等社會は上流社會と下等社會との間に位する一の階段に過ぎないけれども、國家の運命上から見れば、中等社會が一番重大なる關係をもつて居るのであります。それ故國民は物質上にも精神上にも全力を盡して、中等社會の進歩發達をはかるべきものであるのみならず、中等社會に居る人自身も亦、其天職を自覺して、自己の本分を盡さなければなりません。然るに在來の習慣として、上流社會は上等にして貴く、下等社會は下等にして卑い、中等社會はその間に位して居るものと、單に品位の上から區別して居るのが一般であるから、從つて中等社會の人は、自己の任務のいかに重大のものであるかといふ事を、自覺して居らぬが通例であります。

△獨逸亞米利加の實例

中等社會の多い國は必ず發達する、かの獨逸や米國などで、中等社會が多數を占めて居るといふ事は、即ち彼れの隆盛をいたす所以であります。これに反して上流社會と下流社會とで成り立つ處の國家は衰滅する、印度の如き埃及の如きはそれであります。現今に於いても暹羅とか朝鮮とかいふやうな國には殆ど中等社會といふものがない有様であるが、之れは取りも直さず自滅しなければならぬ運命をもつて居るのであります。斯ういふ譯であるから國家は成るべく中等社會を多からしめることをつとめなければならぬ。上流社會をして中等

社會に引き入れ、下等社會をして中等社會に昇らしめ、以て中等社會の勢力を强大ならしめるといふ事は、特に政治家や社會學者の攻究すべき問題であらうと思ふのであります。

△上品な生活と無爲の生活

獨逸などでは、貴族は多く軍人となることになつて居るし、下流社會にはまた盛んに貧民院や孤兒院といふやうなものを設けて。相當の敎育を與へ、夫々仕事に就かしめるやうになつて居りますから、上流社會にも下等社會にも無爲の民は實に少く、從つて中等社會に屬する人が多數になつて居る譯でありますが、日本では何うも無爲にして遊んで居るのを上品とする風があつて、それは殊に婦人に於て甚いのであります。上流社會の婦人といへば多くは自分の身體の仕末だもしない、多くの下女を使用し、莫大の生活費を投じて、無爲遊惰に日を送つて居るのでありますが、一般の婦人は實にさういふ生活を羨望して居るのであります。

且つまた下等社會に至つては、丁年前後の盛んに生產力を有する婦人の幾十萬といふものが、醜業婦といふ忌はしい職業に身を沈めて居るといふ有様であるから、婦人にして正當の活きをとり、眞に國家のために貢献をして居るのは、實に中等社會に於ける少部分に過ぎないといつて差支なからうと思ふのであります。それ故中等社會にある婦人は自己の境遇を最も幸福であり、また名譽な事でもあると、心得なければならないのでありますが、同時にそれに伴ふ天職を自覺して、其責任を盡すことに努めることが必要であります。

△心は貴族的手は平民的

それで私が中等社會に於ける婦人に心得て居つて貰ひ度いと思ふ事は第一に自分の力で働くことを名譽として貰ひ度いのであります。働きを卑むものは亡國の民である。他人の力によらず、自分は自分の力で生活するといふ概念をもつことが必要であります。もとより相當の地位あり財產あるものは下男下女を使ふといひ

ふ事も必要でありませうが、兎に角在來の無爲にして暮すことを貴族的とし、上品と心得るが如き誤れる觀念を改め、せめて自分で出來る事丈けは必ず自分でするといふ習慣を養つて貰ひ度いものであります。私の母が平素生徒に敎へて居る格言に『女といふものは心を貴族的にして、手を平民的にせよ』といふのがあります、之れは婦人といふものは、その心は須く上品なるべし、然れども手は力のあらむ限り働くべしといふ



のであるが、實に千古不磨の格言といつて宜いと思ふのです、實際精神は何處までも高尚にしてほしいゝが、仕事や行爲は成るべく平民的にして貰ひたいものであります。例へば馬車とか俥の如きものにも成るべく乘らないやうにし、借金といふことも止むを得ぬ限りはしないやうにするのみならず先祖から譲られた財産で遊惰の日を送るのは恥辱である。無職は此上もない不名譽であるといふ風に心得て居つて貰ひ度いのであり

ます。

△夫の職業に對する同情

第二には夫の職業に同情を有つことが必要であります。世の夫たる人は、その官吏たると學者たると實業家たるとを問はず、各々其職業に伴ふ特別の苦勞といふものがあるのでありますが、もし之れに對して妻たるものゝ同情なき時は、實に味氣なき感じになるものであります。私の知つて居る婦人に學者の妻君となつた人がありますが、妻君となつて見ると自分が理想として居つた家庭とは違ふといふので大きに不平である。一體その婦人は何んな家庭を理想として居つたかといふに、花紅葉の折々につけては、夫と手を携へて散步でもするとか、或はまた火鉢を圍んで面白い物談に時の移るを忘れるといふやうな、つまり小說的の樂しい家庭を空想して居つたのであります。處が學者の家庭となるとさうは往かない。夫は朝から晩まで机に向つて調べものをして居る。そのために夜を更し徹夜をするといふやうな事さへ稀ではない。そして講演とか研究會とかいふものに出懸けて往くが、歸れば直ぐにまた書齋にとぢ籠るといふ風で、殆ど言葉を交はす機會さへ少いのであります。それ故家庭が不愉快であるとて妻君が不平を訴へるのでありますが、私はそれを聽いて、それはあなたが惡いのである夫の仕事に對して同情といふものがなければ不可いといふて其心得違ひを諭し、且つ香蘭女史の話をしてきかせた事でありました。

△粥を炊いて詩作の夫を慰む

香蘭女史は母の師匠の柳川星巖先生の夫人でありますが、女史の詩に、夫が冬の夜詩をつくつて居るので、さぞ寒からうと思ふから夜中に粥を炊いてすゝめるといふのがありますが、私はこの詩を讀んでから、眞に香蘭女史を尊敬するに至つたのであります、酒のやうなものをすゝめては、身體の毒にもなるから、軟い粥を炊いて、詩作の夫の退屈を慰め、空腹を癒すといふ

のは、實に床しい心遣ひではありませんか、學者の妻君たるものは、須らくこの心懸がなければならぬと思ふのであります。斯くの如きは勿論學者の妻君に限つた譯ではありません、軍人の妻君は軍人の妻君なりに、政治家の妻君は政治家の妻君なりに、各各其夫の仕事によつて、相當の心遣ひがあるべきであります。それ故婦人は平生の理想主義はよし如何樣であるにしても、一旦人の妻君となつた以上は、その夫の職業に同情をもち、夫の主義に同化するといふことを努めなければなりませぬ。但し私のいふ同情の意味は決して夫のいふなり次第に盲從せよといふのではない、夫の苦勞を分ち、時に其缺點をも補ふことをつとめるといふ意味を含んで居るのであります。例へば外交官などの如く社會の表面に立つて働く人の妻君は、よく社交といふやうな事に注意して、夫の仕事をして機敏にとり運



ばしめるやうに助けなければなりませんが、實業家といふやうな人の妻君などは、單に物質的生活に於て、夫を助くるのみならず、之れに精神的生活の樂しみをも知らしめ、以て調和的の生活を營ましめるといふやうに努めることもまた大切であると思ふのであります。

△無作法な成金婦人

第三には中等社會の婦人としての天職を自覺して貰ひ度い、支那の文字は元來象形文字でありますが、中といふ字を見ると箱の上から下へと棒が貫いて居る。即ち中は上下に通ずるといふ意味をもちて居る字であります、字の意味からして既に然うである。中等社會にある婦人が下等社會に對しては思ひやり深く、深切であるべきは勿論、上に向つてもまた皇室國家に忠愛の心を致すを初めとし、すべて長上を尊敬して社會の秩序を保つべき任務を有して居るといふ事は更めていふまでもないのであります、然るに婦人といふものは兎角威張りたがる。自慢をする。少しでも財産地位があるとなると、目下のものに向つて傍若無人であるのみならず、目上に對しても亦無禮無作法を振舞ふのであります、世間では俄大盡の事をさして成金といふ、これは將棋の駒の歩が金になるといふやうなことで、實にうがつた語でありますが、この成金は女子に多いと私は思ふのであります。男子は成金でも兎に角自分の腕で成り上つたのであるから、まだ恕すべしであるが女子に至つては所謂氏なくして玉の輿に乘りながら、恰も自分は玉相當の價値あるものであるかの如く心得て得意がるのであります、これこそ眞の成金で實に片腹痛いことであります。それで私は中等社會の婦人に向つて、何うか身分相當の生活を營むといふ事を忘れぬやうにして貰い度いと願ふのであります。

△世の思潮に先立つ人

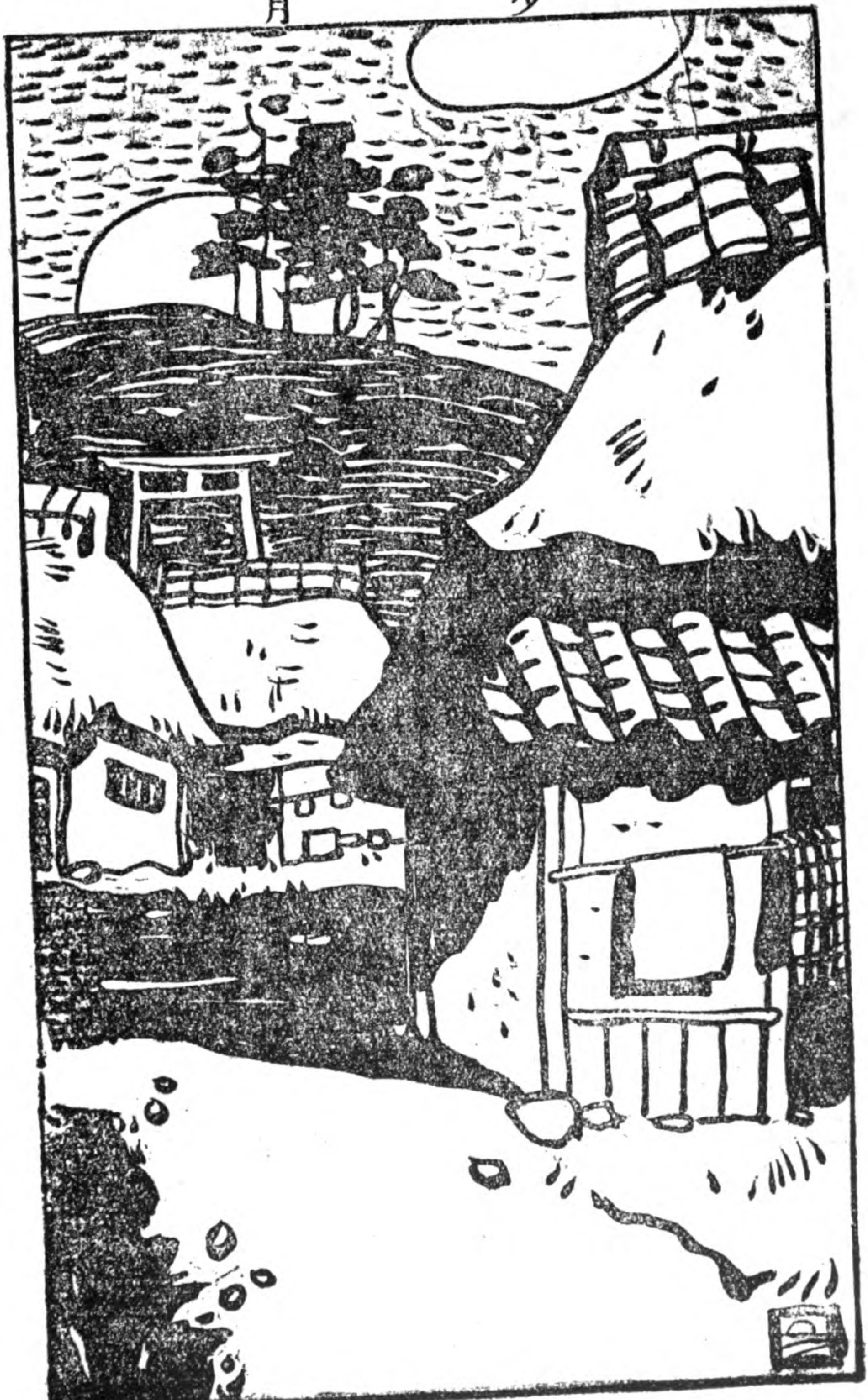
第四には人間は物質的生活丈ではいかぬ。精神的に活くることを知らなければなりません。下流のものは

格別ですが、上流などは上品な生活をし、立派な敎育を受けて居るにも拘らず、人物といふものが至つて出て來ない。學者とか、思想家とか德望家とかいふやうな人は主に中等社會から出て居るのであります。即ち中等社會は、單に働くといふ上からばかりではなく、精神的に於いても國家の中堅をなして居るのであります、從つて中等社會の人は、凡ての誘惑に打ち勝ち、上下を誘導して、國風を適當な方向に進めなければならぬ責任をもつて居ることを忘れてはなりません。今日の婦人を見るに、高等の敎育を受けた人達でも、家庭へでも入るともう家事や子供の世話にのみ追はれて、精神の方はだん〳〵退歩して行くといふ傾きがありますが、これは實に遺憾な事であります、新時代の婦人は常に社會の思潮に後れないやうに心懸けて居らなければならないばかりではなく、寧ろそれに先き立つ位の考を有つて居つて、家庭を經營し、子女を敎育する必要があるのであります。それには新聞雜誌の如きは勿論すべて、讀書といふ事をつとめて、宗敎や文學に就いての趨勢を知り、ことに倫理道德の標準といふやうな事については、最もよく解つて居らなければならないのであります。私は中等社會の婦人に對して、何うぞいつまでも精神的生命ある人として世に處せられむことを最も希望するものであります。

以上申したやうに中等社會の婦人にかゝる責任は甚だ重いのでありますが、それに對して十分自重して貰い度いのであります。自分は國家の中堅である。左翼と右翼とは敗北するかも知れぬが、中堅は飽迄も勇戰する、孤立しても城を守るといふ覺悟で、妄りに上流の弱點を學ぶとか、下流の弊風に染むといふやうな事なきばかりではなく、寧ろ一歩進んで上下を誘導敎濟せむ事をも心懸けて貰い度いのであります。



夕月



羨ましき西洋婦人の讀書趣味

安井哲子

△子供のうちから養ふ讀書趣味

私が最も羨しく思ふのは、西洋の婦人がよく讀書をするといふ事で御座います。英吉利では圖書館はたゞに都會にあるばかりでなく、何處の田舍にもありまして、無料で書物が讀まれることになつて居るのですが、また圖書館まで往かずとも、小石川區なら小石川區で貸本を備へて置く處が御座いまして、少しばかりのお金を出すと、思ひのまゝに好きな書物を自宅へ借りて來て讀むことが出來るので御座います。尤も貸本屋は日本にも澤山御座いますけれど、英國などのは日本のやうに、主に小說を貸すといふのではなく、一寸小圖書館のやうなもので、分けて子供の讀み物が澤山に備へられて御座います。そして子供の讀物の目錄は大人の讀物の目錄とは別になつて居り、且つ出た本と出ない本とは札を以て示して御座いますから、小さい子供達でも其處へ參つて自分で目錄を繰り、次に懸けてある札を見ますと、赤い方になつて居るから此本は今出て居るのだとか、白い方になつて居るから何の書物は出て居ないのだとかいふ事が直ぐ解るのです。西洋の子供は實によく讀書をいたします、日本の子供が學校から歸つて來て、お金を貰つては何かお菓子でも買ひに行くといふ處を、西洋の子供は貸本屋へ往つて本を借りて來て讀み、讀み終ればまた取りかへて來ては讀んで居ります。ですから西洋の子供が讀書によりて自分で自分を敎育することは實に大きいもので御座います。旅行記などは高等小學校の卒業生位から讀みますから、まだ若い人でも餘程よく外國の事情に通じて居るのです。何處の國は斯う

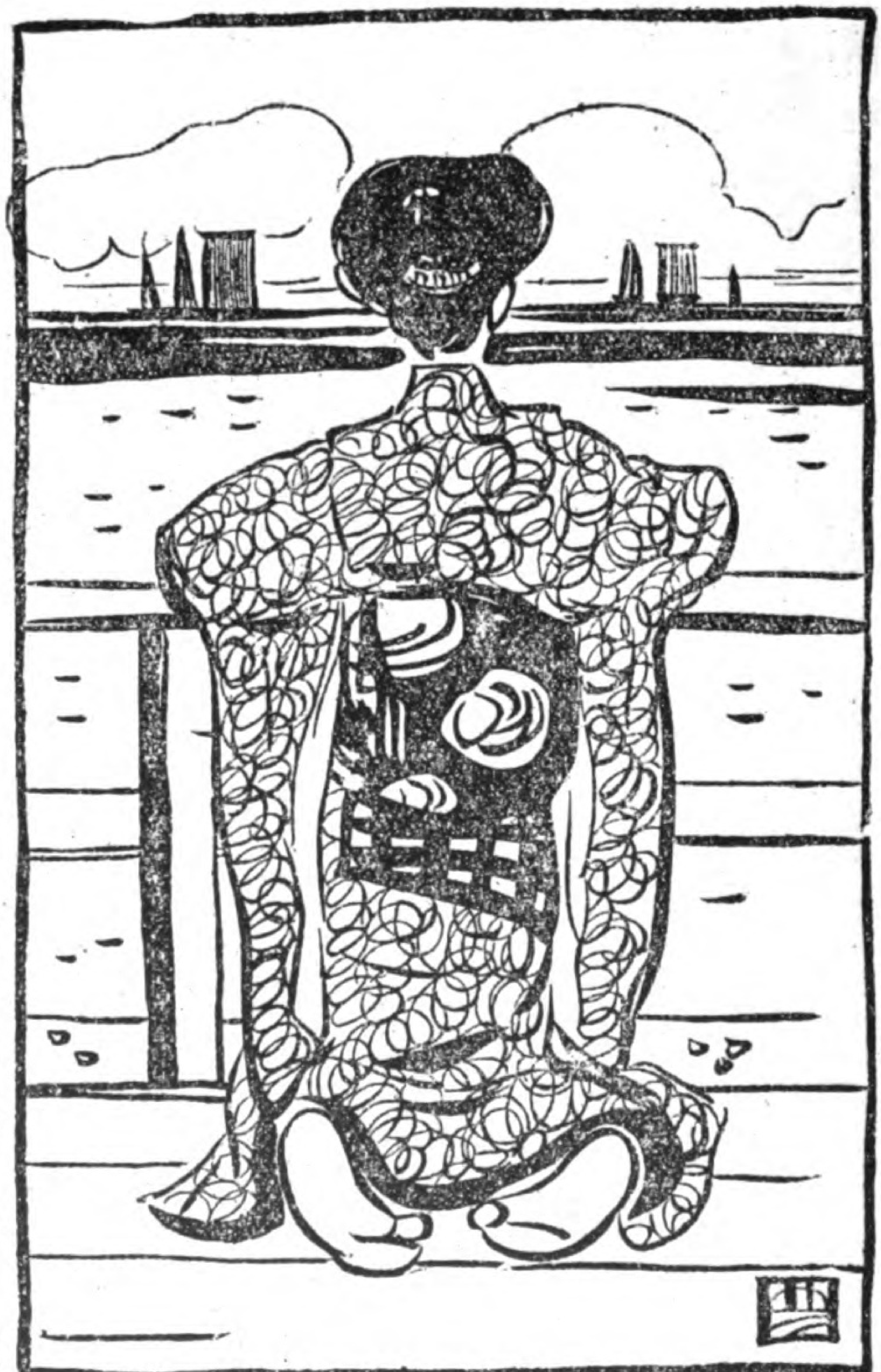
いふ風で、何處の國には何んな珍らしい事があるといふやうな事が、豫めわかつて居るのですから、外國人に逢つてもまづ何ういふ事を尋ねたら宜いかといふ事が直ぐ思ひ浮ぶといふ譯で、私共が參つても實に適當な質問を出すので御座います。

△交際に及ぼす讀書の影響

さういふ風に小さい時から讀書の趣味といふものが養はれてありますから、大人になつて何んなに仕事が多くなつても、決して讀書を絶つといふやうな事は御座いません。家事の暇でも、人を待つ間でも暇さへあれば讀書をいたすので御座います。それ故西洋の婦人は物事に對して興味をもつことが廣く、而かも其興味は自分獨りのものではなく、共通の興味になつて居りますから、大勢寄り合つても座が白けるといふやうな事は勿論なく、お互に面白く語り合ふ事が出來るのです。從つてまた狹い人事の噂などではなく、極罪のないお話のうちに廣く知識の交換をする事も出來るので御座います。然るに日本の婦人は讀書をする事が少いから、人を招んでも人の噂でもするより外に話の材料がなく、殊に大勢の集合にでもなると一向お話が出ません、物でも頂く外はたゞお互に默り込んで睨み合ひをして居るといふ姿で御座いますから、會に出ましても窮屈な思ひをいたします丈けで、少しも面白い事もなければ、益を得ることもなく、誠に以てつまらないので御座います。お客などをいたします折でも西洋婦人ですと、互に紹介さへして置けば、主人が特別に氣を配りませんでも、お客同士で面白くお話がもてゝ行くので御座いますが、もし日本婦人を招んで面白くさせやうと思ひますならば、何うして一通りの骨折では御座いません。折角氣を揉んで話の糸口を出しましても、直にポキリと折れて了つて座が白けるといふ鹽梅で御座いますから、何うしてもそこに餘興でも設けて、笑ひの種をこしらへなければならぬ事になります。

△交際の秘訣

尤も日本の婦人が話をしないといふのは、單に話の材料に乏しいといふ丈ではなくして一つには自己中心といふ事が原因をなして居るだらうと思はれます、話と申しても何もさう難しい事をいはなくても宜しい、世間話しでも何でもかまはないから自由にすればよいのです。申すまでもなく交際の秘訣は必ずしも話が澤山に出來るといふのではなくして、相手に同情をし、先方の心を見拔くといふことにあるのですから、相手がもし繪を描く人であればまづ繪の話を持



出すことが肝要です。それは自分が繪の事を知らなければ、單に此頃は何をお描きですかときく丈けでも、先方に對して餘程よい感じを與へると思ひますが、日本の人は話をするのは面倒だから、まあ成丈け默つて居らうといふやうな考ばかりして居ります。ことに親睦會といふやうな會に出てまで、お互に睨み合をして居るに至つては、全く會合の目的を沒して居ると申さなければなりません。高等女學校の同窓會などは僅に年に一回ある

なしで、久し振りに先生やお友達と逢ふ事であるから自由に思ふ事を話し合つたらよからうと思ひますのにこれも矢張りお菓子を食べて餘興を見るに過ぎないといふのは、實に歯痒い事で御座います、西洋の同窓會には餘興といふやうなものもないでは御座いませんけれど、それは必ずしも見なくとも宜しいので、まづ打集ふて語り合ふ事が無上の樂しみになつて居るので御座います。何うか日本でも婦人の集會にお話を面白くする工夫はないものでせうか。私はも少し廣い家にでも移るやうになりましたなら、時々同志の方に御出でを願つて、お互に打とけたお話をすることを初めて見たいと考へて居ります。それも會と名がついては、またしかつめらしくなりますから、極輕く何となしに集つて、お茶でも飲むとか、一寸した御飯でも頂きながら、自由にお話を交換いたしましたならば、嘸面白い事でもあり亦有益でもあらうと思ふので御座います。

△敏捷なる仕事の變化

それから最一つ西洋婦人に羨しいと思ふ事は、仕事の變化が敏捷で、且つ一寸でも無益に時を過さないといふ事で御座います。それは船の中で一番よくわかる事ですが、西洋婦人は自分の部屋で本を讀んで居つたかと思ふと甲板に出て來て運動をする、運動ばかりも飽きれば今度は船の中の動物でも見に行きます。物を見るといふのも一つの仕事なので、決してじつとして時間を空費するやうな事はありません。それが日本人ですと一時間でもポカンと海を眺めて居るといふやうな事が、珍らしく御座いません。私は英國で敎師の家に居りましたが、其先生は極多忙の方で御座いますがお茶でも飲んだあとまあ廿分暇があるとなれば、其間繼ぎものでもしやうといつて、破れた靴下でも取つて來てはセッセとそれを繕はれます。そしてそれをしながら私に何か雜誌でも讀ませて聽いて居られるとか、或は質問をさせてお答へになるとかいふ風で御座いますが、其内時間になれば直ぐに仕事を片付けて本務にとりかゝられる。何うも其時間の使ひ方の敏捷な事は

實に働くばかりで御座います、かやうに西洋人が頭をつかつた次には勞働をし、身體をつかつたあとには休息をして、而かも其間に少しも時間を遊ばせないといふのは、實に羨むべき事で御座いますが、これも一に周圍の事情から起る自然的要求の然らしむる處だらうと思はれます。私共でも西洋に居りますと、格別つとめといふではないけれども、自然さういふ風になるので御座いますが、日本に歸つて參りますと矢張りだらけて了ふ傾きが御座います。



△周圍の事情より起る自然の要求

周圍の事情といふ事を申しましたが、それには家屋の構造といふやうなものがよほど、深い關係をもつて居るだらうと思ふので御座います。御承知の通り西洋の家屋は壁を以て部屋と部屋とが仕切つてありますから、自分の部屋へ入つて錠でも下して了へば、もう人の聲もきこえず、全く交通遮斷となるので御座います。從つて注意を集中する事が出來るのですけれども、それ

丈けまだ長くは其狀態をつゞけて居ることが出來ない。一二時間もすればまた外の空氣に觸れたいと思ふて來ますから、自然庭へでも出て運動をするやうになります。處が日本では家の中に居つても、直ぐ目の前に庭が見えますから、わざ〳〵下り立つといふ必要が御座いません。其代り自分の部屋に居つても隣室の話もきこえ、外を通る物賣のよび聲もきこえる。時にはまた他の人が遠慮なく通り拔けて歩くといふ風ですから勉强などをするには餘程不都合で御座います。一日でも坐つて同じ事にかゝつて居られますなれども、其割合に仕事が捗らないので御座います。さればとて日本の家屋にもいろ〳〵よい處があるので御座いますから一概に西洋風の構造がよいなど申す事は問題で御座いませうが、とにかく何うかして日本の婦人にも少し精神の働きを活潑にし、餘り無益な時間を過さないやうにいたし度いもので御座います。





薩摩人の子供の敎育法

精華女學校長　勝田孫彌

我が薩摩人の間に今日獨得の士風のあるのを見て、英國や獨逸邊から、何うして其んな氣風を作つたかと言つて、態々聞き合せに寄越す者があるさうですが、併し別に特種の書物を授けるのでも無く、又是れと言つて他と異つた敎育組織があるのでもないから、十分な答へも能きないさうで、彼等は非常に不思議に思つてゐると云ふ事です。けれ共私の考へでは此の士風を作つたに就ては確に大なる原因がある。それは何かと云ふと、薩摩に於ける家庭の敎育法、一般の風俗、及び交際上の習慣などが、他と大に異つてゐると云ふ事です。

△男の子は神樣扱ひ

先づ家庭に於て子供を育てる有樣から言つて見ると薩摩では親達は特に男の子供を可愛がると云ふ風がある。たゞ可愛がると云ふよりも寧ろ神樣の樣に大切にすると言つた方がいゝかも知れない。一寸した事であるが、干棹の懸かつてゐる下などを男は決して通るものではないと母から敎へられてゐる。これはつまり男の頭を尊ぶからです。恁う云ふ風に敎育されてゐるから、鄕國から初めて東京へ出て來た者などは、其等の事に構はぬのを見て皆驚いてゐる。私なども鄕國を出てから旣う隨分古いものですが、今尙ほ子供の時に敎へられたのが頭に沁みこんでゐて、干棹の下などを通ると、何となく變な氣持がする。又顏を洗ふ器物にしても、男を大切にする所から、男用と女用とはちやんと別にしてある。そして女が男の物で洗ふと云ふ樣な

事があると、女はそれこそ甚く叱られる。此れなどは今日の時勢には或は適しないかも知れぬけれども、兎も角も萬事がかう云ふ風です。

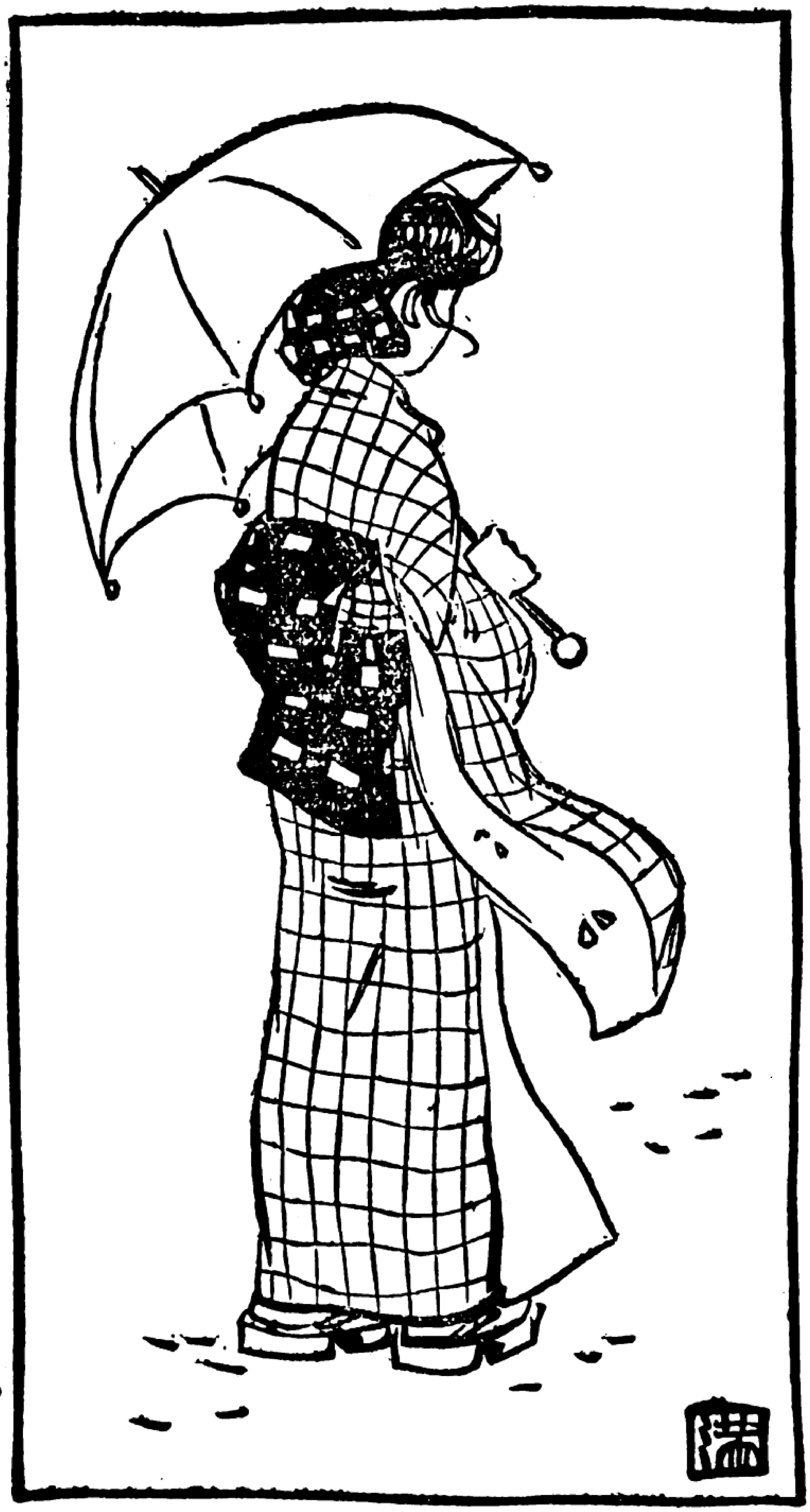
△母親は健兒社の聲援者

又士族の良い家庭に於ては、子供が遊びに往つて、何んなに着物を破つて歸つても、母は決して小言を言はない。角力を取る、暴れる、そして着物をメチャメチャにする。さう云ふ事をしなければ後に子供は役に立たぬとしてゐる。私なども此の流義で育てられた方で、着物は姉が縫つて呉れましたが、袖を無くして歸へると、元氣だと言つて却つて喜ばれたものでした。

其他鄕中の交際と云ふ事も薩摩人の氣風を作つたに就ては大なる原因となつてゐる。そして父よりも母が之を奬勵したと云ふ事は殊に注目すべき點である。鄕中の事は前回にも一寸述べたが、尙は委しく言つて見ると、之れは一部落の者が集つて組織してゐる結社的のもので、此の附近(淀橋)で言つて見れば、角筈鄕中柏木鄕中と言つた風のものが幾つも出來てゐるのです鹿兒島の城下では之を鄕中と言ふけれども、田舍の方では之を方限と言つてゐる。其處では部落の公共的の事柄は無論協議するし、又士氣を鼓舞すると云ふ事には餘程重きを置いてゐて、昔は弓術、砲術などの稽古をもしたものでした。男の子供は七歲から皆なそこへ這入る事になつてゐるが、七歲から十四歲迄の者は稚兒と言つて子供同志の交際をなし、十五歲から三十歲迄の者は二歲と言つて所謂健兒社を組織する。尤も二歲の中、十五歲から十八歲迄の者を兵子二歲と言ひ、之れがほんとうの健兒です。鄕中の集會日は月に何回と定まつてゐる。其の日に子供を必ず出席させやうとし、少しにても時間に遲れさせまいと氣を揉む者は母親である。少々位は病氣でも必ず推して出席させる。そして恁うしなければ子供は意氣地なしになると言つてゐる。

△集る子供は出來る丈け歡待す

斯くの如く親達は子供を強健に、元氣よく、活動的にさせる方面の事を奬勵すると共に、一方に於ては、餘所の子供が自分の家へ集まると云ふ樣な事があると能きる丈け力を盡し、それを歡待して、自ら喜ぶと云ふ風がある。だから子供の方では、自然友達の父母をも自分の父母の樣に思つてゐる。薩摩の此の風習は確かによい樣に思はれる。子供等は他の父母をも自分の父母の樣に思つてゐるから、それを呼ぶには、伯父さん、伯母さんで通して居る。從つて又親しくもなる。此の風習は今日でも尚ほ殘つてゐて、私の宅へ誰れか郷國から出た者が尋ねる時には、矢張り伯父さん伯母さんと云つて來る。橫山伯の處へ書生が訪ねるのでも、矢張り伯父さんと言つて行く。だから其樣言はれる方でも丁度自分の子供の樣に思ふて可愛が



ると云ふ風がある。彼の大久保甲東と西郷南洲との仲の善かつたのも、一には之れが原因を爲してゐる。大久保の父は大の勤王家で、國事の爲に島に六年間も流されてゐたと云ふ位の人物であつたし、其の母は皆吉鳳卿と云ふ學者の娘で、是亦賢婦人であつた。そして大久保と西郷とは同郷で郷中の交際もしてゐた所から大久保の父母は西郷を我が子の様に愛し、西郷は又大久保の父母を我が親の様に慕ふて大なる感化を受け、遂にあの様な人物になつたのだと言はれてゐる。

△開け放しで寢ても賊は入らない

薩摩人が今日醇朴なる氣質を有し、郷黨相親しむ風のあるのは、全く斯かる風習があるからです。そして此れは鹿兒島の城下よりも田舎の方限の方が一層親密の様に思はれる。私の郷里は喜入と言つて戸數二千戸許の小さな町で、其の中に私共の方限がある。其處では、少しでも自分より年取つた者をば皆伯父、伯母と呼び、又少しでも年若の者に對しては誰れをでも自分の子供の様に言つてゐる。私などの様な年取つた者が歸つて見ても、少しく年上の者よりは全く子供の様に扱はれる。そして此處は二千戸もあり乍ら、皆雨戸を締めて寢ると云ふ事がない。夏でも冬でも只だ障子を一枚締めた丈で寢てゐるが、それでも盜賊が這入つたと云ふ様な話は未だ聞いた事がない。實に醇朴なものである。それと云ふのは方限などの關係から郷黨互に相親しんでゐるからです。

△薩摩の女と女學者

薩摩人が斯う醇朴なのは、定めし學問をして居らぬからだらう、と言ふ人があるかも知れぬが、明治十年には既に中學校も出來て居た位であるから、決してさうではない。尤も女は餘り學問はしなかつた方ではあるが、而かも家庭に於て自然の間に敎育を受けて居た。それ故今日少々位學問をした婦人の言ふ様な事は、年取つた女は皆辨へてゐる。先日も或る家を訪ねたら、

其處の夫人が、「今日の婦人は學問をしたと言ふけれども、何事にかけても實に淺いもので、常識の乏しいのは、驚く薩摩の女は學校へは這入らぬけれども、流石に家庭教育の爲に十分養はれて居た程あつて、何をさせても却々氣が附く」と言つて居られたが、之れは實際で、目上目下の客の待遇法、言葉の上の禮儀作法、或は子供の教育、其他家事經濟の事など、何にかけても能く心得てゐる。だから女に學問は奬勵しなかつたけれども、家庭の教育法は能く行つてゐた。此の母があつて前の樣な方法で子供を教育するから、子供は却々元氣よく發育する。

△十五夜の子供の遊び

私の鄕里では八月の十五夜には、毎年月のお祭をするが、其の時には、方限中の澤山の子供を二つに分けて綱引をする事に定まつて居る。で初めは子供ばかりで行つてゐるけれども、追々大きな者迄が出てくる。



それが熱してくるとお仕舞には家を開けつ放しにして家内總あげで出てくる。父も母も出て來て引張り合ひをする。度々其れを行ると遂には其の綱が切れて仕舞ふ。すると又其れを廣場へ持つて行つて卷いて土俵場を作り、中へ藁を敷いて、今度は子供に角力を取らせる。此の時には子供等の父母や姉などは其の廻りを取り卷いて如何にも樂しさうにして眺めてゐる。これなども母親が主として奬勵するのです。今日は昔しの樣に盛んではないかも知れぬが、矢張り行つてはゐる。だから子供は非常に活氣があります。

△稚兒の遠足運動

近頃は何處の學校でも遠足と云ふ事を能く行るが、是れなども薩摩では、ずツと昔から行つて居る。郷中の中の七歳から十二歳迄即ち稚兒の年輩の者は、一年に幾度か、三四十人位一緒になつて必ず遠足を試みる例となつてゐる。其の時には各自に握り飯を腰にくゝりつけて、草鞋穿きで勇んで行く。これを行らずにぐずぐず引込思案をしてゐると母親が承知しません。遠足は多く三四里位ある神社に行くので、勿論歩いて行つて歩いて歸へる。烏帽子竹神社と云ふのは、非常に高い山の上にあつて、それへ登るには上から石が轉げ落ちる樣な嶮しい處もあるが、さう云ふ處へ五六里或は七八里もある樣な遠方から七八歳の子供が往復しても平氣なもので、山上で辨當を食べて馳けつこをして下ると言つた風。恁う云ふ事は薩摩は實に盛んです。

△森有禮子の感嘆

外に於ては斯くして體力を鍛え、精神を練り、人と親しく交際し、家庭に於ては母がそれに聲援を與へてゐる。即ち郷中の交際と獨得の家庭教育、これが薩摩人が今日の氣風を維持してゐる原因である。換言すれば氣質鍛錬の方法が十分に備はつて居たからと言つていゝ。森有禮氏は此の氣質鍛錬と云ふ事を非常にやかましく言はれた人ですが、或時鹿兒島へ來られて、矢張り此の行り方に限ると言はれて、それから今日學校で用ゐてゐる兵式體操が初まつたのです。

薩摩では男の氣風が其樣であるから、女迄がそれに感染して、他とは幾らか異つてゐる。優しい中にも那邊かに男の樣なところがある。年取つた婦人でも矢張りさうの樣で、那邊かに强味がある。恁う云ふ婦人に育てられた子供は如何かと云ふと、只今東京に居る人人に就て見ても結果は皆好い樣である。要するに薩摩の風俗習慣にはなか〳〵見るべき點がある。是等の事を能く理解して子供を教育するならば、恐らく過りは無からうと思はれる。（談話筆記）



女學校の一時間

三輪田女學校家政科の一時間（第四年級）

梨花女

四月廿六日――麗かに晴れた月曜日の午後、私は三輪田女學校の應接室に控へてゐました。

隣室の柱時計が一時を打つと、硝子越しの木の間に見え隱れてゐた生徒方の姿が皆敎室の方に走つてゆく。算盤を彈く音、物の數を讀む聲などの騒がしく聞えてゐた受附から、幾人かの足音が遠ざかつて行つたと思ふと跡は靜かになつた。

「どうもお待たせしました」と三輪田敎頭が出て來られて、此方へと案内される。職員室側の廊下を過ぎ、二階に上ると、東の端が第四年級ロ組の敎室と註されて、今家政科の授業が始まつた許り、五六十名の生徒が整然と並んでゐられます。

敎師は西野みよし先生、丁度染色に就いてのお話しが始まつてゐました。

「衣服の上着には白い色のものを着けるといふ事はなく、屹度何かの色をつけますが、あれは何の爲めでありませう……何々さん」

と先生の質問がある。と名指された生徒は、

「裝飾と衛生との爲めであり升」との答へた。

「裝飾と衛生、さう、裝飾もありますれ、衛生にも必要です。併しその二つ限りですかもうありませんか、○○さん」

「裝飾と衛生と、經濟との三つを兼れたもので御座います」

「左樣です」と先生の聲には如何にも滿足らしい響きがある。

「裝飾、衛生、經濟と、この三つを兼れる爲めに染色の必要があるのです、處で、裝飾の點は云はなくともお分りになつてませうが、經濟上に色をつけるといふ事が何故可いのでせう誰々さん」と質問例の如し。

「色をつけますのは、白いものですとすぐに汚くなりますから度々洗濯しなければなりません。ですから、色をつけて汚れの見えないやうに致します」

「では、衛生上には……何々さん」

「冬なぞは黒いものですと、温かい空氣を吸收しますから」

何處か隅の方で小さな笑聲が起つた。

「空氣を吸收するからでせうか、……さん」

「溫かい熱を吸收しますから、大そう溫かくて衞生上によろしう御座ひます」

「さうです。熱を吸收するから溫かいのです。そんなわけは理科の方でお習ひになつてる事だから私が改めて此處でお話しする必要はありません。ですが又、一方から云へば黑いものは垢が見えぬから大層惡い。垢の見えぬばかりでなく、もしその染色の原料、即ち染草に毒のあつた場合など、これを直接肌につけますと皮膚を惡くしますから、上衣には染色の附いたものが可いけれども、肌につくものだけは是非白いものでなければなりません。

染色に毒のあるか無いかは化學的の試驗をして見なければ分りません。一寸眼で見分けるといふわけにはゆきませんから、反物を求める時には成べく信用のある吳服屋に行つて、價格の少しばかりは高くつても品の確かなのを買ふのが一番です。それからまた見た處はおなじ色合のものでも、染方に依つて中には、おはぐろで下地を染めたものとか、白地を晒す時にソーダやさらし粉を澤山に使つたものなどは、どうしても地質を弱めて早く損みますから經濟上非常な損になります。

次に色合ですが、これも又時に依つてよく應用してゆかればならぬ。凶事の時には凶事の色、吉事の時には吉事の色、ふだん着、年齡に依つてそれ〴〵時と場合によく應用してゆかればなりませんが、まづふだん着としてはどんな色合のものが可いでせう……」

「經濟上を主として、黑つぽい色合のもの」

「晴着には」

「裝飾上を主として、薄色のパツとしたもの」

衣服として、凶事の場合には沈んだ色合のもの、例へば黑、黑ずんだ鼠など、吉事の場合には派手やかなぱツとした色合。などゝ問答があつて、今度は年齡に依つて、「年取つた人には」との問ひに對して皆、「地味な色、例へば黑とか黑ずんだ鼠色とかいふ風な色合」との答へが多かつたが、先生の意見は違つてゐた。

「年寄には餘り黑ずんだ色はよろしくないのです。何故と云へば年寄はどんなに奇麗にしても汚く見えるものですから、年齡不相應な位に派出な方が可い。年寄で誰にも似合ふのは黃色が一番です。それから茶色なぞも可いでせうね。次に若い人、例へばあなた方位の年頃ではどんな風な色合のが可いと思ひますか」

これにはさすが、小豆色、紫、臙脂などの答へが多かつたのは道理だと思はれました。

「併し又、年齡ばかりでなくその人々の樣子と顏色なぞに依つてよく考へねばなりません。自分にどんなものが似合ふかも考へずあの人に紫の矢絣がよく似合ふから私も紫の矢絣にしやうとか、あの人の半襟が大相好いから私もあんなのを買はふといふ人眞似ばかりしたのでは、到底自分に合つた配合は得られません。ですからよく自分で自分に合ふものを考へて巧みに配合しなければならぬ。これは決してお洒落の爲めに云ふ

のではありません、又今あなた方にさうなさいと云ふのではありません今はお父樣やお母樣達にお任せして、將來一人立つてやられねばならぬ時の役に立てる爲めにお教へするのです。學校で畫を教へるにしてもあなた方を畫工にする爲めではありません。將來衣服の撰擇をする場合に於ても巧みに色彩の調和を得るやうな、審美的の智識を養ふ爲めであります。若しこれ等の智識を應用して、最も巧みに配合を得られたならば結構です。

色の白い人には何でも似合ふものですが、色の黑い何色も似合はぬ人には寧ろ色の無い白い中襟を掛けた方がよろしい。

それから着物の重ね、これは上着とかけ離れた色はよくありませんが一概にさうばかりも云へません、絶對にかけ離れた色で最も配合よく品の可いのもあります。例へば黑と白との如き。亦赤と黑との如きは惡魔の色とさへ云つて、最も厭らしい色ですけれど、使ひやうによつては極く品よく見えるものです。

黑と紫、これは絶對に似合ひません。

要するに、色に依つてその人の品格に關係するものです。

本を開けて……そこに黑い線を引いてありませう……」

と、云はれたけれども私には本が無いから、只聞いたゞけを記しますと、

赤と青と黄――これが色の原素であります。

赤と黄の帯つたものが樺色となる。

赤と青で紫。

黄と青とで綠。

此の取合せの加減でいろ〳〵な色を現すものです。

赤と綠、黄と紫、かばと青の如きは合ひ過ぎて却つて上品でなくなります。」

此の時、時間を告げる鈴の音がけたゝましくひゞいて、階下の教室で戸を開閉する音が騒がしくなつた。「………のお話に就いては又此の次に……」と先生の言葉を切つ掛けに私も教室を出て暇を告げました。

女子商業學校倫理科の一時間（高等科二年）

△應接室の十五分間

通用門を入つて突き當りが嘉悦先生のお住居、玄關の鈴を押すと、取次の若い方が出で來られて、

「只今授業中で御座いますが」との事、

私は、前日先生にお願ひしておいた旨を話すと、「それでは」と飛石傳ひに學校の應接室に案内されました。受附部屋に與つた六疊許りの室で卓子に椅子三四脚お定りの如く置かれてある。壁の一方に、柱時計が丁度今九時五分前を示してゐる。

卒業生徒數一覽、生徒年齡別、府縣別、父兄職業別などの表が掲げ

く一方の壁に貼られてあるばかり、何一つ装飾があるでもなければ、華美とか立派とか云ふ點は見出せないけれど、それでゐて何となくすがすがしい心持よい感じがされる。

硝子に一點の曇りもなく、床に塵一つ止めぬ潔さは普通の學校や[illegible]間などに見受け難い處でせう。嘉悦先生が、每朝生徒の先立ちとなって掃除から雑巾掛けまでなさるといふ事はかねて私も聞いてゐたが、成程さうなければ斯くまでに手は届くまいと感心いたしました。

時計は丁度九時を指した。鈴が鳴る。各教室から物音が聞え初め、廊下を行き交へする生徒の姿が窓硝子にはつきり映る。

お納戸のお袴に、鼠色紋附のお羽織を召した嘉悦先生が入つて來られて、

「只今初まりましたらすぐに御案内いたしますから」との事、見るともなく例の一覽表に眼をさらしてゐると、又鈴の音が高く耳に響く。嘉悦先生の案内に隨いて私は二階に上りました。

「只今中庸のお話をして居ります。前の復習をしたり、思ひ付いた事を入れたりする事がありますから、切々になりますがそのお積りで……」と小牧先生は一應私に斷られて、さて……と向き直られた。

△婦人の勇氣

「此の前勇氣に就いてお話をしました時、孟子の云つた勇氣に就いての可い言葉がありましたがどういふのでしたか」と先生の質問。

「富貴も淫する事能はず貧賤も移す事能はず威武も屈する事能はず」

「左樣、處で「富貴も淫すること能はず」とはどういふ事でせう。」

「人間といふものは富貴の地位に置きますと、その地位や財産を頼んで心がゆるみ、知らず〳〵に墮落するもので御座いますが、大丈夫はある位置に立たせても富貴の爲めに淫せられるといふ事が御座いません」

「貧賤も移す事能はず」とは

「普通の人間ならば、貧賤の位置に立たせますと、心變りがして邪心のきざすものでありますが、大丈夫はその時に當つても正道を守る事が出來ます。」

「威武も屈する能はずとは」

「威武を以てしてもこの爲めに屈せられる事が御座いません。」

「さうです。如何なる武力を以てしても屈せられず、貧賤に處して道を守り富貴にあつて淫せられる事の無い、これを大丈夫といふ。

處で、一口に勇氣と云つても、腕力の勇氣智識の勇氣などいろ〳〵あります。若し勇氣は智識や腕力に限られたものだとすれば、婦人は全然勇氣の無いものと云はねばならぬ。

處がさうでない。時には男よりも勝れて勇氣あると云はれてゐる位。

それは心の中の勇氣即ち克己心です。此の己れに克つは易いやうで最も難いもので、王陽明程の賢者でさへ斯う云ひました。

「山中の賊を逐ふは易けれども心中の賊を逐ふ事能はず」と、それ程に得がたいものではあるが、又修養時代に幾らでも得られるものでありま

す。つまり忍耐力を要ふ事が肝要なのであります」

△中庸は平凡の道

「隱れたるを求め怪しきを行ふ、我はなさず」と孔子は云はれました。隱れたるを求めとは人の氣付かぬ六ヶ敷い穿鑿をする事、怪しきを行ふは人の知らぬ風變りの事を爲す事、併し孔子はそんな事をしないと云はれました。又、「君子道にして行ふ半途にして止む我又能はず。」
「君子は中庸による。」
「世を脱れずして悔いず人に知られずして悔いず」
中庸の行ひとは平凡な行ひ、平凡な道による事、「世を脱れずして悔いず知られずして悔いず」とはわが名は知られなくても悔ゆる處なく、平凡に世を過すといふこれが中庸の道であります。」
併し考へればなりません。此の書にかく説いてあるからとて、今の世の中に立つて名を賣るといふ事は果して惡いでせうか、現在今の世の中では人に知られる處でなく、我れから我が名を賣るものである。例へば書物にしても、これは可い本だと自分から廣告したり、商人が自分の品物を自分から褒めて賣るなど。大抵皆さうですがあれは惡い事でせうか……」
「よい事だと思ひます。何故と云へば、いくらよい本であつても眞に廣告しせずにゐたら世間ではそれを知らずにゐますから、善い事を廣告し知らせるのは世間に善を施こすわけになります。」
「左様……つまり世に善を施すわけになりますから、それ相應には廣告する必要があるのです。
次に、自分の名譽を自分から世に廣告する人がある。これはどういふものでせう……
此の問題は私にもよく分らないのです。が私の考へでは自分の價値有りのまゝならばよいと思ふ。それを世間ではよく、一寸のものを一寸五分若しくは二寸位に廣告したがつてゐるし、又さういふ人が澤山にあります。
併し之は間違ひです。自個の價値が一寸なら一寸、若しくは少し控へ目に九分位に紹介するのが最も適當であらうと思ふ。」
さてその次ぎは——と先生は起つて、黒板に向はれました。

第十二章

君子之道費而隱。夫婦之愚可㆓以與知㆒焉。及㆓其至㆒也雖㆓聖人㆒亦有㆑所㆑不㆑知焉。
夫婦之不肖可㆓以能行㆒焉。及㆓其至㆒也雖㆓聖人㆒亦有㆑所㆑不㆑能焉。
費而隱の費は明易㆑知。隱は微ニシテ難㆑です。君子の道は易くして雖い、教育の無い愚夫愚婦でも與り知るを得れども其奧義に至つては聖人と雖も知らざる所あり。夫婦の不肖よく行ふを得れどもこの奧義に至つては聖人と雖も亦能くせざる所ありといふ。
人飲食せざるなし、よく味ひを知る事なしと、同じ理窟であるぞ。
貴女方がかうして小學校から女學校まで隨分の長い間、倫理修身を學ん

である。それ位學んだならもう大抵よさしうなものだが、そこが即ち致命傷です。

教育の無い親でもその子に向つて「お前そんな事しては親にすむまい」と説くそんな風に倫理といふものは誰にでも分り、誰にも口出しの出來るものであるけれど、さて其奥義に至つては、如何なる學者が幾十百年究めても到底知り盡し云ひ盡す事の出來ないものであります。又、昔から倫理の歴史に照して見ても、人各々に依り同じ事柄に就いても種々雜多な説がある。今後に於ても日々に新らしい説が出て、かくして永久に盡きる事はないでありませう。

而して、斯くの如く誰にも口出しの出來るものであるけれど、それがまた容易に行ふ事の出來ぬものであります。

それからこれは中庸とは別の話であるが、近頃自殺といふ事が大變に流行つてゐる。中には、一人では嫌やだから是非道連れを拵へて死ぬなぞといふ心得違いなものさへある。そして一時は大層六ヶ敷い問題となつてゐたが、此の自己を殺すといふ事はどうでせう。道徳上から云つてもどうでせう。……○○さん」

「絶對的に惡い事です」「何故惡いでせう」

「吾々の身體は父母から受けた父母の身體でありますから」

「父母の身體、只それだけでありませうか」

「先祖から遺された事業を繼ぎ、それを後世に遺すものは吾々の務めであります。自分といふ此の身體は、過去と未來につながつた現在のくさりの一つでありますから、それを自ら殺すといふのは先祖や子孫に對して濟まぬわけであります。」

「左樣、未來と過去に繋がつた自分の身體を自ら殺すのは甚も間違つた事であります。かう云へばまた、過去は過去、未來は未來、現在の自分は自分の命であるから、勝手だと言ふものがあるかも知らぬが決して自分一個の身體ではない。自分は家族の一人である。又社會の一員である。引いては國家の一員である。家族の爲めに生き、社會の爲めに生き國家の爲めに生きねばならぬ。

中には、自殺の原因に就いて同情すべき點もあるが、併しそれは大抵世の中の苦痛に耐えられぬ勇氣のない人間のみです。人に濟まぬ事をしたとか恥かしい事があつたら、その恥をも雪ぎ人にも詫びるまで生きて務めればならぬ。

苦のある代りには樂もある世の中の事、その苦がいやだからとて無我意ならよいがそれでは間違つてゐる。いろ〳〵倫理學者が論……」

私がこゝまで聞いた時、「今日はこれまでにしておきます」と先生は本を閉されました。二人計り生徒から質問のあるのを待つて、小牧先生と共に室を出る。

「大抵まあいつでもあんなものです。倫理の書にも新らしいのが、種々ありますが矢張りかうした古いものを使つて、その折々世間の出來事や何かで氣付いた實例を引いて敎へる事にして居ります」と緣側で禮を述べてお別れする。

嘉悦先生に一言お禮をしたいと思ひましたが、お姿も見えぬに態々お手間を取らすも却つて失禮だから、玄關先から先刻の取次の方によろしく」と挨拶して門を出る。土手の若葉が氣持よく雨あがりの濕ひを見せて、外には招魂社參りの人の往來が賑はつてゐました。

産科婦人科専門 醫學士 北畠孝夫先生閲

最近

婦人病心得

しもの病

自宅療法

女の一番つらい病は。しもの諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齢の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、獨り心を痛めて、素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて。生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛歎の極である⊙著者は多年の實驗と。最近の學説を基礎とし。(婦人病者の心得)と題し上記の各項に分て丁寧親切に詳説せり⊙病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して、自宅の療法を會得せよ

●當分の内無代進呈す送料貳錢封入至急申込まれよ

發行所 東京築地新榮町四ノ一 (電話新橋三六〇一番) 笹岡省三

目次 (婦人病の総論◎血の道(ヒステリー)の原因病理及び自宅療法◎神經衰弱、貧血、萎黄病とは如何及其療法◎しらちながちの病理及其根治法◎月經時の手當月經諸病の療法◎姙娠の原理、受胎すべき場合姙婦の攝生、つわりの養生法)

無代進呈 (但送料貳錢を要す)

送花原料

東京九段坂

吉住商店

電話番町二〇五六番

振替口座六六七九番

●營業目錄●=御入用ノ方ハ二錢切手封入東京九段坂=吉住商店宛申込マルベシ直ニ進呈可仕候

女(その一)

家庭整理の指導

當代第一流の女子教育家編著



家庭百科全書

全部五十册　每月一回發行

和裝頴美本　◉紙數各三百頁　◉石版彩色口繪一葉　挿畫十數箇

▲定價一册金四拾五錢――郵稅八錢

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、動もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概ね理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過ぐるか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

第一編　**新家庭訓**　三輪田高等女學校長　三輪田眞佐子女史著

第二編　**四季料理**　宮中臣民兩流料理師範　大日本割烹學會々長　石井泰次郎君著

第三編　**裁縫指南**　女子高等師範學校教授　喜多見佐喜子女史著

第四編　**和洋菓子製法**　東京割烹會講師　龜井まき子女史著

第八編　**簡易治療法**　新潟縣高田高等女學校教諭　藤井靜子女史著

第九編　**禮式と作法**　女子高等師範學校教授　佐方鎭子女史著

第十編　**惣菜料理**　赤堀吉松君　赤堀峯吉君共著　赤堀菊子女史

第十一編　**編物指南**　女子技藝實踐學校編物科主任　三木とみ子女史著

東京日本橋區　發兌元▶　◀販賣用電話　本局二六二〇▶

女(ゐの二)

婦女必讀の大全書

第五編 **茶道と香道** 水原翠香女史著

第六編 **諸流生花指南** 琴松園文雅君 松幸齋常君 共著

第七編 **育兒の務** 醫學士田村貞策君 朝夷孤舟君 共著

第十二編 **婦人の生理と衞生** 青山學院教授 牧野淸子女史著

第十三編 **教育お伽噺** 少年世界記者 木村小舟君著

第十四編 **女德の養成** 前田長太君著

第十五編 **家屋と庭園** 内山正如君著

第十六編 **魚鳥家畜の飼養** 農業世界記者 庭野化骨君著

第十七編 **女子作文法** 藤ふみ子女史 松崎ふく子女史 共著

〇第壹章 思想〇第二章 思想の整頓排列〇第三章 口語文〇第四章 口語と文語〇第五章 文章〇第六章 文の精練(其一)〇第七章 文の精練(其二)〇第八章 文の種類〇第九章 普通文〇第十章 書簡文●名家文例●附錄＝形容語〇同訓の文字

第十八編 **子女の教養** 私立高等女學校長 棚橋絢子女史著

●胎敎●哺育●泣く子の取扱ひ法●溺愛●二程の母●子女の質問●秩序を守る性習●子女の懲罰●子女の理想●玩具の選擇●子女と虚言●命令と服從●親の不行儀●夏期休暇●間食の利害●子女に教訓としての話說●物のあはれ●問攻の害●子女と遊戲●臆病なる子女●成田喜起の母●繼母としての子女の教養●魏芒慈●子女と名譽心●家事と少女●慈善的保護を受けたる少女●小學校時代の家庭敎育●母親の偏愛●從順の美德●熱誠なる習慣●子女に時間を尙重がらせよ●禮節の修養●傲慢心を暮らす親●淸水太郎左衞門が母●子女と讀書●子女と卑怯●活潑の眞●子女に錢を與へる親●告げ口●留守宅の母親と眞心の養成●子女の交際●名和が約束の松●少女と奢侈●保姆と僕婢●趣味ある子女●子女と貯蓄心●子女と宗敎心●自他の區別を明白にせよ●子女の病氣と親の心得●物言はぬ動物の取り扱ひ●小學校卒業後の教育●安詳恭敬●家庭童話二十題

女(ろの三)

本町三丁目 博文館 振替貯金口座東京二四〇番

東亞堂書房創業第五週年記念出版

加藤咄堂先生新著

修養論

三版出來

好機は短時日なり即刻決斷申込まれよ

修養は人生の一大事也常に心を修養に存する者は向上し、怠る者は墮落せざるを得ず。修養あるは實に吾人人類の恩寵にして又畢世の一大義務也。然かも**新しき時代**には**新しき人物**を要し、新しき人物には又**新しき修養**を要す乃ち先生の此著する所以にして古今に徹し、東西に亘りて倫理、宗教、哲學、等の諸家の深奥を討尋し、且偉人先哲が立志奮勵以て人格鍛錬に努力せし、各種の熱烈悲壯なる逸事史※を博引して、圓融陶冶こゝに**新たなる修養法**を建設せられたるもの從來江湖に散在せる**空想的成功論**の類に非ず。之を小にしては齊家處世の妙契を悟得すべく、之れを大にしては、宇宙人生の大目的に瞑合すべし。吾人が修道の唯一路にして、又向上自彊の絶好指針たり。

◉新時代の新女性は『女大學』的舊式道德に滿足すべきに非ず。又た突飛なる『歐米崇拜主義』に心醉すべきに非らず。

◉幸榮ある我が日出國の淑女には別に好適せる新修養法あり。本書此の修養法を說きて懇切を極む！

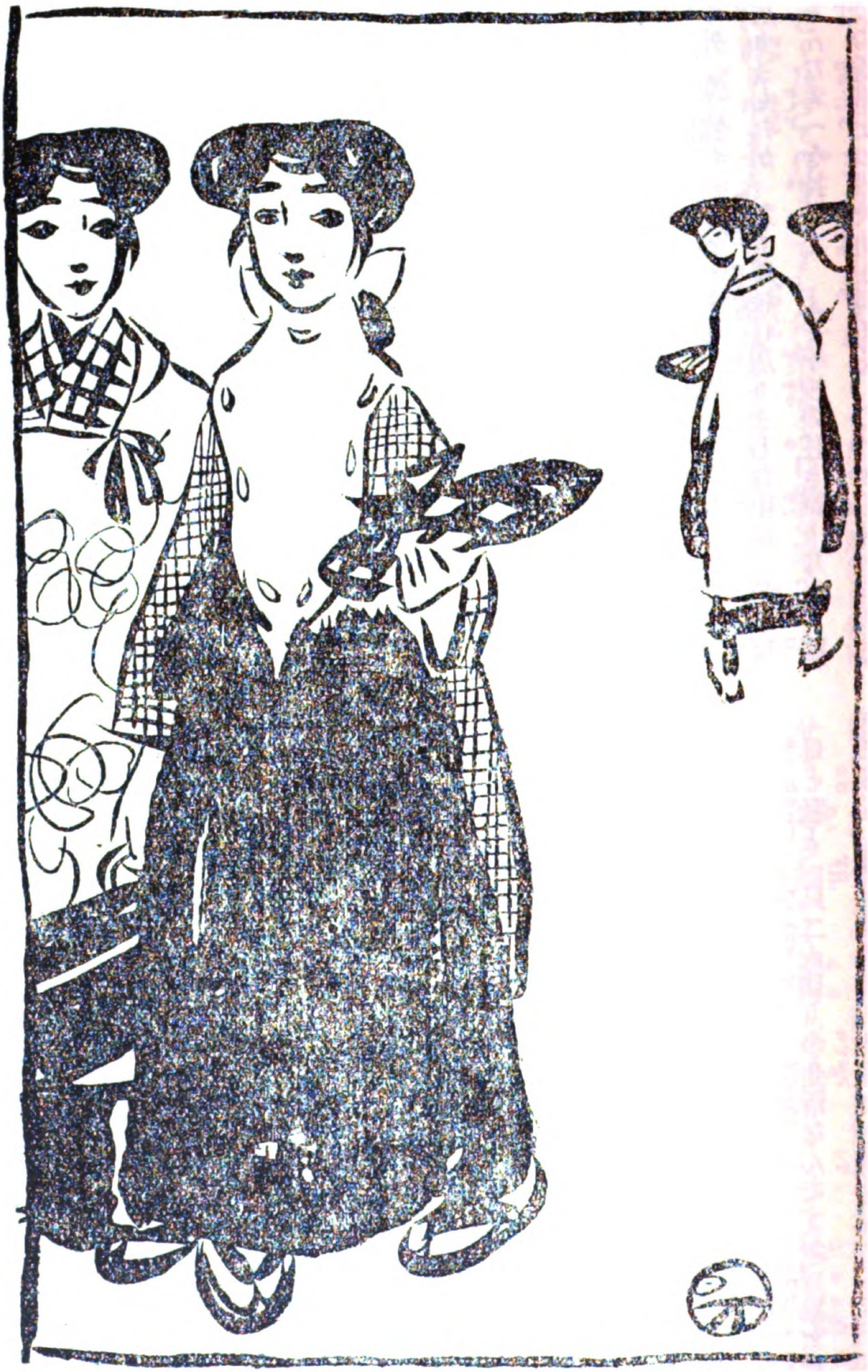
◉本書は家庭の消毒劑にして又子女弟妹の絶好指導者なり。

菊大判全一冊五百五十頁
總クロース金模樣頗壯麗
定價 壹圓八拾錢
◉六月卅日限り
特價 壹圓五拾錢
▲小包料 內地拾貳錢 清韓臺卅五錢

見本！ 見本！
往復葉書にて申込まるれば直ちに贈呈す。

發行所 東京本鄉一丁目 振替口座一一七 東亞堂書房 賣捌 全國著名書林

女(その四)



奮鬪して得たる月桂冠

五ヶ年間苦學を重ねし花嫁花婿の珍經歷

小ざくら

本誌を愛讀なさるお孃樣の中にも、お一人子とか、又さうでなくても、御後嗣となつて、お婿樣を御迎へなさるお方が、尠なくあるまいと存じます。さういふお方達の爲と、又一般のお孃樣との爲に、私の經てまゐりました道筋をお話して、いさゝか御參考に供さうと存じます。

▲理想の夫

今の女學生に、理想の夫はと尋ねれば、十が九まで必ず外交官だわと答へると、種々の雜誌に惡口が出て居りましたが、私も學校に居りました頃は、やつぱりそんな考へを持つて、よく學校の往き歸りなど、語學校の帽章をつけた方を見ると、なつかしくつてたまらなかつた事がありました。

卒業してから後も、私の理想は倨うよなど〻、高くとまつて、ふさわしいやうな緣談もいくつかありましたが、天から相手にならず、皆斷つて仕舞いました。

其の癖、誰さんはどこへ、彼さんはこゝへと、御結婚なさつたお話しを聞くと羨しくつて、何故私はこんなに緣遠いのかしらと、かこつ事も度々でした。

然し、私は一人子なので、皆樣の樣に、お嫁にゆかれる身分ではないのでした。まして家は、あまり豐かではありませんし、「小糠三合持つたら、婿養子に行くな」といふ諺もある位、とても理想の何のといふやうな、立派な夫を迎へる事は出來ないのです。それを思ふとつい捨て鉢になつて、一生獨りで暮さうといふやうな氣にもなりました。

▲敎員免許

母と私と、只二人切りの生活なんですが、私を敎育する爲に、多くもあらぬ財產は、遣ひはたして仕舞い

ましたので、三月、半年と經つうちに、生計は日毎に苦しくなつて行きますし、母はしきりに婿を取つてと、それ計り申ますけれど、私はどうしてもいやと申しまして、小學校正敎員の檢定を受けて、遂に敎員となりました（月俸十五圓）初めて生活の難も知り、墨よ靈よと、空想に耽つた昔が、馬鹿らしくも、又なつかしくもなりました。

▲花嫁花婿

筒袖の衣服に袴をつけて、毎日小さい子を相手に、樂しく暮して居りますうち、義理ある人の世話で、どうしても夫を迎へねばならぬ事になりました。年は二十四、會社員で、二十圓の月給取り、敎育はといふたら、小學校を卒業したばかり、只正直で溫厚なのが、取り柄といふ程の人だといふ話、私は全く情けなくなつて、去年あたり申込まれた方達が、急に戀しくなりましたが、覺めた夢を再び見るわけにもゆかず、すゝめられてやむなく、見合ひを致しました。天から馬鹿にしてかゝつたのですから、別にきまりわるがりもせず、寧ろ細かく觀察して見やうといふ意氣組だつたのですが、眞赤な顏してうつむいて居る其の顏に、思ひ掛けぬ威嚴があり、チラと私の方を見上げた眼には、凡ならぬ光がありました。ハツと思ふた刹那、其の人を尊崇する樣な、慕しい樣な心が、胸の中に起つて、やがて胸一ぱい、身體一ぱいに擴がつてゆきました。

いかゞでした？と、翌日媒介人が聞きに參りましたので、一も二もなく承諾して仕舞いました。母も親類の者も皆大變な不思議でも見る樣な樣子で、私の顏を見まもつて居りました。學士、軍人、高等官、外交官などいふ影が私の心にひらめかぬではなかつたのですけれど、それより強い希望の光りが、すぐ其の影を消して仕舞つて、學生時代の樣な氣持になつて、遂に吉日を選んで、綿帽子をかぶりました。

▲夫婦の苦學生

新婚旅行の樂しさも知らず、結婚した其日からすぐ

に大奮闘の準備にかゝりました。夫はかねて自分に教育のない事を、非常に殘念に思つて、國民中學會にはいつて中等教育を修めやうといふので、第三期（中學三年程度）に入會し、一日の事務を終つてから、夜おそく迄講義録に目を注ぐ事とし、私は教授を終るとすぐ、飯田町の國語傳習所に通つて、國語を一心に勉強しました。共に一年半で卒業し得るのです。月給は二人併せて三十五圓ですから、母と若夫婦の三人生活では、さほどに難義ではありませんでしたから、苦學といふても財政からではなく、時間上の苦學だつたのです。

▲粉骨碎身の五年間

月日のたつは早く、夢の間に一年半の修業をつんで、二人共首尾よく卒業證書を得ました。私は直ちに文部省の國語漢文の檢定を受け、夫は會社を辭職して私の若い時の理想通り、外國語學校の佛語科に入る樣にすゝめ、私は非常に奔走して、漸く某女學校の國語科の教員となり、月給二十五圓を得る身となりました。夫の學費だけでも十圓はかゝりますので、今度は生活も苦しくなりましたから、かねて覺え習ふた遠州流の生花教授を、毎日曜に致しまして每夜又國語漢文の教授も致しました。併しすぐに弟子がつくわけではありませんので、半年程は火の車の樣なさわぎ、其のうち夫も多少語學が出來る樣になりましたので、ある方の紹介で、某富豪の令孃の家庭教師となり、私の方も亦弟子が多くなりましたので、生活も少しは樂になりました。結婚してから五年といふものは、お互に粉身苦闘しましたが、此の間、母には決して不足や不滿な感じを與へぬやうに致しました心算です。

▲成功に近づく

妻が先生で、夫が生徒といふ、をかしな對照の三年も過ぎて、夫が二十九の三月、漸く私は理想の夫にかしづく事が出來るやうになりましたが、まだ〳〵物足らぬ心地が致しました、といふのは昔羨しく思ふた

友達の夫は、其の時も皆は私の羨望の焦點となつて居りました。何故と仰有い、私の夫はまだ學生々活を終つたばかりの所謂青二才なのでした、そこで外交官試驗を受ける樣にすゝめました處、夫も其の心がありましたのですぐ願書を出して、試驗を受けましたが、美事はねられました。やむなく又一年を研究期として過ごし翌年重ねて試驗を受け、やうやく合格し得ました。學生の頃家庭教師に參つて居りました家の御主人が、大層夫を信用して下さつて、宮内省の外事課へ夫をお世話して下さいました。初めは二十五圓でしたから、相變らず私は女學校教員と、傍ら花道教授をして、先づは心豊かに消日して居りました。

二年計り經ちましてから夫は急に、駐佛大使の隨行者と定められて、外事課を辭し、只今は花の都の巴里に參つて居ります。實を申せば私も一緒に參らなければならないのですが、年老つた母がありますので、日本に止まつて居ります。十年前の温厚で正直で無學だつた夫は、十年の後の今日は、鋭い機敏な派手な外交官として、とにかく注目さるゝ程の人となりました。

▲今後の覺悟

私の若い頭の理想は、十年間の奮闘に依つて、漸やく實行する事が出來ましたが、まだ〳〵滿足は出來ませぬ。分に安んぜずして不足をいふ人は不幸だと申ますけれど、私は不足を感じない人は不幸であると思ひます。不足なればこそ、滿足を得やうと奮闘して、一歩一歩、向上して行くのでせう。私の今後の方針は、奮闘であつて、私は夫を世界にうたはるゝ程の外交家と爲ねばやまぬ覺悟です、空想だ、無謀だとあざける方もあるでせう。然し、私の若い時の理想といふたのは實は空想の甚しいものでした、けれど、一心金鐵をも貫く譬へ、やう〳〵これまでに致しました、望んでならない事はあるまいと思ひます、只事は勤勉にあるのです、人の一生は、奮闘の歷史であるといふ語を、諸孃の御腦に、深く彫りつけて上げたいと思ひます。

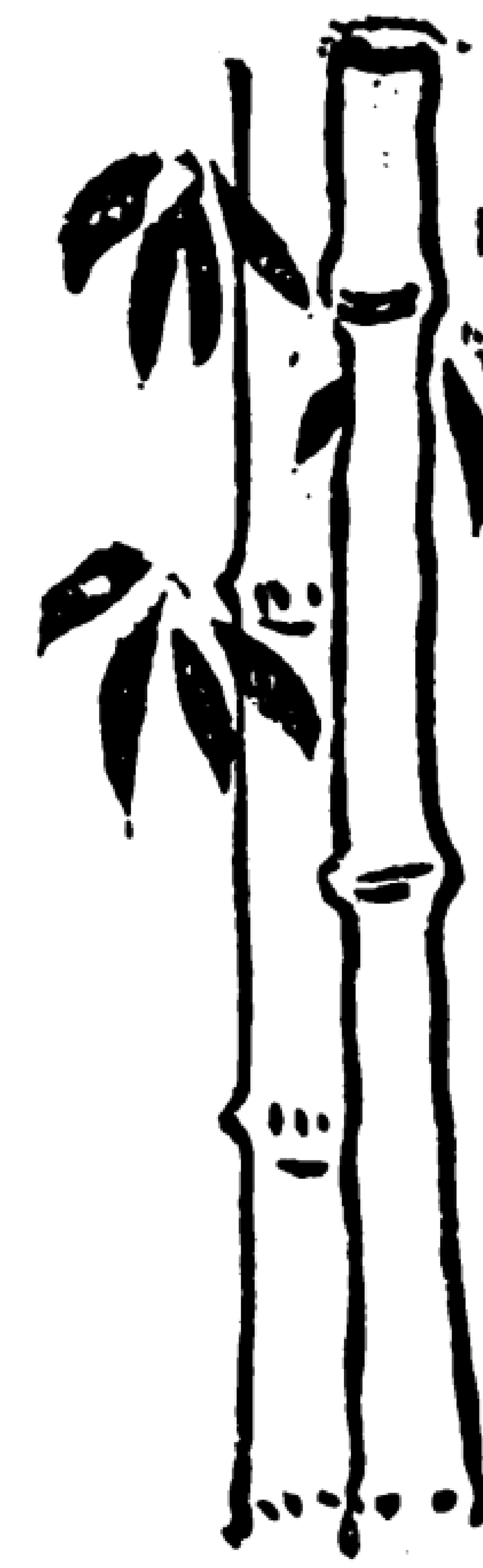
何卒諸孃は、虚榮の爲に外交官を夫にお選びなさら

ないやうに。棚から牡丹餅の落ちて來るのを待つ樣な御心をお持ちなさらず、自ら働いて自ら樂しみ、自ら幸福を作つてお出でなさいまし、殊更御一人子の方や、御後嗣の孃樣は、この御決心がないと、とんだ御不幸を御覽なさいますから、よく〳〵御注意遊ばして、皆幸多い御生涯を御作り遊ばす樣、希望致します。

夫の恥我が身の恥を打ち明けてこれから家庭を作られるお孃樣方にころばぬさきの杖を一もと参上げたく拙き筆に有りのまゝを寫し出しました。

巴里婦人の新裝





古稀の齢を重ねたまひし
花蹊女史

婦人記者

今年は跡見女學校創立三十五年に當り恰もよし老刀自七十の齢を重ねたまひしより刀自の薫化に浴せし名媛の方々緣故ある人々發起となりこのほど盛んなる賀筵を催ふされしはいと芽出度事共なりき以下の談話は老刀自の當夜談として記者に語られしところなり

○跡見家を興すべきはお前

私の生れた處は攝津の國の木津と申す處で、今は大阪市になつて居ります、一體跡見家は土地の舊家でありまして、德川時代の大庄屋で御座いましたが、私の父は人を助けるのが病と申してもよい程の人でした、其のために微祿して了つたのであります。そして私は天保十一年丁度その家計困難の中へ生れたので御座いました、私には姉を初めといたしまして、弟も妹もありましたけれども、私は赤坊の頃から玩具などは一向欲しがりませんで書いたものを見るのを悦び、どんなに泣いて居つても字をさへ見れば忽ち泣き止むといふ風で、四歳から字を書き、七歳頃にはもう人に敎へることが出來るといふ有樣であつたからでありませう兩親は常に私に對つて、跡見の家を再興すべき人間はお前であるといひきかせられて居りました。それで私しも兩親の言葉が深く頭に沁み込み、自分は何うしてもこの家を興さなければならぬ、それには嫁入りなぞをせずに何か一藝に達することが必要であると考へ、愈々熱心に學問を勵みました。學問と申しても其時分の事故漢學を勉強したのでありますが、畫をかくことも非常に好きで、十二歳の時から稽古し初めました。

○父上に代りて子弟を敎ふ

私の父は書の名人で、微祿してからは習字や讀書を教へることを家業といたして居りましたけれども、相變らず人の世話することが好きで御座いました。それに貧乏はいたして居りましても、もと／＼其の貧乏は人のためをはかつて得た不幸に過ぎないのでありますから、人からは却つて重んぜられるといふ風で、なかなか用が多いので御座います。それ故稽古の方は私が姉と共に父を助けて、と申すよりも寧ろ父に代つて見てやつて居りました。當時習ひに參るものは百廿人許りもありましたらうが、それは大方百姓の子供ばかりでありますから、鼻汁を垂らして居る、帶がほどけて居る、惡戯はする、丁度菅原傳授の寺子屋のやうな塩梅ですから、私も姉も殆ど手を眞黑にして世話をやいて居つたもので御座います。それに百姓は夏は忙しいが九月になりますとそろ／＼暇になりますので、大人が夜學に參ります。それも八十人位はありましたから隨分骨が折れました。おまけに女中があるといふでは御座いませんから、其間に煮炊きの事もいたさねばならず、自分の勉強にとりかゝる事は、夜分でも餘程おそくでなければ出來ませんでした。しかし一家の責任はすべて自分一身にかゝつて居るといふやうな考が御座いましたから、少しもそれを不平に思ふやうなことはなかつたのです。二宮尊德先生は、人間は誰れでも天地蒼冥の時に生れて來たやうな心得で働かなければならぬといふやうな事をいはれましたが、私が當時の心懸けは丁度それで、自分は親兄弟を一人で養はなければならぬものといふやうな考をいたして居りました何故かしらさう思つて居つたのであります。もとより今日の人達のやうに親の義務を問ふといふやうな事は露ばかりもなく、寧ろ足らぬ中でこれ丈けの學問が出來ることを有り難く思つて、自分の勉強の足らないことをのみ恐れて居りました。十七歳の時京都へ修業に出ましたが、それとて貧乏な家から學資を貰ふといふやうな事は出來ません幸ひ京都では扇の繪を描かうと思へば幾何でもあつて、それを内職にすると、學資を差引いて殘りを家に送ることも出來る程でした。

○女學校を起すに至りし動機

私方で東京へ移つて參りましたのは、明治三年でありましたが、戰後の事でもあつたからでせうが、當時の娘さん方の氣風といふものは實に殺伐で女らしい處は少しもありませんでしたそれは殺風景粗暴を極めたもので、まあ一寸申して見ますと、散髮兵兒帶に薩摩絣の長い書生羽織を着、手には洋書を携へて大道を濶歩するといつた風でした。

私は斯ういふ風を見て、少からず驚きますと同時にこれは何うしても婦人の風儀を改良しなければならないといふ事を切實に感じたのであります。そこで自ら奮つて其任に當らうと決心いたしたので御座いましたが、華族樣方から續々お姫樣方を預つてくれといふ御申込みがありまして、だん〳〵私の家では狹くて何うすることも出來なくなりました、で、明治八年に及び中猿樂町に學校を建て、跡見女學校と名付くるに至つたものでありますが、當時でも八十人程の生徒は御座いました、そして何ういふ事を敎へましたかと申ますに、學科は國語、漢文、算術、習字、繪畫、裁縫、琴插花、點茶といふやうなものでしたが、わけて女は裁縫がよく出來るやうでなければならぬと申して、裁縫を重じさせました。處が文部省では學校に裁縫といふやうな課目を置くといふ事は變だから、豫科とか何とか名をつけては何うかといふ事でした。繪畫についてもまたさういふ注意がありましたけれど、私方は初めから文部省の干渉を受けずに、獨立いたしてやつて居



りましたから、必ずしもそれに從ふ必要はありませんでした。

○先祖祭りを行ふ

學課の外に先祖祭の事を敎へました。これは何事も舊式を捨てゝ、西洋風を學ばうとする當時一般の社會風潮につきて、婦人も次第に禮法を輕んずるといふ傾向があるのを敎ふたので、一方生徒には先祖を祀る作法を敎へ、一方來賓には日本にも之れほど美しいまた優しい風があるといふ事を知らせ度い目的でありました。で、私方の大先祖は八意思兼神でありますから、それを伏見宮様に書いて頂きまして神位を設け、ちご髷に結つて、緋の袴をはいた生徒をしてこれに神饌物を供へしめるのです。それは實に綺麗なもので御座いました。毎回其日は朝の内に式を濟しそのあとで講義をいたしました生徒が大字を書いて展覽に供するといふやうな事をいたしましたが、大變な評判で、前々から見物を申込まるゝ方が非常に多く御座いました。何しろ其頭の若い娘の風といふものは、まだ十歳未滿の子供でさへ、額を四角に剃りまして、髪は後の方へ、おたばこに結ひ、飾りといつては稀に紫のかのこでもかけるか、或は何もつけないのでありましたし、着物でも襦袢の袷は紫か水淺黃といふものばかりでありましたから、芝居などに參つても見渡す限りが黑で、赤いものとては見たくも見られぬといふ有様でしたから、私方の祭りの式は殊更もの珍しく人の目を惹いたのであります。當時私方の生徒はいづれも華族様方のお姫様ばかりで、京都から御出でになつた方が多う御座いましたから、緋の袴はわざ〳〵拵らへなくとも持つて居られました。それ故初め私方の生徒はみな緋の袴を着けて居りましたけれどだん〳〵種々な方面から生徒が入つて參りまして、緋の袴をはかれないやうな人も出來ました折柄皇后様から紫は緋と同じであるから紫を用ひさせたがよろしからうとのおほせもありまして、遂に紫に制定いたしたもので御座います。

○運動會の奨勵

それから私方では生徒の健康といふ事を考へて、運動

踊は初めから奨勵いたして居りました。それには、御所で盆の日に女官方が物せられる大踊といふものゝ手を取りまして、運動踊といふものを案出し、今様歌に合はせて踊らせました。其の仕方は眞中に琴を置いて囃し、生徒は揃ふて廊下から出て來て、廣く圓形をつくり、囃に合はせて踊るものので、丁度今日の遊戯のやうなものでした。夏など霞に井桁のお揃ひの着物を着紫の袴をはいて踊る處はなか〳〵優美なものでありました。しかし其頃文部省あたりではしきりに西洋の學問〳〵と騒いで居つたにも拘はらず、西洋に舞踏のあることなどはまだ知らなかつたものですから、この運動踊は至つて悦ばれませんでした。けれども昔は大きな大名のお姫様にでもなりますと、それこそ深窓のもとに育つて居られるので、歩くことさへ十分にお出來にならなかつたものです。一寸庭へでも出て見やうと仰しやれば侍女が兩方からサッと障子を開き、お履物を取つて上げる、日でも照ればお



後方から傘をさしかけてお上げ申すといふ風で御座います。もしさういふ方達を一日坐らせて、勉強ばかりをおさせするならば、忽ち健康を損はれるでせう。或はまた不具者とさへなられぬとも限りません。それ故私は、文部省や新聞紙などで反對されたにもかゝはらず、かまはずに生徒の運動踊を奬勵いたして居りました。冬などでも其踊を一二番やりますと、ぽか〳〵汗が出るやうでありました。それに學校の運動會といふやうな事も私方が元祖で御座います。もとより競技といふやうなものをいたした譯ではありませんけれど其頃はお濱御殿を拜借することが出來ましたもので、度々生徒を連れて參つては、よい景色でも眺めて靜に樂しんで歸つたもので御座います。

○京都にて九條公に召されし時

其後社會の風潮につれて、學校は内容外觀共に擴つて參りましたが、猿樂町の校舍が狹くなつたので、こゝ(小石川柳町)へ移つて參りましたのは、廿一年の秋で御座いました。今年は學校の創立三十五年に當りますので、其お祝ひをいたさうなど申して居りましたが丁度私も古稀に達しましたので、校友會の人達がお師匠さん(先生のお弟子方は先生を先生といはれず、お師匠さんとおよびになるとの事で御座います)のお祝も一緒にしやうとて發起人の方達と相談なされて、過日のやうな盛會が催された次第で御座います、それに就いて跡見女學校略歷といふ小冊が出來ましたが、これはほんの略歷で、文久二年に初まつて今日に至つて居る私の日記から、ほんの要點丈けを拾つたものであります。それは日記を見るといろ〳〵な事が書いてあります。私は貧乏な家に育ちましたから、時々家事上の心配事も起つたけれど、この教育事業といふ事に就いては、寧ろ割合に困難がなたつたと申してよいでせう、と申すのは學校を起しますにしても、校舍を建てゝから生徒を募集するといふ風ではなく、生徒が多くなつて仕方なしに校舍を新築するといふ有様で、つまり自然的の要求によつて擴張いたして參つたと申してもよい位で御座います。一體私は此方から頼んで

物を教へるといふ事は大嫌ひでありますから、高貴の方へ上つたりいたしましても、いつでも先方様の御望みによるので御座います

私が京都で漢學を教へて頂きました宮原節庵先生の許へ九條様から御人が見えて、お裏方様が跡見に來て貰へまいかとの仰せであるが何うであらうと話があつた時、宮原先生はそれに答へて「それは不可ぬこともないでせうが、しかし跡見といふ女は御家來の格で御主人の仰しやるまゝにならなければならぬといふやうでは到底いけません、師匠は矢張り師匠として立てゝ下さるやうでなければ承知いたしますまい」といはれたさうです。處がそれでよいから來て呉れとの御頼みで、私は九條様へ上つた事が御座いましたが當時九條様のお裏方様と申せば、關白様の奥方であらせられますから、まづ御佛參にでも



御出懸けの道に出て居りますものならば、控えよ〳〵で私共は一町もお通り過ぎになるまで地上に坐つてお辭儀をして居らなければならぬ程の御身分なのでありました。

○依賴の書畫が山のやう

私は前にも申上ます通り、極幼少の時から自分は跡見の家を再興すべき人である。家を立てるには嫁入りなどをしてはならぬ。そして何か一藝に達することが必要であるといふやうな覺悟と決心とを以て、一心に勉強をいたしましたのですから、別に不平を懷くとか煩悶をするとかいふ隙がなかつたのであります。從つて修養といふ事に就いても、いたすべき事を當然いたしたと申す丈けで、特別に斯うと申す苦心談も御座いませぬ。

只今の慰み樂しみと申すと、矢張り學校の人達の事を考へることであります。しかし趣味が廣う御座いますから、何を見ても、何をしても面白いのです。音樂を聽くことも好みますが、謠曲などは自分でもいたします。旅行も隨分好きでありますけれど、何分にも學校の方がありますので、さう出懸ける譯には參りません。出かけやうと思へばまあ暑中休暇でありますが、近頃は皆樣から御依賴の書畫が澤山重つて居りますから、暇があればまづ其方を片付けやうと思ふて居ります。何うか死ぬ前に一枚づゝも皆さんへ書いて上げたいと思ふて居りますけれど、お約束の數が餘り多いので、書き終へさうにも思はれません。しかし身體は至つて達者でありますから、まだ〳〵活かれますでせう。攝生法と申してもまあ朝早く起きて一時間位近所をブラ〳〵歩いて歸る位の事であります。

△女子音樂園の絕念音樂會

棚橋、三輪田、下田等の諸女史を顧問とせる下澁谷なる女子音樂園は創立以來五ケ年を經過しこの度漸く校舍の新築をなすに至りしより其紀念として去る廿二三兩日上野の音樂學校にて音樂會を開催せり、曲は杉浦夫人の獨唱バイドリツロ氏の獨奏、寶生九郎の雲雀山、[illegible]間金太郎の熊坂、杵屋の長唄、延壽太夫の淸元、藤間の踊等ありて頗る盛會なりき當日の收入は擧げて同園建築費の補助に充つるものなりといふ。

五月雨

覆盆子

苺は薔薇科に屬する灌木か又は多年生の草なり、莖は長さ六七尺に達し、刺多く葉は種々の形をなし花は多く白色にして五個の瓣あり、春末初夏の頃枝梢の間に開く、果實は夏の中頃に至りて熟す、その性寒冷の濕地を好み温暖乾燥の地に適せず。

種類は甚だ多けれども通常木苺屬と蛇苺屬の兩種に分ち得べし木苺は高さ三四尺ありて山野に自生す葉はやゝ卵形にして分裂し下面は白色を帶び、花は小さくして白色を呈し、果實は聚合核果にして黄色なり、蛇苺の種類蛇苺、草苺及び、舶來苺等ありて、食用に供するものは舶來苺即ち覆盆子なり、これは多年生の栽培草にして、實果は尤も大なる聚合核果をなし味尤も佳なり、就中ドクトルモーレー種と稱するは形ち扁圓狀をなし、大さ直徑二寸に至るものあり、果皮濃紅にして軟かく香氣及び漿水多くして品質又極めてよし。

苺の果實は、その味甘美にして少しく酸味を帶び、夏日の清涼劑として生食するに極めて佳なり、又その果實よりヂャム、及びゼレーを製し、或は苺酒を醸し、需用極めて多し、

苺の種を蒔くには三四月頃攝氏十五六度の温度を保てる砂交りの苗床に三四寸を隔てゝ播き、若干障子を設けて蓋又は蓆にて日光を遮り置き、芽を發して後ち日光に曝し、五月下旬より六月頃畑に假植して肥料を施し八月下旬又は翌年の三月頃、一尺内外を隔てゝ本畑に移植すれど、種苗によりて繁殖せしむるよりは分植法を用ふるをよしとす、分植法は夏の頃、匍匐枝を摘切り、根は軟かにして翌年三月頃根に十分土を附けて一尺二三寸を隔てゝ假植し直ちに肥料を施し、九月頃本畑に移植し藁などを敷くなり。

苺を砂糖漬とするは未熟の果實を取りて蔕を去り、苺一升に白砂糖一斤水少しの割合にて混和し、文火にかけること約一時間にして密閉し數十日の後再び砂糖を加ふるなり、又ヂャムを製するには果搾器にて苺をつぶし、銅鍋に入れ文火にて一時間ほど徐かにかきまぜつゝ更に砂糖を加へて一時間煮つめて鑵又は壜に詰め密閉すべし。



馬除けて花ふみにけり蛇いちご　　胡　雁
谷川やいちごとる手の及越し　　柳　居
手を伸て馬上に摘しいちごかな　　千　那

蚊

蚊は蠅虻などゝ同類蟲にして形ち甚だ小なり、口は針狀をなして液汁を吸ふに適し、其觸鬚は大小の兩顋は細き針嘴に變化し、下唇は長き管を具へ上唇と共に全部を覆ひて管狀をなせり、人類畜

しくは頭端にとまる時はこの細き針にて皮膚を刺し、下層をその管口に引入して血液を吸ひ、毒液を注込むなり、蚊は前翅二枚を有し飛ぶこと甚だ早く、晩夏の頃夜な〳〵躍り出でゝ人音を悩ます但し血液を吸ふは雌のみにて雄は吸ふことなし、又蚊柱といふは野原などに無數の蚊の群飛して柱のごとく見ゆるを以てなり、これは雌雄相求むるものなりといふ。

蚊の活潑に飛まはる時期は二三週間に過ぎず、卵を産めば即ち死す、卵は通例溜水の中の木片、枯葉などに産つけられ、其數五十個より百五十個に及ぶといふ、この卵の孵りて水中に浮動するを孑孑といふ恰も棒を振ふに似たる故なり、この孑孑は翅もなく脚もなくその形小さき釘に似たり、靜かなる時は體を倒まにして水面に浮び、末端にある氣孔にて空氣を呼吸し、物に驚く時は直ちに水底に沈む、水の腐敗せる有機物を取りて食す、孵化の後十數日中を經て脱化し成蟲となる。

蚊を驅逐するには通例青葉木片等を燻すものなれど、尤も効あるは除蟲菊とす、又近頃鋸屑に硫黄末を混じ、細長き紙袋に包みその一端に火を點じて燻す方法あり、撲滅法の一説に、蚊の發生する四五月の頃溝渠、水溜り下水等に石油を撒布すること數回に及べば其年は蚊の發生することなしと。

蚊柱の暫らく遁かぬ舳先かな　　鳥谷

血を分けし物と思はず蚊の憎さ　　丈草



蚊遣火や詫びわけたる繩暖簾　　百風

雨の暮傘のくるりに鳴蚊かな　　二水

壁の蚊や机の下のかくし砂　　梅室

蚤

蚤は二翅類に屬する昆蟲にして完全なる變態を經過す、六個の長脚を具へ、後肢殊によく發達し跳躍に便なり性活潑敏捷にして口は吸取及び刺螫に適せり、蚤の幼蟲は白色にして細長く二個の短尾を有し、通例疊下などに生息し凡そ三十日を經ば成蟲に化して人を刺す、驅逐法は床下をよく掃除し疊下の塵芥をよく拂ひ、疊はなるべく乾かして、床下には石灰を撒布し床板には煙草の莖を敷くべし、若し掃除十分に行き屆く時は幼蟲の蛹に化するに臨み繭を作るべき塵埃なきにより發育を遂げずして死するに至る、煙草の莖も亦多少の効あり、其他衣服の洗濯、家屋の掃除等に注意すべき事勿論なり、除蟲菊より製したる蚤とり粉も亦有効なる藥品なり、又犬猫類の蚤を驅除するには濃厚なる石鹼水、又は煙草水等を以て洗濯するをよしとす。

打つけに蚤のはなしや旅戻り　　梅室

くらひから起て噛すや蚤蝨ひ　　杜有

女學校評判記　五

實踐女學校

河岡潮風

△アヽ小日本よ。大女傑よ▽

野蠻の生活は單純である。文明の社會は複雜である小兒の心は無邪氣かも知らぬが、事業を爲し得ぬ。大人の胸には權謀も潛んでゐるだらうが、國家天下の偉業を企て得る。假りに一歩をゆづゝて、賢き者、賤せる者。劣れる者。馬鹿正直なる者は、死して天國の門をくゞる事が出來るとしても、生きて萬戶の侯となり生前、得意の生涯を送る事は不可能だ。

物質文明の世、黄金萬歲の世、權道かへつて正道に勝るの世に處すべく日本人種はあまりに正直に、小膽である。犬骨折つて鷹の餌食とやら――イツモ緣の下の力持ちばかりしてゐる！

この間に立ちて大陸的性行の、大膽なる女流に掘り下田歌子女史あるのみ。經歷は佛蘭西式。花やかに艶艶しき逸話に滿ちて居る。方針は露西亞式。いづくに笑ひ、いづくに恫喝し、又たいづくに愁ひ泣くべきかと云ふ呼吸に通じて居る。昔しニコラス一世はシベリア鐵道を敷設せんとするや、地圖を按じ、色鉛筆で、ペテルブルクから、ハルピンまで一直線を引つぱつて此通りせよと云つた。綸旨汗の如しで、直ちに殆んど曲針なき鐵道をこしらへたさうな。女史はニコラス一世の亞流を學び、目的物へ一直線に走らうとした。山河湖沼にも似たる障害にも屈せず、かよわき女の身で進むだ。何たる壯烈、何たる勇猛、世人は退いてその功蹟をたゝえるがよい。

然るを何ぞや、露西亞の好きな社會主義の徒までが角目立つて必死の攻撃――あゝ此の樣な事で、一等國の仲間入りが出來ると思ふか――。その點では戰に負けても露西亞はえらい。トルストイと、ゴリキイと、ツルゲネーフを同時代に容るゝの國――あゝ、狹量な

る大和民族！　而して氣の毒なる歌子女史！　卿は誤つて日本に生れたり。乃至その出現は早きに過ぎた。あゝ、小日本よ。大女傑よ。吾等はまづ双方の爲めに氣の毒にたえぬ。

△奉公先で生んだ娘▽

げに頼みがたなきは人の心なる哉。昨日得意の俊才も、けふ飽かれては追放の凡庸となる。其の近き例、われは下田女史に見たり。などゝ四角になつて書き出す迄もない。去年一月幾人かの髯男總がゝりで、やつとこさと女史を學習院より突き出した報に接した折こそ、吾輩は最も人世の悲哀を感じたのであつた。善きにしろ惡しきにしろ、女史は女學部の柱石であつた。元勳であつた。讓らば讓れ、但、何人と云へども謝るねばならぬ成事をなしたのは否む事は出來まい。而かも彼の女は疫病神の如く追はれたり。しかも表べだけでも平氣にて陣をまとめて去る事を得たるは。その半生の愛兒、實踐女學校があつたからではないか。

試みに東京實測地圖を披いて御覽なさい。その安物に非ざる限りは、城西澁谷ステーションのほとりに、「文」（學校の略號）の字が書いてあつて、實踐女學校と書かつてるを見るだらう。あゝ、此學校は下田女史の半生の愛兒であつた。

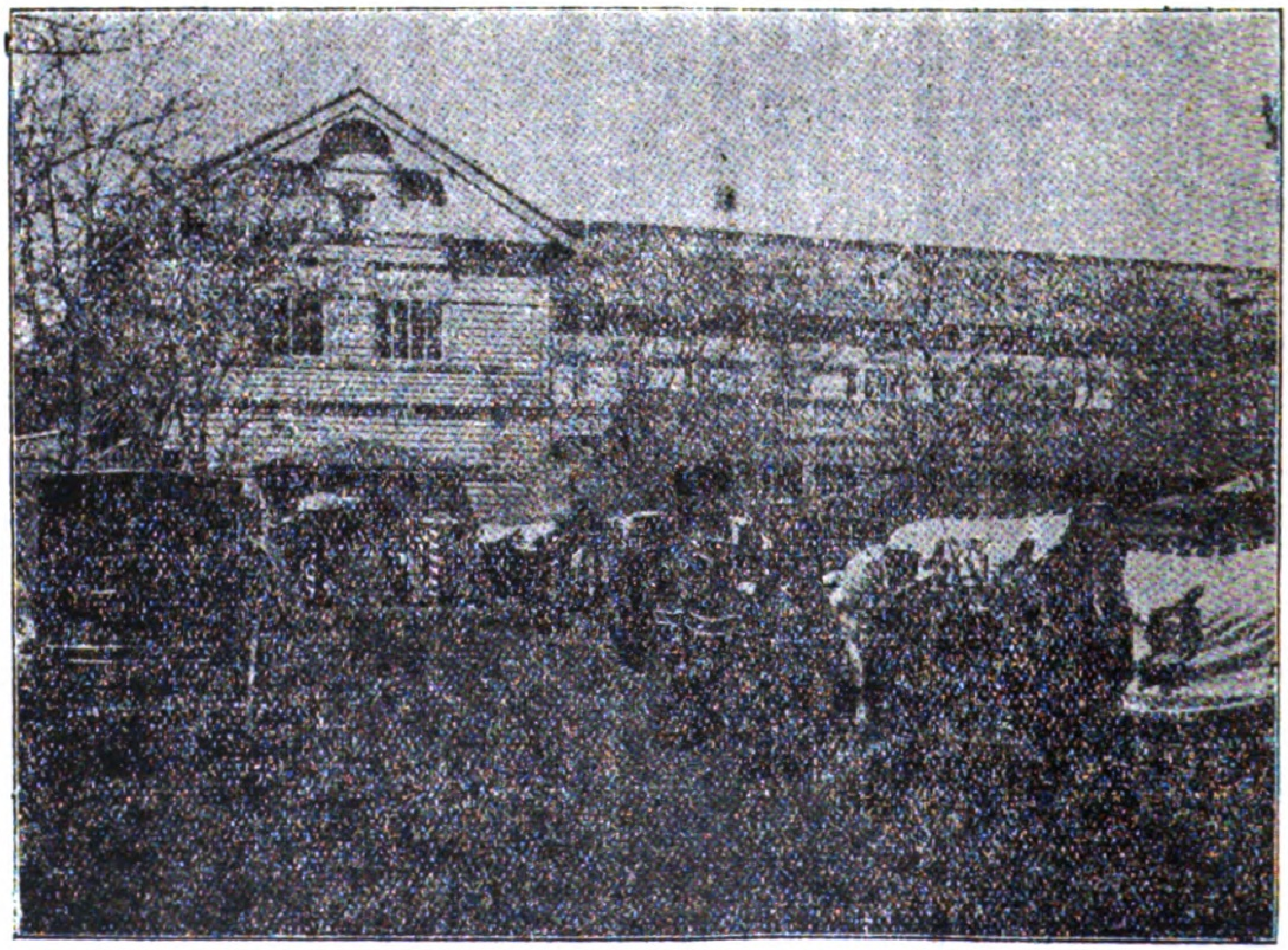
卑近な世俗の例を引いて云へば、乳母奉公に出た者が、勤め先で生んだ娘に相當するのである。本來ならば吾子可愛く、其方に乳を呉れる處だが、主人の義理に引かされて――も一つは給金の點に多少心も動いて――あまり顧みもせず、捨て育ちにしておいた。シカシ一朝解雇された曉に、大木の蔭とも倚むだのは現在の生みの兒より外はないのである。

榛の木の樺色に煙り、牧牛聲長閑なる、澁谷の田園に、健かに育ちし、實踐の校舍は、四面楚歌の秋にあつても、喜んで失意の女史を迎へたのだ。眞に、かしこき狐は逃げ込むべき洞の口を二ツも作つておくさうなが、人間も心あるものは、萬一の隱れ家を用意しておくのが當世かも知れない。

以下順を追つて實踐の來歷を語るからお聞きあれ。

△御料地に聳ゆる校舍▽

かつて國事犯に座して入牢中記憶法を發明したと云つて、一世を驚かせた和田守菊次郎の妻君に久松繁子女史と呼ぶがあつた、矢張大陸的傾向を帶びた女丈夫で千變萬化の半生を送つた末、下田女史の門下生となつたのである。お互に水魚の如き交を訂して相語らひ、貴婦人の一團體をおこし



實踐女學校紀念會の當日

「帝國婦人協會」と名づけた。そして此會の事業として實施したのが本校であつて「本邦固有の女德を啓發し、勉めて現今の社會に適應すべき婦女を養成する處とす」と目的を定めてゐる。社會の上中下の各階級の子女のどれにでも都合よくあてはまる樣に苦心したものなのだ。

最初は麴町區元園町の豚小屋然たる假校舍に端を開いたもので、部屋は暗く、人いきれがしやすく、天井の低い。ヒステリーにでもなりさうな處

であつた。

明治三十六年一大飛躍をなすべき期來り、この踏みぬけさうな校舍をあとにして、青山電車の終點より三丁と離れぬ、常磐松御料地內に、約一萬坪の地を拜借して、移り住むだのだ。爾來日進月歩、今日では八百の生徒を有する、有力なる私立女學校となり、部門を別つて左の三としてゐる。

A、中等學部——修身齊家に必須なる實學を授け、賢母良妻を養成する處。修業年限五ヶ年、月謝二圓五十錢。一週授業時間數二十九時間乃至卅二時間。入學資格、小學六年卒業以上。

B、工藝部——處世に必須なる實學技藝を授け、兼ねて自營の道をも講ぜしむ。教科を別ちて、裁縫、編物、刺繍、造花、押繪、挿花、圖畫の七とし、各科ともに本科三年、高等科二年を置く。月謝二圓五十錢。必修科目授業時間數一週二十四時間。入學資格Aに同じ。

C、高等專門學部——高等なる專門の學術又は技藝を授け、社會の要求に副ふべき婦女を養成す。教科を家政、文學、技藝に別ち、修業年限は各二ヶ年。月謝三圓一週授業時間數二十五時間より三十六時間に至る。入學資格、高等女學校卒業程度

右の外に清國留學生の規定があれど、日本人には無用に存じ差し控へておく。茶の湯、生花、彈琴は志望の生徒のみに敎へるさうなが、こればかりは學校で敎へるのは効能が薄い樣である。

△辭令に巧みなる校風▽

次に少しく校內の事業に言及すれば、校舍は立派な方でない。たゞ門を入つて右手に供待があり、便所があるは、卑近なる流行語の振つたねに相當してる。

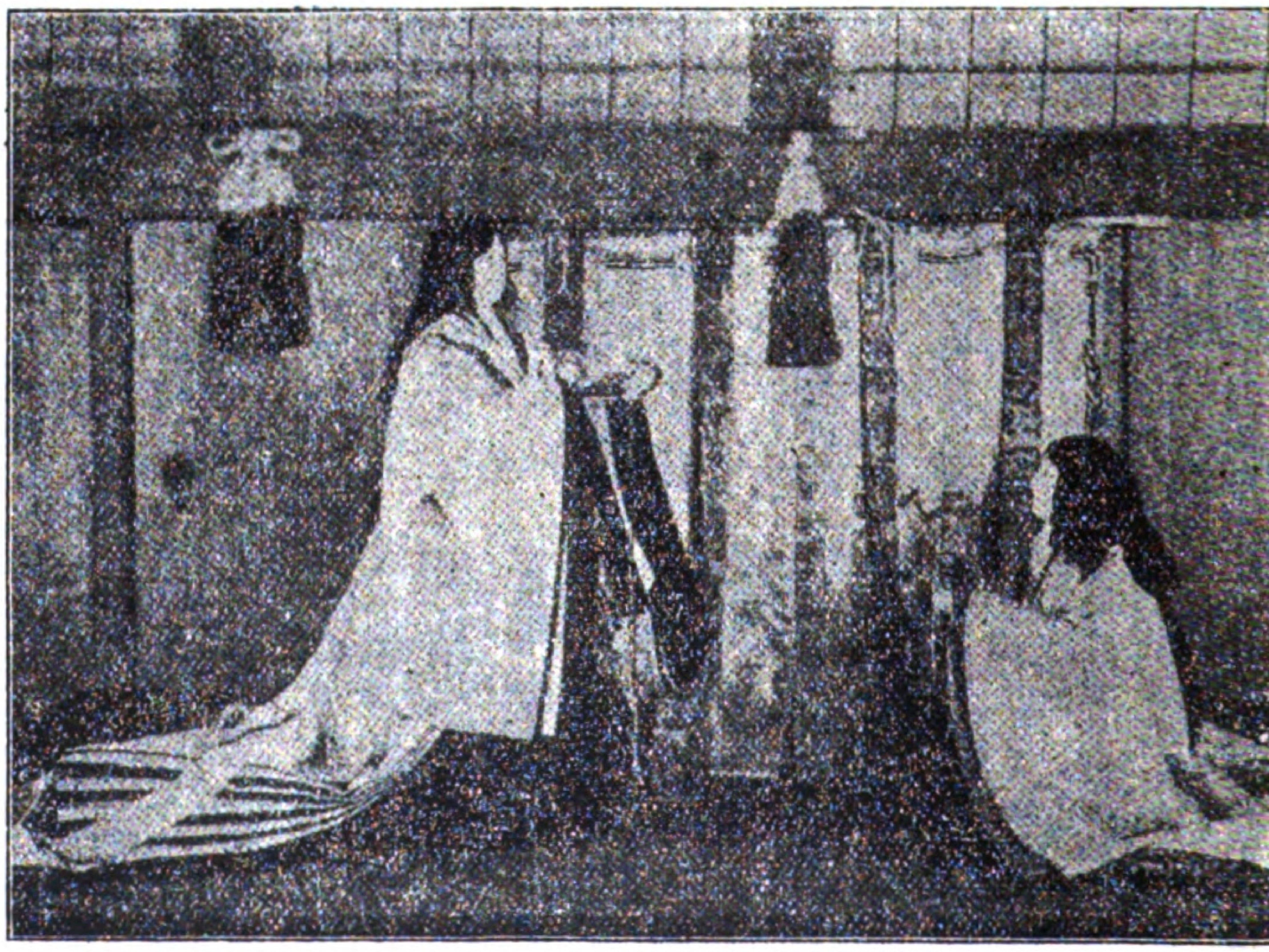
庇がみ開山女史の學校であるから、さぞかし二百三高地式部が多からうと思ふが、近頃桃われが勢力を占めつゝある。世間一般に庇がみが少くなつた事は、新聞にもある通りだ。背の低い女學生が、ウンとのめり出して歩いてるのは、人事と思へぬ位いやだ。潮風生は此傾向を喜ぶ。

校風は着實な方に屬し、お世辭でまるめて、ころがすのが得意だ。學校では矢絣更紗の上ッ張の樣なものを校服として制定してある。何でも元祿から二三百年前に遡つて各時代の服裝の特徴を集めたものゝ由、どんなに窮屈でブラン〱しても膝小僧が飛び出すなぞを

不體裁は悉無。しかも一圓八十錢とは安いもの。教師は校長初め、女教師は同じ服の黒色なのを着てゐる。一寸見には喪中の樣だ。

生徒の父兄は平民三分の二を占めてゐる。去年一月、歌子女史が泣いて學習院を告別した當座には、君を慕ふて飛梅もどきに、名家の子弟多く轉校したと傳へられてゐるが、それでも華族と名のつくのは片手の指に數ふる程もなかつた。

「先生はチエ、學習院の方へばかり行つてらしてこちらへは中々いらつしやらないのよ！』との怨みの聲は校内に滿ちてゐたが、今や彼らは倦きる程、女史の丸顔を見得る樣になつたのである。沈痛なる句調で、滔々とまくしかけて演說（講義とは云はさぬ）するのは日本一品であらう。



實踐女學校生徒の製作平安朝時代風俗人形

副校長は青木文藏氏。もと鹿兒島縣下の女子師範學校の先生であつたが勤續十數年の後、自ら退いて上京し、教育方針が一致してるとやらで下田女史に紹介する人あり、今より八年以前本校幹事

となり、いくばくもなく赤城氏の職を襲ふて現位地となつたのである。人をそらさぬ人、敵を作らぬ人。倘一歩進んでは、ニコ〳〵してお世辭を振りまく人だ。如才がないと云へば輕薄に聞え、圓轉滑脫と評せば、エラさうだが其の中間に位する手腕を持つてゐる。要するに實踐にはなくてならぬ一員だ。

△交代でお伽役▽

寄宿舍は元園町時代から設けられてあつた。最初五六人であつたものが、增加して行つて、今では百三十人に垂んとしてゐる。

間數は十六。美しく掃きぬかれたる廊下、各室の入口には桃色や、水色の上草履がぬいであつて、手拭ひかけに云ひ合せた樣に使ひ古した手拭が懸けてあるのは一寸趣きのあるものだ。

階上の亞字欄によつて裏を眺むれば、見わたす限り御料牧場の畑で、今頃ならば、寢よげに見ゆる若草に眼のさめる樣な菜種の花の咲いてゐる。折々は薫風につれて、牛の聲も聞えやう。畑のつくる處には青山學院女學部の木造洋館があつて、また畫中の景である＝＝尤も、向ふから、こちらを見るなれば、手すりに干したる桃色の裏のキモノなどが、おもしろき繪の樣に思ひなされるであらう。お互樣と云ふべし。

各室は八分通りまで、十五疊均一で、定員は八人＝＝隨分窮屈だと察せられる。無論自習室も寢室も兼用である。所持品はさほどハイカラでもないが、流石女とて小綺麗に整理してるは感服、机の上には源氏物語やら女學の雜誌やらが置かれてある。かく一室に澤山收容するのは如何かと最初考へたさうなが、實際やつて見ると、案外成績がよい。上級中の年長者が母となり年少者は年長なものを姉さんと呼び、水いらず、女同志の小家庭を形づくつて居る。

舍監は八ヶ年勤續の時任武子女史で、少なからず校長の知遇を受けた人。其他にも女史を補助する舍監が二人ある。

本舍で一風變つてるのは上級生から每週交代で三八

づゝ主婦を出し、舍監のお御役にする事だ。これは人の妻となり、姑に使ふる折の豫備練習とか云ふので、當直の三人は舍監室の隣室に枕をならべて臥し、夜の夜中とてもお聲がかゝれば、飛びおきて、親切にかつテキパキと用を聞く。晝と云へども、舍監の身のまはり一切の外に、食物の献立、女中への命令――など、すべて忙しき家庭の主婦になつてもまごつかぬ様に稽古をするのである。

また食事については、各室代りあつて食堂係りとなり、女中の手つだひもし、また日曜には普通家庭を標準とした臺所の器具を應用して働く。かくして一ケ月の學資は僅か十三圓から十五圓だとやら。見た通り、聞いた通りであるならば、本寄宿は實に立派なもので推賞の辭を奉つてもよい。

△四十九歳の留學女生徒▽

私學の經營の兎角困難するのは、政府の壓迫よりも財政上の窮迫が恐ろしいのである。金がないのが玉に瑕。經綸胸に溢れても、手を空しうして立ン坊をせねばならぬ場合が少くない。此時にあたり一個の好財源となりしものは清國留學生の教育と云ふ事だ。男子の專門學校では何故に素早い早稻田まづ清國留學生部を設いた。慶應は授業料問題が折り合はず、一人殘らず追ん出られて仕舞つたが、神田の諸學校でも「留學生們好々」と大いに歡迎してる。虚に乘ずる事、たゞに柔道のみに非ざる嘉納治五郎氏なども、宏文學院を設けた位。何にしろ隣邦を啓發すると大義名分を明かにして、月謝が餘計で、設備費がかゝらぬと云ふのだから確かに良好の弗箱だ。

下田女史は早くも此の形勢を觀て取つた。幸ひ嘉納氏の夫人須磨子は學習院出身で、女史の手鹽にかゝつた人――であるばかりか、女史の媒介で嫁したのだから、その系をさぐつて近き、他の學校で試みなかつた女子留學生教育を、おつぱじめた。

尤も三十四年頃からも清國人の三人五人はゐたのだが、留學生と名のついて、束になつて渡つたのは三十

八年夏、湖南地方よりの二十名を以て始めとするのである。最年長者四十九歳、最年少者十四歳。眞に烏合の衆であつたが、新智識を求めんと欲する心は皆な一ツ。とても〳〵新日本婦人と威張る一部の女學生徒の比でなかつたさうな。

留學生部を置いたのは三十九年で、前年の入學生は早や卒業して錦を着て歸國し、學校の先生になつたとやら。僅に一年でよほど學力がついたと認られたものと見えて、其後は官費留學生もやつて來る。今では寄宿生だけでも三十幾名となり、主任の坂寄美都子女史大喜びだ。たゞチト手古摺るは風俗習慣の相違であつて、食費に八圓取つても引きあはぬ事や、絶對に他人に肌を見せぬ處から、風呂も一人づゝ入るので、時と金との不經濟な事やら、一々あげれば際限が無い。それにモ一ツは、ケチンボーである事……オツと是は書かぬ筈であつた……。

△何しろ御旺んだ▽

余は本項のはじめに下田女史は學習院を追はれたと云つた。しかし、夫れは暴民的の人々だけであッて、世は濫りに女史を忘れるものでなく、女史も淡白に世に遠ざかるものではない。附和雷同を事とする暴民的の有造無造は眼中にないが、權あり、名ある人々との交通を慮外におく程の膽力を持たぬのである。

去る三月廿七日の如き、午前は第九回卒業式を開き午後は創立滿十週年の紀念會を擧行した。名士貴女の馬車や俥は磁鐵に引きつけらるゝが如く門内に流れ込むだ。式場の演説中、土方伯はベルギーの例を引いて本校の主義を賛し、極力下田女史を推賞した。犬養氏は成功の速やかに盛大なりしは想像以外なりきと提灯を持ち、井上角五郎氏は「下田先生とは主義の一致せる上に於て、今日に至る迄、交際を全うしてゐる次第である」と叫むだ。

別室には展覽會あり。休憩室あり。來賓は茶菓を供され、生徒の製作品を頂戴し、十二分に滿足して引き上げた。滿足して歸るのだから、惡口を觸れあるきま

うな筈はない。又た、眞實惡口の材料も乏しいのである。

旺んなる哉實踐女學校―下田女史が生きん限りは、算術級數的に發展してゆく事でありませう。現に今日の(十七日)新聞には附屬幼稚園の開けた事も出てゐた位――二人女の子を持つてる親は一人は此學校に入れても後悔する事なかるべしと、思つた儘を記す事然り

山脇高等女學校

△檜町と調和せる過去▽

赤坂區の青山御所正門につらなる砥の如き大道、南する約三町の地は檜町である。こゝは何大將、公爵、乃至は何會社々長などゝ肩書いかめしき顯官公吏の多く住へる地である。冠木門は立派なれども、その柱には巡査何某と沒趣味なる表札が打ちつけられてある玄關へ通ずる砂道に、箒の跡正しく青海波を描けど、そこには意地惡さうな洋犬が寢そべつてゐる。私立女學校として指ぞりの山脇女學校が、かゝる俗地に巣をならべてゐるのは大いに當を得てゐるのである。

先づ本校の校名から考へて見ても、山脇女學校と云ふ命題は、ヅツとした名でない。由來他人の子弟を訓ふる敎育の業と云ふものは、神聖な上にも神聖なものであつて、個人の私しを爲すべきものでない。學問は天下の公器であり、學校は天下の共有物であるべき筈だ。頑迷なる文部の小役人連は此理を知らずして、獻身的に盡せる學校でも、私人の設立にかゝる時は、飽く迄も一私人の持ち物の樣に思つて食つてかゝる事も往々見うける處だが、彼等元來が小人也。六ケ敷い理窟を云つても解らない。しかし、山脇女史ほどの敎育ある女流が、一女學校を設立したからと云つて、商估も敎育も左程の別ありと信じてゐない大倉喜八郎氏の故智を眞似て?自分の名をくつゝける如きは、あまりに俗に碎け過ぎたやり口でないか。

是れ理由とするの第一。

次に本校の誕生は權道によりし事である。數年前牛

込區白銀町に女子高等實修學校と呼ぶ可愛らしい女學があつた。經營の任に當りし人々は、音樂界の大家にして、現に早稻田大學副幹事の職にある東儀鐵笛氏以下、獨逸協會學校の殿方であつた。校長に山脇女史を戴き、一同車輪の働きを續け、どうにかして仕上げて見たいと奮鬪してたのだ。けれども女史はすでに見切りをつけてゐた。とても駄目々々、いつまでしてもウダツがあがらぬ。此上は妾自ら理想の學校を建てませうと、二三の同志と計り、かつ上流の貴婦人を說破して資金を集めたのである。かの毛利公母堂なんかは、三萬圓出した。かくて出來上つたのが山脇女學校、實修學校の面々は美事に拔けがけをされたのだ。流石に溫厚な鐵笛氏も、氏が文藝協會の試演會に粉する、猶太人シャイロツクが怒る時と同じ表情をせざるを得なかつた。しかし、後悔するにも、地團駄踏むにも、すべてはあまり遲く、詮方なきものであつた。女史が無理して早く生んだ女の子。夫れが本校である。夫れが檜町に育つてゐるのだ。何の不思議があらうぞ！これ理由の第二。

△頗る立派なる宣言書▽

なほ第三、第四と數へ立てたいが、過去の事を洗ひ立てるも賢からぬ話、月たらずで生まれた娘でも、容色美しければ、玉の輿にも乘らう。馬車に乘つて、お父さん程に思はれる御亭主の許へ嫁入もするであらう。丸髷をつけて澄ましてゐれば、點のうち處のない立派な奧樣だ。夫れと同じく、本校とても、過去は兎かうの評判あるとも、現在、及未來に押しも押されもせぬだけに經營して行ければ結構なのである。先づ、本校の設立趣意書の中に「我校敎育の本旨は新に走らず、舊に泥まず、生徒をして智識と德行とを併せ得せしめ學術と實務とを兼ね習はせ、我が帝國の婦人として愧かしからざる淑女たり良妻賢母たる實を全ふせしむるにあり。服裝を質素にして心を優美ならしめ、忍耐勤勉にして處世に適切ならしめんことは特にわが校の意を用ふる處なり」とある。よい理想である。もしその

通りに教化さるゝならば本校は立派なる意義がある學校である。否な、事、志と違ひやすき世事なれば、自分の出來るだけの事をさへしてれば、理想通りにならずとも、自ら顧みてやましい事はない。山脇女史はかならずベストをつくしてゐる事と信ずる。

女史も敵を多く持つてゐる。吾人はその惡聲を耳にするの時、いつも乍ら口に税のなきを遺憾に思ふ。女史の夫君は、從三位勳三等行政裁判所評定官、貴族院議員山脇玄氏である。學校の新築は昨年完成した。今や眞價も世人に認められんとしてゐる矢先だ。一層の飛躍と發展とを見せてほしいものである。



山脇女學校寄宿舎

△校内のくさぐさ▽

本校の修業年限は四年で、入學期は三月。入學資格は年齢十二以上で尋常小學六年修了以上。家事科を修めると五年生になり、專修科をやる事にすれば、もう一年增える授業料は一ヶ月二圓五十錢である。

現在の學生數は四百人に垂んとし、一割は專修科生、六十名近くは卒業生で、後に述ぶる家族的寄宿にゐるのである。

職員凡そ二十名、中で塗師谷秀叡氏は幹事兼任だ。職員、出身者、現學生などで組織せる校友會の名を卓月會と呼び、名士を聘して講演をしてもらつたり。會報を出して文章の錬磨、通信の機關としてゐる。但文章は月並なのが多い。

學生氣質は多少ハイカラの傾もあるが、二錢銅貨大ハート形の中へ、富士山の繪に實習とかいてある校章を、左胸部に附してるので、規律はよく保たれてゐる。

校舍は綺麗で標本なども整頓してゐるが、所が處ゆゑ、地面が思ひ切つて取れず、何だかせゝこましい。お隣が丁度栗野愼一郎氏の邸であるが、朝から晩まで、黄色い聲で騷がれるには凹んでるさうな。以て如何に活潑に遊戯するかゞわからう。

其他別に取りたてゝ云ふ程の事もないが、文部大臣夫人？が參觀して敬服したとやら云ふ、寄宿の事を添えておく。

△主婦となり又下女となる▽

本校の寄宿舍には二種類ある。普通學生の方は本號さし畫にもある樣に、運動場裏の凹地に建てられてあつて、高い山から谷底見ればの觀がある。潮風生が參觀した日には折りあしく、病人があつて取り込んでゐるとて見せて呉れなかつた。どうせ、いづこも同じガラス窓の内に、勸工場仕込みの低い机を置き、更紗の座蒲團をキチンと敷いて、まねき猫然と坐つてるのでなければ、どこやらの寄宿で目撃した樣に、あつたら姫御前のあられもなく、寢そべつて、中央公論の自然派小說を讀んでゐて、廊下つたう足音に、夫れでも心が咎めるか、そつと押しかくした。二つに一つの住居であらう。是非今度も一度來て御覽下さいと案内者は附加せられたが、戰鬪準備が出來た處へ罷り出るは、少しも活きた材料はとれぬ。嵐の如く不意に踏み込まねば眞實な日常生活に觸れる事は出來まい。

も一ツの寄宿は卒業生の方だ。有志のものだけ、尚ほ一年とゞまつて、家庭實習をするのである。

一寸見れば何とかの官舎と云ひたさうな、小綺麗な平屋が軒をならべて十六軒兩側にある。皆なおの〳〵玄關があり、八、六、三、二疊の四間に臺所がついてゐる。學生五人を住はせ、家賃は十二圓五十錢（即ち一人二圓半）食費は五圓半あまり。で一ケ月交代で主婦一名下婢一名を任命し、殘りは家族で補助役なのだ。主婦は献立てやら、買出しやら、他人の監督やらを司り、下婢は煮たきの世話から來客の扱ひ、逆さになつて雜巾がけもすれば、果ては便所の世話まで燒くとはよい面の皮。イヤ夫れよりは手の皮が厚くなつて困るさうな。



同校生徒の晩餐會

昨日までは良家の箱入娘で、横の事を縦へもやらなかつた孃樣が入舍して下婢にでもならう事なら、サア大變。懷息子が輸卒に取られたよりも閉口頓首して、箒を持つて家の中をば、まご〳〵まご。四角い座敷を圓く掃

き、丸い盆をば三角に拭く、飯を焚けば黒こげ、菜を煮れば辛きに過ぎ、甘きに過ぎ、夜寢る時には戸じまりを忘る――もし是がホントのお嫁にでも行つてやつたのなら、どんなにか、お姑樣の眼が光る事だらう。何度泥的のお見舞を受け、手長猫の襲撃を蒙る事であらう。幸ひと仲のよい同志で、主婦と云ふも下婢と云ふも、いづれをいづれ別ちがたき馬の脚の、一方は殿樣に扮し、一方は足輕に裝ふたと同じ事であるから、他人の前なら、顏から火の出るやうな失策も笑ひの中に葬られる。

今日は人の上、然り而して明日は我身の上にめぐり來れば、笑つたものは笑はるゝ位置に立つ。かくて輪次變りあつて、變りばえのなき下婢生活を送る中、嚴難人を壁にして、娘氣の失せた、世話女房は出來上るのである。而かも學問はある。容貌は秀でゝゐると云ふのであれば、天下是程重寶にして、有難い妻君を持つ者。よほど星まはりのよい男と申さねばならぬ。

潮風生は無理に引つぱりまはされて、くれ〲も實況を見せられた「此の寄宿舍制度は本校で餘程苦心をしたもので、成績は非常によろしう御座います。何とかそこの處は一ツよく書いて戴きたいものでハア」と賴まれた「宜しう御座る。心得た」――と夫れ。こんなに太鼓を叩いた譯だ。何とお氣に召しましたか。

此の次は府立の三高等女學校！

正　誤

前號掲載平塚明子女史の「僞らざる告白」並に「半生の努力に依つて得たる人生觀」云々の表題は編者の勝手に附けたるものにて筆者の意にあらざるは勿論又本文の意味にも添はざるを以てこゝに取消し、併せて女史と讀者に謝す猶本文中印刷の誤を左に正す

△六〇頁—私の日頃の修養上の實際は實驗　△六一頁—反對的は反射的　△六二頁—全く人格は全人格

ほたる

ほたるとは火垂或は火照の轉化せるものなりといふ、甲蟲類にして皮膚堅く、頭、胸、腹の三部互に密接し頭赤く、全體黑く、鞘翅と觸角とを具ふ、腹部に發光器を備へ晝間は淡綠色に見ゆるも夜は鮮やかに青綠色の光を放つ、卵生にして完全に變態を經過す種類は頗る多く、我國に多く居るは源氏螢、平家螢なり、卵は多く水邊に産みつけられ、一ヶ月ほどを過ぐれば孵化して蛆となる五月頃脫皮して蛹となり、それより凡そ二週間を經て初めて地上に飛ぶなり、この蛹の時代には成蟲よりも却つてうるはしき光を放つ、メキシコに產する螢は長さ一寸餘にして二種の發光器を具へ、それより非常に大なる光輝を放つ、土人はこれを用ひて提灯に代へ又婦人は種々首飾品に用ふといふ。

螢光は一種の酸化作用に基くものにして其發光機關は無數の細胞より成り、其各細胞の周圍には許多の氣管支ありてこれに屬つき細胞内に可燃性物ありて氣管より來れる空氣中の酸素に逢ひて酸化しこゝに發光を見るものなるべしといふ。

古來螢の名所として數へられたるは山城宇治川、近江の名山、大和の佐保川等なり、又近江今宿邊の者はこれを捕集めて螢問屋に卸し、問屋にては種類の籠に入れてこれを賣る、又螢合戰といふは大小無數の螢群飛び交へて戰ふごとく、又は一所に塊まりて一團となり、恰も火の玉のごとく、又碎けては數萬の小火となる樣壯觀奇絕を極むといふ、而して每夜螢の光り始むるは大抵午後八時頃よりにして十一時頃最も盛んなれば螢狩の行はるゝは此の頃なりとす。



ほたる火や吹飛ばされて鳴の闇　安來
田の水を見せて螢のさかり哉　北枝
山水や見えぬ螢の影うつる　風翔
むづかしき世も日は暮れて飛螢　成美

〇母の會聯合大會

新樹綠深き五月十五日、芝區三田功運町普連女學校に於て母の會聯合大會を催されたり、會は午前九時半より始められたるが、最初に會長本多貞子夫人の聖書の話あり、次で各母の會の報告あり暫時休憩、午後一時半より更に開會、本多夫人の祈禱、子供の音樂ありてチナーベル夫人歡迎會に移り、夫人の米國母の會の模倣の話等あり、次でヘフー孃の獨唱子供の手眞似歌、久留島武彦氏のお伽噺、小室せい子女史の武術薙刀及び仕舞、江原素六氏の講話、其他餘興等ありて會を了れり、當日は數日來の雨晴れてすがすがしき天氣なりしより、會場に集れる坊ちやんや孃さん達の面面も活氣充ち滿ちて誠に愉快なる集りなりき。



各地風俗之變遷

山陰道の名邑

石州津和野の風俗

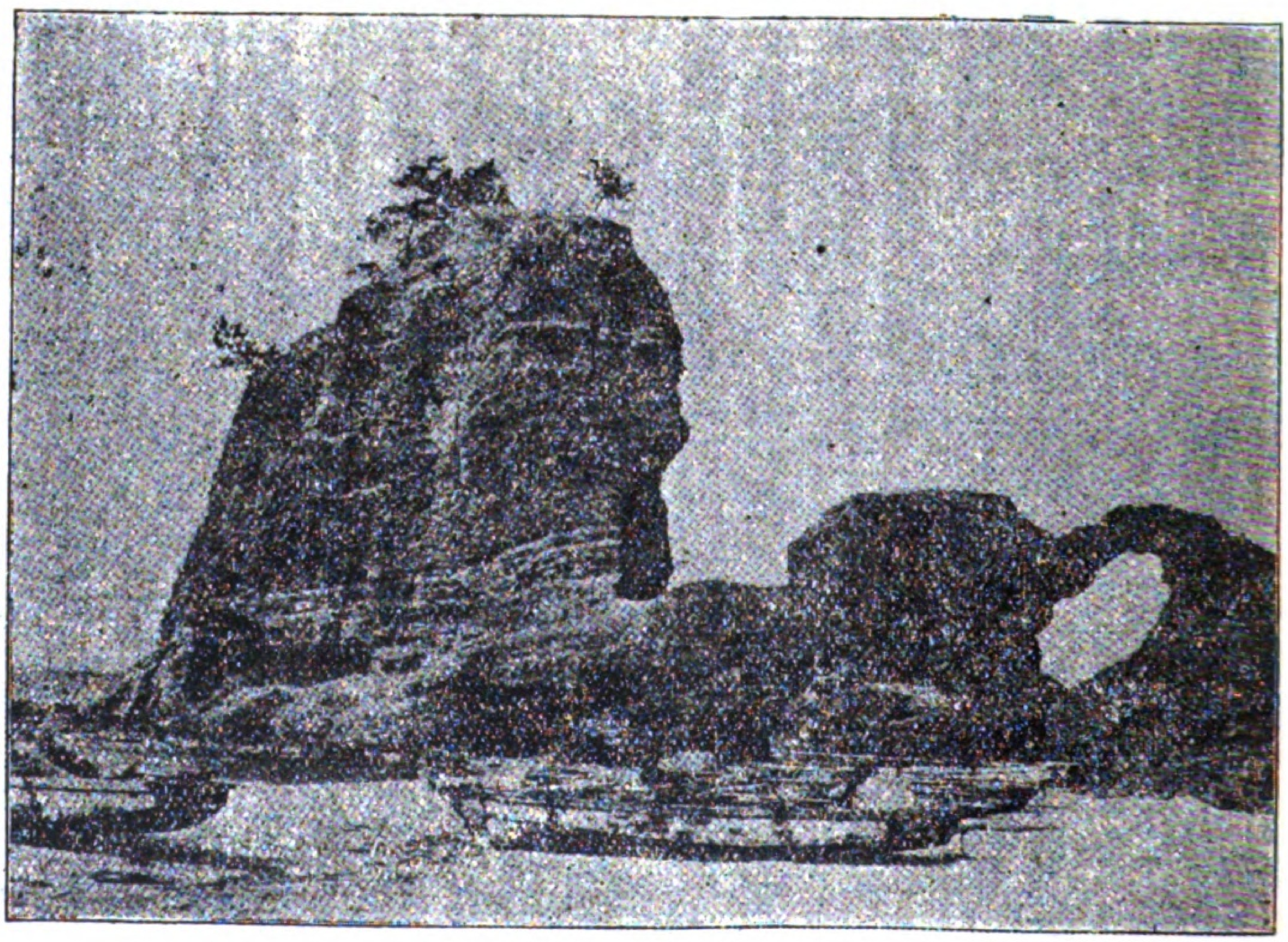
苔の花

◎槖吾城下の今昔

中國は西の果石州と長州との堺山又山に圍まれた摺鉢の底是が所謂槖吾城下で南北一里餘東西廿丁の小さな町それでも津和野といへば石見では濱田港へついでの都此界隈ではまづ名の知られた所なので其昔槖吾が澤山あつたのが其名の起り、西に聳えてゐるのが即ち槖吾城山で一名三本松城とも申ます、天主閣は維新の際取拂はれて影も形もなけれども高く積み上げられたる石垣は幾百年來の苔をのせて、變遷繁き世の中に只一人有りし昔を語り顔に尺餘のちがやの中に立つてゐます、東に並ぶ圓山、妹山、松林山、中央を流るゝ錦川、是が龜井伯爵の舊藩地、吉見三河守の築かれた城下であります、僅四萬三千石の小名とはいへ、とにかく城下といふので以前は、相當に賑はつたさうです、維新後は藩主の東上と共に漸く太平の眠がさめて、上下等しく大小刀をすてゝ鋤鍬或は、算盤をもつ樣になつたけれども、何分にも交通不便の所とて思ふまゝに働けず爲にいつともなしに漸次東西一轉住するもの日に月に増して今日では、戸數も千餘戸をあますのみ大層淋しくなりました然し交通機關などは、十年前頃に比すると少しはよくなつて南の方三田尻行、山口行、北の方濱田行の乘合馬車が出來て毎日兩方へ四五臺づつ通ふので人力車の外は歩行した昔に比すれば、多少便利になつた樣です。

◎氣候と風景

氣候も以前とは大分變つて來た樣で、十四五年前までは、隨分寒氣が强く十二月より翌年三月頃までは積雪の解ける事なく二尺位は平氣なものであつたさうですそれがどういふ譯か近頃は大層暖かになつて雪もあまり降らないしふつても一尺と積ることはまあ珍らしいほどであります、夏もさう暑いといふ程ではなく土用中でも八十五度位が極でありますから、まあ概して溫暖でいゝ方なのであります、只困るのは、雨の多いことで一日



石州名所濤靈の巢岩

お天氣ならば三日も四日も雨といふ風で一年の內二百日位は雨といつてもいゝ位でせう、夏の夕の涼しい雨や花まつ頃の春雨と鬱陶しい內にも亦樂しみが御座いますけれども年が年中三日にあげずふられてはいくら呑氣な人間でも遂には氣がめいつていやになつてしまひます、然しこんな處でも風景はまた格別でまづ春は

鷲原公園嘉樂園の櫻花

鷲原公園は町の西南隅にあり十町餘の長程三筋、堤上には櫻樹楓樹交々に、堤の外側は老松に圍まれ前に錦川の上流柿川を隔てゝ高田山を望む、堤の北方山寺に八幡宮あり

嘉樂園は龜井伯の舊邸城山の眞下にあり家屋は旣に取拂はれて一圓の芝生に櫻樹數百株、中央に先代從二位玆監公の頌德碑あり

夏の暑さは白糸、夕虹の瀧に流して大橋、新橋、桂橋の夕涼みも亦一寸趣がございます。

白糸瀧は鷲原公園より凡そ十五町向ふ高田山の中にあり長さ二丈餘さながら白糸を引けるが如し、瀧壺には、小さきハンザケを見る、昔小式部内侍此處にて產湯をつかひしとかい傳ふれども眞僞は知らず、山の中とて「おかけなさい、おはいなさい」の姉さんも居らず腰かけむお茶やとてもなけれどそこに又俗界離れし妙味もありて七、八、兩月は人跡の絕ゆることなし、

夕虹瀧は町の中央東方にあり鳴瀧ともいふ長さは僅かに一丈餘、瀧底白糸には及ばれど只町中にありて便利よき爲集ふ人は白糸に劣らず此瀧の上には、いつも、虹をみる故に此名あり。

大橋は錦川の中央、新橋は上流、桂橋は桂川の中央にかゝれるもの、いづれも橋下碧水の流と橋上青松の風とに人をしてそゞろに仙境の思あらしむ、月の夜などは猶更いはずもがな。

秋の紅葉は松林山、七草、蟲の音は野坂峠に茶臼山

松林山は妹山の麓北の方、頂に天滿宮あり、櫨樹、楓樹非常に多く其數を知らず

野坂峠は町の南端長州との堺道の兩側は七草を以て土もみえず八月頃よりは日中といへども松蟲鈴蟲の聲絕ゆることなし。

茶臼山は桂川の向ふ高田山に並びたてる山、七草、蟲は其麓に多し、硝燈提灯もつて遠路をわざ〳〵桂川を渡り蟲取りに行くシヤレ者も尠らしからず、間違つて、蛇の頭押へるあはて者もありとは、さても〳〵。

冬は妹山の雪景色登山するほどの勇者はなけれど炬燵から頭だけ出して雪見酒に冬の日の短かきを、かこつ人も大分ある樣子であります、此外八町畷の螢狩、稻荷山のお月見、城山の暮色などは、又それ〳〵に繪や詩の好材料でございます、序に當母校後進の小妹がものした津和野八景の歌、及龜井伯先代德性院樣の御狩道中記を御覽に入れます

◎津和野八景

1 我が生ひ立ちし津和野には、山川多く連りて、
四時の眺のそれ〳〵に、見れどもあかぬ八つの景

2 もゆる春日に匂ふなる、櫻に名高きわし原の、
うす紅のあやごろも、八重のかすみの色そひて

3 人足しげき彌榮宮、なつさび行けばこゝかしこ

ゆかりに匂ふ藤波の
影こそうつせ錦川

4 川にかゝれる大橋は
みどりの松を吹く風に
たぎる水さへ打そひて
夏の夕の涼み場よ

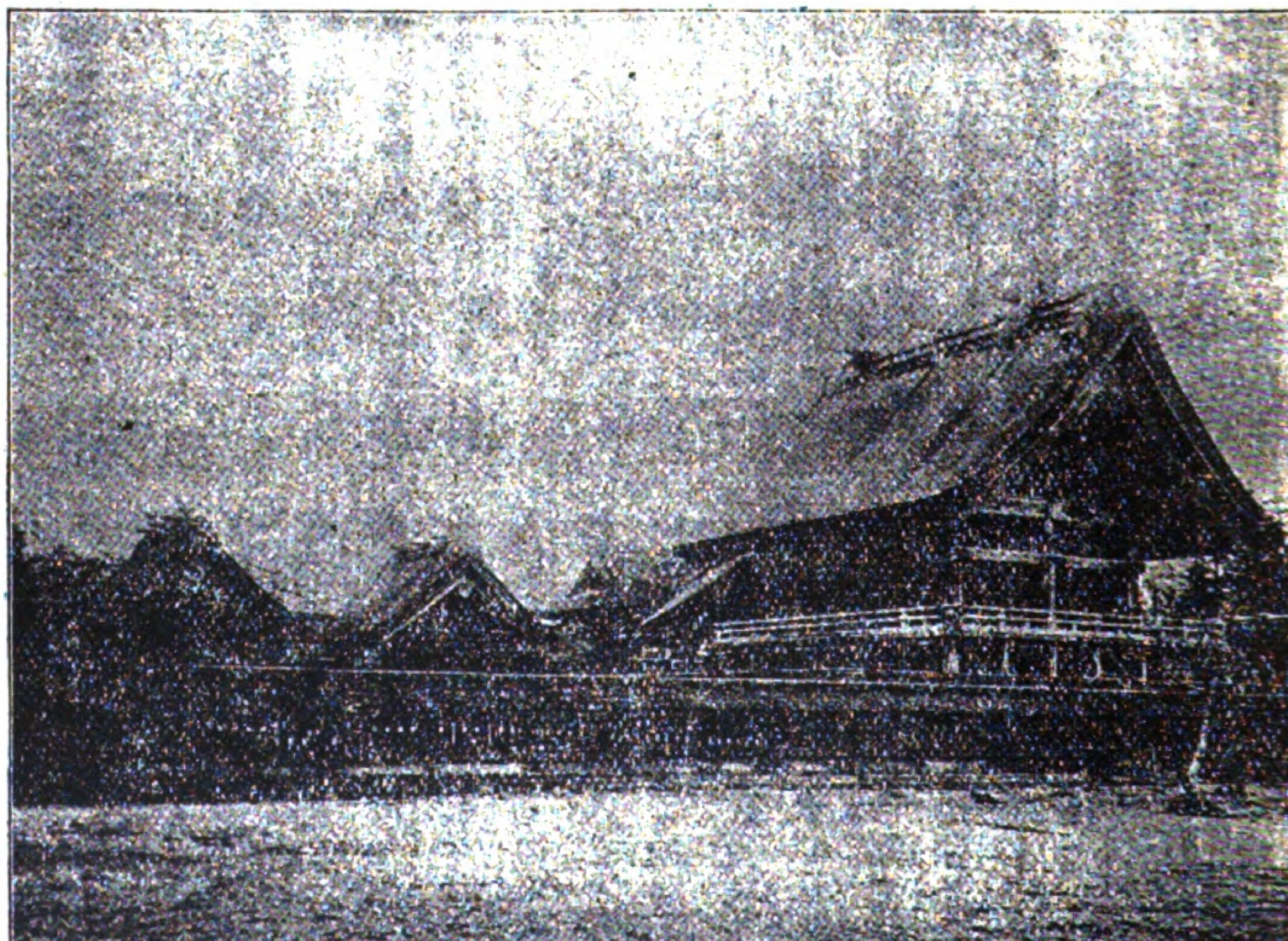
5 松林山の秋のいろ
紅匂ふもみぢ葉は
花も恥らふ唐にしき
げに美しき眺かな

6 おぼろに匂ふ夕月夜
くまなく照す秋の夜中
いづれ劣らぬ其影を
したひて集ふ稲荷山

7 冬の來りて其あした
仰ぐ青野の雪げしき
高く雲井に聳えたる
氣高き樣ぞ尊とける

8 ねぐらに歸る夕烏
聲のみあとに、其かげは
城のあなたの森影に

西側より見たる出雲大社



あゝ城山の暮のいろ

9 永明寺よりつき出す
こだまに響く鐘の音
筧の水も音すみて
薄暮の山のしづけさよ

10 やよや人々美しき
此天然の其もとに
遊べやうたへ諸共に
うたへや遊べもろともに

◎鴨御猟道中記

狩衣いでたつ袖を振はへて、見れば弓手に妹山の高嶺の深雪しろじろと、麓に近き原すぎて路だつ杉の片河や、水片河の細流れ汲んで名も知る清水町、風呂屋細宿の宮詣ふかなたに見ゆる岡が嶽、並の川御川御

水にもまるゝ茶臼山、ひく木にあらで薪こる
賤が伏屋も物さびし、萱原の馬場の櫻は春毎に
色香をまして著し八幡宮を伏しをがみ
末社〳〵を遶りつゝ　時雨の松もいく千代と
こぶかき影を宿すかな　民部の淵は此處ゆかし
こなたの方は入がつぼ　白糸の瀧は其むかし
小式部の産湯の水ときゝ傳ふ　高田の山の時鳥
おちかへりなく夏の夜の　處の名さへ喜時雨とは、
つゝじが岡の岩つゝじ　いく久の川の涼しきに
假りに庵をしめられて　花鳥風月のたのしみと
書きおさめまゐらせ候めでたくかしく。

◎風俗人情

土地の人情は、どちらかといへば、親切な方で至つて淡白であります、而しまことに口不調法な處でお世辭などは殊の外下手なので一寸、つきあひにくい樣ですが、心に隔がなくて安神して交際が出來ます、猶他國の人よりも目にたつて著しいのは、愛鄕心に富んでゐることです、是は地勢の然らしむるのでもございませうが、又一つには、舊藩主龜井伯代々の厚い御恩澤によるのであらうと思ひます、一昨々年龜井伯御歸國かた〴〵御來津の折などは非常な騒ぎで町民一同誠心誠意御送迎いたしました事など到底筆紙にはつくされませぬ、いよ〳〵御來着ときくや老若男女の區別なく御道筋に人山を築きました、中にも昔氣質の翁媼が往來に土下座して涙を流しながら『勿體ない。有がたい』を繰り返し手を合せて拜んだ有樣などは餘所のみる目もいぢらしくゐならぶ人々思はず袖を絞りました。これらは舊藩地の人達でなくては、まるで想像も及ばないことでせう。こんな風ですから矢張り昔の武士根性がとれないで『武士はくはねどたかやうじ』然としてどうも仕事をいやがります、士農工商の階級が依然頭に殘つてゐて、實業をいやしみ金錢にかゝはる者は小人として、つまはぢきするといふ有樣ですから從つて經濟思想などは皆無であります、近年小學校に於て、此弊を矯めん爲種々と苦辛慘憺して、實業思想の養成につとめてゐますので大分其効果がみえる樣ですけれどもまだなか〳〵前途遼遠でございます、金錢を賤し

む結果として只一つい〻ことは、子供を育てるに高等小學校卒業頃まづ十六七歳頃までは、如何なることがあつても子供に金錢をもたせないことです、日用品、學用品は、元よりすべて入用の品はたとへ些細なものでも、皆親が買つて渡しますので、買食などをするといふ事もなく是などは喜ぶべきこと〻思ひます。

風習としての名物はまづ盆踊でありませう大體當地のお盆は二度ございまして、佛式の家（主として商家）は舊暦の七月十五、十六、十七の三日神式の家（主としては士族）は新暦の九月一、二、三の三日にいたします、盆踊は毎年此新暦のお盆即ち九月一日より凡そ一ケ月間どの町でもいたすので今晩は何町、明晩は何町と交互に毎晩あるのです、踊り場へは、盆提灯を高く縱横に點じ囃子方は高く屋臺を設け其上で三味線、笛、太皷の合奏をいたします、其歌は

松の花越に出る月見れば
見えつ隱れつ人目を忍ぶ、空にも戀があるものか。
まても見事やみたらひつ〻じ、
宵に蕾んで夜中に開く、夜明方にはちり〳〵に。

是につれて數十の踊り子が圓陣をなして踊ります、踊り子は老若男女貴賤の分ちなく素人も黑人も打交り思ひ〳〵のいでたちに素顔を隱して出ます、元はみんなお揃の白地に腰模樣の振袖で黑の股引、麻裏草履それに黑の覆面をかぶつて踊つたものださうですが此節ではそんな姿をしたのは、僅々十分の一位で多くは滑稽姿でございます、祭禮では、天神、祇園の二祭が主なもので前者は五月の十九日より同二十三日がお下りといつて町の若い衆數十人黑の腹掛白鉢卷手々に松火をもつて、松林山より御輿を擔ひ下すのであります、松林山の麓より又錦川の中を上へ下へと御輿を水へ投げたり上げたり、一時間許りも川の中を渡つてそれから大橋以北の町々を順次に廻つて御旅所に行くのですかくて五日間御旅所に御滯在、五日目の二十三日の夜お上りとて、前と同じ順路を逆に松林山へ御送りいたして終りなのであります、此五日間は通り筋に夜店を張り町々からは種々の山車、囃子車などが出ます、中でダンジリとて、車の上に七八歳より十二歳位までの

男兒が揃ひの腹掛鉢卷で大太皷を中央におの〳〵二本の棒をもつて、ヨイサの掛聲を合圖にドンと打ち「ヨイサドン、ヨイサドン、ヨイサドン、ドンドンドン」と繰り返しつゝ可愛い聲を揃へて拍子をとりながら町中を引き廻します、車の四方の軒はホーヅキ提灯をつるしなか〳〵威勢のいゝものであります、夜店には、十九文店とて小間物類何でも一錢九厘均一の店が出ます

後者の祇園祭は七月廿日より同廿七日まで一週間にて二十日がお下り二十七日がお上りでございます、御上下とも其道筋の角々で鷺舞といふものをいたします、此鷺舞といふのは、京都が本場で其まねをしたのとか習つてきたのとか申ますが大分古くからある樣です、まづ二羽の大きい白鷺が居りましてそれが主にまふのであります、それに從つて棒振とて平家の落武者然とした風姿の男が赤い髮を亂して三尺位の兩方に房のついた棒をふりながら鷺の後を一所に廻ります、地は笛太皷でうたひ男が二十人位麻裃に草履をはいて扇を手にもち中腰になつて聲高らかに歌ひます、

橋の上に下りた鳥は何鳥、川さゝぎの〳〵、ヤー川さゝぎのさゞが橋を渡した、時雨の雨にぬれ通り〳〵。ヒロナーヨ

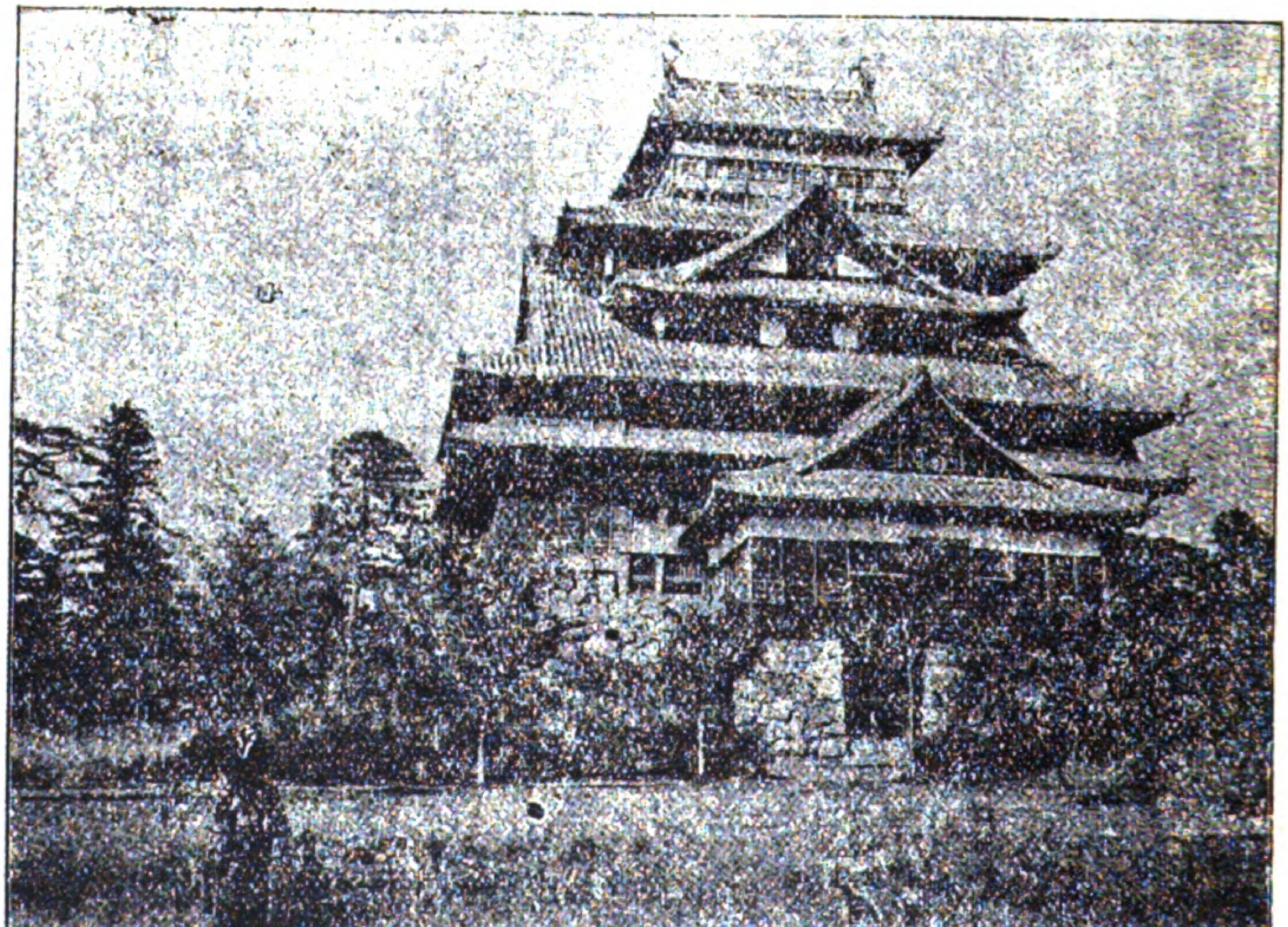
ーカー、ドン(笛、大皷)

是につれて鷺が羽を擴げたり飛んだりいろ〳〵に舞ひます大層上品でおもしろいものでございます、山車囃子車夜店などは前の天神祭の時と大差はございませぬが只一つ違つた賑は、チンバ聟といふ極めて滑稽な假裝行列がございます、是も古くからあつたのださうですが花嫁花聟の道中で花嫁といふは殊の外大きい女で顏は二の町どころか三の町四の町位の處それが又高い〳〵足駄をはいて、大團扇を右手にバタ〳〵あふぎながら歩きます、花聟は是は又人一倍小さい男でおまけにピツコときてゐますそれが昔風のチヨンマゲに結んで裃をつけて兩刀を打込んでキツトコ〳〵歩きます夫婦の不釣合は此上なしで其後を大草履片足擔いだ者などがお供をして「エー聟とらうとて、チンバ聟とりやつたヒヤア〳〵」とはやしたてゝ行きます、此外には特に記す樣のこともございませぬ、七日の間は新ま

ゐりと稱へ毎夜の如くお旅所へ參詣の人引きもきらず、一通ならぬにぎやかさでございます、此二大祭の外小さい祭は澤山ございますがいづれもさしたる賑はひもなくダンジリや競馬位のもので夜はマヒといつていつか新聞へ石見地方の舞といつて出てゐました丁度お神樂みたいな事を神社の拜殿でいたす位のものです一年中の行事五節句などは必ず舊暦を用ひまして隨分盛んに催します。

◎言語

松江舊城天主閣



發音は非常に正しく言葉は割にきれいな處でございまして一寸東京言葉に似てゐる樣です然し從來のしきたりで身分によつて親兄弟の呼び方や方言など違つてゐますのを二三左に

士族の上、父（オトッサマ）母（オカアサマ）祖父（オヂイサマ）祖母（オバアサマ）兄（ニーサマ）姉（チーサマ）夫（旦那サマ）妻（御新造サマ）令息（ボーサマ）令孃（ゴロサマ）（御寮樣？）士族の下はサマ付をサアといふのみ外は同じです、

平民　父（オトト）母（オ

カカ)祖父(ヂヂー)祖母(ババー)兄(ニイニイ)姉(チーチー)夫(親カタ)妻(オカッサマ)今日は(ナンシマシタ)左樣なら(マタキマセウ)もう(ハー)下さい(クレナサイ)こはれる(メゲル)

◎生活の程度

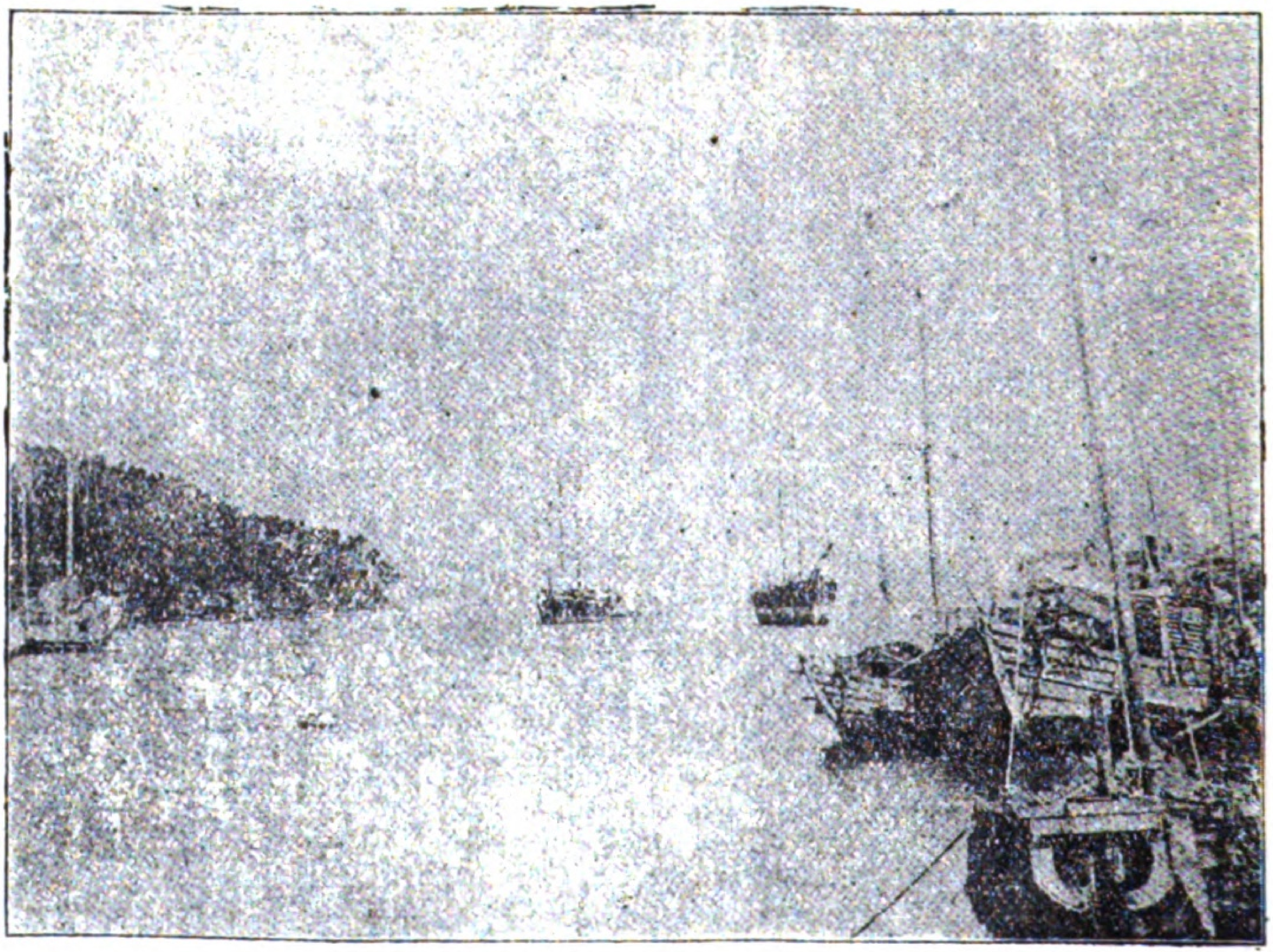
衣食住總てが割合に程度が高い樣であります、是は昔から東京との交通が頻繁であつた爲からなつたのであらうといふ事です物價なども年一年たかくなつてまゐりますけれども東京などゝはまるでお話にもなりませぬ。

衣　花柳社會を除いて平常着は多く手織物で一寸出るにも新紬か銘仙が關の山でございます、而しお正月とかお盆とか或は天神祇園の祭禮には上下ともけふを晴と着かざつて出ますので其時は隨分こつた姿をいたす樣でございます、時々の流行などもあまり急變はございません男の方は十年前頃までは黑羽二重がなくてはならぬ樣でしたが此近年日露戰爭以後は非常に質素になつて、木綿物しか着ない樣になりましたそれはお正月の儀式など上流のお方でも大抵皆木綿の紋付をおつけになります、たま〳〵絹物などきてゐますとあの人は柔弱とか何とかいつて冷笑する樣です、小學校の兒童なども以前私どもが出ます頃はなか〳〵派手でございまして式日などには縮緬の二枚着三枚着などお重ねになる方もございましたが此節ではそんなものは一切廢せられて男女とも黑の木綿の紋付にほゞ一定いたしました。こんな風で一方大層質素になつた樣ですけれどもそれは只ある方面丈で御新造樣御寮樣方はどうして〳〵次第にきらびやかにおなり遊ばすので旦那樣親御樣の御心配も一通りではあるまいといらぬおせつかいも申してみたくなります吳服物は總て京都仕入で田舍に似合はぬ柄などよろしふございます。

食　米は長州からまゐりますので品質は上等價もおやすい樣です、魚貝類も多く長州の北部海岸からまゐりますので昨夜とれたのを直ぐに夜通し運んで今日の午前中にはもう、それ〳〵當地の肴やの店に並べても

りますそれをかごに入れ天秤棒でかついでヨーイヨーイと賣り歩きます、魚の種類はあまり多くなく鯛、甘鯛、鰤、鯖などでそれに、いかたこといふものは御座いますがまあ概して鯛類が多い様でございます、價も東京近所の漁村よりもはるかにやすく其上浪のあらい日本海でとれるのでお味もまた格別でございます其外かき 蛤 などは廣島あたりからまゐりますし川魚では鰻、鮎などが澤山とれます、海苔、若芽などの海草は濱田近海の高島

境港の水門



といふ島から婦人がうりにまゐります一見大原女の如き風姿をして、

ノリヤイランカイナー。

ワカメヤイランカイナー。

いかにも離れ小島の人の様です。野菜類、味噌、醬油などは、みんな土地で出來ます、野菜をうりに來るのは、近在の婆さん連で大きい籠を背負つて四布の前垂をまいてまゐりますそれを金錢ではうらないでボロ(ツヾレ)と更へませうといつて襦袢の古いのや足袋の破れたのやいろ〳〵の布切

とゝとりかへるのであります炭、薪も近在からもつてまゐります其呼び聲は、

スミヨー／＼。割木や／＼。

まづ此位の處で大體の食事は大厨揃つてゐまして東京邊からゐらつしつてもあまりまづくて食べられないといふ様なことはないさうです、牛肉は町の北端塔の原といふ穢多町に屠牛場がありまして毎朝若い男女が行商にまゐります、此穢多町には美人が多く物好にも見物かた／＼御出浮の殿方もあるとやら。

住　山間でありながら、よく火事のある處で舊藩時代から町内全燒は度々であります近くは明治の初年南の果から北の果まで一軒殘らず燒けたさうです、爲に古い家といつてお寺が殘つてゐる位のものどの家も多數新しいので、そんなに煉瓦造の家こそありませぬけれども藁屋の家もまことに少く大抵皆瓦造でございます商家は勿論町家風でございますが其他は多く昔の士族邸風で上品な家が多い様でございます殊に昔の家老屋敷などは大きい門構へに前の方へは物見など出來てゐてそれは、それは廣壯なものでございます、貸家の家賃はまた極めてやすく八疊二間に六疊一間十疊一間に四疊半二間位それに二階が二間位庭は前後とも廣くかつ、築山泉水まであつて其上猶多少の菜園もあるといふ立派な門構への家でさへ、僅々五圓位なもの最下級の五十錢位の家でも六疊二間に臺所位ありますこんなに家賃は安くて又敷金などゝいふものもございませぬ。

金錢の取引は二八月といつて二月の末と八月の末が大取引で百面相の鬼が出る時であります。

◎敎　育

敎育機關としては、舊藩時代養老館とて武士の子弟を敎育する處がございましたのですが明治の御代になつて養老館は廢せられ新たに小學校が設けられまして色々の名稱のもとにいく多の變遷をへて今日の尋常高等小學校となつたのでございます、永年職を奉せらるる校長がまことに熱心で適任者であるからでもござい

ませうが日に月に進歩して其効果は町全般に渡つて非常に著しい様でございます、卒業生は男女それ〴〵に校友會を設け學藝を研究して居ります特に男子部では夜學會を組織して中學程度の學科を勉強してをります、其他母親會を起して一人僅かに一錢の會費を以て毎月一回夕食後校内に集會して日常有益なる講話をきゝ精神の修養をいたします、本會員は上下の區別なく苟くも一家の主婦たるものは、皆出席いたしますので服裝なども至

鳥取市街より久松山を望む



つて質素で前垂かけたお内儀さんも澤山ございます、町民多年の宿望漸くなつて昨秋より高等女學校を開くことになりました今の處まだ一、二、三、の三學級しかございませんけれども人數は定員以上で將來有望でございます、當地出身の主なる人を左に御照介いたしませう。

野々口隆正（國學大家）
岡　熊臣（同　上）
山本琴谷（畫　家）
福羽美靜（歌　人）
森　鷗外（醫學博士文學大家）
西　周（文學大家）

此外博士とか何とかいふ

者は數ありますがまづ此位でよしませう。

◎土地の產物

商業地でもなければ工業地でもない敎育には熱心であるけれども、それかといつて敎育地でもない此後どうなり變るものか分らないので、產物などゝ特筆大書した處でさあ書くものは皆無といつた樣なもの、然し題目を設けだからには、多少に關はらず墨をぬつてをかなくてはなるまい。まづ第一が生糸それから紙、導火線位のもので生糸はかなり大きい工場が二つあつて町内婦人の内職として飼養した繭が過半數。餘は近在から買入れるのであります、紙は町内では至つて少くまづ近村が主なもので名高い石見半紙を製造するのでございます、導火線は工場が四つ實行はなか〱いゝ相ですけれども時々爆發して死傷者を出すのは實に斷腸の極でございます、猶一般婦人の内職としていたすものは經木眞田で老若ともにいたしてゐます、是らの產物は一應周防の三田尻へ出してそれから汽車なり汽船なりに積込んで東西へ送るのですが當地より三田尻までの間が甚だ交通不便で運賃に多大の費用がかゝりどうも思はしくございません樣子です、早晩汽車も通ずるとかいふ事でございますから其時には又相當に分別もでるであらうと思ひます。

よしなきこと長々と書きたててさぞ〱御退屈さま、多少我田引水の點があるかも存じませぬが是も愛鄉心のいたす處と御容赦下さいまし呵々。





學者の淵叢地を自任して居る大垣町

町の子

◎大垣の今昔

天下分けめの戰爭に、西軍の總督浮田秀家の據つたと言ふ大垣城、櫻の新翠、松の濃綠、藻の花の浮くお濠を取りまいて、五千餘の家が至極平和に大垣の町を作つて居ります、近頃漸く交通機關も完備して、汽車あり、電話あり、近日電燈も架設されるといふ事、昔は十萬石の城下、今の戸田伯の舊領地です。

十九年前の濃尾の大地震、瞬時に變つた阿修羅地獄に、天主閣と十幾軒を殘すの外は、すつかり破壞し、あまつさへ火災を加へて、此の町だけでも八百餘の老若男女が聞くも慘鼻の死を遂げました。今でも十月の二十八日は此處此處の佛事に町中の坊さんが轉手古舞する日だと申ます。追々に年を經て、前よりも餘程立派に家屋は建ちそろひましたが、町はづれの屋根などには稀れにまだ、赤くなつた名殘りの燒け瓦を見る事が出來ます。

海へ十里、山へ一里、所謂濃尾の平原、沃壤な地は大垣から東へ、限りなく開らけて居ります。

◎日用の物價

矢張り時代の趨勢につれて諸物價は高くなりました然し都會に比すれば雲泥の差で、日用の野菜なんぞは毎朝郊外から百姓の爺が、新しいのをかついで若芽に蕗、莢豌豆。と呼び歩きます。

川魚はこゝらの名物で、フライに惜しい銀色の香魚や、赤味を帶びた櫻ばえ。鯉に鯛。交通の便の開らけ

たおかげで、海へ十里の土地もお魚には事をかゝぬとはいふものゝ今も鮭や、さよりは元來が鹽辛い性質の魚と、思ひ込んで居る大垣人は少なくありません。

一般大垣人は掛け引の商賣は下手、從つて無暗なかけ値は致さぬ樣です。理よ、維新の折、拜領した僅かの金祿公債に、惜しやチョン髷打つ切つて、あぶなつかしい算盤珠のはぢき樣、士族の商人も隨分多う御座いますから。

衣服裝飾の流行は都とは一年おくれ、と申した所、魁したとて誰れも譽めて呉れるでなし、おなんど流行にあづきの羽織で打つとほす位はお安いこと。

家貸だとて、六疊二間に四疊半、疊たて具附きで三圓位、十圓もきばれば一角の紳士顏して住はれませう。

地價は町の繁華といふ所で坪七八圓、靜かな所なれば二三圓、大工の日傭代五十錢位、日雇女は十錢位、こゝも下女はなか／＼拂底で御座います。十八以上の女になれば半期の給料十五圓から十八圓位、東京にも讓りませぬ。住めば都か、人は住みよい所だと申します。

○生產の狀態

古來此の附近は菜種油の產地として名が有りましたが、世の文明につれて丸行燈はランプと變り、すつかり需用が無くなつたので、多くの油の老舖は破產蕩盡し、或は商賣がへをして、殆ど其の跡をたちました。

かの名高い美濃紙に美濃米、米は大垣が集散地になつて居りますが、美濃紙は大垣からづつと遠い南の方で作られます。

近時心ある人々の奬勵によつて漸く養蠶が盛になりかけたのは生產の少ない大垣に取つては喜ぶ可き事です。

日露戰爭後どこも彼處も盛に事業勃興熱が燃えた時此處も御多分に漏れず、ヤレ紡績會社、ヤレ織物會社と成金黨の連中が大分騷ぎましたのも暫時は株式の暴落と一所に火の氣は消えて、計畫ばかりで夢の樣に終りました。

工業は皆無といつても能く、商業は盛ならず、此の

まゝならば今後の發展は思束ない事でせう。只見る可きものは教育のみで御座います。(圖は長良川の鵜飼)

◎教育と宗教

教育はなか〳〵熱心で家庭に於ても重んぜられて居ります。中學校、商業學校、女學校、養蠶講習所、などいつも滿員の有樣、小學校の完備したのも幾つも御座います。小學校の女生徒は黑木綿の服に同じ袴で丁度黑んぼの樣、女學校も綿服の袖が一尺五寸に限られて居ります、之れ等は何事にも消極的な大垣には相應しい事ですが、七寸の袖が二寸だけへつて何れだけ効能が有つたかは、まだ瞭然と聞きませぬ。



美濃は北越につぐ佛敎の盛な地で、澤山な寺にはいつも說敎が絕えず、一般の人の頭には後生なるものがこびりついて居る樣です。されば本願寺のかのお借財なるものに附ては、大變な心配で、盲目按摩の一人女が百圓出したとか、家なしの乞食が五十圓寄附したとかは珍らしい話では御座いません。おゝ、偉大なる信仰の力！と、迷信にもせよ驚かれます。

◎人物と婦人氣質

此處は隨分變つた人の出た地で御座います。ずつと遡つては、梁川星巖、飯沼慾齋、小原鐵心、菱田海鷗今は佐藤博士、南條博士を筆頭に大垣出身の博士が丁度五人。

「元來が大垣は學者の淵叢地で御座る」と士族の老人は鼻うごめかして申ます。

女だつても仲々ひけは取りません、美濃出身に名だかい下田歌子女史あれど、大垣からは少し隔つた東濃なればあへて引つぱり出さうとは申ませぬ、女傑と知られた梁川紅蘭繪畵で名のある江馬細香などが御座います。

此の様な過去に女傑を持ちながら、何ぞ今の大垣婦人のおめでたき事や。一體に因循で平凡で、覇氣に乏しく嚙んでも味は出て參りませぬ、能くいへば上品、內氣、人がよろしい。婦人會は愛國婦人會、佛教婦人會、會員はなか〳〵多い様ではありますけれど、時に精神のある所を忘れて枝葉に走り、黨派が出來たり、紛紜が出來たり、なか〳〵一致して丸くはゆかぬと聞いて居ります。

男女を問はず一般人氣は惡い方ではありませぬ、どちらかと言へば人の好い方、左様かといつて質朴でもなければ勤勉でもなく、見せかけの立派な銀行家、實業家、醫者、新聞記者、中には隨分今様ぐうたら男子も多いさうです。

◎名物と名產

日本で水の一番好いのは大垣だと、某醫學博士が仰つしやいましたとか、十二間ほれば何處からでも軟水が盛に湧いて出ます。それ故一軒に一つ二つの掘りぬき井戸は附いて居て絶えずわき流れて居ります。其れで掘り代は僅に六圓、飲料にも心地の惡い硬水に百圓を費す釣瓶井戸、お金で買ふ水道の水、大垣の子供はお伽噺と思ひませう。

大垣はずうと昔は大柿村と書いた位で、至る所に柿

の木が、ずゝなりする秋は隨分見事で御座います。

此處の名產は柿羊羹、名物に甘い物なしといへど、茶人などには好かれます。「宗近君のお父さんがね、今日柿羊羹を食べてよ」といつかお隣の淺ちやんが虞美人草の新聞を抱へて告げに來てくれました。

孝子で名高い養老酒は、瀧の水の精製長壽を願ふ慾張人に愛用せられます、其の他、鮎鯉鯛などの川魚。



また一つ大垣にしか見られぬものが有ります、さらさらと溢れて流れる井筒の井戸升に冷してある葛饅ぢう。危險の多い氷の代りに夏は至る處の店頭に賣つて居ります。

◎附近の名所

町の中心、若葉の岡に巍然と聳えた巨鹿城、名所と人は叫ばずとも、心ある遊子の低徊する

所、青嵐の宵には郭公も鳴きます。

瀧に名高い養老の山へは三里、三里といへばおつくうの樣なれど、人車馬車の便あつて四時遊客は絶えません、夏は殊に瀧ちかくの立派な旅館に、遠來の避暑客が隨分多いと聞きますけれど、詩人と畫家獨專の紅葉の瀧には優りますまい、まだ俗化せぬ仙境、一度は杖をお曳き遊ばせ。世に名高い孝子の遺跡、奈良朝の世、元正帝が行幸の際、御腰かけさせられたといふ腰掛岩も、瀧のしぶきに苔むして居ります。

房島の簗。揖斐川の清流に簗をかけて鮎を取ります澤山の漁夫が夏の夜たいまつを手にして働く所ば頗る美觀だと申ます、長良に優る鮎の名所と、昨年御料局長某の守が百姓太郎作の鮎料理に、舌皷ならし給ひし所、近頃殊に名高うなりました。大垣から四里。

其の他、長良の鵜飼、關ヶ原の古戰場、不破の關、いづれも一時間を汽車にゆられゝば事なう參らせます

◎地方病と方言

水の好いのか、空氣の好いのか、餘り傳染病などは有りませぬ、俗にいふ「おこり」間歇熱は夏期に隨分多い當地方病なれど、馴れて了つて少しも恐れません、少し顔色の惡い女に「何處が御病氣?」と問いて見るなら「いえ、あんた、一寸おこりを振ひましてなん。」と譯もなく言ふ。三日病氣して其の晩にキナエンを飲めば素人細工で妙に全快して何の事御座いませぬ。けれど一時は四十度以上にも熱が出て隨分苦しい病氣で御座います。

京都へ三十里、名古屋へ十里の大垣は、京都から來た言葉、名古屋から來た言葉、大垣城下獨得のもの、隨分をかしい方言が澤山御座います。

「下さい」を「下しかい」といふ、はむかし二本おとしたお武家が切口上「下しおかれい」の轉化したもの。戯談を「じやらけ」胡坐を「じようら」土筆を「つぐぼ」仕てお呉れを「仕ちよくれ」行うぢあないかを「ゆこまいか」修繕するを「はそんする」をかしい言葉は限りも御座いません。

（完）



夢見つゝある北陸の大都

さみどり女

△百二十萬石の城下

近江の米原驛から東海道線を分れて七時間近く北し更に東すると、汽車は爰にお話しやうとする加賀の金澤に着きます。流石は日本諸大名の随一前田家百二十萬石世々の城下とて、維新後一時衰微したとはいへ又近く人口を増して、九萬何千北日本第一の大都であります。位置は白山連山のなだれが急下して日本海に向ふ中途にあるので、南は續く峰々を望み、北は廣く一目の中に入る平地、犀川、淺野川の二急流が市を貫いて、水は清く眺めは誠に豐かでございます。其淺野川の注ぐ所が即ち鏡花さんの「湖のほとり」に見えた芙蓉の湖一名河北潟、其水は又更に錢屋五兵衛の貿易地として名高い金石の港（と申してもほんの小漁村ですが）に入るので、市から此處までは一里半に近うございます。

　前にも記した通り二つの河が中を貫いて居るため、市は自ら淺野川口、犀川口の東西と中央との三部に分れますが、其主力と繁華とは申すまでもなく中央に集つて居ります。彼の日本三大公園の一として有名な兼六公園も、此中央の部の南寄の所、木立野といふ丘陵の續きで、舊城とは濠を一つ隔てゝ居るばかり、元は城主の隱居所の庭であつたと聞きました。成程名高い丈よい公園で、岡山の後樂園は人工を以て優りこれは自然を以て勝つと存じます。其木立泉水などのもの古り幽雅であるのは申すまでもありませんが、近く市をうち越して河北潟から日本海の白波まで目に入るのですから、その價値の半は周圍の眺望によつて増すと申してもようございませう。園中には船を浮べるに足

る池があつて、高所にも係らず誠に水が自由ですが、此水こそ昔時萬一に備へた軍用水で、三里の遠きから土中を樋で引いてあると申すことです。其工事には何れにもよくある傳說があつて、昔其勞に當つた人夫は秘密を知るが故に皆殺されたとか、兎に角此公園こそ市第一の誇でせう。

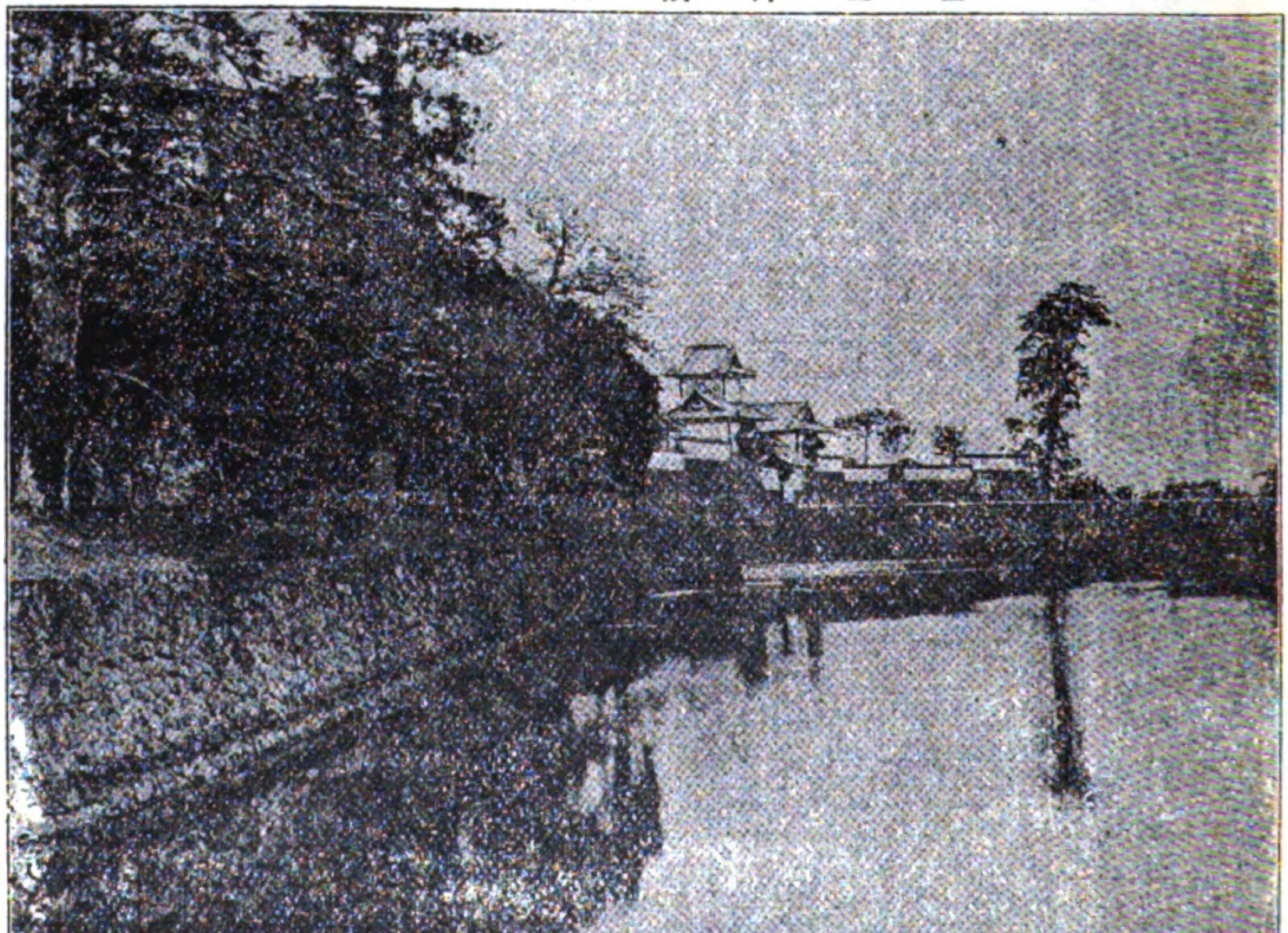
△遅い文明

斯樣に市其ものは立派ですが、商業其他一般から見て、文明の程度は餘程遅れて居るやうです。其位置から申せば本土の中部、其大さから見れば屈指の都會でありながら、まだ覺めはてぬ夢の跡の殘つてゐるのは其原因確に鐵道の敷設の遅れたのによると存じます。即ち此地に汽車の通じたのは僅に十年來の事で、それまでは山蔭の桃源境、吹きすさむ新空氣から取殘されて、獨古い昔の夢に憧れてゐたのでせう。とは申すものゝ、一つは其位置が北に偏在してゐるからにもよるので、時代遅といふ此觀は今に初まつたのではなく、維新の際に折角勤王黨に組しながら、可惜大藩の力を薩長土の手先に使はれて、骨折損の疲勞まうけ見たやうな結果になつたのも、つまりは此賜物です。

が、遅れたものが其落伍に氣付いた時、眠つてゐたものが其夜明の色を知つた時には、血眼になつて他の後を追はねば間にあひません。汽車といふ新世界への結付を得た金澤市も、亦急に他との併行を計るべく活動し初めました。其活動の十年間、此短い間にどんなに急激な變化があつたでせう、今其一班を面白い例でお話し致しませう。――其位置からいふと金澤は東京よりも京阪によほど近うございますし、交通の難易から申しても東は中に中山道といふ峠を持つてゐますから、古くから其影響は西にうけて居りました。此結果として從來此市の商店では、何もかも「京大阪仕入」を誇の招牌としてゐたのに、一度鐵道が通じて東京の風が傳はると、此稱は何時か一變して「三府大仕入」となりました。けれどもそれも一時の過渡期丈、帝都の風が汽車每に運ばれるにつけ、忽ち變る「東京直仕

入」總ては此風で短い十年間に變化したのです。暖簾がガラス戸となり雪車が自轉車となり、曾ては、初めて電燈がつけられた時市中が晝よりも明くなると聞いて家根に登つた市民も、今は電話にも自動車にも驚かなくなりました。けれど、も皮相の文明は早く傳へられますが、眞の改良は時を要します。で一躍して新空氣の中に入つた金澤も、他に比べてはまだ〳〵古い姿が脱けませんが。それ丈又人氣が純朴で正直で、他國の者でも粗略にはせず、盜難や火事なども數へる程しかないさうです。

舊金澤城石川御門



△辻便所で謠

斯う昔氣質のまだ拔けない上流石に大藩の跡丈に、其氣風も嗜好も何處となくおつとりして、住んで心持の惡い所ではありません。其上藩が大きいので昔から徳川幕府に、睨まれ勝だつたものですから、代々の藩主は其忌に觸れるのを何よりも恐れたのです、有名な話ですが、何代目かの藩主が何時も鼻毛を延してゐるので、或人がお拔きになつたらばと注意すると、「いやいやこれは容易にぬかれぬ

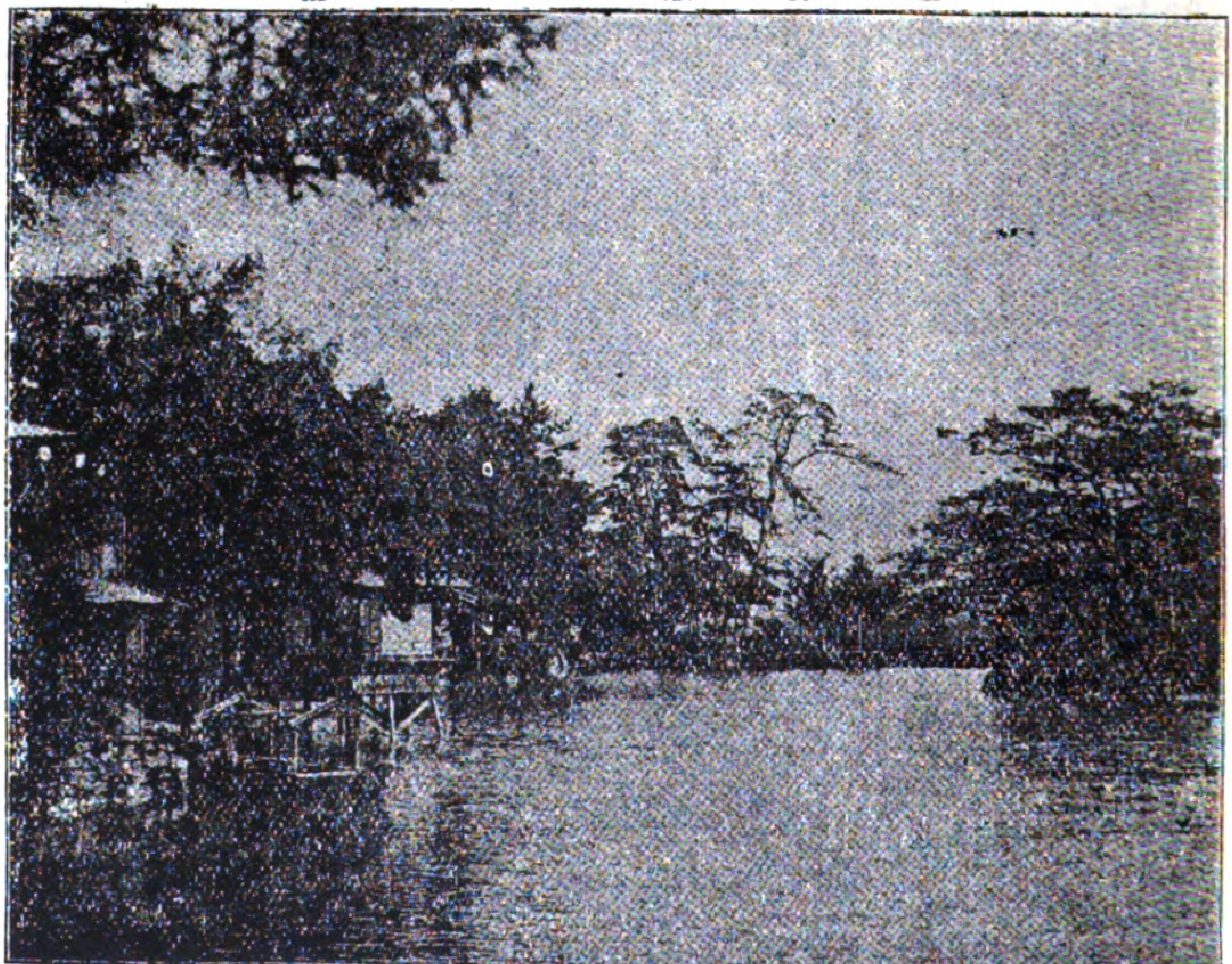
百二十萬石を釣る鼻毛ぢやもの」といはれたさうな何れも皆此の洗で、藩の氣風も自ら其の主義に導いたのですから、なまなか術武などゝいふよりは悠長を主として、大事の腰のものさへ皆見かけばかりの腰物が多く、今も此の種のよいものは此地に少いと聞きました。それよりも目にたつのは其の居城の規模で、城濠も石垣も飾具のやうな小さいもの、これも對幕府の策略でせうか、これが百二十萬石の殿樣の居られたところかと女の私でさへ驚きました。所が此の主義の遺風が今に傳つて、何處かに殘る優柔不斷、加賀寶生の名に聞えて謠の本場と今にいはれるのも、同じ目的が生んだ流行の形見ですが、流石に音に通つた丈此處に來て第一に驚くのは斯道の普及で、酒屋の樽拾でも一二番の嗜のない者はない位、場末の町などへ行くと、「いかに鬼神もたしかに聞け」と辻便所の中に田村將軍が居たり、「はづかしながら名をなのり候べし」と、、、とてつもない出羽の郡司の娘が湯船から首を出すなどは、決して嘘でも僞でもありません。何時やら他家へ呼ばれた時、餘興をつとめた狂言の大夫の名を聞くと下駄屋のオッさん、、、(小父さん)と八百屋のアンカ、、、(兄貴)といはれたので、どうも信じられなかつた程です斯うですから何處の神社の境内にも、神樂堂の代りに能舞臺、いざ祭禮となると、賑かな囃の代りに「ヤアポーン」とさびた沈んだ音がするのです。そればかりでも此地の人氣風俗の悠長さがお分りになりませう。

△よくいへば儉約しい所

昔から藩風が右のやうですから、一體が極地味で派手派手しくありません。で其生活のさまを見ても、よくいへば儉約しい所、惡くいへば因循な吝嗇な所、近い話が庭の中にも無用な松や櫻の植込は極少く、植ゑれば乾度花實兼備(!)の李か杏子林檎などは、近頃殊に多くなりました。偶々櫻などがある家では、また三四分の見所を惜氣もなく摘取つて、鹽に漬けた花も家で餘れば他に賣るのです。も一つ同じ例としては、中流以上の家まで貸間をしない所がない位、で下宿屋

といふものは殆んど皆無で、他國より來た書生さんは皆一時まごつくと聞きました。けれども一體が此樣な生活ですから、物價なども自ら安く、其點は誠に結構です。女などでも決して遊んで居るものはなく、下流の家庭などでは子供から大人まで多く工場等に通つて管卷とか機織とか夫々賃金を得て歸ります。尤も其爲に學校を怠り勝の風のあるのはかういふ土地のかういふ階級には致し方がない所でせう。が此處に解し難い事は、斯うも

金澤兼六公園



女が働く割に男が多く家に遊んでゐる事で、從つて御飯炊や子守などゝいふ女の專門が、此處では男の受持になつてゐる。これはまだ男に相應しい事業の起らぬ所爲かも知れませぬけれど、餘所から參つたものには不思議でなりません。けれども斯う仕事が轉換つてゐる爲めか、男が誰も〳〵料理の上手なのには驚きます。

△乏しい物產

氣風は前に申したやう其上一體がさう地味な土

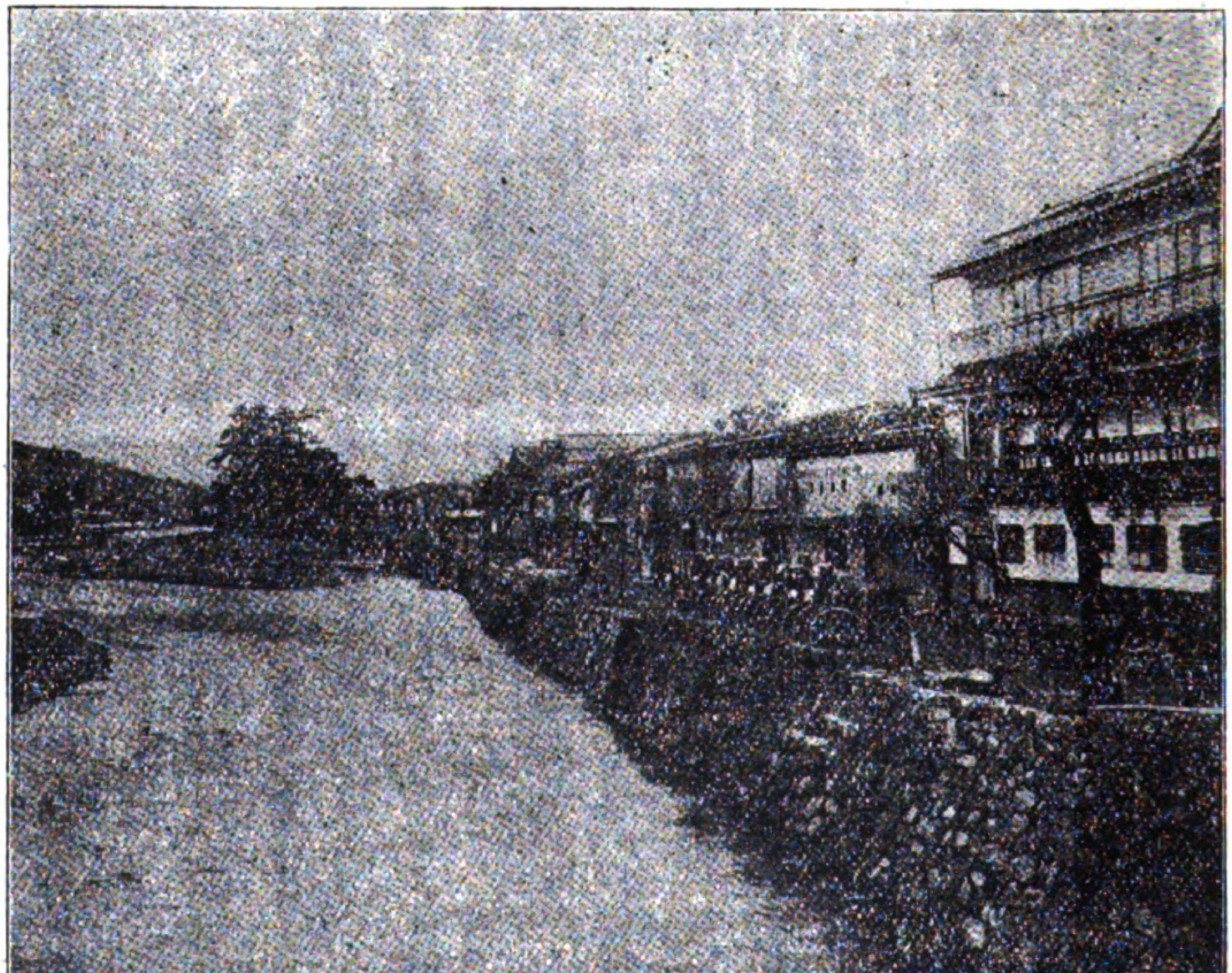
地柄に加へて、大藩の跡の昔の夢がさめ難いかして、物產といふもの目ぼしいのは何もありません。人は金澤といへばすぐ九谷燒を聯想しますが、あれとても此市から出すのではなく、稍ゝ離れた田舍に窯があるので此處には只其商店が多い丈です。反て近頃では羽二重の織出しが多くなつて、工場も三四立ちましたが、それとても福井市の尻馬にのつた位のもの、殊に近年の問題である尺不足からの市場の不景氣で、それもばたばたと倒れ初めました。これ等の風を土地の人は前に申した交通機關の遲れたのに歸して居りますが、同じ運命の下に立つた福井や高岡の盛大なのに思合はせると、決してさうばかりは申されません。恐らく前田家が三百年間に作つた面白からぬ氣風と、大藩の民の懷豐かな逸樂の結果かと存じます。

△半年は雨雪の中

此市に生活して最もいやに思はれる事は、天氣の惡いのが第一です。日本でも屈指の雨量多い所とて、半年はまア雨雪の中、からりとした天氣は夏丈の短い間でございます。まづ十月下旬から漸く雨期に入つて、秋雨から續く時雨の空、霙が何時か霰となり雪となると、翌年の二月まで今度はそれを逆に繰返すのです其間の退屈さ、戶外の運動などは夢にも出來ません。從つて空氣は何時もじめ〳〵して、弱い方などは、尤もよくあるまいと存じられます。雪は越後のやうに多い事はありませぬが、それでも雪國の部の五六尺に及ぶ事もあるとか、家の建方などもそれに應じた式で、軒は普通より一間も突出て居り、雨戶は緣先に更に土間を掘つて其外に立つのです。だから馴れない間の欝陶しさ、部屋の中が何時も黃昏のやうな心地が致します。其溫度からいへば、夏は隨分暑く冬は可成に寒うはございますが、さりとて東京と大差あるとも思はれません。然し家の建方と共に室內の防寒の用意に手拔りなく、部屋といふ部屋に炬燵のない間はない位、土地の人は夜も家內中四方からそれに足を入れて眠るのです。尤も馴れぬ私共が其眞似でもしやうものなら、

上氣の爲めに一晩で立派な眼病になりますが、此處の人は習慣で何ともありません。然し斯う一つ炬燵に男女混じて眠るのですもの、どうしていゝ風儀がえられませう、兎角面白からぬ評のあるのは一つは確かに此爲かと存じます。又冬の中で一寸奇妙に感ずるのは雷鳴の烈しい事で、夏よりも多いのは元より、落雷も度々あるやうです。一吹風がザッと軒をかすめると、其音につれてばら〳〵と大粒の霰、すぐ烈しい雷が耳をかすめるので

淺野川の流れ



すから、馴れねば一寸異樣です。以上の樣に、氣候は誠に宜敷ございませんが、只嬉しいのは梅雨の少いこと、前年から降續いた雨雪が止むと、春から夏にかけてまづ〳〵上天氣の、漸く蘇生つた心地が致すのです。

此樣に記すと天候ばかりで最ういやになりますが、さうばかり申したものでもありません。成程其の方は惡うございますが、其代り地震と傳染病とは極稀で、地震などは知らぬ人が多い位、傳染病も交通の開けたと共に少

しは耳に致しますが、一體の土地が山國がゝつてゐるものですから、他に比べては皆無といふてもよい程です。

△珍らしく思はれる一二

祭禮とか年中行事とか尙記せば限りもありませぬが、既に何時やらの新小說などにも、鏡花さんや斜汀さんの精しい御紹介があつたやうですから、茲には他國人の大まかな觀察丈に止めて、最後に珍らしく思はれた一二をお話して筆を擱きませう。

何處へ行つても第一に氣のつくのは言語ですが、此地の人の言葉も隨分變つて居ります。然し大體から申すと古い言葉がかなり多く、其上一體が京都辯に近いのへ其話振が誠に悠長ですから、何れかと申すと優しく聞える風です。今一つ〳〵擧げる事は廢しますが、初めに一番耳につくのは「やア」(ハイ)です。店に行つてものを買はうとしてもやアといへば、車夫を呼んでもやア、烈しくなるとやアやアと重ねざまにいはれるので、何となく跋が惡うございました。それから町に出て目につくのは、饂飩屋の赤行燈、これは四五尺の四角な形のもので、全體が眞赤な色です。其上此家で客扱をするのが十一二から十五六までの小僧さん、裾短かな着物を細前にして客の前ににによつきり棒立になつた儘、「何あげるけい」といふのですから堪りません。私はそれとも知らず夫と共に這入つて、這々の體で逃げました。食物の序にも一つお話し致したいのは夏賣出す「ガバタ」と申すもので、ざらめ糖を固めた樣な雪の塊です。これは山近い淸淨な地に大穴を掘つて冬の中其中に雪を山のやうにつめ、蓆で覆うて貯ふのださうで、夏になると大路小路の辻々に、さゝやかな店を張つて賣つて居ります。客があれば、鋸で適宜にひいて持つ所に丈靑々とした大笹の葉をかけて渡すのですが、土地の人はそれを五厘三厘買ひ取つて、美しく裝飾をした人まで恥らひもなく大道を食べてあるきます。私共が頂いたところでは、一寸風が變つてゐるから一時に珍しがりますが、とても眞の氷のやうで

はありません。けれども長く食べなれた人には反つて此方がよいのですか、先年函館氷を持込んだ人があつたさうですけれど、皆恐がつてちつとも賣れなかつたさうです。これで見ても所變れば品變る、こんな詰らぬ記事もおいでになつた事のない方にはお珍らしいかと思つて、狹い見聞をお話し申したのです。

風俗記事に就て

地方風俗の變遷を募るの主意必らずしも山間僻陬漁村蠻戸の奇風異俗をのみ求むるにあらず、要は現時の活動せる社會を知らんが爲なり、されば通邑大都の稱ある名古屋、仙臺、長崎、廣島、京都大阪の町には勿論、墨陀の雨、芝浦の月の風流はなくも、鴨川の夕凉み道頓堀の芝居、淺草觀音の社會的觀察は逸すべからず、諸國、名產、名品、土地の誇り、國の自慢さては名物のうまい物なき其名物、名所古蹟に詐りある其の名蹟、日本三景はおろか、高山、大澤、魑魅魍魎の棲み家も又十分紹介の餘地あるべし

一、生活状態を記する時は必らず日用品の重なる物價を記すべし

一、風俗人情を記する時は必ず言語の訛り時樣を記すべし

一、俗謠、奇習、珍話、逸事、傳說、史談等はなるべく挿入すべし

特賞の一　夢見つゝある北陸大都

特賞の二　自任して居る大垣町

特賞の三　山陰道の名邑



東京だより（二）

秋雨

新綠に包まれた東京．

滿都うかれ心の春は逝いて、武藏野一圓、人はすでに花の醉より覺め、それともわかぬ初夏の風は、そゞろに新綠の愛す可き香を送り越して、濁りたる臭き此の世の空氣を、これより一掃せんとするに似て候。

此時にあたり、爲すあらんとする新らしき年度の東京市は百般頗る沈滯の姿に候。幾年來耳に馴れし不景氣の聲は今以て反覆するによしなく、むしろ、層一層、色の濃くなる氣味に覺えられ候。

さしもきのふ迄は盛に煤烟を吐きて、門前の柳ために黑かりし林立せる烟突も、今日は曇れる空に孤立して、むなしく墨陀の川風に悲愁の姿をうつし、表は赤煉瓦の構えいと厳めし氣に見ゆれど、内は地獄の三丁目　機關車の油つきし果ては、約束手形の連發に、何もしらぬ小商人の手を振るなど、風呂敷の擴げかた大きければ大きいほど鼠の嚙る孔も小さからぬよう見受けられ候。されば四百五百の薄資本にて漸く張れる店と覺しきは、轉廢、實に朝三暮四のあはれさにて雜作賣の貸屋札のみ日に增加しゆく有樣、かくてはいかに景氣よかれと祈りても更にかひなきわけに候。これ何の因、何の果なるかは、世を知らぬ女のとても推測するには難けれど、多年胚胎せられたる世事各方面の惡弊が漸く化膿し來れるにはあらざるかこゝに一大手術を施す可き時機の切迫し來りしにはあらずやなどしきりに思はれてならず候。

しかし乍ら、さる立ち入りたる問題を捉へんがために歩きまわりたる東京市にあらず、只漫然と、倦怠に

倦怠を重ねたる心に少しにても清新の氣を吸ふこともやとあるきまわりたる果てが、はからずも興味を新緣の東京に持たる迄のことに候へば、うすく〳〵なりとも東都の景況が御胸に描かれなば幸甚、しからずんば、徒らに筆を弄したるものとお蔑すみありていさゝか不滿とは存せず候。

△麴町區

こゝはさすがに、梢に千年の翠を湛え、颯々の調ととこしなへにのどかなる千代田の松の松かげなれば、閑靜なることいふ迄もなけれど番町あたり平また凡なるものに候。北も東も塀また門、偶ま平を破るものは主じ思ひの番犬の遠吠え、こゝに至つて晝吼ゆる犬をすさまじきものと稱たる淸女の直感の鋭敏なるを覺えたる位に候。さり乍ら子女の教育には忘る可からざる土地ある一二の場末をのぞきてはおほかた中流以上の人の住居多ければ、但し招魂社を前にしたる三番町、二七不動をあてこみの上六番町は、稍その破格なるものに候得ど其の他目拔きの場所と覺えし麴町通りは、市區改正のためにとり擴げられてより、安普請の西洋館のみ殖えて昔日の藏作りは漸々に面影を失なひ、たゞ人さわがせの電車のみ得々として眞只中を濶走いたし居候を見れば、甲州街道よりはるく〳〵荷車曳いて來る太郎作、權兵衛があと見送りてうらめし氣に汗をぬぐふも無理ならずと存せられ候、まことに文明の一面はかくして彼等の勞働心を失望せさせ居り候

霞一重を隔てたる日比谷原頭はさすがに帝都の中心何時來て見ても廣また大、天地の無窮はこゝにして始めて知るの感これあり候。

然るに何ぞ、近來の事件と目せらるゝ日糖に關する衆議院の壁よごしや、自から代議士といふ大任を双肩に荷ひ乍ら、なほ慾張りて、要らぬ所に手を出し、僅かに一萬二萬のために節を潰し、黃金に征服せられたる愚かさ、近頃の流行を自殺情死とせば、これもたしかに風變りなる自殺者に外ならずと存せられ候、男子の面目こゝに至つてふみつぶされたるものといふ可き

に候はずや。豫審の決定は既に濟みたり最後の判決は知るによしなきも、とにかく受くる刑そのものは或は彼輩に取りてさまで痛切なるものとも思はれず候へどかくなるうへは、自から穿ちたる孔に自から葬るにひとしきもの、それを思へばむしろ口惜しく存せられ候。

二千圓の歳費に甘んせず、私かに事を爲すの意義を以て、また黄金に使はれ重寳がらるゝだけの才を以て盡す可きに務めなば、國家の得る所、蓋し多かりしならんに、百年の大計、一朝、判斷の誤りよりして事は破る、罪はもとより憎む可きも、かくして一時に葬むらるゝ幾十人を思へば、惜しみてもなほ餘りある事と存じ候。

去るに臨み再び仰げば、何式といふ建方にや、いかにも野暮臭き肩身のせまい心地する建築、茫然として曇れる空に立ち居り候。

△神田區

負けず嫌ひの自動車を除く外、何物も息まず喘ぐ九段坂一とつを間にして、この區の空氣はからりと異なり居り候。

今川小路兩側の古本屋は、店頭に幾多の顧客をならべて拔目なく候。勸工場東明、南明は、例の如く綺羅美やかにかざりつけ居れど、矢張り不景氣をこぼしつつ、附景氣か何か、臨時福引などしてともかくお茶をにごし居り候は、何となうあはれを覺ゆるものに候。

これに反して神田明神の敷石は、すりへること夥しきよう見うけられ候。蓋し神社佛閣は浮世の潮流に反比例するものとかや、こゝもそのためしにはもれぬ福德の三年目なるべしと存候。

名にし負ふ江戸生粋の神田ッ兒は、今は離散していづくに何を問はんに由もなけれど、こゝらはさすがに昔の俤なつかしと見らるゝ處も少なからず。ことに此の明神の祭りは例年盛況を極め、可成神田ッ兒の意氣をさらけ出し居り候。きのふけふ明神境内の杜の梢いや生ひに繁りて、幾多の鳥に塒を與へ居候は、時分がら奇特なる事とうなづかれ申候。

花に、青葉に、月に、雪に、東京名所の一と數へられしお茶の水は、水彩畫にペン畫を加へし趣き、上を下との八本の銅線騒擾を極めて杖を立つるに暇なからしめ候へど、今は青葉の比ひなきながめ但し高等師範の古校舎が村落の粉小屋めいて面白き調和を保ち居り候。



表はかくも見苦しけれど、うちに養はるゝ百餘の才媛は、全國より選抜せられたる一騎當千の强のもの、故に當代に名を成せる、良師、良妻、良母はおほかたこゝの出身におはすと聞き及び候。惜むらくは文部一流の遣口の直轄にある學校なれば、詰め込むことに嚴にして、むしろ人物養成といふ點に寛かなるが如き觀の致候。されば折角教育界に多少巾を利かした

まふ、あらはれたる數氏の技倆タイプがすべて團栗の丈比べとしか思はれず、諸雜誌にて折々うけたまはるお話しもどうも生煮えのお魚のようなるは、甚だ物足らず感ぜられ候。

これは新緑の東京市といふ問題には沒交渉のことなれど見つゝゆくうち此の直感のふと胸にうかび候まゝ

小川町を横に切つて一ツ橋にいづれば、かなたこなたに並び立つ幾多の校舍、何れ不屈の健兒をぶくめる中に、最も光輝ある歷史と、先輩を有するは高等商業學校に候べし。

然るに今や不幸にして、歎願の件一も容れられず、加ふるに文部の高壓手段は堪へ〳〵し來れる學生をして一時に忿怒の頂點に達せしめ、こゝに愛す可き意氣と强情とを有せる千五百の健兒は、一時に袖をしぼりて校門に訣別し、最愛の徽章を擲うちて悲歌慷慨の慘事を演じ候ひぬ。此稿を草するときは恰かも其三日置きて後の事、學校はいまだ授業を開始し得べくもあらずといふの夜にて候ひき。

事のこゝに至れるもとより生徒としては過激なりとの譏りもやがては出で來る可し。さり乍ら卒業の期限前に迫れるの今日に於て、あらゆる名利、多年研鑽の果をも失つて顧みざるの擧に出でし眞情を察すれば轉た斷腸の思なきあたはず候。

文部當局、かく迄の事に至らむとは思はざりしならむ。健兒またかく迄になさんとはしひて思はざりしならむ、さり乍ら意氣ついに和合せず、終に此の悲しむ可き大事件を生ぜしは誠に遺憾の極みと存じ候。これにつけても思ひ及ぼさるゝは女子の身の上に候。此の事件がもし女子の學校なりしならば如何。よしや如何なる壓制を加へらるゝとも、よもやこれ迄の事は出來ず候ひしならむ、止むなく泣き寢入りに終らねばならぬことに候ひしなる可く。これを思ひ、かれを思へば、女子教育の前途また不安至極に候はずや。

近日高等女學校の風紀に關する何個條かの訓戒めきたる名文が發表せらるゝよしに候が、いかにも最も千萬なる條々、さすがに先輩女流の御名案

警視廳認可ト共ニ確實ナル證明アル白毛赤毛染ハ

千代ぬれ羽ノルアミ尚本品ハ永久保存スルモ効力



文(その一)

不變ニシテ多大ノ信用アレバ賣買最モ安全ナリ請

フ本品ヲ備ヘテ顧客ノ信用ヲ得ラレヨ……………

女(なの二)

●博文館圖書陳列所……館内にあり

大日本發賣元祖

明治四拾二年新品發賣



●定價

金五拾錢
同貳拾錢
同拾錢
同五錢

▲遠國送料
金貳錢

▲郵券代用にてよし

リウマチス全治 秘訣

妾儀多年リウマチス病に罹り百方手を盡すも更に効なく困難の處不思議の神藥の奇効に依り忽ち根治全快し喜悦に堪へず依つて人助のため同病者に事實を告げ救濟せんとす御希望の方は郵券二錢封入申込次第詳細に御通知申上可く候間御遠慮なく申込あれ

東京府下大森停車場東大畑
河奈とめ女

小賣部大擴張

他店出版物
御取扱申候

各位愈御清穆之段奉恭賀候陳者從來弊館小賣部ニ於テハ單ニ弊館發行ノ書籍雜誌並ニ早稻田大學出版部其他ノ發刊ニ係ル一手販賣品ニ限リ取次販賣仕來候處在地方顧客各位ヨリ弊館發賣品ト同時ニ他店出版品ヲモ御註文相成候向尠ナカラズ其都度他店品丈ハ不得已送本方御斷申上居候次第ニテ之ガ爲メ各位ニ於テ折角御希望被成候品モ容易ニ御手ニ入ラザル等誠ニ多大ノ御不便ヲ與ヘ候ノミナラズ御送金ニ關スル手數入費及御通信等ニ付テモ餘分ノ御失費ヲ釀シ候事ト相成候ニ付此等ノ不利不便ヲ除カン爲メ今回弊小賣部ノ業務ヲ擴張シ汎ク他店出版品ヲモ御註文ニ應ジ御取次申上候事ニ改正仕リ尚一層機敏確實ヲ旨トシ各位ノ御愛顧ニ酬ヒ度存候尚ホ詳細ハ五月發行雜誌ノ定期號ニ廣告致置候間御高覽之上何卒倍舊ノ御眷愛アランコトヲ偏ニ奉希候

追テ他店出版定期刊行雜誌ヲ繼續御購讀ノ節ハ各發行所ヘ直接御註文相成候方御便利ニ有之候ニ付弊館ニ於テハ取次不申候

東京日本橋本町
博文館營業部

女(その三)

第七回 音樂夏季講習會開設廣告

一開期 來ル八月一日より二十一日迄 三週間
一講習科目 唱歌、ピアノ、オルガン、ヴァイオリン、和聲學
各科共講習生の學力程度を參酌し甲乙二組に別つ又隨意科目として樂理を課す
一講師 東京音樂學校教官、女子音樂學校講師及本會講師數名出席
一會場 東京市神田區錦町三丁目十一番地本會本部
一講習料 一科目金壹圓五十錢、二科目以上兼修者は一科目毎に金壹圓を增す
一講習時間 自午前七時至正午十二時

明治四十二年六月
東京市神田區錦町三丁目十一番地
日本音樂協會

女(その五)

名和昆蟲研究所長 名和靖君
少年世界記者 木村小舟君 合著
織田一磨君圖案

新式昆蟲標本製作法

全一冊

春は來たれり！山笑ひ水亦笑ふ、蟄蟲新たに戸を啓きて嫩草の野、菜花の園、蜂蝶千百日毎に舞踏す、正に之人生の和樂苑、自然の秘密藏たり、此時に當り昆蟲裝成の一書生る、說は斯道の泰斗として、三十餘年を其研究に委ねたる老手、筆は當代少年文學界此種の記述に獨特の妙技ある人、書中採集の秘訣を說き、特別製作式を記せる如き、蓋し讀者を利する事多大ならん、加ふるに二百數十種の實物寫眞は、之を昆蟲圖譜として見るも愉快なるべし、あゝ錦上に花を添へ、更に蝶を舞はすとは、夫れ此書の謂か。

洋裝四六判紙數二五〇頁
口繪實物寫眞百數十種
挿畫木版百十數個
正價金四十錢
郵稅六錢

東京日本橋本町三丁目　**博文館**　振替口座東京二四〇番

野外の趣味

花は散つて青葉は茂つた、野外に於ける學問と娛樂とは、今が最適の時機である、植物界を見渡しても、動物界を通覽しても、活潑に生々して居る、さう云ふ野外に出て、自然の研究を試みたり、身體の修練をするに便利を與へやうとして現はれたのが、即ち此一卷である、されば日本國の少年諸君は、何人も之を備へなければならぬ

▲郊外の趣味▲自然の教訓▲野外植物▲野外動物▲鑛物界▲採集日記以下數項……さゝなみ作
◎お伽詩篇 加藤清正……武内桂舟畫
◎懸賞 和歌俳句……少年諸君
▲野外と體育▲ベースボール▲新奇なる釣魚▲寫生畫一斑▲野外遊戲十種以下數項……

全一冊洋裝菊判
紙數百三十六頁
口繪美麗豐富
正價金十錢
郵稅一錢五厘



博文館

農學博士 稲垣乙丙君閲
工藤齋君著

新編 家庭の科學

抑も婦人の本務たる日常家事に於ける百般の事項は悉く科學の理に支配せられざるはなし然るに本邦婦人は概してその智識に乏しきが爲め往々妄説を信じ鑑別を過り識らず知らずの間に不經濟、不衞生の動作をなすことあるは痛歎に堪へざる所なり著者工藤齋君は高等女學校に敎鞭を執るの傍ら理科と家事科とに連絡を付し兩者共通の資料を採て本邦の主婦たる人にその智識を授け以て婦人の本務を完全圓滿に盡さしめんことを欲したるもの即ち本書なり

全一冊洋裝菊判
美本紙數四百四十二頁
正價金八十五錢
郵稅十錢

井上繁次郎君著

室内装飾 家具圖說

一名 製具者指針

本書は室内家具の内、置棚、茶簞笥、机、食卓、花臺、煙草盆、其他飾り彫刻の圖案二百二十餘圖に、最も簡單平易に、其沿革用途材料製作順序等の説明を附し、印刷製本亦美なれば、之を購ひ座敷の装飾に充てんとするも、本書を參考とし家具撰擇の指針とするも、叉指物の職業に從事する人は意匠考案の助けとするも何れの目的に於ても、頗る有益の好參考書である

全一冊

洋装菊倍判
總クロース製美本
紙數百十枚
正價壹圓四拾錢
郵稅拾二錢

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇番

女(その八)

と感拜せざる可からざることなれど、あのような形式のみに由れる矯正法により女生が左右せらるゝようならば、全然女子教育の何の蚊のといふ丈けが野暮のことと存候。と共にさながら封建の面影を見る如きかゝる訓戒を出さるゝ迄になり居れる學生あるとは何といふ情けなき事に候ぞ餘り馬鹿げて、口にするのも阿呆らしく候。男子と女子とはもとより思想に於ても異なれど、かゝる時、これに對して愧ぢざる行爲と氣慨を有する女子の少しは出てもよさ相なものと傍から獨り氣をもみ居り候。



いつの間にか青物市場多町を歩み居り候ひき、すでに走りの茄子や胡瓜は紺や納戸の法被が引張りッこ、「三ッーよ〳〵」「むんな〳〵」と掛聲勇ましく、こゝには不景氣も知らぬにやと思はるゝ斗りの、陽氣さに

御座候、しかし乍ら力づくと金の多寡の取引に候へば、破れたる印半纏に危氣なる草鞋はきたる老人などは何時もつきのけられ、かきわけられ、見る目いたはしきものに候。ことに日本人は此の徳義心に缺け居ること、此一事を以ても推察し得可きものに候。

△日本橋、京橋。

東京に於ける東京は實に日本橋と京橋に候。一貫せる電鐵路の兩側、すべてこれ鏡の如き土藏作りの老舗名堂、數ふるに指を屈する暇なき程に候。

明けては本町の初日出、暮れてはまばゆき夜の銀座、そが中間にかゝれる橋梁は、毎に遠雷の響を絶たず候。

而して此間、三歳の童子もなほよく知れる、三越、白木、松屋吳服店は店頭の飾　窓に由て紹介せられ、實質に於て世界に識られ、あらゆる都人士の衣裳、伊達の引幕化粧廻し等に由てその美を賞　歎　いたされ居り候。

時正に新綠の候、何れも夏衣賣出しの景氣どうはあらゆる文字ある所にすでに配布せられ終り候。機敏なる手と、甘き誘惑の文字は、かくして男子の心膽を寒からしめ、女子の虚榮心を進歩せしめ居るものに候。歎ず可きか慶す可きかわれこれをしらねど、ともかくも「流行」といふ動物は快活なる、不可思議なる力を有し居るものとつく／＼感じ申候。これに就て現今一般の女の頭腦に、上品、意氣、さび、等、一種色彩の觀念が標準を有ち得たるより覺え候はいかに？。今迄のように、流行といへば猫も杓子もこれにならふといふにあらずして、多少自分自身を自然に經驗意識してこれに適當なる色彩を用ふるようになりしと思はるゝはたしかに人間智識の一進歩と存候。

なほ今年の流行に就て斯道の店員よりきゝ得たる節なきに候はねど、かゝる事に縁遠きわれ／＼が生じいなること並べるは口はゞたき事と恥かゝぬ先にと眞中を歩み申候。

現今雜誌界の牛耳をとる博文館は、また當區にて特筆す可き書肆と存候。其名文は、宇宙あらゆるものゝ

名を領し曰く太陽、曰く何世界、何々倶樂部、太平洋といふ工合に、大き相なものは皆當館の人により編纂せられ居候。

目下頭腦發奮の好期、各處より舞ひ込む原稿は机上に積んで山の如しとか聞き及ぶ、來む七月の夏期休暇には、兄上より、姉君より、これ等の文字が求めたまふ御人々の目にいかに映ずることならんと存候。

此處を出でゝ久松町の明治座に向ひ候。其の翌日は木挽町の歌舞伎座を見物し比較せんと存せしにいまだ開場の運びにいたらず、止むなく明治座丈けをのぞき候。狂言は此問題に沒交渉、かつはわれ〳〵より皆様の方新聞にてなど御存じの事なれば再筆せず。只一言、その技術に就て生じたる點を申せば。

一體當座の空氣はどことなく清新の點が少なからず候。目下上京の仁左衛門にせよ、また東京の左團次にせよ、舊劇のうちにも多少囚へられぬよう〳〵と努むる所みどりの色は深からねど若葉の梢愛す可きものと存じ候。そのあまりに細心なる注意より小刀細工との譏りをもうけ居れど、こは畢竟形式の上を見てのみの他よりの一種の嫉み、眞に鷹揚なるものは針の穴にも注意苦心をいたすものとかや。此の點に於て仁左衛門などはたしかに梨園の逸品と存候。かれにしてもし駄駄こねのいやみなくば、天晴れの男なる可きに上方氣質の面にくきことを裏面に於てなす由をきけば、人物はとても左團次などに及ばざる可きや。

打ち出しが十一時、まさか夜半にのそ〳〵歩くわけにも參らねばその日はそれにて歸宅いたし候、明日は更に芝區より轉じて山の手にと思ひ設け居り候。

深川中村高等女學校開校式

同校は土地の豪商中村郁次郎氏が一家の私產を抛ちて創立せしものにして校長は多年女子教育に熱心なる戸野みち子女史なり、開校式を去月十六日新築の校舍に於て執行せしが大隈伯の演說、田川大吉郎氏の祝辭等ありて頗る盛式なりし猶同校は專ら商家の内助者を養成するの目的にて務めて實際的の教育を施す方針なりと目下在學生は約百名なりと。



食卓日記

宿の妻

主婦のつとめは最も親切に美味に且つ經濟的に調理を致して一家の快樂を求めねばなりませぬ、それには第一材料の選擇が甚だ必要でどうかして、美しい美味しい料理をいたし度いものと常に心がけ經驗ある方に伺ひました事など手帳にひかへて追々に實行致して參ります自から實驗の二三を左に申し述べませう。

△白米　は俗に申す芽が小さくて米の全部透明で光澤の有るのは上等で、芽大きく全體が黄ばみ薄白く曇り光澤のないのは下等の品で伊勢の小粒米と申すのは御飯には上等で單に米を求めるには粒の揃つたのを選ぶ必要が御座います。

△新米　秋季の新米は胃を害します故十一月頃には新米二割に古米八割十二月には三割一月は四割と云ふ樣に追々に增加し四月頃まで古米を交せると宜しう御座います。

△米磨方　は單に叮嚀に手早く磨ぐ事が必要で麥など入れる時は麥は別に一入よくとぎます。

△炊き方　炊く水は必ず汲み置きの水を用ゐる樣に心掛けまして私は決して磨ぎ立ては用ゐませぬ必ず一夜位は水に漬けて置き炊きますと決してコワイ御飯は出來ず誠にフックリと宜しいのが炊けます。
そして釜の蓋の上には重い石を置く事に致して居ります。

△薪　は能く枯れた堅木を用ゐ、又炭炊に致します時には土釜が宜しい樣で御座います。

△砂糖　私共では誠にお砂糖を氣に致す方で十分に注意もし實驗も致しましたまづ見た處では色白く光澤が在つてかたまりなく例へあつても直に碎ける而して重量は輕いのが上等で御座います。

△山葵　はすりおろしましたゞけでもチト〳〵とねばり氣があつて異香でなければ上等ではありません。

△茄子　は蔕に刺の多いのは種子の多い印ださうでトゲの少ないものを選びます。

△白玉粉　は寒晒し粉で京都の浮粉と申すのが有名で且最上等で御座います。

△鹽水　野菜ものはすべて鹽水で洗ひ或は漬けて置きますと殺蟲の功が御座います最も日用必要な事であります。

△日曜日

春すぎて今ぞ初めの夏衣かろき袂を浦風になびかせつゝシットリとぬれた波打際へ歩みを移した。油を流したやうな靜けさ見渡す限り萬頃一碧。日は朗かに風も和ぎ長砂長汀洸々たる初夏の海原。遙かかなたに霞をあざむく眞帆片帆。のぞいた横に差し出た磯の松。やがて白帆の影はゆるやかにみどりの内に入つた。夢から覺めたやうにハッキリと近く友ケ島が浮ぶ。遠く海盤に一抹したやうな淡路島心の底まですつきりと洗はれた樣な氣がする運動をして歸宅の後活き〳〵として夕食の支度に取りかゝる。

けふの獻立は

（一）鯛の玉子酢。
　付ワサビ

（二）ロールキャベツ。

（三）ほうぼうの味噌汁。

（一）は鯛を三枚におろし小骨を去り適宜に庖刀し甘酢（即ち酢に少々白砂糖を交せる）に一時間程漬けて置き一方には鍋に味醂、酢砂糖少々鹽を煮立て葛粉を少量とき入れドロ〳〵になし置く玉子一個を湯出て黄味ばかりを細々になし置き鯛肉を皿に盛り其上にドロ〳〵になしたるをかけ其上に今の玉子の黄味の細々をかけワサビを添へて出す。

（二）はキャベツをサッと湯がき水を切つて置く牛肉を細々にたゝき食パンの細々になしたるもの少少入れ交せ玉子を一個入れよくかきませ鹽胡椒で味を付けキャベツにくるみ濃いスープで煮る。

（三）は先づほうぼうを三枚におろし皮をも去り氣長に摺り鉢に入れて摺ります。別に白味噌をすり水で割り並の味噌汁にこしらへ魚の中へソロ〳〵と小口から摺りながら入れる而してあまり强から

ぬ火にかけ絶えずかきまはし煮立ちてより豆腐を短冊に切り實として入れる。

次は茶菓子として左の二種を作る。

（一）オンレジジエリー。ジャムケーキ（イチゴ）

（一）はまづミカンの汁をしぼり置きゼラチンを水に冷し置き而してから水より鍋に入れ煮立てる全部かたまりなくとけてから今のミカンの汁を入れ白砂糖を入れ再び煮立せ「裏ごし」にかける、次にゼリー形に入れて水に冷す。

（二）は玉子を十二分に泡立て「ベーキングパウダー」即ち燒粉を適宜に入れ白砂糖を入れ（裏ごしせしもの）次にメリケン粉をフルイにかけたるをソロ〳〵とだますやうに交せながら入れる全體に交ざりし時かげんを見てドロ〳〵より少しかためになし「フライパン」にはラード油を引き（弱火にして）適宜の大さに燒く裏表を狐色になるやう燒き終りて一枚の上にヂャムを適宜にのばし一枚で蓋をなし上と下と揃はぬ時は庖刀にてハート形なり何なりに工夫するもよろし。

△月　曜日

今日は友人三人を夕食に招待するからと良人より命令朝から献立の心配まわ漸く左の樣な考がつく。

（一）鰈の刺身　被　胡瓜のセン。。　防風　ワサビ

（二）鯵の山吹むし

（三）ハムエッグ　パセリー

（四）魴魚の照燒　付　茶巾　ソラ豆

（五）吸もの　蒲鉾　松茸　吸口　柚子　三ツ葉

以上酒の部

（一）茶碗むし　牛肉　ウド　三葉

（二）赤鯛の櫻ずし　香のもの

以上御飯

（一）鰈を三枚におろし刺身となしワサビおろしと庖丁を暖めてワサビをおろし細々に刻み付ける。

胡瓜のセンと防風を委よく配置して出す。

(二) 鮪の切身を刺身の大さで少し厚く二分五厘位に庖刀し布巾の上にのせて蒸しにかける。而して皿に盛り、酢、味醂、醤油を調和してかけて置き、別に玉子を湯出白と黄と別々に細々にきざみてパラ〱と皿の上よりふりかけワサビを添へて出す誠に優美なる料理なり。

(三) ハムを求め適宜に一度湯出る(大切りのまゝ)而してから二分の厚に手際よく切り鹽胡椒を少々振りバターにて痛め皿を一寸暖めてから盛り玉子を湯出桔梗花の形に庖刀し付け合し出す、パセリーの新きを洗ひ付け合すも宜し、ソース添へて出す、ハムの湯出方は一斤を凡そ十五分間位にて宜し。

(四) 魴魚の切身を初め素焼になし、味醂、醤油、砂糖の煮つめたるを作り付けては焼き〱七度程くりかへし十分美しきを見て皿に盛る(あまり強火は不可)照焼の火かげんは甚だ注意を要す。

茶巾そら豆は、そら豆を湯出裏ごしにかけ白砂糖をもフルイにかけ鹽少々を交せ霊豆とよくねり合せ味をみて目の荒いさらし木綿の布にて栗の形に作り付合す(布に包みてひねれば自然と出來得べし)

(五) 濃きだし汁を作り味をつけ置き「かんづめ」の松茸を洗ひ味醂、醤油にて煮る三ッ葉は一寸湯に通し蒲鉾は其まゝ椀に盛り汁をそゝぎて出す吸口には柚子を用ふ。

御飯の部

(一) 牛肉ロースを適宜に切り味醂、醤油、砂糖少々にて煮る、ウドはほんの少し薄味をつける位に止め三葉は一寸湯に通し置く一人前五六錢位も鰹節を用ゐる心にて十分濃くだし汁を作り味をつけ玉子をとき蒸し茶碗に入れて出す。

(二) 赤鯛を三枚におろし適宜に切り(皮は去らず)酢に少々白砂糖を加味せしものへ四五時間漬けておく、一方に飯を炊き一升に付酢一合半强の割合

で酢を交せさましてから普通の「にぎりずし」ににぎる、ワサビを挾んで酢漬の鯛をのせる。

無事に御飯もすむ。パインアップルを切り皿に盛つて進める。

△火曜日

今日は公用で早朝より大阪へ御出張なので車中の御辨當を作らねばならぬかねて用意しておいたので無事に左の如くに心配した。

（一）サンドウイッチ、（二）伊勢ゑびフライ　種物　エビ　玉子

（三）海苔卷酢　種物　椎茸　干瓢

（一）はハムを湯出てゝ出來得る限り薄くし大きく紙のやうに庖刀し、食パン一分位の厚さに切り先づバターをぬり西洋からしをはさみ其れからハムをはさみ（兩方より今の通りのパンをもつて）一寸押をして置く而して巾八分長一寸に三分位に切り箱に入れる。

（二）伊勢ゑびを湯出からを去り肉のみを取り尾はつけておく方宜し而してそれを縦に二ッに切り。メリケン粉にくるみ玉子の交せし中に入れ次はパン粉にくるみてよくおちつけてからバターでフライする。

（三）ゑびの肉をミンチになし味醂、醤油にて煮上げ、玉子は鹽砂糖を交せ煮上げおく。干瓢を水に冷し鹽でもみ柔になりたる時湯煮をなし味醂醤油砂糖で煮る椎茸も水洗ひして後細く切り同樣に煮る淺草海苔を靑くなるまで火取り簾の手前にのせ飯を二三分の厚さに平に布き心に干瓢を入れ次に椎茸を入れ卷き兩耳を少しづゝ切り落し適宜に切る玉子、エビも同樣なり。

△水曜日

夜に入つてから御歸宅昨夜は有名な蘆邊をどりを見たとて大そうな御機嫌、いろ〳〵のお土產を御出しになる御いそがしい中をよくマアこんなに……と私もニコ〳〵する、妹等二人までも御心づけ下さつた、喜

人形を揃ひに。……富士子、五十枝もどんなにとび立って喜ぶ事だらう。

△木曜日

お土産の御禮にと云ふわけではないけれども今日は少し珍料理を作らうと左の如く考へる。

(一) パーミセリー、牛肉入
(二) 赤鯛細づくり(三杯酢)(白髪ウド)
(三) 泡雪むしいさき
(四) 玉子みどり焼 ピワくわゐ
(五) 田毎の月。
(六) アップルダンプリング
(七) プランマンジ(寄もの)

(一) は西洋ウドンで御座います能く湯出て水を切つておく一方に牛肉を大切のまゝ湯出スープを取る味をかげんし肉も小さく切り玉子ぎをきざみ入れ鹽胡椒を入れ終りに今の湯出たパーミセリーを入れる、皿に盛り熱き中出す。

(二) 鯛を三枚におろし細づくりになし甘酢に十五分間漬け三杯酢にて食す。

(三) はいさきを三枚におろし適宜の大さに切りサッと鹽をふりおく玉子の白味だけよく泡立てゝ御皿にしても落ちぬ位になし魚の鹽を洗ひ落し其上に白味を匙にてのせ蒸しにかける、皿に盛りソースを添へて出す。

(四) 玉子を泡立てゝ少々レモンを加へ鹽、砂糖にて味を付け玉子焼鍋に入れ、ゴマ油を引き弱火にて焼く厚さは五分位狐色に焼けたれば小口よりソロソロと巻く而してよくさましたる後六分位の厚さに切り。浅草海苔を靑く火取り五分の巾に切り今の玉子を巻く合せ目は一寸玉子を付け止める。

ピワクワヰはまづクワヰをむき其まゝ湯がく而して後「口なし」を以て少し黄に色をつけ鹽砂糖にて味をつけ煮る冷めてよりくわゐの真中を一寸楊子で突き穴を作り、浅草海苔を醤油、砂糖にて煮たるものを手際よくつめる丁度びわと見まごう如し。(以上口取もの)

(五) は普通の濃きダシ汁を作り加味し薄あんとなす即ち葛を水にてとき入れるなり。一方には豆腐

を眞四角に切り其中央に玉子の大さ位に穴を作り其中に玉子の黄味のみを落し入れ薄あんの中に入れ丁度半熟となる樣に暖め椀に盛りあんをかけワサビを添へて出すなり。

(六) はリンゴを能く洗ひ庖刀にて眞を手際よくゑぐり拔き其中にバターを少々つめ込み次に白砂糖をつめ天火にはバターを引き天火に入れ十五分間にて出來上る全體に柔になりしぼみバターと砂糖にて自然の美味と成り誠に好き品なり。(天火は石油のあきかんでたやすく出來るものにて上と下に火を入れ中央に棚を作りおき引出しを二個も作らせなば價も最安直に出來得るものなり。)

(七) はゼラチンを水に冷て火にかけトロ〳〵になし置き白砂糖を加へる玉子は白味黄味別に泡立て兩方共ゼラチンの中に入れ裏ごしにかけレモンを少々加ふ而してゼリー形に入れ水に冷す、拔く時は一寸湯に差入れると宜し。ゼリー形なき時には器に作りおきビスケツト用の花形にて打拔くもよし。

△木曜日

けさ起ると、薄みどりの涼し絹に衣更した若楓、露の白玉がことさら寶石のやうにすが〳〵しく見える。

扨てけふの獻立は。

(一) 日の出玉子 ソース付
(二) 的こみ瓜 三杯酢
(三) 湯波卷 銀杏 木クラゲ 蕗根 百合根
(四) 豆腐のフライ リンゴ
(五) 玉子豆腐 あんかけ
(六) ギセー豆腐
(七) 栗の三杯酢

(一) は玉子を湯出て置き牛肉をミンチになし葛粉を少々入れ胡椒、鹽を入れ玉子を交せて、是に加へよく練る而してそれを平たくなし玉子の湯出たるを卷きてバターにてフライするソースを添へパセリーを付けて皿に盛り暖き中に食す。

(二) 胡瓜の種子と皮を去り、牛肉をミンチになし

塩胡椒を入れたるを胡瓜の中につめこみ蒸しにかけ五分位に切り三杯酢をかけて出す誠にアッサリとした酒のさかな。(魚肉にて作るもなほ宜し)

(三) 最上等の湯葉を五六枚一寸湯に通し置く。銀杏、木クラゲ、蓮根、百合根、(煮るマデの順序は前號に委しく記載しあればこゝに略す)を煮上げ今の湯波に叮嚀に包む一方には普通のダシ汁に薄あんを引きて椀にもりたる湯波の上よりかけてワサビを添え出す。

(四) 豆腐を適宜に切り葛粉にマブしてバターにてフライするリンゴは皮を去り適宜に切り、玉子を泡立てメリケン粉砂糖少々を入れよく和し其中へリンゴを入れバターにてフライする。

(五) 玉子を泡立て砂糖醤油、ダシ汁少々を入れむし茶碗に入れて蒸す(むしすぎるとスが立つ)それを適宜に切りて椀に盛り(三)の時の薄あんをかけて出す。

(六) は豆腐をザッと湯煮し布巾にてしぼり別の鍋に醤油と味醂、砂糖を煮つめ豆腐を煮る。冷してより玉子を泡立て入れよく交せゴマ油を引きある玉子やきにて焼く。割合は豆腐一丁に玉子四五個。

(七) 梨をむき刺身となし水にはなちおき三杯酢を作り皿に盛りかけて出す生姜を付け合す。

泡雪菓子

玉子をよく〳〵泡立て砂糖を入れ牛乳を少しづゝ入れたるを蒸したるものに、牛乳と玉子の黄味のみを湯煎にしたるをかけて出す。

○女子音樂園落成式　麹町區下二番町に在りし女子音樂園は、今般豐多摩郡下澁谷に移轉新築せしにつき、五月六日午後二時より落成式を擧行せり、園主松山澄子刀自の開會の辭に次で加藤弘之男の祝辭(代讀)、坪井、三宅、兩博士及び青木文造氏の演説あり、其よりのピアノ、ヴアイオリン、合唱、箏、等生徒の演奏、數番あり、一同に茶菓を供し午後七時頃散會せり、當日は來會者には棚橋、下田、村井、比志島、小松原文相夫人、青木子爵夫人等の同園顧問諸氏を始めとし、京極、眞木兩子爵夫人三條公、毛利公、酒井伯等の令嬢方等百餘名の出席者ありて頗る盛會なりき。



家庭笑話

◎電車內の失策

若い女が二人で電車に乘ると甚く込んで居て、ぶら下る皮が無い。仕方なしに一人がつれの手をつかまへてやつと轉ばない丈になつたはよかつたが、暫時して氣が注いて見ると、これはしたり、つれと思ふたのは大間違。つかまへたのは男の手であつた。大あわてにあわてゝ、「おや、間違つてた！」と云ふと、男はすましたもの、又片方の手を出して「これがいけなきや此方にもありますよ。」

◎年齢の使ひ分

「花ちやん、お前いくつなの？」と小母さんがきくと、花ちやんは眞面目な顔して、「あたいおうちに居る時は五つなの、學校に上ると六つ、そしてね、汽車に乘る時は四つになるの」。「おや、お前は一人でいくつもお年持つてるのね」。「だつて母ちやんが何時もさう云つてよ」。

◎醜い奥樣の迷惑

ある處で御馳走のあとで餘興が初まつた。それは各々何でも面白い顔をするので、一番醜い顔をした人に御褒美が出る筈であつた。一同種々と工夫して顔をゆがめた。と、やがて審判官は隅の方に立つてた女の側へ行つて、「奥さん、どうもあなたが一番お上手のやうです、失禮ですがこれを」、と紙包を出しかけると、奥樣は吃驚して、「おや〳〵、私何も致しませんのよ。」

◎母親の眞似

母親は目を廻す程忙がしいのに、子供は座敷であまり騒ぎ立てるのでたまらなくなつて、臺所からどたばたかけ出して、「みいちやん、お前何だつてそんなに騒ぐの、御母さんがのぼせ上つちまうぢやないか、ちつと靜におしよ、御覧、眞坊はあんなに大人しくしてるぢやないか」と叱ると、「あら母樣、わたし唯今まゝごとしてるの、そしてね、眞ちやんはお父さんで、あたいがお母さんなの、だからみいちやん今母樣の眞似してるのよ。」

◎猫の尻毛

玄關の前で何だかどたばた音がするので、お祖母さんがのぞいて見ると、武坊が一生懸命猫の尻尾を引張つて居る。「これ〳〵そんなに惡戯するものぢやありません、猫が痛がつてさわいでるぢやないか」。と武坊は大に不滿で、「お祖母ちやん、坊はたゞじつとつかまへてるの、猫がひとりで引ばるからいけない」。

墨の撰び方

鎌倉書法會　星野天知

一月の誌上で筆の事を話したら諸所から問合せだの、禮狀だの、筆を譲つて呉れなどゝいふ申込みが夥しくて一時は混雜したが、それ程人々が興味と實益とを得られたかと思へば喜ばしい事と思つた。

そこで此度は筆と同様に一向人々の考へない墨の事を話さうと思ふ。

畫や書の先生でも墨の事は無頓着なのが多い、唯唐墨が良いなど、人々の口眞似をして實は唐墨の事すら不穿鑿なのがある、中には又六かしく計り議論する人がある、素人は又どういふのが良いのか分らぬから、黒く光つたり彩色が綺麗だつたり、何か香氣でもあれば良い墨だ位に標準を立てゝ居る、そこで商賣人は忽ち其弱點を知つて、何でも外形の装飾を立派にして墨の質にはかまはぬといふ傾きを生じて來る、墨の質を安物にして不相當な金銀の彩色をして、齒磨きと同様麝香か龍腦を入れた箱に仕舞つて置いて匂はせる、これがかういふ買手には商賣堅氣の自然に發達する手段であらうが、書畫が少し分つて來ると筆と墨の惡いのが氣になつて來る、氣に成つて來れば書畫ともに其眼が進んで來たので、書畫の優美な細緻技能も分る人は、其氣韻や形狀に氣が付くから筆の良否や（其色彩の重なる）墨色に氣が着くのは當然だ。鳥渡した手紙でも文字の氣韻に伴ふものは墨色の氣韻である、それに良い假名書きの筆などは惡い墨では切れる事が早いから困る、普通の筆でも惡墨は却つて不經濟である。

▲唐墨は良いか

人々は口癖に唐墨は良いといふが、それは昔の話である、支那の宋、元、明の時代までは大層良い墨が出來たが、其は改良の結果で成功したので、其改良しないまゝ前の製法が日本へ傳はつて、これは又改良しないまゝだから和墨は劣つて居たので、其故唐墨と言つて昔か

ら賞美したものである、然るに支那は清の代に成つて追々柔い脆い質の安紙が出來て來たので墨も亦相應な安物が出來るように成つた、これは清朝に成つて書畫の道が衰へた故紙も墨も人々が構はなく成つた結果で、安い原料の墨が流行して製法が全然惡く成つた、第一に其原料たる油煙の惡い計りではない肝心な牛膠の代りに魚膠を用ゐるように成つたのが墨の保存力を失つた製法の大打擊であると分曉識者は言つて居る、それ故今日輸入する支那の墨は昔と同じように唐墨と言つて賞すべきものではない、鳥渡使つて見ると良いようだが其が商賣的で、安い代りに種々惡い所がある。

▲古墨は良いか

墨を製するには油煙と阿膠を土臺とするが、其阿膠は如何良いのでも粘るのが本質だから之れは年月を經て自然膠氣の緩むを待つ他はない、然るに早く膠氣の緩むような膠では質が惡いのだから、支那の書聖と仰ぐ衛夫人などは十年以上經て石のように堅い墨を用ゐると言つて居る、如斯わけで人々が古墨を尊ぶ風に成つて來たのである、然るに今日ではそんな良膠と油煙とで拵らえた明以前の古墨は最早古過ぎて二三百年經た物は膠の質を失つて用ゐるに足りない、一口に言へば今日では良い古墨は無い筈である、徒らに膠質の惡い清時代の古墨を間違つて賞揚するのは人の口眞似する人で其考が怪しい。

唐墨も古墨も最早今日は良いのではないといふ事を知つた谷文晁などは、唐墨は剝安いと言つて惡いながらも和墨を工夫して用ゐた、書法家でも丹輪や盤根子は唐墨を避けたといふ事である、これは魚の膠は少しの水氣にも變色するから、書いた時は黒くても乾くと白ばくれる、表裝しても色が變るといふ事を知て居たのである。

今の支那墨で書いて置くと看板などは三四年で段々剝落ちてしまう、一年も立ては色が變つて仕舞ふ。

▲香氣ある墨は良いか

良い墨は墨香といつて一種の良い匂ひがある、閑窓の許で靜かに墨を磨る時馥郁と良い墨香が馨る時は長閑な良い心持がするものである、併し麝香や龍腦などで傍から附けた匂ではない、墨香の高尙な馨を發する墨は良い墨でなければ發しない、古人も言つて居る「沈香を燃すより花の匂の方が良い、花の匂よりも茶の匂が良、茶の匂よりも墨香の方が良いとある。

▲どんな色が良い墨か

漆黑い漆のやうな色で變色しないのが一番良いので、靑味を含んだのが蒼潤といつて其次である、少しでも赤味があるのは惡いので、白ばくれた色は最も惡いのである、良い墨で書いたものは幾年經つても書き立てのやうである、先づ漆の代用として用ゐ始めたのだから、其色を標準とすれば分る。

▲惡い墨はどんなのか

今日市中で賣つて居る墨で見れば分る、多年直段の競爭で愕く計りに安いが、先づ五十錢以下の墨は甚しい惡兆が知れる、質が粗く色が赤味やら白味がある、磨ると泡が出る、滓が溜まり易い、筆が固まり易い、磨つても良い匂がない、惡い膠を多く使ふからゴリ〳〵と長く磨らねば使へない、色が變りやすい、甚しいのは礫などが混じて居る、淡墨で書く時延が惡くて色が不同だらけである、一體に色合が卑しい。

▲どこの墨が良いか

昔時後白川法皇の時から有名に成つて尊圓親王を賞美せられた紀州製の藤代墨といふのがある、其紀州の人で鈴木梅仙といふ老翁は三十餘年來明時代の良墨を復興しようと苦心したので、今日の墨を用ゐて居ては書も畫も四五百年の後には皆消て仕舞ふ、實に明治の美術は殘らぬ、却て探幽や雪舟や黃檗派の明僧の畫が殘つて遙か後世の書畫が湮滅するといふ美術上の失點を防がねば成らぬとて終に製法を發見して雅邦等の畫伯に知られた、吾が書法會でも習ひ用の墨（十五錢か廿

五錢の）と歌書きの用墨（五十錢以上の）とを作つて貰つたので習ふ人は大仕合せをして居る、近頃は追々墨といふ事に注意する人があると見えて譲つてくれと鎌倉の吾が書法會まで頼んでくる人が多く成つた。

▲どうして墨を試めすか

別々の硯へ其試す墨を磨つて、これを漆ぬりの板へ列べて着て見るに、其乾いた跡を見競べれば一番良いのは漆のように黒い、併し唯黒く光るも惡光りのあるものは膠の色だから強ち光る斗りが良いといふものではない、墨の光りは品位の良いものである。

奢りもの

私の知人に某會社の勤人が御座います、御子様もなく奥様と二人暮しですが奥様は未だお若くて其美しい事と云つたら實に類のない程です併し其セータクなる事も又甚だしいのです

それも巨萬の富豪ならば知らず失禮ながら月給取の奥様には分に過ぎは仕舞かと存ぜられます、女中は三人居て一人は朝おフロを沸し一人は御飯たき、一人は掃除と云ふ様に各々自分仕事はきまつて居ります、旦那様は七時半頃御出勤八時半頃湯が沸きますと奥様は二時間も掛つて御召になり髪結が參りまして髷に御上げになりますがお氣に入らぬと三四度も結ひ返へしますそれから御念の入つた御化粧もすみまして今度は御召替へになります紋縮緬の綿入に縞御召の下着友禪縮緬の長襦袢、繻珍の帶、甲斐絹の足袋、指にはいつもダイヤモンド、左右の手にキラ〳〵して居ります十二時頃御化粧全く終りて後女中二人を連れて村中を散歩します女中二人は奥様を中にならびて奥様はいと滿足さうに御歩きなさる姿は全く以て……雨が降らうが風が吹かうが一日もかゝしません午後旦那様御歸へり時分になると奥様はチヤンと着物を着替へます之も旦那様への御勤めかと思へば可笑くも思はれます。

旦那様は當地に御勤めの身なのに拘はらず奥様は此の様な田舎は厭と云ふて東京に御歸りになり女中と三人暮しにて芝居や遊散に御出掛け流行と云へば何一つ見のがす事なく三越、白木へ註文しては其中の上品のみを買求め古き物はドシ〳〵古着屋へ御下げになりて、新調を喜び給ふ。

たま〳〵旦那様は東京に御歸りになると奥様は大急ぎにて木綿着物と取り替るさうです旦那様の見ぬ處では三十圓の下駄など用ひて毎日遊び暮して居られるさうです。

時に奥様の賄料丈が月々百五十圓化粧身の廻りは此外ださうです（大月驛近江ちか）

當世富豪の家庭

ゆふがほ

しと〳〵と軒端をめぐる玉水の音にいぎたない春の夢破られる、もう勝手の方では起き出たらしく寐ぼけた様な御飯炊の杉の聲と抱車夫の平吉の胴間聲とがもつれて遠くに聞える、今から眠る間もあるまいと暫く床の中でもじ〳〵して居ると並んで寐て居た妹の昭子が「姉様おめざめになつてゝ？」といふ

「え、今日も雨よつまらないわね」

「あの昨夜父様からお話の有つた今度ゐらつしやるといふ母様のことね、どうお思ひになつて？」

「どうつて……左様ねえ餘り若すぎるわ、兄様と同じ年だなんて……」

「私とだつてたつた三つちがひよ、迚も母様とは思はれやしない……」

「これからはまた家内が賑やかになるから嬉しいわ、それに大變綺麗なハイカラな方だつてね、お年も若い方が物が解つて却つて私達には好いかも知れないし」

「何ぼ何でも五十七と二十二ぢやア……ホヽヽ父様もよつぽどおめでたいわ」

「だつて田中さんよりや、いくらかましよ」こんな會話が暫くの間交はされてから二人とも床をはなれる、身じまひが済むと亡母様の靈前へお水を供へたりお花を替へたり、わけても此の子達は弱いから心にかゝるとおつしやるのを私が屹度立派に育てゝお目にかけますと亡母様御臨終の際に誓つた十歳になる双子の妹藤子と百合子とを學校へ出すまでの世話焼やら、角帽姿の兄様も、まあ子供の様な時々は駄々をおこねになるのをすかしたり父様のお召替も女中任せにはして置けず朝な夕なの一しきりは私の身體も隨分あちこち忙しい。

それが一まづ片付くと今日は金曜日だから静には家内中のシーツと枕の敷布、肌着などの洗濯を、杉には食器類を磨く様に云ひ付けて置いて私は自分の派手な絽縮緬の單衣の仕立にかゝる。

昭子も側で長襦袢の衿をかけ替へながら花畑の矢車草が大きくなつたの雨があがつて嬉しいのとつまらない話ながらまたいつとなく新らしく私達の母となる可き人の上に移つてしまつた。

「それで姉樣！　今は山村男爵の御宅にゐらつしやるのですつて？」

「山村さんの御孃さんの家庭教師なのでせう、そして今度山村家の御養女分でゐらつしやるのだつて父樣がおつしやつたわ」

「あゝもう直に繼ッ子になるのねつまらないわ」と昭子がしよげる。

　これで話が一寸途切れてお互にセッセと手を働かしてると小間使の雪が後の襖を靜かに明けて柳谷樣の奥樣がお越し遊ばしましたと云ふ、まあ番町の伯母樣、うれしいことゝ立ち上つて御迎へに出るまもあらせず今日は珍しく根の低いおまげで小巾やら針箱やら一ぱい取り散らけた中へお通りになる、

まあ伯母樣、こゝはあんまりで御座いますから座敷の方へと申上げるのを

好う御座んすよ此室の方が却つて勝手なのですから

とおつしやるから手早くあたりを片付けて御あいさつする。

亡母樣の姉樣で眼元からお口元から、お聲までが私には亡き母樣を想ひ出されてなつかしい。銀のべの細い煙管でお煙草を靜かにめし上りながら。

「今日は父樣に少しお話が有つて來たのですけれどお留守だつてね」

「は、生憎……社の用向で横濱まで行くとおつしやいまして、少し早めにおでかけで御座いましたのそれは左樣と伯母樣もうあの事御存じでゐらつしやいますのでせう？」

「あの事とは……？　あゝお母さんの事？　實は今日もその御相談に來たのですよあなた方も新しいお母さんが出來てうれしいでせう？」

「私達より父樣の方が大よろこびなんで御座いますよそれはもう大變……」と昭子が笑ひながら口をはさむ。

それから昨日三越から出來て來た兩人のコントラスト織の丸帶をおめにかけたり今度自動車をこしらへ樣かと父樣が昨夜おつしやつた事やらいろ〳〵かつぎ出してお話申上げる。

御晝飯でもめし上つてとお止めしてもとうどう忙しいからとて十一時頃そヽくさとお歸へり。



御晝飯がすむと昭子はピアノの稽古に出かけるしおどけ者の杉も日本橋へ乾物類を買ひに出したので私達の居間も女中部屋もヒッソリする、私は四人の女中に仕事を分けて渡してから雨上りの青葉の庭を眺めつヽ縫ひかけを續けて居ると小さな妹達が學校がへりのお人形の樣な可愛らしいお友達を五六人引ぱつて歸つて來たあれが松平樣のお千勢樣つて、ホラ以前新橋でならしてたといふお妾のお腹なんで御座いますよ」と雪が數へてくれたのは流石に、わけても目鼻立の揃つた美しいお下げ髮、西の應接室の椅子や

テーブルを片付けさせて眼かくしゝて居るとかでキャッ〳〵と賑やかな笑ひ聲が居間まで漏れるバナ、ケーキを持たしてやると甘いものをとおつしやいますと云つて來る。おやア仕方がない甘納豆でも持つてつて御覧なと云ふと折から歸つて來た昭子が。

「まあ、おちびさん達生意氣だわ、甘納豆のあれつぱかし迚もだめよそれより何か取つたら好くはないの?」と汗をふき〳〵。

やつと片袖つくや付かずにまた杉が來てお献立の品が揃ひませんから明日のとやりかへましても宜しう御座いませうかと云ふ。

「都合ができなきや仕方がないわ、まあどうでも好い樣にしてお置きなと面倒くさいからよくも聞かず出たらめな返辭をする兄樣も疲れたと云つて學校からお歸へりになるし續いて父樣も五時にお歸邸思ひなしか此頃は別して御機嫌が好い樣だ。

わかいお嫁さんの出來るのがおうれしくてあんなにニコ〳〵遊ばすのよと御夕飯の時に昭子にさゝやくとこんな時に何かねだるのが一番だわ成功疑なしと小聲に云つてクス〳〵笑ひながら。

「父樣また新形の夏指輪が船來つたので御座いますつて、天賞堂の店員が電話で申して參りしたよ」なんてそろ〳〵お株の謎が始まる、藤子にはゴムホーヅキ買つて頂だいな、百合子はね、猫が飼ひたくて仕樣がないのよと小さい兩妹がまじめくさつて。僕ア豚と蛙とが飼ひたいなとはいつも乍ら兄樣のませつ返し。

私は指輪よりも何よりも母樣の出來るのが樂しみで御座いますわとシンミリ云ふと珍しいもの好きの大關昭子も今朝の言葉に反してさもうれしさうに、それは付き始める。

樂しい團欒の二時間も過ぎては急に堪へがたき疲勞を覺えて居間に入るや遂ウト〳〵と机にもたれてうたた寢のゆめ、昭子に起されて家計簿記けて床に就いたのは銀杏小路に小夜更け初めた頃であつた。」

母樣を此の家にお迎へしてからもう二週日は夢とすぎた、豫想して居たそれにも增して美しい若作りの、

思ひ切つて前髪の、のめつつたマダム巻をすかしばりのピンで留めてお服装なども二歳若い娘の私よりもよつぽど派手だ、それもまたミス時代でゝもあるならばあれでも不思議はないけれど何にしても花婿さんは當年取つて五十七歳のおまけに二十二歳の息子を筆頭に四人の娘の母様ですもの、父様もまあ酔興な……。

それは兎も角、今まで家政萬端きりもりして來た私が何だか食客の様な工合になつて金庫の鍵までお渡し



してしまつたしそれにこれからはお小遣錢まで母様から頂くのだとはいさゝか以て不平な次第、それはもう此の家の主婦なのですもの、それが當然のことだけれどもまだ氣心もわからない方（私にはまだお客様の様に思はれてならない）に何から何までお任せしてしまつた事が先の母様に對して申譯ない様にも考へられて……

でもまあ父様の御機嫌が殊の外だからこれでまづ／＼天下泰平、それに母様がゐらしつ

て以來、精神上の苦勞は別として私の日課が半分以上減つたので、からだの閑暇になつたのが何より。

御兩親は今日丸木に紀念撮影にお出ましとやらで朝から家内はまるでおもちや箱でも引くりかへした樣な大さはぎ、ミルク風呂がたつやら髮結さんが來るやら、それ馬車の用意、お召物の仕度と女中達は坐る暇もない、只今からおめし替遊ばすので御座いますよ早くゐらしつて御らん遊ばせなと雪が注進に來たので長い廊下を大いそぎて更衣部屋に入るとまづ强い香水の香りが鼻を打つ。

何か御手傳ひでもと云ひ乍ら見れば母樣はいつものマダムを今日は意氣な佐土屋形のおまげにうづ卷しぼりの緋のてがら、白地に芭蕉を繪羽模樣の長襦袢をスラリと、お美しいこと蕉園樣のお筆の樣、それにごま鹽ひげの父樣も御同乘では路ゆく人の眼を引くともまた一しほであらう藤納戸地に牡丹を大きく裾模樣の二枚袷と白地に鳳凰をぬひとりの丸帶とは更に若く美しく見せる。

おいで早々父樣にねだつて昨日おとり寄せになつた眞珠つなぎのくさりを首からダラリと、ギリシアレースの夏ショールが褪紅色とは流石に振つたお好みの程も察しられる、昭子にさへも草柳いろだわ。

ヌッと入つてゐらしつた父樣も今日は殊更おめかしで、おひげも短くはさんで有るし、おくしの澤も美しいけれど、寄る年波は爭はれぬもの、後へまはると惜しいかなお小皿ほどのはげが目立つ、まあいゝわ、どうせ、寫眞は前から撮るのだから。

ぬぎ捨てのお召物やら長襦袢やらあたり一ぱい散らけたまゝでお出門となり、パッとかざした空色のパラソルに日光をよけて、わざと幌をはづした馬車の上、御兩親のお面にはさぞや得意の笑がのぼることで有らういくら、大會社の社長でも五十萬の財產家でも、馬車で出歩きが叶はうとも私などなら眞つ平だ。

一まづ丸木からお歸邸遊ばしてまた午後からお更衣の上、三越へお出ましがあつた。

今まで私達をあれほど迄に愛して下すつた、なつか

しい父樣その父上の限りなき愛を永久に此の美しい母上獨りに奪はれてしまふのではあるまいかと口惜しさの上にねたましさも手傳つて。

『三越なら私達だつて連れてつて下すつても好かりさうなものねえ』と昭子に洩らすと。

『まあ姉樣も察しが惡い……こんな大きな者達に父樣の母樣のつて云はれちや樂屋を見られたも同樣ですもの置いてきぼりされるのは當然ですわ』

『まさか兄樣とも云へないしね』と二人とも笑ひころげる。

夕方母樣御國許の親御だといふ方がお越しになつた、

皺くちやの、白髮頭に小さな丸まげをチヨコンとのせて。

綿繻珍の信玄袋を後生大事と小脇に抱へた――それでも若かりし昔をそれと偲ばする面影の六十餘りのお婆さん、華族會館で御披露の時には山村男爵が表面の御里方として列席されたので此御老人はお見えにならなかつたから私も昭子も初對面、これがまあ私達の御祖母樣かとなさけなくも思はれるのをわざと表の御座敷にお通しゝておもてなしする、お國言葉でくど〳〵と、何のことやら判らないふしだらけなのをかしこまつて御相手する其の間の辛さ!!

やがて蹄の響いさましく誇りの色さへ口元にたゝへて、御機嫌斜ならず御歸邸遊ばした母樣は表座敷へお入りになるやなつかしかる可き生の母御に御愛想一ツおつしやるでもなく澄し切つて御挨拶遊ばしたまゝ、オツ〳〵とおびえた樣な御老人を從へて疊廊下を御居間の方へ。

おゝまあ何といふ冷やかな態度であらう?、あれがその一人娘の思ひまうけぬ出世をよろこんで、海山とほき幾百里身の老ひも忘れてはる〳〵とたづねて來られた親に對する娘のしうちといふものであらうか?と今更ならねど虛榮の力の偉大(?)なるに驚かされたのであつた。

逝く春

玉玲瓏

斯くして妾は永久に趣味に活きんかな

先生が御不快で今日から二三日裁縫はお休み、朝飯後雜誌を見て居ると、お前まあ何の事です。裁縫がお休みならお休のやうに、ほどき物でもおしなさい。母樣にあと片附さして自分はもう御本とは、と早速覺悟の前のお小言頂戴。いたみ入つて仰せの通り母樣の小紋縮緬の羽織をとく、まあ紋の少さい事、やつと五分五厘しかない。こんな物同じ縫ふにしてもはゞが利かないわ。春ちやんのこそほんとに佳かつたつけ、私はあんなもので紋羽二重のが欲しい……。

それは東京で指折の仕裁屋が縫つたんですよ。大變上手で叮嚀で着崩れ一分しなかつたよ。お前にもあの位に出來ますかね。

牛蒡を切つて居らした母樣が笑ひ乍ら不意に有仰る

縫へなくつて私、これでも始終百點をとつて居るんだわ。まして羽織はもう卒業だつてちやんと先生から。

午後からお濱さんが來た。私は矢張り島田にあげて貰ふ。根に卷くものはこの前銀のをかけたら少し巾がせまかつたゝめか、ちと粹向に出來たから今度は舊の白丈長にする。どうぞ鬢を——と鬢櫛を渡されてそつとかき上げると後から毛筋でふくらます。あゝ餘り出過ぎていつも程張らないやうだ。前髮も大き過ぎる。前髮の巾廣く取ると私の顏は四角に見えるつて評判なのに。はい宜しう御座います。エ、どうもお世話樣、と鏡の前を離れて一寸手をあてゝ見ると、オヽよく出來ましたとお茶をついて持つていらした母樣が御滿足さうな微笑。ほんに何ていゝお毛で被居いませう。ここにも二三人島田に結ふ娘が御座いますがね、いたいたしくて廻りも思ひ切つて出せませんのですよ。みのを入れずに出來ますのはお春さんとこちらのお娘ばかりです。同じ結つても張合があつてと我が手に掛けて髮をちつと見て微笑みつゝ櫛をふき／＼お濱さん、

例の如才ない口をたゝく。折柄玄關にお人。私は直ぐに飛んで出たが、あゝもしや村井さんちやないかしら、と思ふとぐつと胸がをどッてまあ髪を結つておいて宜つたとの念が咄嗟の間に走る。が、さらりと開けた障子の向ふには思ひもよらぬ東京の小叔母様。

あらと云つたきり車夫の手からカバンを受け取つて母様とさけぶとまあ〳〵と出ていらした母様もお喜びよりか驚いて被居しやる。お濱さんは手早く片附けてコソ〳〵と歸つて行つた。



まあこの叔母さまがもう母様にお成りの事はかねてお手紙で承知して居るけれど、現にかうして可愛いゝ坊を抱いてお出るのを見ると、私何だか可笑しい氣がしてならない。この以前私が見たのは丁度高髷の花嫁姿もつとも昨日の樣に思へてもあれは早三年の昔、叔父様がまだ赤門の花だつた時分であつたけれど……。

急いで座蒲團を出す、お火をとる、その間に母様との御挨拶すんでお茶をすゝめる私の方へ、坊をかゝへたまゝ少し身體をお向けなさると、

あ、御機嫌好う……ほんとにお久し振ね、おゝよく出來たこと、今の髮結さん、なか／＼人柄に結ひますのね……。

い、い、さつぱりしたものであとはもう溢るゝ笑顔。

私この叔母様ハイカラで親類中一等好き、白の絹ちぢみの裏なんかつけた葡萄色縮緬の五ッ紋の羽織着て鶉ちりめんの二枚重ね、後れ毛の澤山はねてる前髮を思ざまふくらまして、三枚櫛の好みなら衣服の着こなし、五分の透もない當世風の若奥さま、實に品もよし今まではからうも思はれなかつたがまつたく美人だわ。白髮まじりの切り下げの母様とくらべてこれでも姉妹かと情なくなる。

赤ちやんの名は龍雄さん、鳥渡イゝ名だわネ。生れて四月と云つても普通の子より大變大きい。クリ／＼とよく笑ふてお召縮緬の廣袖の中で小さい手を握つて居る。ほほゝゝゝ可愛くて／＼食べてやり度いわ。顔の丸いとこから目許など叔父様にそつくり。

お土産として私には淺黄繻子の帶か、はや帶止め、櫛など、妹は學校用品と手袋を頂いた。

夕御飯には母様に代つて炊事係りを引受ける。家事に大變趣味を持つ方があるが私は……こんな事大嫌ひだわ。否々勿體ない勿體ない、私の母様なればこそ裁縫や讀書にばかりこり附いてお手傳もせぬのを、まるでお嬢様のやうにしておいて下すつて、御自分は毎日毎日下女同様な水仕事。美しい手といつも同輩に羨まれて得意に成つて居たのが消えも入り度い――朝顔洗ふにもお湯をとつて貰ひ、お米一ッといだ事さへ無いんだもの。あゝ親の情……何て有がたい――ア、こげくさい、お炊どんが考へ物はまた大禁物だわ。でもまあよかつた。玉子やきに牛ペンのお汁で御膳を出したらまあ千代さんが松葉で炊いた御飯はガスのより大變おいしいのね……と賞められ四ッまで重ねられたので實に嬉しかつた。そこで私等も茶の間で手早くすませ

て夜はお座敷に叔母様と臺ランプをかこみ、いろ〳〵お話し承まはる。今度はかうして赤ちやんも連れていらしたのだし、少なくとも四五日は御ゆつくり成すつていゝのだらう。すれば嬉しい——私が差づめ案内役で江ノ島かまくらの御見物、また新婚旅行の時とは趣もちがふだらうからと獨で定めてまづその事を伺ふとあらさう——と可愛いゝ齒をちらりと見せて笑つて、折角ですけれども、實は私晃と一緒に鎌倉へ來て居るんですの。は、一昨日あの三ッ橋へね……、でそのついでと申しちや何ですが此方へおより申しましたのよ晃も待つて居りますから明日は歸ります。エ鎌倉へ……千代さんも如何——いらつしやいませんか。

まあ驚いた。それだからこそ叔父様がお大切なお二人をこゝまで手放しておよこし成すつたんだわ。もう何と云ふんだか知らないが、お揃で御保養の旅枕なんか振つてる。ほほゝゝゝ坂本の叔父樣はあんな面白い方



だからよく、高田の家ぢやね……つてお眞似や口振なすつちやお笑はせ成すつたが、叔父樣がお優しいからお髮上げの時なんぞ手傳つてお上げ遊ばすさうだ。今頃は三ッ橋の二階にポッチンと褞袍をかぶつて叔母樣の事考へて被居る樣子が目に見える。私いつか何かで讀んだら若い良人は美しい妻か早く母親に成ると、自分に對する愛を子にうばはれて了つたやうで一種の嫉妬心がおこる、とかつて書いたのがあつたが、本統にこんな奥樣を持つたらさうかも知れない。併しこの叔母樣が夫にさゝげる愛はどうてし龍雄さんなどのと比較になつたもんぢやあるまい。そして叔父樣は無論通さん〳〵てさん附に有仰つてだしいはゆる理想の家庭と云ふものはこれなんだらういくらお止め申したつてこんな所に泊つて居て下さる筈はないわ。只た一夜きりで明日もう悲しいお別れする程ならば、來て下さらない方がましだつた。お客樣は嬉しいけれどお歸りのあとで身も世もあられぬ淋しさ人戀しさを感じるから厭よ。あゝ變な氣持でゝ何だかお話しするのも元氣がない。頂いた羊羹やお饅頭でお茶を飲み乍ら母樣とのお話を、自暴氣味にませ返して居たが龍雄ちやんがよく寢入つたのでそつと抱かして貰ふと、直ぐ泣き出した重ね〳〵ケチがつく。だから私赤ちやんは嫌ひだ。何んな子でも私に抱かると乾度泣くわ。

叔母樣は七時過ぎお目覺に成つた。手早くお手水くんで私のねり白粉と洗粉とを出して置き、お湯をとりました、と搖起しに云ふと、おやさうと云ひかけてどうも濟みませんと靜かにお立出に成る。薄ねずみのふらんねるを重ねた銘仙のお寢間着のまゝで亂れた髮をかき上げ乍ら、お早う……と莞爾。スラ〳〵とお湯殿へ――。

やがてハッとクラブの香がしだした。龍雄ちやんは獨り床の上に殘されて手足をハタ〳〵さして居る。

千代さん、御園のとき水はありませんか――不意に訊かれて、

エ、あゝ御座いませんわ。なあに――と一寸のぞい

て見たら、左の掌に御園をうけて指環の嵌つた右の指でそつと溶いて被居しやる。強い香水がプンと鼻を打つ。龍雄ちやんを次の間にうつしてお座敷の掃除をしお雜巾かけてる間に早お髮上げもすんで着物をあらためられた。昨日よりずつとお化粧が濃くつて凄い程美しい。實に叔母樣は美人だ。こんな人もう母樣にして了ふのは惜しい……勿體ないわ。いつまでもいつまでもこの位の奥さまで置きたい。併し今でも二十二のお齡より三ッ四ッは更けて見える。



それで老孃……勝代樣なんかの更け方とはまた違ふから綺麗だわ。お好きなお雜煮こしらへて上げたら大變御意に召し大好評。

朝飯後は、またまた母樣とお話しに實がいり私があと片附けて居る中は花やかな笑聲など聞えたが、大急ぎでぬれ手をふきふき上つて來て見ればもうお歸りだと有仰る、せめて今日だけとすがるやうに云つても、否龍雄のおむつに困るからとばかりでお聞成さらぬ。そりや鎌倉にあの

叔父樣が待つて被居るんだもの、いくら止めたつて駄目だ。仕方がないから私が鞄を持つて電車までお送りした。白のボアーを卷いて風通お召の半コート、龍雄ちやんを抱かれた姿。まあ何と云ふマダム振り、いツそ叔父樣が憎くなる。

霜どけ路に絹足袋やゴム草履がよごれるのも平氣で櫻花時分には是非東京へ出ていらつしやい。そしたら乾度叔母樣の家へお泊りなさいよ。お得意のカルタもお相手になるやうな方が知己に澤山ありますからとか今年の避暑には鵠沼へ來るかも知れませんとか、種々話し乍ら行くと平常は飽きるまで待たせるのが折よく云はふか惡くと云はふか、少しまごつく程に鎌倉行のが來て叔母樣をさらツて行つて仕舞つた。

取り殘された私は茫として手の中の玉でも取られたやう、うら悲しく淋しく泣き出し度く成つたから歸りにはわざと大聲で、

嗚呼玉盃に花うけて。緑酒に月の影やどし……。

と歌ひつゝ藤ケ谷橋まで來ると向ふから四人連の學生みな紺絣の羽織に小倉の袴、〇〇大學の帽をかぶつて居たが四邊はゞからず打興じて來るので、それとなく右側へ避けて通つたのにすれ違ひざまはつと私の手を握る。何だ男の癖に和はらかい手だ。嚇つと成つて振り放すとどつと肩をゆすつて行き過ぎて他の三人も聲を合せて大笑する。私はいきなり傍の小路へ駈けこんで吻と息ついた。まあ何て失敬な奴等だらう。これでも私は醫師より外の男に滅多に手なんぞつかませた事はないんだ。思へばこの髮をまだ下髮に桃色リボンの時代、今では新婚の夫人とスキートホームの進さんが襟にJの字輝やかせて居た頃打連れての江の島詣窟口の崎嶇たる岩根に扶け引かれてたどつた時、近くは松野さんと五月雨の夜のつれ／＼に興のゝるまゝ熱い血通ふ君が右手はつと優肩に、片手はぢつと我が手を取つて何か云掛けられた時、息苦しい程胸が躍つて燃えるやうに顔を赤めたが――その折嵌めて居た此金指環。幸か不幸か此頃左のくすり指へうつしたゝめ折角の紀念を、あの墮落書生にけがされて了つた。

あはれ今からもう戀しい悲しい形見ではなくなつたあゝ進さんに松野さん、其後何う遊ばしたであらう。否何うお成りなさりようとて私の胸にきざまれた二人は、永久に二分刈頭の書生姿なのである。が今後父たり、良人たるお二人とは相見る折もあらうがもう昔の……あゝあゝ新夫人は乾度高田の叔母樣の樣な方だらう。そして矢張りあんなホームを造つて居られるのだらう。

おゝ御苦勞でした。大變おそかつたね、電車で待つたの！

母樣に聲かけられて吃驚した。馬鹿々々しい、いつか歸つて勝手口に立つて居たんだもの。

丁度お晝餐、妹はまだ學校からもどらず母樣と叔母樣のおうはさし乍ら淋しく箸を取る。と午後の便であらう、郵便とさけんでパッタン、何か投げこんで行つた。いつも〳〵配達の來るのを戀人でゝもあるやうに待たれる。今日は何處からかしらと駈け出すと大きな書籍と美しい畫ハガキ。おやと思つて取り上げる……あらッ沼川さんから、夢中で封を切れば一葉全集我知らず母樣を呼び立てた。

思がけないとて思がけないとてこれ程思がけない事があらうか。沼川さんとは去年の田内さんの歌留多會でお目に掛つた方。その後私の心の日記をお讀み遊ばしたとかで二三度お手紙頂いたが、でもこんな物まで送つて下さらうとは夢にも思がけなかつた。しかも欲しい欲しいと思つて居た一葉全集を……。

あゝ何どお禮申上げたらいゝだらう。乾度々々女史の萬々分の一にでもあやかつて、將來にこの御厚情にむくいるわ。懐しい方からおくられた慕わしい女史の作物、私は一生―いや一時も手放すまい。こればかりは人にも貸さぬ、見せもせぬ、死んだら一緒に持つて行くんだわ。あゝお懐しい沼川さん――幾度かキッスして抱きしめた。

ほほゝゝ今更にあのカルタ會が思ひ出される。一同の隱し藝をつてせめ立てられた時、

……樣にJの字法科の章、包かゝへて大學へ……

と苦しさうにお歌ひ遊ばしたお顔が目の前にちら〱するわ。あゝあの晩は實に樂しかつた。通ふ姿の程のよさ……つて御自分もそのお仲間なんぢやないか、まだ見ぬ角帽姿の沼川さんがあり〱としのばれる。

もう去年からの望がかなひ手に入つた嬉しさに何事も身にそはず、夜は御飯も食べずに全集に熱中して了ふ。まあ女史の寫眞、もつと瘦ぎすなハイカラな方かと思つたら……もつとも其時分には廂などはなかつたらうが。

評判の十三夜も早速讀んだ。私は「われから」の方が傑作だと思ふ。經づくゑ、うつせみ、曉月夜、私こんなのが好きだわ。それからうもれ木の一節、「今年十八年くもりなき美玉、打くだく大魔王は戀といふ胸の一物、或時は誘ふ春風花開く園、ある時は指さす秋雲月くらき天、喜憂を包みし袂の先、引きて伴ふ果は何處ぞ、東西南北影もなく形もなく、愛らしかりし双頰の……』以下數行、實に名文だと感心した。

わづかこれだけの物を書き、あれだけの間にあれ程の名を成し得たんだもの。稀世の天才と云ふのはほんに女史の事なんかだらう。あゝ女史は何故早く逝つたらう。私もあと追ふて一緒にお墓の下へはいりたい……ききゝとさけぶ鼠の聲にそつと我にかへれば母様と妹の安らかな寢息。抱いた火鉢の櫻炭もまつ白く更けた。ランプのチヂヾと油をすふ音悲しく――おゝ叔母様や、龍雄ちやんは今夜は三ッ橋の二階に、あたゝかい夢を結んで居られるであらう。




天をはがきしよう
書い事なく すけりせども…



歐洲 帝室と戀の犠牲

松居松葉

一　親孝行は男の爲め

戀の犠牲となつて、竹の園生から民間に落ち、詑しい生涯を送つて居らるゝ公達や姫君がたの多いのは、澳太利の皇室であらう。此朝廷には自分の知つてる有名な戀物語だけでも五組あるが、其澳太利から程遠くない獨逸のハンノーヴァのフレデリカ内親王殿下も、戀愛の爲めに其地位を犠牲にされた一人で有る。此方はハンノーヴァの廢王の長女で、容色世にすぐれ、心ばえもまた人に勝つた方であるから、當時の各皇室の公達方は、一齊に目をつけて居られたが、中にも英國今王の御同胞の御一方は、氣も狂はぬばかりに此君を思ひ詰めた。先代ヴィクトリア女皇は、從妹同士の事では有り、不幸なる父君の境遇に、深くも同情して居られたから、此御方に對する愛情も深く、是非わが御子息に結婚させやうとせられたが、内親王は如何しても御聞入が無い。父君は位を奪はれ、目さへ盲れてしまはれたれば、此世に何の樂みも在さぬ御方、それに一番御氣に入りの此身が御側を離れたら、何樣に御心寂しく思召すとであらう。此身は
◎生涯獨居して父君に孝養を盡し、ますると、如何にも立派な御語に、流石のヴィクトリや女皇も强ひてとは云はれず、終に英國皇室との御縁談は立消になつてしまつた。ところが程なく父君は世を去り給ふたので縁談はまた起りかけた。そこで内親王も詮方なく、實はこれ〱と打明けたのを聞いた人々の驚きは、何とも形容の仕方が無かつた。事實を曝露けると、内親王は
◎既に云ひ交した男があつたのだ　其男と云ふのは、

父君の秘書を勤めて居た——今では男爵になつたが——當時は一平民のヘルフォン、バウエル、ランミンゲンと云ふ人であつた。此人の父は英國の一親王家に仕へて、ヴイクトリア女皇や其夫君アルベルト親王にも知遇を受けた人間であつたが、若い時ハンノーヴアの軍隊に入り、ハンノーヴアが普魯西の爲めに破られた時、國王と共に擒となり、其後もハンノーヴアの爲めに回復の陰謀を廻らした爲め、終に謀叛人として刑に處せられた。之が爲め其子のランミンヂン男爵さへ、今以て獨逸領内へは足踏みがならぬ始末である。兎に角父は何程國家の爲めに忠義を盡したにせよ、一平民の秘書風情を、ハンノーヴアの王家の婿君とはされぬ。そこで一族擧つて其結婚に反對し兄君は一家の主長として、公然内親王の願ひを拒絶した。併しヴイクトリヤ女皇は、前にすげなく拒絶されたに拘らず、深く此戀路に同情を寄せられ、ウインゾル宮の會堂で、結婚の式を擧げさせせられた。そこで今

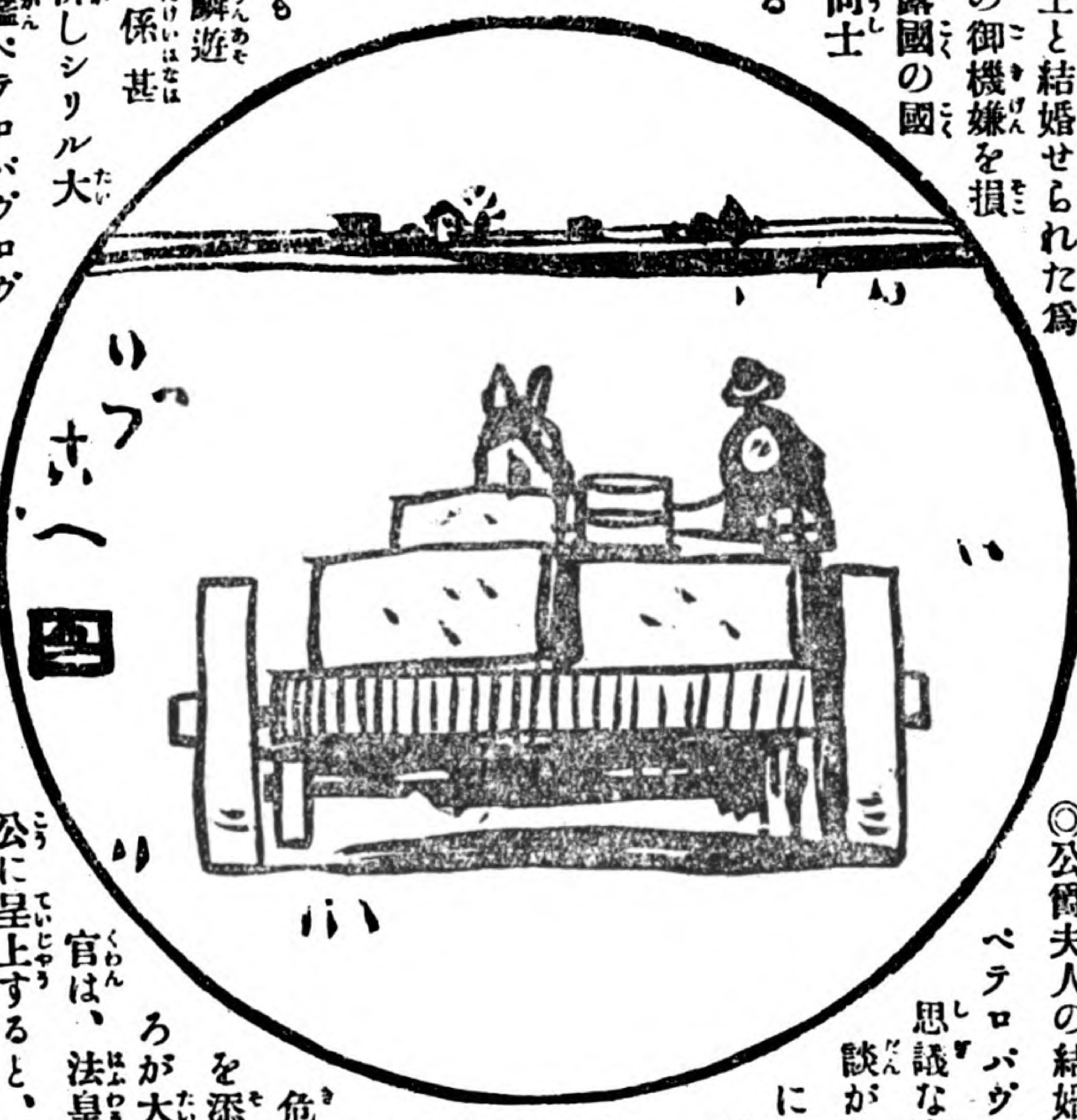


度は英國女皇と、◎内親王の御親戚との間に悶着が起り、その時以來断然英國へは足を踏み入れぬとまで激怒した公爵さへあるに至つた。併し戀人同士の間は爾來洵に幸福で、女皇の御蔭によつて、ハンプトン宮といふテームス河畔の立派な宮殿に、嬉しい月日を送つて居られ、其後は西班牙のビアリッツに住んで、裕かに、靜かに閑日月を送つて居られる。男爵は中々道樂の有る人だが、分けて好きなのは、種々なる階級職業の人々の自署を集める事で、中々面白い名も集つて居るさうである。前の内親王、今の男爵夫人は、一昨々年西班牙國王が皇后を迎へられた時、敎母として働かれ、大分親族からの同情を回復せられた。

二　日露戰爭の紀念

戀の犠牲の標本は、露西亞の皇室にも二人まで在します。其の一人は即ち瑞典の第二皇子ウヰリアム親王に嫁せ給ひしマリア、パヴロヴナ女王の父君ポール大公で、一人はシリル大公である。前者は女王の外にも一人の御男子がある妃殿下に死なれると間もなく、ピストールコル男爵夫人と號する美人を思ひ初め、それを容れて第二の夫人とせられた。處で此婦人は野心の深い虚榮の多い女であるから、前夫人の寶石類を矢鱈に引張り出しては、それを以て身を飾り、大公の出る席へは何處へでも出かけて行く。そこで御一門の皇族は苦々しい事に思はれ、終に◎ポール大公を勘當に處して了はれた。大公の第二夫人は、ヴアバリアから伯爵の稱號を貰つたが、斯る稱號は其國の帝王の許可がなくては用ひる事が出來ぬのに、露國皇帝はポール大公夫婦に對し、非常な反感を有して居られるから、其肩書も寶の持腐れとなり、大公は日陰者の身の上になつて居られる。併し親が無くとも子は育つで、マリア姫と其兄君のヂメトリ大公とは、叔父君セルジ大公の敎育の下に、立派に成人せられ、マリア姫は一昨年めでたく瑞典へ御入輿あらせられた。又シリル大公は軍人として露西亞の上下に評判

の好い方であつたが、ヘッス大公家から離別せられたヴィクトリアメリタ女王と結婚せられた爲め、すつかり露國皇帝の御機嫌を損なつてしまつた。一體露國の國教希臘教では、從兄妹同士の結婚は堅い禁制であるのに、女王は殿下の母君の姪であるから、露國内では結婚の出來やう筈が無いのだ。皇帝も種々殿下を諭して見られたが、戀に目の眩んだ大公はまるで耳にも入れぬ。で、皇帝も逆鱗遊ばされ、爾來兩者の關係甚だ面白くなかつたが、併しシリル大公は日露戰爭の折、軍艦ペテロパヴロヴスク號に坐乘せられ、國家の爲めに大に盡瘁せられたから、陛下も其功を沒するに忍びず、◎公爵夫人の結婚を認可せられた



大公がペテロパヴ、ロヴスク號に坐乘中、不思議な事から災難を免がれた奇談がある。同艦の乘組士官中に一箇の指環を嵌めて居る男があつた。彼の云ふ所によれば、それは前代の羅馬法皇から貰つたので法皇はそれを彼に與ふる時、決して之を失ふなよ此指環は爾に福を與へ、危難を避けさせるぞ」と言を添えたさうであつた。ところが大公の參謀となつた件の士官は、法皇の言を守らず其指環を大公に呈上すると、其翌日ペトロパウロヴスク號は爆沈して、大公は助かつたが士官は海の底へと

沈んで了つた。大公は爾來其指環を自分の守り神として、決して指から離した事は無い。身から出た錆とは云へ、如何にも

◎御氣の毒の身の上なは　サキソニー王國皇太子の前の妃殿下、今のモンチニヨソ伯爵夫人である。此方は前のタスカニー大公の姫君で、二十一歳の時サキソニー皇太子の許へ御入輿あらせられたが、一體が活潑な平民的な御方、サキソニー皇室の面倒くさい儀式に縛られて居るのが辛くて堪らず、二人が仲のモニカ内親王といふ可愛らしい姫君をさへ棄てゝ、七八年前白耳義から雇ひ入れた家庭敎師と駈落をして了はれた。併し之も永續は無く、程なく別れて見ると、元木に勝る末梢なく、皇太子が戀しくて堪らず、人橋かけて詫を入れたが、素より御承知のあらう筈は無い。併し段々の話の末が、モニカ内親王の乳母同樣の資格で、其養育の爲めに宮殿内に留ることだけは許すといふ事になつた。併し或部分の人は、之すら永續はあるまいと悲觀して居る。如斯いふ方々ば如何にも御痛はしいには御痛はしいが、一面から云ふと、自己の望みを遂げられたのであるから、御自身では他の見るほど心苦しくは思召さぬのかも知れぬ。それよりも御氣の毒なのは、御婚期を疾うに過しても御緣遠く、生涯獨身を守らせ給ふ姫君がたである。我邦では出家でも遊ばす方の外には、斯る例は極めて尠ないが、外國の皇室にはなかなか澤山ある。

三　四十過ぎたる姫君

殊に多いのは英國皇室で、前代ヴイクトリア女皇の時代には

◎三十を越した處女が五人　も揃つて、其宮中に居られたといふ事だ。近頃は列國の皇室に公達が殖た爲か姫君方の賣口も好く、漸々老年の姫君の數が減つて行くが、それでも尚大分賣約の濟まぬかたが有る。其中で有名なのは今の國王陛下の御息女ヴイクトリア内親王殿下、御歳既に四十一歳であるが、未だに御獨居を遊ばして居給ふ。だから御兩親の御慈愛は、他の御子

がたに勝れて、御下賜の品は宮殿に溢るゝばかりである。十四五年前御兩親陛下より賜はつたピアノなどには「ヴイクトリア姫へ、父と母より」とわざ〳〵金文字で記しつけて有る。毎年七月六日の御誕生日には、殿下は小兒が御好だといふので、母君皇后陛下は第一族の少年少女を集へて、自からその方々を率ゐ給ひ、ヴイクトリア内親王の室の戸をたゝかせ給ふので有る。殿下は餘り御丈夫な方では無いが、御兄妹がたと等しく、戸外運動が御好で



◎中にも自轉車は名人で居らせられる。今でも折々女官を御供に御微行の遠乘を遊ばす事がある。六年前にスノードンの山路を攀ぢさせ給ふた一事は、自轉車界に有名な事實である。殿下は又母君にも劣らぬ程の寫眞好で入らせられ、自轉車旅行の其間も、寫眞器械は肩から離し給はぬ。それに美術が非常に御好で、盛に新畫を購ひ給ふては、御居間の壁の隙間なく掲げて置かるゝ、近年は御兩親の御同伴がなくも、外國旅行

をさへせらるゝ事がある。兩三年前日本へ來られたアーサア、コンノート親王殿下と瑞典へ行かれ、又露國皇室の懇請にまかせ、その國をも訪はれた事がある。露國の將來の皇帝は此殿下を敎母と仰いで居られるので有る。併し前のヴイクトリア女皇が御在世であつたなれば、迚もこんな自由な事は御爲せになるまい。前世紀の中頃過、女皇の第二子アリス內親王が、母君に伴はれずに白耳義の大使夫婦を訪問された爲めに、

◎英國皇室の一大問題となつた事が有る。處女の中には窓を締めた馬車にすら乘らぬといふのが、英國上流社會の習慣であつたのだ。此ヴイクトリア內親王の外に、もう一人「老たる姫君」のヴイクトリア姬といふのがある。シユレスウイツグ、ホルスタイン親王妃殿下の御息女で、即ちヴイクトリア女皇の孫君に當つて居る。此方も今年三十九歲て、いまだに御獨身、女皇御繁昌の時代には第一の御氣に入りで、女皇の晚年は大抵御一緖に暮されて、其爲めに嫁期を逸してしまはれた。此御方は英國で

◎有名な猫好な貴女で、御飼養の多數の猫の中、パツク三世といふ奇妙な名の猫は、方々の展覽會へ出て多數の賞與を貰ひ、大に殿下の滿足を買つた。殿下は母君の遺傳を受けて、詩歌に巧みに、匿名の下に幾卷かの詩集を出版された。殿下はまた慈悲の心深く、正式に看護婦の敎育を受けられたのは、英國の貴女中殿下が最初である。併し是等の姬君がたは、御自身に何といふ望みがあるでも無く、たゞ自然の境遇が斯く不幸な御身の上に陷れてしまつたのであるが、中には心の底に深い巧みが有つて、

◎わざと獨身生活を送つて居られる方も有る。前に記したハンノーヴア家のフレデリカ內親王殿下の御身の上などは其一例で、今のヘツス大公妃エレアノラ殿下なども亦同じ策略を利用せられた御方である。ヘツス大公は其御幼少時代に、此姬君と結婚の約束をせられたのであつたが、其後如何したわけか、今現に露國のシリル大公妃殿下となつて居られるヴイクトリア、メリタ姬と御結婚遊ばされた。之が爲めエレアノラ姬

は深く失望の淵に沈み給ふたと思ひの外、さして悲しみ給ふ容子も無く、三十二歳になり給ふまで、堅く獨身生活を送られた。處が一方では御夫婦の御仲むつましからず、終に御離縁となるや否や、エレアノラ姫は大公家へ御入輿遊ばされ、とう／＼多年の御希望を遂げられた。

寄れる合奏

築山のうしろの八重櫻も、夕の雨でしつかり色あせて、つれなく見ゆるのに、又にくらしい今日の風、ちら／＼と散る花びらは、さながら雪の樣、眺めつきせぬ。庭の面に向つた、お孃樣のお居間には、紫縮緬に牡丹と胡蝶を染め出した座蒲團がしかれて紫檀のお机の上には、美麗な、文具や、いろ／＼の美術品行儀よく置かれて、床の間に並んだ書棚には、古今の書籍が澤山に積んである、次の間には琴、三味線、月琴、二絃琴、ピアノヴアイオリンと和洋の樂器が飾られて、春の陽氣が充滿て居る私は毎日此二間をお掃除して、お髪上げやら、お召替へやら終日小間使としてお側に居る。眞實に此家のお孃樣などは、美食、美衣におあきになつて被入るのだ、恰ど二月程膳が惡るかつたので、鎌倉へ居らして、お歸りになつた時などは、田舍へ行つてたまに、流行におくれたと大層に、お氣をもんでお召物から頭のもの、はきものまでも、流行といふ、流行の品をお求めになつて、お立派なお品でも、今流行しないから用ゐられないと仰有つて、只々流行の魁をして居被る、故に此品が流行だといへば、價は何程高くても、恰好はどんなでも似合つても似合はないでも、直ぐお求めになる、お孃樣先の方がよくお似合ひ遊ばしますとでもいはふものなら、それこそ御機嫌をそこねて仕舞ふので、何んでも新しいものをお賞め申して居ります、先づお金などは井戸から湧くものゝ樣に思召て居被るので、世の中の苦勞艱難など夢にも御存じなく、只美術とか音樂とか、文學とかにお心をお用ゐになるだけで、茶の湯とか生花とか折にふれて種々のおなぐさみ、雨の日のつれ／＼に文机にむかはせ給ふ事もあれど、今日は何會明日も何會とお出ましがちにて音樂會などにお出ましの時は二度同じ御召物は用ゐ給はず、お友達を訪問遊ばすのも、小袖を三重も四重も帶の四五本も揃へて、此着物に此帶はうつりがよいの、わるいのと三時間位もかゝつて、漸くお出かけになる、又時には今日は、髪がよく出來たからと急にお出ましになる事もあり、只流行の品々を、身にまとひ人々に美しい、珍らしい品だと、賞められるのを、おたのしみにして居被る、此間も鶉縮緬のお被布を、お誂ひになつたのが色が薄いと仰有つて、又御注文になる、金錢などは何程かゝつてもお金で出來る事ならと、旦那樣も奥樣もお孃樣を生きたお人形の樣に仕立て、御滿足して居被る眞實に、只々驚いて拜見して居ります。（清子）

小兒衛生

初生兒の罹り易きいろ〳〵の病氣

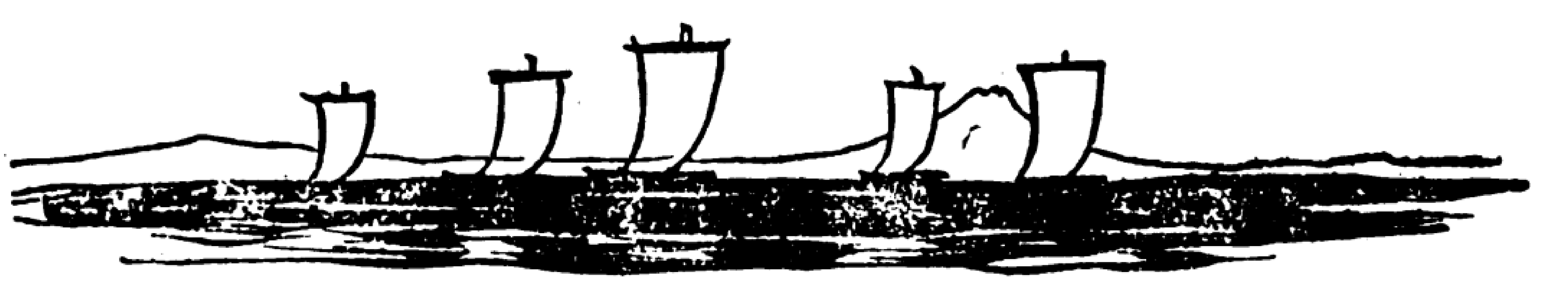
翠溪女史

△腸胃病

初生兒の多くかゝり易き病にして其徴候は乳を吐き又は下痢を起し機嫌あしく、睡眠不安等の事あり、これは乳汁又は飲食物の不良に原因するか、或は過飲過食に原づくものなれば、大に注意すべし、小兒の死亡多きは主としてこれ等の不消化病によるものにして、且つ此の病は餘病を惹き起し易く小兒の不意に搐搦を起すなど皆この不消化病に原因するものと知るべし。

△鵞口瘡

これは重に嬰兒に起る病なり、始めは舌の表面に白き苔の如きものを生じ、追々増加して口中一面にひろがるものなり、此病は清潔法を怠るより來るものなれば先づ醫師の治療を乞ひ一方には哺乳用の器具を清潔になし、又小兒の口中を微温湯にて洗ひ、又母乳にて育て居るものならば、其乳房を哺乳せしむる前後に必らず清潔に洗ふべし。



△ヂフテリヤ

この病は激烈なる傳染病にして夏冬共に流行し、これに罹りて致命する小兒多し、病の徴は咽喉部及び其附近に義膜と稱する白色のものを生ずるものにて、是れ實に恐るべき病なり、されど手早く醫師に謀れば近頃は血清注射の妙法あればその療法によりて手遲くれさいなくば大抵は一命を助け得べきものなり、さて病兒は他人より離隔し、其痰及び病兒の用ひし物品は一切嚴重に消毒を行ふべし、猶豫防の爲め、他の小兒にも血清注射を行ひ置かば安全なり。

△蛔蟲

これは其卵の附着したる野菜果物や又は便所に近き井戸の水を飲むより起るものにてこれ又小兒に有り勝の病氣なり、この蟲の發生するや腹痛し食定まらず、涎を流し下痢を起し又は睡眠不安或は顔色の赤くなる等種々の證あり、これを治するには「セメンシーナ」といふものを煎じたる汁又は「サントニーネ」を用ふれば下るものなり。

△蟯蟲

これも小兒の罹かゝり易きものなり、其原因は同じく不潔の飲食物より來るを常とす白き小蟲にして肛門の近くにあるが故に食鹽水の灌腸を施してこれを殺すことを得べし。

△下痢

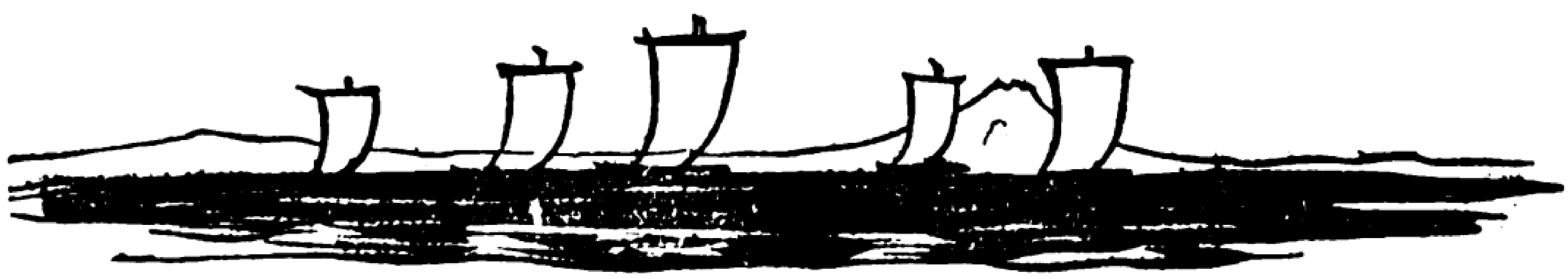
乳のみ飲み居る小兒は大便黄色にして柔かきを常とす、然るに變じて水の如くに粘り氣もなく、又は綠色の凝りたるものを下す時はこれ下痢にかゝりたる證なり、よろしく醫師の手當を乞ふべし。

△たゞれ

初生兒の多くは腰股の邊のたゞれる事あり、これは大小便通のありし度每に清潔に爲さゞるより起るもの多し、故に柔かき手拭を微温湯にひたし其部を清かに拭ひ、その後へ天花粉を塗り用ふべし、又おしめは必らず沸湯にて洗ひ乾かしたる物を仕替ふべし。

△痙攣

小兒は種々の痙攣にかゝり易し、其徴候は眼球を引きあげ拳



をにぎり、顏をしかめ、不安となりて一種變調の泣聲をあぐ、其原因は消化不良、發熱、驚愕、母親の精神感動後の乳汁を與ふる等によるものなり、此時は平臥せしめ、頭部を冷して醫師を招くべし此病を起し易き小兒は腸胃にかゝらざる樣又過食せしめざる樣に注意すべし。

△百日咳

これは概して小兒に多き病にして、始めは喉頭かゆく、續きて咳出で止まず、顏色蒼白となり、或は吐き、時としては大小便の通じ止むことあり、此の咳嗽は殊に多く夜分に出で其の爲めに睡眠不安にしてこれを見るものをして如何にも苦しげに思はしむるものなり世にはこの病を餘り重大視せざる樣なれども中々恐ろしき傳染病なれば速かに醫師の手當を乞ひ患兒を離隔したる室におきよく消毒を行ふべし。

△嘔吐

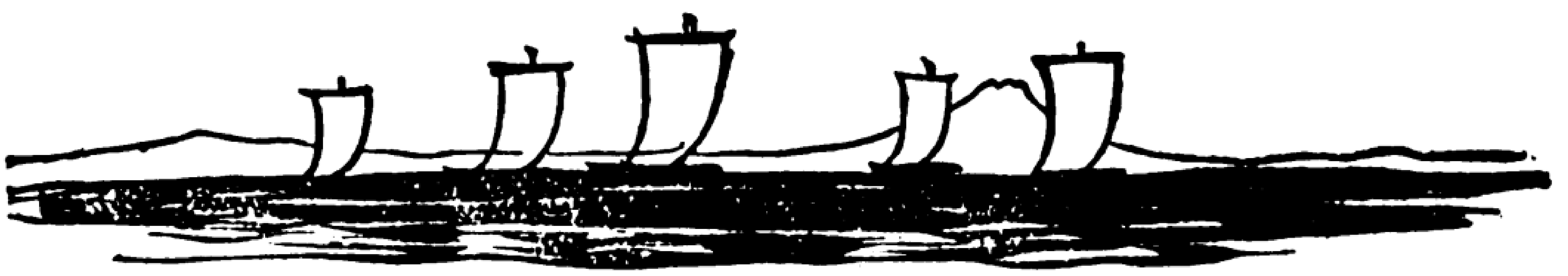
小兒の乳汁を少しく餘分に飲む時は其一部を吐き出すものにしてこれは病氣の爲めにあらず、されど數々反覆して乳を吐くときは餘り長き時間乳を吸はしむべからず、若し嘔吐に下痢を併發する時は速かに診察を受くべし。

哺乳兒の衛生

◎小兒の生るゝや數週間は大抵は產婆の手に扱ふものゆゑ、產婆は臍立つを待ちて其道に經驗ある人に尋ぬべし、就中、沐浴法、衣服の着せ方、灌腸の仕方等は心得おくべし。

◎まづ小兒の清潔法として、生れてより一ヶ年間は毎日一回づつ沐浴せしむるをよしとす、是は小兒の身體を清潔になすのみならず、主として身體を暖かにあらしめ、且つ活潑にする爲めなり、さて其方法は清かなる溫湯を多量に用ひ其溫度は初めは攝氏の三十六度とし、次第に減じて三十五度となすべし、小兒をこの溫湯中に頭部を出してずつぷりと入れ、柔かき海綿にて靜かに身體を洗ひ、眼は必らず、他の布にて特に撰みたる清潔の微溫湯にて洗ふべし、湯の中には五分間位あらしむるを度としそれより取出して溫かく乾きたる大手拭にて濕氣を採り、衣服を着せ、溫き床に置くべし、此際不注意して風を引かしむべからず、其時に用ふる石鹼は良好の品にて、極めて其力の弱きものを撰ぶべし、然らざれば、小兒の皮膚を侵すものなり、夕に寢につく時は微溫湯に手拭を濕して小兒の身體を拭ふは大に身體に愉快を覺え熟眠せしむるの効あり。

◎又他の清潔の一として生後三ヶ月位を經過したらんには、小兒をして便器を與へたる時にのみ大小便を爲すの習慣をつけしめ



むべし、小兒は一晝夜に數回の大便と頻繁に小便をなすものにして此兩用は大に小兒の發育に關係あるものなれば、若し通じの工合惡しきと認むれば、直ちに醫師に報告し指圖を受くべし又大小の通じありし後には手拭を微溫湯にてしぼり局部を清潔に拭ふべし。

◎小兒の居るべき室は殊に空氣の流通を良くし、乾燥にして日光の當るところをよしとす、されど眼中に光線の入るが如きは避くべし、初生兒をして戶外に出すに適するは春の末より夏の暖かき季節ならば生れて二週間も經れば、これを連れ出すもよし、されど秋の末より冬へかけての候ならば生れて六七週間はつれ出すべからず、それも初めは三十分間に限るべし、目ぶしき所、又は寒暖の變化の劇しき所は避くべし、小兒の衣服は柔かにして寛く、清潔なるものを用ふべし、冬期ならば適度に衣服を暖めおきて、これを着替へさすべし、尤も夏冬とも、少しにても濕氣のあるものを用ふべからす、附紐等にて胸部又は腹部を強く締めつくるはよろしからず、襁褓は熱湯にてこれを洗ひ、清潔になしよく乾かしたるものを暖めて取替ふべし斯くの如く總ての點に清潔を貴び、育つる小兒には爛を生ずることなし、始め一週間の程は小蒲團の上に小兒を臥せしめ湯たんぽを入れ通常の溫度を保たしむべし、殊に寢居る間は衣類を輕からしめ手足の自由に働らく樣に注意すべし又夏季ならば蚊帳を

用ひて蠅蚊の來るを防ぐべし。

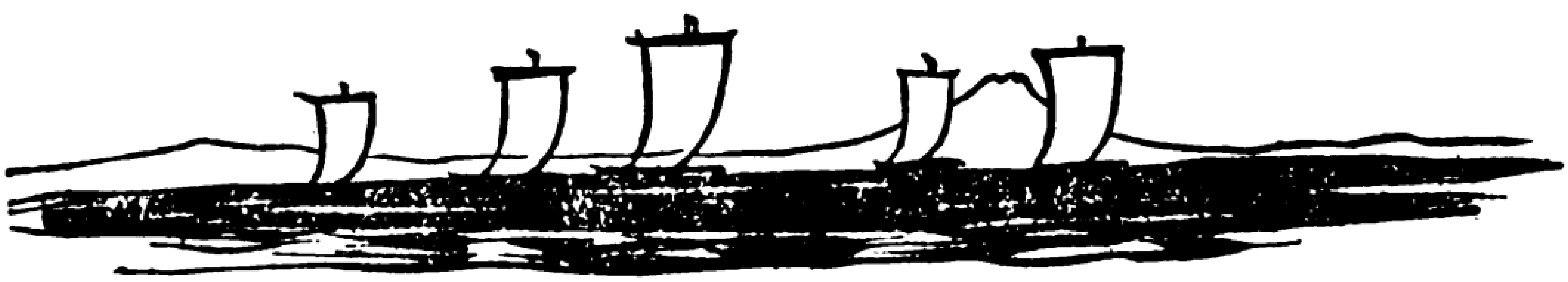
◎小兒の生れて數週を過ぎざるに乳の粉又はおも湯等にて哺育するは危險のことなり、此時には未だ小兒には齒もなく唾液の分泌は極めて少く胃腸は單一にして只管狀を爲すのみ、されば其消化作用の微弱なること思ふべし、かゝる固形分を與ふる時は小兒の腹部は堅くふくれ、大便は塊となりて惡臭をもち腹痛を起し虛弱となり遂に死に至るものなり。

◎小兒の口中に砂糖の粉を入れ又は砂糖水などを飲ましめこれを喜ばすなど往々有勝のことなり、されどこれは小兒の胃腸を弱くし食慾を減じ遂には身體の榮養を害するの源となるものなり。故に小兒生れて半ヶ年間位は乳汁の外何物をも與へざるをよしとす。

◎牛乳にて小兒を哺育せんとする場合には健康なる牛より搾りたる乳汁たるべし、牛乳は人乳よりも濃厚にして消化し難きものなるを以てこれを水にてうすめ、又甘味の少きところは砂糖を入れてこれを補ふべし其うすめ方は左のごとし。

生後三ヶ月間　牛乳一水三分の割
四ヶ月より六ヶ月まで　牛乳一水二分の割
七ヶ月より九ヶ月まで　牛乳と水半分づゝ
十ヶ月より十二ヶ月まで牛乳二分水一分

其後は水を割るに及ばず牛乳のみを與ふべし牛乳の薄め方は其



飲ます度毎に新たにうすめるべし、其溫度は人體の溫度と同一なるべく即ち三十七度位をよしとす。

◎牛乳は腐敗し易きものなり、故に是を蓄へんには一度沸騰せしむべし、まづ毎朝配達し來るものを其都度朝に夕に瓶のまゝに鍋又は釜に水を煮たて瓶の口を去りて煮沸すること半時間以上に渉るべし、此際蓋にて鍋又は釜をよく覆ふべし、煮沸し終らば牛乳は前の如く瓶口にて密封し空氣の侵入せざる樣になし瓶のまゝ冷水中に貯ふべし。

◎哺乳器は常に清潔に保つべし、是を用ひたる後は必らず其度毎に飲み餘りの乳汁あらばこれを捨て、其器とごむの吸口とを極めて叮嚀に洗ひ、猶これを暫時清水中に浸し置くべし。

又小兒を養ふによき生乳を得難き場合にはコンデンスミルクを用ふべし、されど其品を撰まざれば小兒の營養を全ふすること能はざるものなれば、よく醫師と相談すべし。

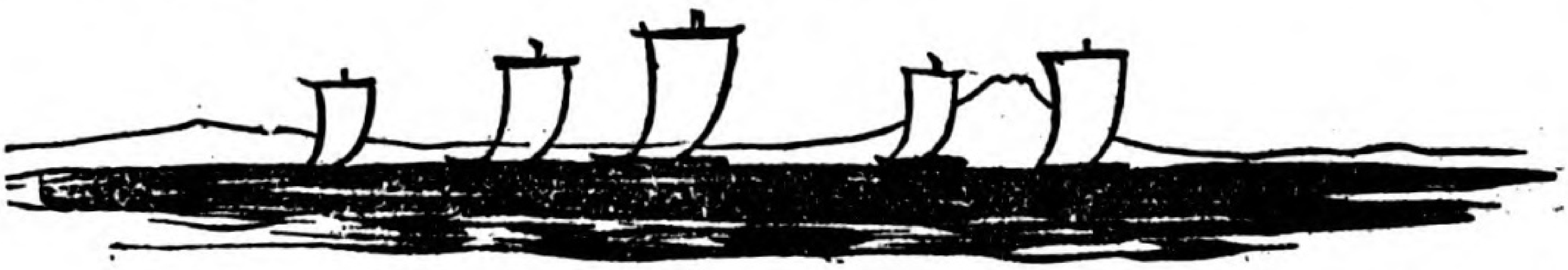
◎小兒に乳を與ふるに分娩の始めより一定の時間に從をよしとす、小兒の泣くに乳を呑ますは惡し、泣くに任せて猥りに飲ます時は小兒の腹中にて腐敗し或は吐き或は下痢など起すことあり、されば泣く場合をよく吟味して眞の空腹にあらざる時はこれを止むべし、此の習慣を作るは隨分困難なれども母は心を強くし感情を捨てゝこれを實行すれば小兒も遂にこれに慣るゝに至る、此の習慣は人生の諸規則を實行する初步にして最も大

切なるものなれば最初に不規則に慣れしめざる樣注意すべし。

◎生後一週間位は三四時間に一回、其後は二三時間に一回を與へてよし。又夜分も始めの内は宵と夜中と曉の三回位を度とし若し少し位泣きたらんには靜かに背をたゝき眠らしむべし、斯くして二三ヶ月後は夜の十一時頃と曉方に與へ以後は追々に與へざる樣にすべし此手加減にて子供も正しき規則になれば母子とも健康に益する處ろ頗る大なり。

◎小兒生れて半ヶ年位は乳の外は何物も與へざるをよしとす。されど七八ヶ月の後は乳齒を生ずるものにして唾液の分泌の量も增すものなれば乳汁と粉粥に少々の食鹽を加味したるもの又は鳥のスープ鷄卵を每三回茶碗に半分位づゝ與ふるの習慣をつけ離乳の準備をなすべし、而して一ヶ年以後に至りては以上の滋養物を一日に二回位となしなほ追々三回となし此間小兒に每日同一の物を與ふるも妨げなし大人と異り湯食の多きは却て害ありそれより十八ヶ月乃至二十ヶ月に至り全く離乳せしむべし。

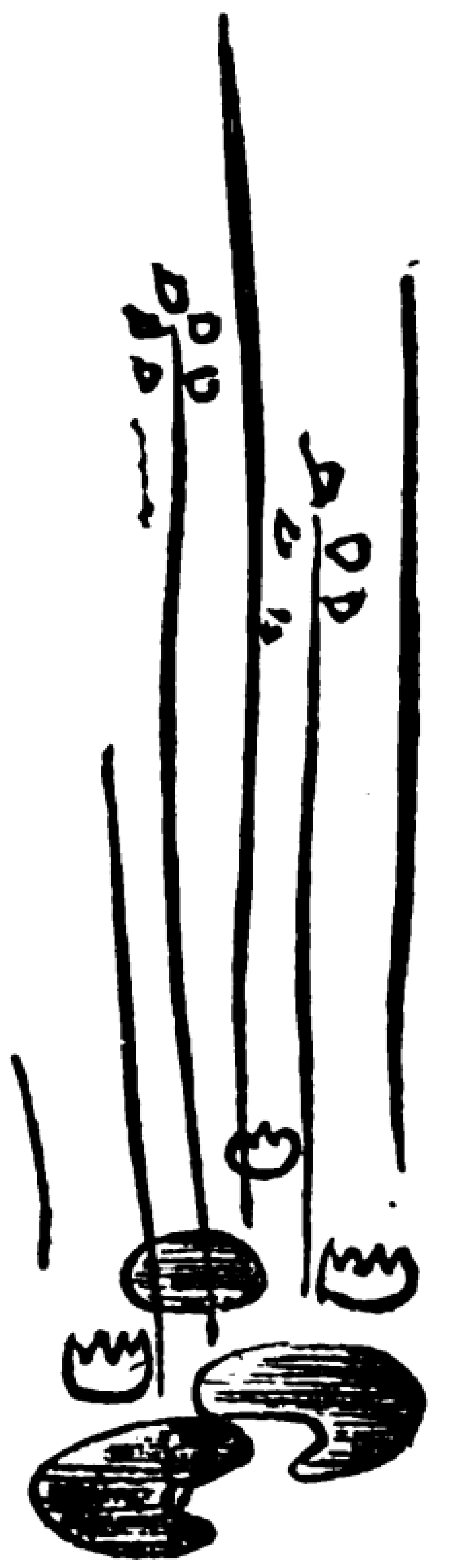
◎小兒の齒牙生ずる時は逆上の氣味ありて物を嚙み或は驚き睡眠より覺め、又は下痢を起し時々發熱し不穩を示す等種々の事あり此際病を惹起し易きものなれば、よく注意し滋養食を與へ皮膚を清潔にし、感冒にかゝらざる樣取扱ふべし、清き指にて小兒の齒齦をこするか、彈性のゴムの軟かきものを嚙ますは小兒に慰安を與ふる一方便なり。



◎離乳の後齒の出揃ふ時は咀嚼力も又出で消化液の分泌も盛となるが故に少しの米飯柔かに煮たる肉類新鮮なる野菜を混じて食せしむるも可なり。されど如何なる場合でも果物は大害を釀すものなれば四歲以下は斷じて與へざるをよしとす。殊にまた離乳せざる間はこの爲めに大患を釀す事あり。

◎小兒生れて三ヶ月間位は臥上に臥さしめ置くをよしとす、小兒自から頸をあげ又は身體を起すことを望む樣子の見ゆる時は靜かに抱きあぐべし、初めより強く身體を動かし、又はゆするは大に惡し、又ばねのなき乳母車に乘するも大に危險のことなりとす、漸々這ふ樣にならば、自由に遊び廻らすべし、但しあぶなからざる樣十分注意すべし。





紡績工女の寄宿舎

参観記

君子

新緑滴らんとする五月の初め、京都高野河原なる鐘淵紡績會社京都支店の工女寄宿舎に現時工女の監督を務めてゐる友人を尋ねて一泊して中を參觀しました。現時六百人の工女に五人の若い舎母がついて、懇切に世話して居られます。

一千の工女を優に入れ得る新築の四棟から出來て居る大寄宿舎は、行き届いて完備し、工女女學校小學校の敎場。何物をも原價で賣つて工女の便利を計る實業部。オルガン、バイオリン、蓄音器、琴、鬪球盤など自由に弄ばれる大娛樂室、整頓した料理室、人造石の大きい湯殿、結髪室、其の他面會人の宿泊所や、仕事服着換場迄、寄宿舎と言へば目白かお茶の水と指を折るものゝ、財を惜まず設備した此の寄宿舎には一歩を讓らねばなりますまい。――元より住む人に玉石の差は有りますが――。折から新入の女工に附いて來た其父らしい田舎の老人が「手前は仕合せだあ、家に居て見ろ、こねい立派な所は見る事も出來ねいだぞ」と十六計りの娘に申して居りました。

工女の部屋は十五疊に十人程。押入、箪笥、床など附いて居て、床の間にはどの部屋にも山水の軸に手際よく挿花がして有り、障子の破れや、着物のぬぎ捨てなど一つも見られませんでした、が晝間こそ皆工場へ出て居て清潔にキチヤンと整頓しては居るけれど夜は隨分せばつ苦しく、騒がしい事だらうとも思はれました。

高い二階の窓から見える京の景色、白布晒す高野川を隔てゝ西には糺の森が鬱蒼と、煉瓦作りの偉大な工

場の煙筒の東には高く聳えた比叡山が。「明朝早く起きて御覧遊ばせ、ソラあの高野河原の一本橋をね、大原女が花をかづいて並んで通りますよ」と舍母がいふ。

今日はすつかり工女の蒲團ほしと言ふので、會社から一人々々に貸與される名を書き入れた縞のふとんを五六人の人足が廣い運動場にほして居りました。此の寄宿舍は若き男子の出入を禁じられて有ります。

▲工女の食物

朝	晝	夕
味噌汁(豆腐)	[illegible] 高野豆腐	生さば
香の物	[illegible] 白豆昆布につけ	干ぴよう 煮付

寄宿舍で私が食した一日は、斯ふ言ふ獻立でした。元より料理の仕方は非常に不味ではあるが工女の食物としては結構なもので有ります。舍母、工女皆此同一食物を取つて居るといふ事で、先生も一緒ものを食べると言ふ事は、感情の融和を計るに効果あることなのでせう。

食堂にはテーブルが整然と並んで居る眞中を、レールが通つて六百の食物は迅速に運ばれます。朝は六時晝は汽笛がプート蒸氣を吐き出すのを待ち兼ねて、眞黒い仕事服着た工女達が息ぎれする樣な工場からドヤドヤと出かけます。ギッシリ詰つて食卓につく處は、丁度烏が澤山たかつて餌をつゝいて居る樣な——見る人に哀感を感じさせた。

然し一卷の社會學をよむよりも大なる眞理が、此處にひそんで居るかも知れません。

一ケ月に四度の休轉日が有つて、一度は工銀支拂、一度は婦人會、一度は料理會、一度は誤樂會、何れの休轉日にも修養の談話や、餘興や、茶話會が開らかれる相です。

▲夜の女學校

夕方五時過ぎには工女は寄宿舍へ戻つて參ります。靜かだつた舍は俄かに騷々しくなつて、誤樂室へ出かけて樂器をならす工女や、手拭さげてお湯へ行く工女や。廊下や障子にもたれておしやべりして居る工女

や、なか〳〵の騷がしさ。

七時から夜の女學校や小學校が初まります。學課は修身、讀書、作文、習字、算術、唱歌などで、まぶしい電燈の大きい講堂で、紫袴で勉强して居る所は全く工女とは思はれません、中には性質の好い熱心な生徒もあるとか、さればこそ鐘紡女學生と銘打つたのは聊か可笑みが感じられる。けれど他の女工よりハイカラで幾分氣位の高いのは事實でせう。學課は二時間で九時に就床。靜まつた夜に復習して居る讀書の細い聲も聞えました。

此の他點茶、生花、料理、裁縫、音樂なども志望者へは無料で敎へるといふ事です。



▲工女の趣味

以下舍母の話によつて記します。

十三四から這入つてこゝで育つた工女達は、比較的高尚な趣味、正しい考へを持つて能く働きよく學びますが、方々を流轉して來た女や、好い程の年になつてから事情のもとに入社した工女達は誠に哀れな女が多いとの事。多く物質的の趣味計りで、出來無い癖に美しい着物を着たがつたり。僅かなお金で買食ひしたり、或はひそかに情人を作つて逃走するとか、絕えず新陳代謝する六百餘の工女の中には、何時もこんな心配が舍母には絕えないとの事。

けれど此の樣な自覺のない女が無意味な、毎日の仕事に倦怠を生ずるのは無敎育な彼れらに取つては、責むるより寧ろ同情すべき事で、溫い同情を以て靜かに諭すより外はない。殊に道德的觀念の乏しい事は驚くべき程である。此の間も工女に面會に參つた母の姓名が其の工女の名前と違ふので尋ねて見ると、「ありや、わしの私生兒どすさかいなあ」と平氣の大聲で玄關で申したさうです。斯んな母に育てられた子ですもの、破廉恥の女が多いのも尤です。

凡べて家庭の境遇から來たのでせうが、進取の氣象のない事、勞働を卑む事、女をつまらぬ者だと思ひ込んで居る事なぞは、どうにかして改めさせたいと極力務めて居りますと舍母は語つた。然し一朝一夕の事では御座いません。全く舍母は獻身的に尼樣の氣で居なければ出來ない事です。

▲御飯のたき方を知らぬ工女が多い

下等社會に育つて來た女達ですから御飯のたき方や薪の燃し方なぞは上手だらうと思つて居りましたのに初めてお料理の稽古を初めた日には驚きました。

下等社會と云つても矢張り、程度や階級が有るもので、多くの工女は稚い時七つ八つから、もう金儲けの爲に他家の兒守をするとか、終日外で薪を拾ふとか、ハンケチの縁ぬいをするとか多く家庭には居なかつたもので、遂ひ一升の米にどれだけの水を入れ、どう薪をたいて好いのかさへ知らないで成長したので御座います。

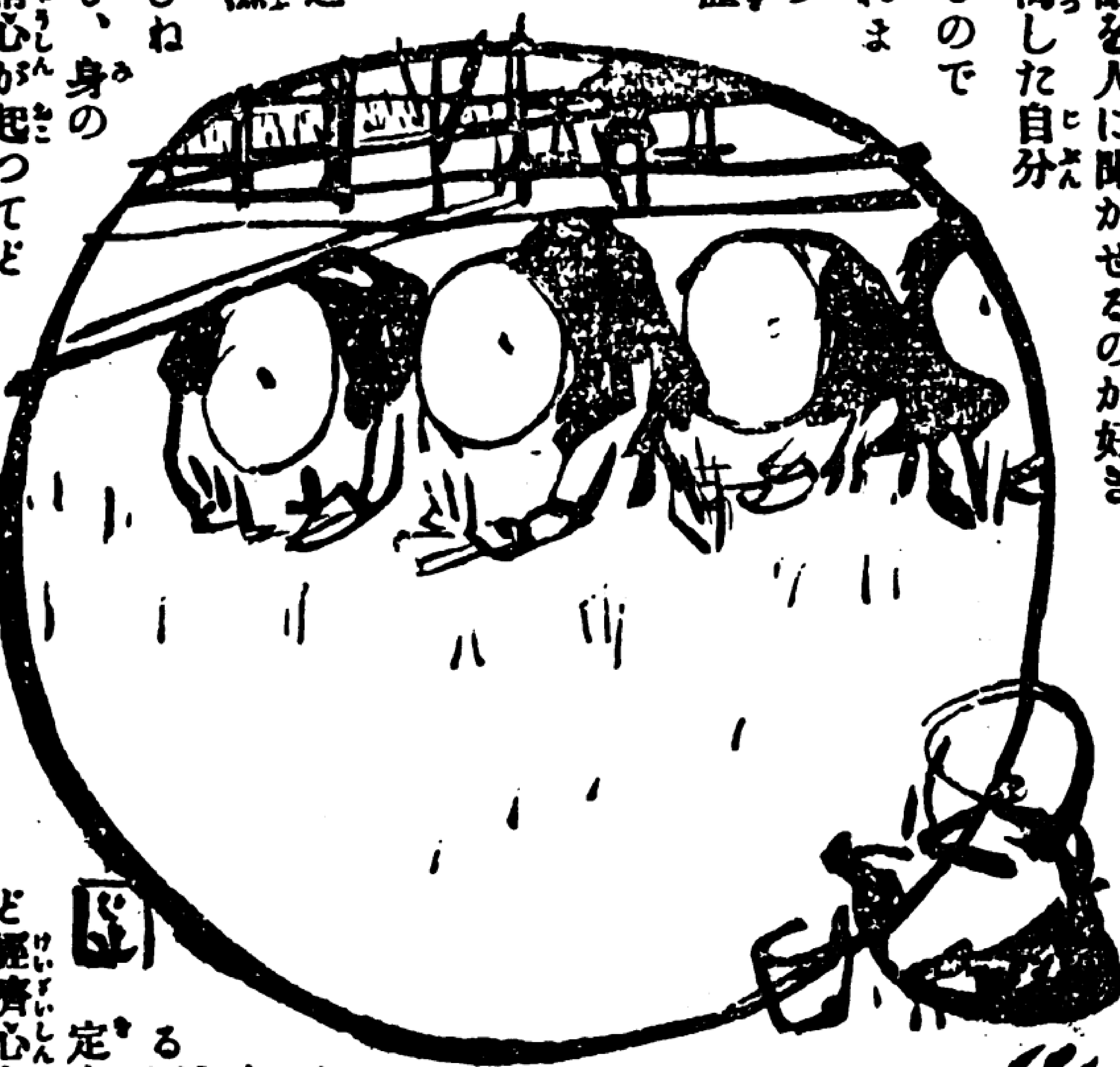
普通の學校の生徒なぞと違つて、敎へるにも、諭すにも、隨分な心くばりをせねばなりません。

元より此處は營利會社、工女は仕事をする爲に來て居る事を忘れてはならないので、如何に一人前の立派な女を作らうと考へたとて、一人でも恐らせたり、或は同盟罷工する樣な事が有つては、營利會社の主旨にもどるので、此の邊が頗る六ケ敷い所で御座います。

▲身の上話

夜になりますと、能く工女が身の上話に參ります、一般工女達は自分の身の上話を人に聞かせるのが好きの樣で御座いますよ。情に渇した自分の心に、同情を得やうとするのでせう――或は無意識かも知れませんが――何れも逆境に育つた女が多い樣で、小說的な歴史を持つて居る樣で御座います。

初め惡漢の誘惑にあつて方々の會社を流轉して來た女や、繼母の迫害にあつて逃げ出して來た女、父のない漁師の娘など、初め無作法なひねくれた女だと思つた工女でも、身の上話を一度聞くと、眞に同情心が起つてどうにかして良い方へ導いてやりたいとおもひます。隱さず言へば二月前、初めて私が此の寄宿舍の舍母



になりました時は、心では工女を愛する氣でも、乾度繼母位の愛情しか御座いませんでしたでせう。けれど今ぢあ、眞にお母さんの氣になつて居りますよ。

工女の日給で御座いますが、十四五の工女で十八錢から二十錢以上、二十歲以上のものは初めから三十錢以上で、本人の働きぶりによりて五十錢位はとります、月十三圓以上を取つて居る工女も澤山御座います。定まつた貯金、國元への送金など經濟心を養ふ爲に舍母が一々注意致して居りますが、二三年も務めると、立派に嫁入仕度の金が出來ませう。年齡は十四五歲から四十歲位迄有

りますが一番二十歳前後が多う御座います。兎に角、仕事に忠實で、忍耐力が有つて柔順な女が出世して行く樣です。

▲工女にはどんな病氣が多いか

所が好いからか餘り患者は出ない樣で御座います。私が初めてこゝへ來て感じたのは、凡べて女工の頰の赤くいき〳〵して居る事でした。個人衛生公衆衛生に注意する事と、尙一つは工場の夜業のないのが大なる原因で御座いませう。

多く病氣の種類は、風邪、氣管支カタル、肋膜、肺尖カタル、肺結核などが多い樣です。氣管の方の病氣の多いのは矢張り大勢工場に集つて空氣が汚いからのでせう。

病氣になりますと病院へすぐ入院させます。白いベットの上にやすませて看護婦が世話致します。脚氣はこゝには餘り無い樣で御座いますよ。

舍母に送られて玄關を出た時、丁度寄宿舍の前に建てられてあるペンキ塗の鐘紡病院の二階の窓から、靑白い顏の瘦せた若い工女が顖出して居りました。



雨後の月

無涯

◎さみだれ

さみだれは五月雨降るを略したのであるから、さみだるゝと活かして遣ふ場合もある、梅雨、又黴雨を書いてツユ又はツイリと訓むのも五月雨のことである。梅雨は梅の果實の熟する頃であるから付けた名なのでツユといふのも梅實の熟ゆる意だといふ說もあるが、水分が多くて濕氣るからツユといふのだといふ說もあつて、其方が親しいやうに思はれるそれで五月雨即ち梅雨期に入るのを入梅といふが、其時日に就いてもいろ〳〵の說があつて一定して居ないが、現今の曆では芒種（六月六七日

頃即ち陰暦五月節)後壬の日を入梅とし、夏至(七月六七日頃即ち陰暦六月節)後庚の日を出梅として居る、兎に角我が國では立春(節分)から百三十五日頃が入梅になるので、この季節間は雨勝ちで氣がくさ〳〵する、衣類諸道具は黴びたり、腐つたりして、何から何まで濕ぽくなる、殊に壁などは濕氣を受け易いので、貼つてあつた紙が剝がれたりなどする。

五月雨や色のつきたる壁の跡　芭蕉

古い壁の色の變つた中に、色紙の剝がれたあとが、四角にまざ〳〵と知れる、芭蕉はそこを詠んで五月雨の心持を現はしたのである。五月中は大抵曇天で降つたり、歇んだりして、雲切が滅多にしない、かと思ふと少しばかり晴間を見せることもある。

五月雨やある夜ひそかに松の月　蓼太

今夜も降つてるか、曇つてるかと思つて居ると、夜更に雲が切れて月が出て居る。それが丁度内所にでも顔を出して見せたやうなので、ひそかにといふ一語が大變に活きがある。

五月雨は降り續くものであるから、處々の川は增水して川止になることがある。

湖の水勝りけり五月あめ　去來

五月雨や大河を前に家二軒　蕪村

五月雨の大井越たるかしこさよ　蕪村

去來の句は琵琶湖のやうな大きな湖水が增水したのが、目につくやうになつた、もう今日で何日降つた、もう霽れさうなものだといふ、如何にも長雨のした心持が現はれて居る、蕪村の前の句は、大河が連日の霖雨で水嵩を增して、濁水が漲つて流れて居る、其處に草葺かなんかの小さな家が二軒ある、濁流は家の直前まで流れて居る、五月雨の河と二戸の家とを取合はして大きな景色を現したのである、後の句は東海道で有名な大井川を五月雨に越したのである、此川は雨が三粒降つても川止になるといふ急流である其川を五月雨に越した、かしこさよの一語で、川の流の危險なことや、もう少し後れると川止に逢ふのを、うまく越すことが出來たといふ意が現はれて居る。

此梅雨中に「黒はえ」「白はえ」といふことがある、從來の季寄の類には梅雨中の空合をいふので、今にも降りさうな空のやうに明るくなるけしきを黒はえといふ、小雨の降つてるうちにも、霽れるかとおもはれるけしきあるを白はえといふのだと解して居るが、これは間違である、「はえ」といふ南風のことで、伊豆や伊勢の鳥羽あたりの船舶に、陰暦五月梅雨の入りに吹く南風を「黒はえ」梅雨中ばに吹くのを「荒はえ」、梅雨明くのを「白はえ」といふ、それに東南風を「コチハエ」といふこともあるのであるから、空合でないことが解る「黒はえ」といふのは陰暦五月初旬に此風が吹くと、之れから曇り勝になつて天が暗くなるので、黒はえといひ、陰暦六月になつてから此風が吹くと、天氣が定つて晴天になるの

で、白はえといふのである。

黒はえに出て見る安房の岬哉　　雲々

◎時鳥

五月雨の頃になると時鳥が鳴き始める、此鳥は渡鳥で、春の末に渡つて來て、各地の深山中に棲んで、卵を鶯や頬白の巣の中に産で、其鳥に孵化させるといふ、虫のいゝ鳥である、それで秋になると、南方の暖國へ歸るのである、鳩位の大さの鳥で、脚は啄木鳥のやうに二趾は前を向き、二趾は後へ向て付いて居る、背は灰黒色で、腹は白くて黒い條が幾つもある、嘴は大い方で、少し彎つて、根元が黄ばんで、尖端が稍黒い。

時鳥鳴くや湖水のさゝ濁り　　丈草

時鳥が鳴いた、もう五月雨になつたさうで、湖水も少し濁つたわいといふ意である。

田植

勧農會といはれる杜鵑が鳴く頃に田植が始まる、苗代の苗を抜き取るのを早苗取といひ、その苗を本田へ植ゑるのを田植といふので、大抵五月下旬から、七月上旬半夏までを限りとしてある、田植をする女を早乙女といふと、此仕事をする頃は丁度五月雨で、天氣が陰鬱な頃であるが勢よく陽氣にしないと、收穫がよくないといつて、盛に歌を唄はせる、これを田植歌また田歌ともいふ。

汁鍋に笠の雫や早苗とり　　其角

雨に濡れながら苗を取て居るうちに、飯時になつたので、汁鍋の蓋を取つて、よそはうとすると、笠からぽたく／＼と雫が落ちたといふので實景がよく現はれて居る。

產月の腹をかゝへて田植かな　　許六

肩で息をしながら、忙しい時であるから、大儀な身體を泥水に浸りながら田植をして居て、農家の婦人の艱辛を極端に現はしたのである。

◎竹醉

竹を移植するには梅雨中をよいとしてある、殊に五月(陰暦)十三日を竹醉日又は竹迷日といつて、此日竹を植ゑれば必ず活着くものとして、竹植ふる日を名けてある。

降らずと竹植ゆる日は蓑と笠　　芭蕉

十三日頃はよく雨の降る日であるが、降らなくとも蓑を着、笠を被るのが、竹を植うるに相應して居る、竹の雫もかゝるし、降り易い頃でもあるからである。

家政顧問

△ほやの磨き方

ランプのほやは普通反古や布切などで拭くやうですが次のやうに致しますと一層美しくなります、まづ程よい棒の先へ海綿を括りつけ、これに水を浸せると丁度ホヤ一ぱいの大きさになる、この海綿を湯でしめしてホヤの中を拭きそれからよく清んだ湯の中で洗いあとを薄紙か柔かい布できれいにふきとるのです、ランプのホヤの磨きの足りないのは誠に見苦るしくかつあかりが判明しなくていやなものです。

△病人を慰める方法

健康な身の時はつまらないやうに思ふ物でも病気にかゝつた時に夫れがまた楽しみになるものです。何か美しい布で袋を縫ひまして、それに長い紐をつけどこか床の側にかけて置いていつでも病人が勝手に手を伸して取る事が出来るやうにしておくと大層便利です、袋の中へはハンケチなり鉛筆なりまた紙の類なり何でも病人の入用なものを入れおく、さうすると一々人を呼ばなくても事が足りまして便利です。また時に病人の眠つて居ります時などに一寸新しいものとか又喜びさうなものを密と入れて置いてやりますと退屈な病人は眼が覚めてそれを取出して見てどんなに喜ぶか知れません。



△雛鳥の育て方

鶏の雛はまだ身體が極やはらかなもので随つて消化力も弱いものですからこれにやる食物などはよく注意しなければなりませんが一番適當なのは粟粒です、よく小米などやりますがこれは成分の強過ぎる爲めかまた消化の困難な爲かどうも成績がよくないやうです。

△雌のかへし方

鶏の雌を澤山かへし度と思ふならば種鶏に澤山食物を與へてよく肥しておきますと經驗上雌が多く出ます。

△鐵鍋釜の澁ぬき法

新しい釜などよく鐵氣が抜けなくて困るものですが次の方法によりますと不思議によくぬけて仕舞います、先づ最初釜の内側にごまの油様のものを一面にぬりつけて置きます。それから打ね藁を一掴ほど釜の中へ入れて焼きます、焼けて仕舞ひましたらタワシでよくこすり次にその中へ大きな茶碗に灰を一ぱいほど入れそれで水を釜八分目ほど入れ、それを三十分間ほど煮たてるそ

してその汚ない水をこぼして仕舞ふと底の方へ泥のやうな灰が溜りますからこれをネルでよくこすり最後に清水で洗います今日買ひました釜を今日から用ゆる事が出來ます。

△眞鍮の磨き方

まづ磨うとする器に强度のアンモニア水をかけてブラッシュのやうなものでその上をよくこすります。それから清水の中でよく洗つて柔かい乾いた布で拭きとります。どんなに古くても又どのやうに汚れて居ましても大變に美しくなります。又淡錆のものならば時々お鹼を溶かしたお湯の中で洗ひまして、柔かな切で一旦水氣を拭き取り、それから淸潔な鹿の皮のやうなもので拭きますといつもきれいになつて居ります。

△敷物の掃除

店敷の敷物(カーペットの類)を掃除しやうと思へば先づマッチシヤを一面撒きまして箒の類でカーペットの地の中迄こすり、あとですつかりはき出す。かうしますといつも淸潔になります。

△テーブルの掃除

極薄い木綿を二三枚も合せましてよい加減の袋を作ります。其の中へ砥石の粉にしたやうなものを入れて香の好い油の中へ漬けておきます。この袋でテーブルを拭きまして、あとで、フランネルか鹿の皮かでよくみがき上げます。このやうにして置きますと一週間程は大變美しくなつて居ります。

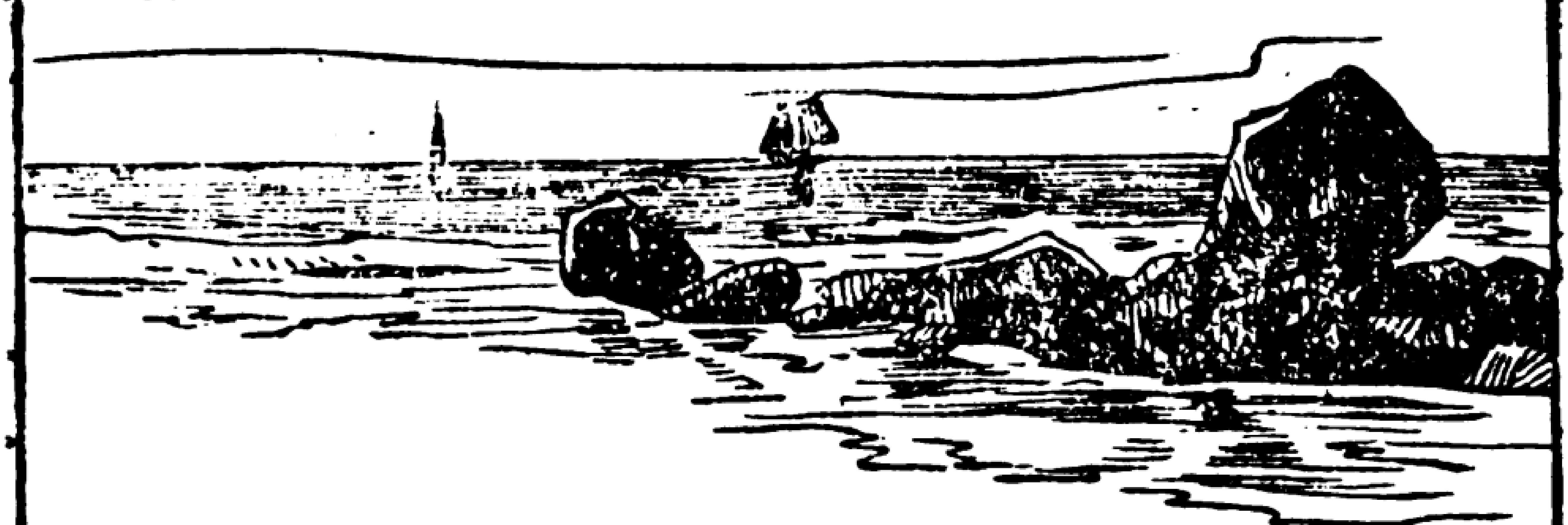


△指輪の手入

極質のよい歯磨粉を指輪につけましてよく磨きます。大分きれいになつた所で極度に濃い熱湯をふりかけて粉をすつかり洗ひおとします。それから櫻紙のやうな柔かな紙でよくふきます、このやうに致しますれど別に磨にやらなくつても立派になります

△金魚の病氣

金魚は大變に弱いものでよく落ち易ひものですが一體この魚が病氣にかゝると直ぐに極細かい白の斑點が尾や鰭や頭の方や又背中などへ出來ます。これを打捨てゝ置きますとぢきにこの斑點が一面に擴がつて落ちて仕舞ひます。ですから何處にでも若し白いものが出來たら早速それを少し强い鹽水の中へつけてやります暫時して鹽水から出して柔かひ布でふいてやり成べく早く白い斑點の無くなるやうにそつとふいてやります、そして今一度新しい鹽水につけて今度淸水にかへてやりますと、大抵の金魚はよくなります。



小說 紅き雲

踏波仙

松波さま、

妾は失禮ながら、貴郎を眞個の兄上樣と思ひ做して、玆に妾の胸に餘る悲哀のほどを聞え上げ、强て貴郎の御情ある慰藉の御言の葉を賜はりたく、淚に滲む文して申し上げまゐらせ候。

歿かりたまひし師の君の七々の御法會ありし彼の夜の歸途、現世に在しませし師の君のおん面影、悄に籠るおん言葉、眉長う髯眞白に、何時もやゝ色の褪せた紋服召して、少し猫背に胡坐の膝を搖らせたまひつゝ、運筆の事、傅彩の事、さては昔の畫の聖の逸話など物語りたまひしお顏もお聲も坐る眼のあたりに浮ぶ耳の底に聞えて、何かは知らず心に異しき寂寞覺え、夜淺き靑松寺の甃石路に、松は縱横に影を落して月明らかに、貴郎は漆紋の黃帷子凛々しく、襞高のおん袴を少

し裾短かに穿かせられ、短かき御佩刀のやうに尺八を挿したまひ、妾は、明石の羅に絽の帶して、貴郎と雁行に歩みを運びつゝ同窓の方々の早や山門の礎の邊に行くも遠く見送り參らする折から、そつと惡寒して血潮の指の爪先より凍り行くかとばかり、我れ知らず佇むを、貴郎は歩みを停めて眼鏡に月をきらりと映して回顧かせたまひつゝ、如何にせしかと仰せられて妾の手に御手を觸れさせたまひ、おう氷のやうだと宣まひし。

御情のほど沁々と妾は嬉しく思ひまゐらせし、されど其時より、妾は恙を得申し候、風邪にやあらん、夜は盜汗して朝な〳〵は頭の痛みて晏くも強て起きはべりぬ。伯母君は一向に心を痛めて醫師の許に行けといふを、兎も角も耐え居たりしに、昨日、夜更の門を慌たゞしく打ち敲きて、電報といふ聲に、早や臥りたまひし伯母君は、手燭を點す隙もなく、漆の闇に門をあけて受け取りしを燈火の下に妾と一緒に披らき讀めば妾とは從兄妹同志の故鄕なる駿州沼津の唐澤秀一といふが、急病にて死歿りしとの凶報にて候ひき。

夢かとばかり、聲も嗄れ涙も涸れて頓みには出でず互ひに持ち添ふ電信箋の顫きふるふばかりにて候ひし暫らくありて、伯母の君は始めて聲を揚げて泣き伏したまふ、妾も共に涙を呑んで泣き申し候、旋て伯母君は面を揚げ、緊乎と妾が手を握り、涙に光る瞳子を据ゑて妾が顏をつく〳〵と見戍りたまひて、友枝よ、あなたは疾うより其れと覺り居りしかは知らねども、まこと、秀一は、そなたには許嫁の夫にてあるよ、と聲を顫はして宣まひし。

松波さま。

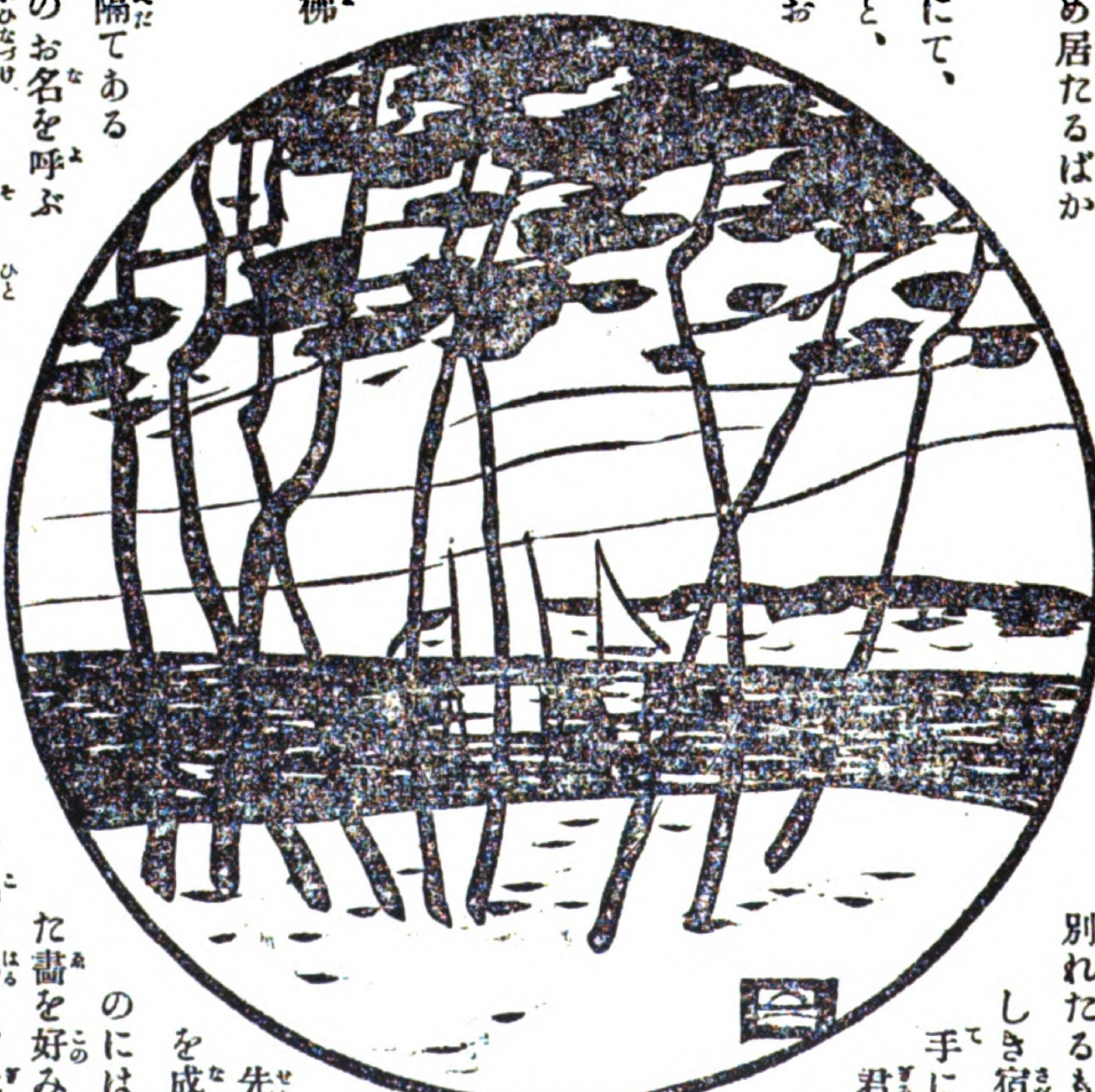
伯母君の、始めてそれと明したまひしを聞き、妾の心の中は如何にと思したまふぞ、胸に毒箭を受けしやうに、妾の五體は痲痺れ、双の手の指先より、血潮は引いて冷え渡りて頭へ〳〵と逆上る、兩方の耳の底にて、遠山寺の鐘の音を夜半の寢覺に聽きたるに、かん〳〵〳〵と微かに、響く心地は、逆上る血潮のたぎる音なりしなるべく候、人心地もなく唯だ蚊蚋の外に

跪坐まりて。霧を罩めしやうな燈火に、暈のかゝるをあだに視つめ居たるばかりに候。

伯母君は、朝の一番にて、新橋を立たせたまはんと、涙のうちにとり／＼のお支度をなされ、妾も夢うつゝに手傳ひ參らせ明くる間の短か夜を、共に少時臥戸に入れど唯だ涙のみ流れ出で、世に在りし人の面影はまざ／＼と眼の前に彷彿ふばかりにて候ひき。

淑夫さま。

松波さまとは餘りに隔てある稱へなれば妾は貴郎のお名を呼ぶを許させたまへ、妾が許嫁なりし其の人は、



貴郎に善く肖し人にて候ひき、夙く兩親に別れたるも、貴郎とも妾とも同じ悲しき宿命にて候。妾は伯母君の手に育てられ、彼の人は伯母君の實家に養はれて去年よりは京都の大學文科に入學いたし居り候。齢は酉なれば貴郎より四歳の弟、妾には三歳の兄にて候。日本畫の泰斗と仰がれたまひし故雲嶺先生の門より出でゝ今は洋畫の大家猪瀨青淵先生の高足として既に一家を成したまふ貴郎とは較べものにはならねども、彼の人も亦た畫を好みて繪はがきなど巧みに描き、此の春も、祇園の夜櫻と、嵐山と、都

踊との繪葉書をものして、妾が許に贈り來し候ひしをアルバムの中に秘藏せしが、圖らずも永き筐と相成り申し候、音樂にも趣味を有ちて、鋸の目立ならぬぐらゐにはヴアイオリンも奏で殊には貴郎が尺八を善く遊ばすやうに、柴笛を巧みに吹き申し候、貴郎が竹の歌口をうち濕して、濃きおん眉を少し顰められつゝ吹き込むおん息たとへば藕の絲の絶えなんとして復た續くやうに、旋ては飄搖と空行く雲の歩みを停むるばかり揚ると思へば、石走る水の咽ぶがごとく、おん指の働らきさへ蜻蛉の水に點ずるさまにして、おん唇の色は火と燃え初め、おん頬にも紅玉の澤を添へて三昧の御姿は、聢く人我を忘れて恍惚たるばかり、先つ夜の先師御法要のおん筵にて、早や衆僧の誦經も濟み、導師去りて後の禮盤の邊に、貴郎が恭しく跪づいて一曲を恩師の君の靈に手向けたまひし時、一門七十餘人何れも聲を呑んで泣かぬものなかりしに較べては、彼の人の柴笛は言ふべき限りには候はねども、誠に巧みに吹き申し候。

伯母の君の胸のうちに、彼の人と妾とに恥かしき約束ありとは夢にも知らず、去歳の夏の休暇の折、彼の人の沼津に歸りて千本松原に潮浴したるを、妾は伯母の君に伴はれ行きて伯母の實家に彼の人と逢ひ申し候千本松原には濱の觀世音といふがあり波靜かに月明き一と夜、彼の人と連立ちて御堂の邊に漫歩きいたせし時、彼の人濱萬年青の葉を採りて柴笛とし、何とは知らず永き一曲を吹き申し候、松風も波の音も鳴を靜めし心地して、中天の月さへ少時は御堂の屋根に憩らふかとばかり、妾は其の時言ひ知らぬ悲哀を覺えて、覺えず涙を落し申し候、今になりて憶ひ回らせば、一すじに思ひわたれる彼の人の心の誠の、柴笛の音を假りて妾の心を動かしたるものとは知られ申し候。

くちをしきは伯母君にて候、然れど今は言ふも詮なし、妾が許嫁たりし人は、先頃より脚氣を病みて居たまひしと聞く、恥かしき仲と知りなば、直にも行きて心の限り看護にいそしみたるものを、三日の後には彼の人は骨となりて、東京の菩提所に葬られることゝな

るべく存じ候、伯母の實家も、旋ては都に移り住むなるべしと思ひ居り候。

淑夫様。

彼の人に背たまひし貴郎に、妾が胸に溢るゝ此の悲哀を分ちて、温かき慰藉の御言の葉を賜はりたく偏へに念じ上げまゐらせ候。

貴郎に始めてお目に懸りしは、去歳の秋、上野に開かれたる先師門下の展覧會の折、山王臺の清水觀音堂にて、師の君よりの御紹介ありしにて候、千本松原のも同じ觀音堂、山の樣も略相似て、



唯だ不忍池を海にしたるのみの違ひに候。

今宵六時の鐘を相圖に、清水堂にておん目に懸り候ことをお許しあらば、嬉しく存じ上げまゐらせ候。

月も好とこそ覺え申候、霜など布き候へば、堂の下より池にかけて辨天堂は海の中の小島とばかり、向ケ岡の灯の影は、海の彼方の伊豆の濱の漁火とも眺められて、坐ろ亡き彼の人と去歳の夏の夜、袖ふりはへて眞砂の上の漫歩きの思ひ出の料とも相成るべく候。

重ねて申し上げ候、今日の黃昏、大佛前の鐘樓に腰

法衣の人その撞木の綱を手にして、六の鐘の初めの一聲の林を穿ちて聞ゆる時を相圖に、貴郎が先か妾が先か、淸水堂の勾欄に身を憑せて、待つ、待たるゝ時にこそかしこ。

今宵は月定めて好かるべしと思ふ日の朝

友枝より

松波淑夫様まゐる

友枝さん、僕は貴女にお目に懸らなかつた方が好かつたと、今更臍を咬んで居ります。

貴女は僕から慰藉の言葉を添て、限りなき悲哀を解きたいと仰有つたが、平日から寡默の僕は、言葉の文に織りなす心の誠の經緯の技も知らず、貴女の懐く悲哀も、ます〳〵深く大きくならしめたことを、恥ぢ且つ悔ひて居るのです。

友枝さん、僕は貴女の御決心を黄昏の淸水堂の勾欄の邊で伺つて、其の高潔にして且つ勁烈なるに感動しました、其のお言葉を聽いた時の刹那に、恁ういふ感じが致しました。

花ならば貴女は女郎花。

實に貴女は女郎花！

今日此の頃、秋淺い僕の僑居の小庭に、女郎花が咲きました、女郎花は憐れ深い花ですよ、姿の優しい花ですよ、弱々しい花ですよ、寂しい憐れな花ですよ、

僕は秋の草花のうちで、此の花を最も好みます、誠に憐れに優しく弱々と、寂しく哀れな花ですが、花自身は善くそれと観念して居て、篠をも頼まず竹にも倚らず、亭々として獨り天下の秋に立つて居ります、運命は儚ないもの、時の力は強いものと覺りながらも、露の下、風の前、嫋々として折れず撓ます、一片勁烈なる心を持して居る斯の花は、採つて以て貴女に喩へ得ると信じます、僕の駄句に。

今宵より露白からぬ女郎花

こは唯だ女郎花の皮相觀、更に一句。

天が下の秋に立ちけり女郎花

句は頗る拙ではあるが、稍や此の花の精神を言ひ現

はして居かと思ふ、其の花に善く似た貴女はまた、振分髪の時に父君母君にお別れなすつて、伯母君のお手に育られ、今までの種々の御艱難、浮世を涙の谷と申します、業風吹き遍ねき活地獄、迦婁羅の炎の其の中に一朶の紅蓮となつて貴女が、孤獨な、寂寞な、幽寥な獨身生活を續けて自家の運命を開拓しようといふ其の毅然たる言葉を聽いて、僕は貴女の心事を推計り、哭し且つ慟せんとするのです。

獨身生活！　僕はこの語を女性の口から聽く毎に、身を掩ふて戰慄するのです、自然は孤獨を許しません、人世の意義は相對です何故貴女は敢て人生の半面とする岑寂・幽寥の境地に其の身を置かうとなさる、戀に破れた人、望みに敗れた人、僕は不敏にして未だ貴女の其の人たるを信じません。



友枝さん、僕は貴女の高潔にして勁烈なる意志を敬畏すると共に、貴女に人世の光明境に倘佯することを衷心からお勸めいたします。

藍色の水、碧の蓮の葉、白い橋、朱い辨天堂、折から夕榮の雲紅ゐに水に浸して楕圓形の不忍池は宛ら大きな調色板のやうに看えました、來客に妨げられて、定めの六時を過しては一膝に車を驅つて石磴の下で乘り捨て、時計を見ると六時を過ること十五分、慌たゞしく清水堂へ驅け上ると、朱の勾

欄黄昏れて紫に限どる邊りに物思ひの風情に立つた貴女の姿、例時のお髪に變つて昨夕廂に結げられたのが、金峰の三枚櫛を花の謎にして、仙家の庭に在りと聞く黒牡丹の頽れ咲くやう、愁に寂びた御顔を俛むかせつゝ僕を見て涙ぐむ貴女を見て、僕は唯だ言ひ知らず悲しくなつた。

木の蔭に又た露床の上に、秋淺い夕を遊ぶ人達は、貴女と僕とが袖ふりはへて遲々として歩み且つ語るを見迎へ目送つて、嫩い血を戀に沸した相歡を味はうものと思つたでせう、貴女の日頃を善く知るものや、僕の平生を善く識つた人であつても、黄昏の人の往來も稀れな木立の奥へ／＼と徘徊ふ二人を見たなら、乾しがたい濡衣の、あらぬ浮名は旋て世間に立てられるであらうと、貴女の爲め又た僕の爲めに、少からず心を痛めました、東照宮の五重塔を一匝して廟の後の小逕を降り、辨天堂から觀月橋の中ほどまで來た時は、山王臺の杜の蔭から、眞珠の色の底光りする一道の白氣天に昇ると見えたは、正しく月昇るの初めでありましたね。

石の勾欄に身を靠せて、秋の宵の冷々と沁る時、貴女は神秘な、幽遠な、深く遙かに透き徹つた美しい眼を揚げて、凝乎と月を仰ぎながら。

「什麼したつて妾は孤獨よ！、妾は孤獨よ！、孤獨よ！」

と、初めは緩く、中ごろは稍ゝ急に、終りの言葉は更に短かく、三たび重て仰しやつた時、僕は言ひ知らぬ悲愴の感に撲れて、この上は早や什麼なる言葉をもて、貴女の悲哀を解き貴女の決心を飜がへすことの出來やうかと覺えず涙を呑んだのでした。

無言に歩みを運んで何時しか復たも清水堂畔、貴女は頻りに渴を訴へられる、茶屋は早や灯を下して戸を鎖した、滿地の霜と布く月を踏んで、秋色櫻の蔭の井筒の上に、誰が酔を醒したか危ふげに置かれた釣瓶を覆して、新らしき水を汲み上げ、先づ貴女に參らせて後、僕も同じところに居、地の底にも秋ありて、一味幽牙に沁み渡つた、時の心地。

日本醬油



色澤香味共に純良最も調理に適す

●ウメニホン印甘露醬油は弊社獨特の再製品にして品質濃厚、香味佳絶生醬油として使用するに適し又「ソース」代用として極めて妙也

●マツニホン印は品質優秀香味佳良にして滋養分に富み普通一般の最上醬油に一頭地を抜き極めて優等の品なり

●フジニホン印は品質最良比較的價格低廉にして剤の利く頗る徳用向の品なり

●山サ、龜甲萬等と御使用比べの上優劣の御判定を乞ふ

(わの一)

日本醬油釀造株式會社

京橋區本八丁堀櫻橋際
東京出張所
電話新橋長三一一四、四六八、二三三五

大阪市南區新町橋東詰
大阪販賣所
電話東一三四五

女(わの三)

▼中學世界主催 學生演說大會記事

參聽者開會前より已に滿員となり、委員必死となりて入場を謝絶したるも、刻一刻、都下の各方面より蝟集し來れる諸學生團體は、洪水の如き勢ひを呈し、終に警官の手によりて鐵門閉鎖を斷行せらるゝに至る。この大景氣を以て迎へられたる吾が學生演說大會は、結局如何なる成功を收めたる乎。當日建部博士、安部氏、大町氏は出席の學生辯士の勇辯才辯に舌を捲きて曰く、『吁々今日の青年は眞に偉い哉』と。以て其の一斑を察すべし。二三記者の快筆は、出張畫家の會場スケッチ、寫眞師のレンズに入りたる材料と相俟つて、縱横の描寫、感興甚だ多し、更に又、學生諸氏の演說に對しては、大町氏安部氏の忠實なる批評あり。

本號必讀の文字

本誌の擴張と讀者の增加

英語世界

第三卷第七號——六月五日發行

▲毎月一回五日發行
●菊判舶來上等紙六十八頁
●毎號口繪及刷込寫眞版入

第四號要目

○英譯「大和心」二篇
○英語研究の方法
○和歌英譯筆蹟
○譯註「秘密」
○短篇小說講義
○英作文の手引
○英譯小品文
○西洋の謎々
○解釋の練習
○獅身像の下
○慣用句の使分
○西洋笑府
○春の式部
○對話一篇
○シャルとウヰル
○商業用英語
○入學試驗詳解
○東京高師英語評判記

岡倉由三郎　和田垣博士　深澤由三郎　今井信之　元田作之進　武信由太郎　佐川春水　増田藤之助　石川祐助　前田忠義　長井氏晸　青柳みどり　脇豐藏　武信由太郎　今井友次郎　横地良吉　河岡潮風

▲初學欄……記者擔當
○舶來語の發音　○ナショナル第一講義
○時文研究　○懸賞判讀
○英文通信　○讀者手帳
○學校消息　○懸賞披露

第五號增刊●解釋と翻譯（目次略す）

第六號要目

●余の英語研究談　岸本能武太
●英譯「暮春」　武信由太郎
●譯註「恐ろしき一夜」　深澤由次郎
●解釋と翻譯　佐川春水
●短篇小說講義　今井信之
●山口高商試驗成績講評　奈倉次郎
●山口高商試驗詳解　横地良吉
●獅身像の下　石川祐助
●解釋の練習　増田藤之助
●慣用句の形式　伊藤彌門
●英作文の手引　元田作之進
●商業用英語　今井友次郎
●慣用句の使分　前田忠義
●正則英語評判記
●神戶高商英語受驗談　河岡潮風
●英文筆蹟　岸本能武太

▲初學欄……記者擔當
○ナショナル第一講義
○時文研究　○懸賞判讀
○英文通信　○學校消息
○讀者手帳　○懸賞披露

第七號要目

（六月五日發行）

○英書簡筆蹟
○譯註西洋怪談
○和文英譯作例
○英語の研究法
○短篇小說講義
○英作文の手引
○外語校試驗講評
○山口高商講評
○神戶高商試驗詳解
○慣用句の使分
○英語の謎々
○解釋の練習
○形容句の研究
○獅身像の下
○會話作文資料
○商業用英語
○英語評判記
○外國語學校英語受驗談
○初學欄——ナショナル第一

井上十吉　深澤由次郎　武信由太郎　佐藤顯理　今井信之　元田作之進　村井教授　ガントレット　深澤由次郎　前田忠義　松浦政泰　増田藤之助　横地良吉　石川祐助　笹岡民次郎　今井友次郎　河岡潮風

▲大懸賞署名判讀發表
○時文研究○英文通信○學校消息○各種懸賞新課題

▲正價金拾錢郵稅壹錢●前金十二冊金一圓十錢六冊金五十六錢…外要郵稅

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　振替口座東京二百四十番　博文館

前田閑亭君著 ●



全一册洋裝菊判
紙數百六十二頁　口繪石版畫挿入
正價金二十八錢
郵稅四錢

抑も小獸鳥魚の飼養は、家庭娛樂に最も好適し且つ高尙の品性を淘冶する等諸多の方面に益すること尠なからず、就中清靜にして優雅なるを金魚の飼養とす、蓋し金魚は池沼汚泥中の一產物なりと雖も、容姿纖麗にして嬌柔愛すべく、園池の美觀、室內の裝飾上缺くべからざるものなり、近時歐米各國此魚の飼養流行し、一尾數百金にのぼるものありと聞く、然れども金魚は飼養宜しきを得ざれば、忽ちにして斃死すべきに依り之が飼育には頗る注意を要す、著者は父祖以來此等の娛樂を好み、古來よりの傳說と實驗とに基ける飼養の方法を記錄したるもの一册をなせり、之を輯補して世に公にす、幸に養魚家の參考となり、併て家庭娛樂を裨益する一端とならば足り。

發兌元　東京日本橋本町三丁目　博文館

婦人界に好評を得たる

田村江東君著

◉活動せる實業界の婦人

全一册洋裝菊判紙數二百四十頁
卷頭實業家婦人寫眞版挿入
正價金三十八錢　郵稅八錢

（內容）

△勤勉力行の化身…三枝かれ子△文明の美化…菅川英子△發明家の妻…仁科彩子△內顧の憂なき婦人…山崎ため子△獨立自尊の標本…篠原よれ子△隱れたる偉勳…川合こう子△黑りボン…伊藤なか子△時計の針の挑みなき妻…服部まん子…△夫婦共勳の醫師…篠田せい子△白牡丹の姉妹…松田八十子大西琴子…△寧ろ襁衣を縫はん…秦利舞子△準備の教育を受けし嫁…佐藤歌子△才德兼備の寶妻…龜井まき子△商業教育の產物…富成梓子△福德圓滿の內儀…横田鐵子△商寶繁昌の秘訣…內田とめ子△夜店の女書肆…片桐なか子△實踐躬行の才女…山崎きみ子△白芙蓉…丸茂宗子△此母にして此嫁あり…大橋きよ子△妙齡の女書記…秋山德子△中洲の西大后…佐々木賴子△光榮ある襁衣の元祖茂野蝶子△實業家の理想的婦人…雨宮信子、同てる子

福田琴月君著

◉當世奥樣氣質　再版

洋裝四六判紙數二百頁　正價卅錢　郵稅四錢

（目次）

◉奥樣十種
◉人の噂
◉結婚前の某孃に答ふ
◉大みそか
◉土產日記
◉奥樣となる事は易く奥樣たる事は難し
◉あはれな誇り
◉會社員の奥樣
◉母より
◉霜夜
◉奥樣の失望
▲餘興
◉滑稽殿の蒲燒

東京本町　博文館　振替口座東京二四〇番

女(わの入)

友枝さん!、

貴女は僕を眞個の兄のやうに思ふと仰しやつた、力なき僕を斯ほどまで思つて下さるかと思ふと、欣幸に堪へません、僕も亦た貴女を衷心から骨肉の妹と思つて居ります。

心も濁く氣を爽かにして、僕の言葉を聽いて下さい。

杉野友枝樣　淑夫

旅僧も尾花も荻も野分かなといふ寂しい冬が參りました。

女郎花も到頭枯れて仕舞ひました。



淑夫さま、先頃から木曾路のお旅、臨川寺の寢覺の床の御繪葉書、難有く頂戴いたしました、時雨の夜半のお寢覺の折、暫時にても妹が身をお憶ひ出でになつたことは身に沁々と嬉しくお禮を申し上げます。

昨日今日あたりは御歸京のお日取りと焦れ〳〵て待ち上げ居ります。旅の勞れも嘸ぞやさぞ、三月あまりに亘る繪行脚に獲て還りたまへる山川風物、さては旅衣をり〳〵の面白きをかしき御話など伺つて、寂しい今の身を忘れたく存じます。

一昨日は亡き彼の人の百箇忌日の法要を敬蓮寺で致しました、法の筵には伯母と妾、伯母の實家の二三人と思つて居りましたとこ

ろ、兼て名のみを聞いて居てまだ一度も逢つたことのない彼の人の弟といふが、意外にも列席し、しかも妾の隣に坐つて、焼香の折には伯母が先き、次が妾と立つ時に、其の人も妾と一緒に香を拈じて、香卓の前に肩すり合せて跪づくのでした。

何といふ無作法な人でせう、高いダブルカラーに玉蟲の琥珀のネクタイ、業々しい眞珠のピンを挿して、髪を眞中から分けて縮らせて、揉上を剃り落し、鼻の背に皺を寄んで鼻眼鏡を載せ、巨蟹の脚のやうな毛の生えた節高の指に、鈴木主水といふやうな珠の指環を嵌めて、咽び返るやうな香水の薫ひをさせた其の顔は其の姿は、少しも彼の人の面影はありません、眞箇に眞箇に彼麼厭はしい人つたらありません。何故伯母は這麼厭な人を妾に内處で呼び寄せるのでせう、故郷の師範學校に居た人で、今は靜岡で教師をして居ると申しました。

淑夫さま、妾、矢張、孤獨が好うございますわ、眞箇に孤獨が好うございますわ、什麼しても妾は孤獨ですわ、寢ても覺めても唯つた獨、此頃は如何したのか夜も安らかに眠まれません、一昨夜は風、昨夜は雨、有明の燈に蟲の寄るのを、

　獨寢の灯に這ひ上る蟋蟀かな

など、獨で泣きました、此の頃は泣くのが大好、泣いて居るうちは、胸に蟠まる悲哀が溶けて流れて出るやうな心地がして、跡で霽々いたしますの。

御存知の香蘭女史、昨日珍らしく來訪、妾を一瞥見て、まア什麼か遊ばしたの、久しくお逢ひいたさぬうちに其のお窶れはと申しました、彼の人の身歿りし以來、頓と忘れた鏡臺の塵を拂つて、燈に背いて夜の闇に始めて自分の顔を看めた時は、まこと我ながら驚かるゝ窶れ方、松波さま、お目に懸つたら嘸ぞお驚き遊ばすでせう。

何事もお目もじの上、ご歸京あそばしたら、直ぐお知らせ下さいまし、此頃は繪具皿も乾いたきり、せめては旅に獲られた豐かな畫材でも拜見して其のお話しを伺がひたいと念じて居ります

けふ　枯れたる女郎花より

淑夫様

一昨日歸京仕り候、主人待つ机の上に麗はしき水莖の跡の一封、取りもあへず拜見いたし候。

今日までお知らせ致さゞりしは、門を閉ぢ客を謝して、旅中に獲たる畫材の整理につとめたる故にて候、明朝よりは柴扉鎖さすことなく風の儘に開閉し、月の儘去來するに任せ申し候、何時にても御來車御遠慮は御無用に御座候。香蘭女史御



同伴ならば、最も妙に存じ候

御手紙によれば、近頃は酷く泣蟲にならせられ候よし、至極結構と御悦び申し上げ候、先頃あれほどお強いことを仰せられた貴女が、到頭本音を吐かれたること、誠に喜ばしく思ひ居り候、此の上とも更に更に泣き蟲になるゝことを希望いたし候、貴女が孤獨の煩悶から超越しやう、解脱しやうとして居らるゝ其の內兜を小生は確かに見透し申し候、過去に

四はれたまふな、未來を危ぶみたまふな、早く〳〵人世の眞意を悟りたまふて、天の心に從ひ、女性たるの職分に一直路に猛進遊ばされたく候。

此の度は木曾路より飛驒、越中とさまよひ歩き申し候、木曾路は中央線の工事中にて、この四五年うちには昔の驛路の様もがらりと相變り申すべし、唯だ飛驒は、昔ながらの風物まことに嬉しきことに候、狙口藤といふを編みて籠として、溪を隔つる村と村とが往來する籠の渡し、葛羅を編みて架けし釣橋、夏にても青葉が露も薄氷るといふ高き山々は天にそゝり立ち、掬びなば十指の爪も藍にや染ると思はるゝ谷川の亂れ流れて、嵐礫く雲白き邊を、輿馬意に任せて旋々として行くの興は、何とも申しがたく、籠が峰といふところは春の末より梅雨の晴るゝまでにかけて、大角豆よりも長き山蛭の人の跫音を聞きつけ、晝も暗き繁みの枝より降りて旅客を惱ますところなるが、小生の其の山を馬に騎りて踰えし時は、恒河沙の數知れぬ蛭、人を襲ひて面も向けがたく、馬子は青草を焚き、其の烟もて馬の腹より薫べ、手に篁竹を打ち振り〳〵攘ひ退けて、進み行き申候、何さま怖ろしき山ながら、峰を極め候へば秋闌はなる千種の花の繚亂と、花の海は天に接して擴り居り、花を押し分けて進み行けば、右左より路を擱め袂を扣く、實に廣漠宮裡の仙妃が、手に〳〵醍醐の瑤瓶を持ちて、紛々として天降り、この雲中獨往の客を擁して、聊か遠來の旅情を慰はんとするかを想はしむるばかりに候。

溪谷の美は越中に近き西茂住の諏訪谷とこそ覺え候其の高閑幽遠の景は正に天下に比儔なかるべしと思はるゝばかりに候、湫潭の鑑冉び余を招くの意ありて、復游の縁更に相會契することあらん時は、縱溪邊の茅茨を結んで廬となすとも、幾日を此處に暮して、此の溪山の大觀を收攬せんかと思ひ居り候。

「伊勢の編笠、ふりに好や、枕にも好や」などいふ古雅な俗謠も木の實拾ふ乙女等に歌はれ居り候、欅の新芽の心といふ字に萌え出でたるを摘み採り、淸き谷川より赤きと白き二種の小石を拾ひて、共に包み、己が

好める人に贈りて戀すてふ證しとする「思葉」といふをかしき風習もござ候、深山の三家村に宿りし時は、貴賓に饗すとて米の飯を炊きて進め呉れたるは好けれど、碗に稗と麥とを和せ炊きたる飯を盛り、其の上に淺く米の飯を掛けて出されるにはちと驚き申し候、米の飯を鍍金にしたるにて候。

この外、面白きこと、をかしき事お話の種子は無盡藏に御座候、何時にても御來車待上げ候、ならば香蘭女史をもお誘ひ合されて、御好物とか承はるお鮨もじも、田舎に似合ず、近頃界隈に旨く進める新らしき店も出來候。



友枝さま

淑夫

一昨日は妾のみか香蘭女史まで伴ふて參上、御心盡しの御馳走にあづかり難有く御禮申上候。久方ぶりの御目もじ、唯だ譯もなく嬉しく心の異しく跳るばかりにてござ候ひき。おん旅のをりをりにものしたまへる數多きスケッチは、貴郎が旺なる御精力のほども窺はれ、殊には彼の諏訪

谷とやらの御大作は、未熟なる妾の口から申し上げ候は、烏滸の至りとは存じ候へども、誠に〳〵非凡なる御作と唯だ〳〵驚嘆するばかりにてござ候。此の御作明年彌生の頃、上野の展覽會へ御出品あらせらるゝ時こそ、應しく一山萬朶の櫻花も、其の顏色を失ふばかりに、二十四番の春風は獨り貴郎の御作の邊にのみ吹くべきは申すまでも候はず、貴郎のおん譽れは固よりおん交りを辱なふする御緣につながる妾ども、如何ばかりか喜ばしく候ふべき。

愛でたき御作の數々を拜見し、山水風物面白き御觀察のおん話しを承はり、日頃の我を忘れ候やうに、泣き蟲と相成り候妾も斯の日ばかりは笑靨たべし人のやうに、心も綻び申すべきかとばかり、寒月のお庭の霜におん見送の灯を背にして、御門を出で候後も猶ほ恍惚と夢心地に御座候ひき。

過去に囚はれて、未來を危むな、ひたすらに人生の意義に順ふて、解脱せよ、超越せよとの御戒めも、身に泌々と嬉しく存じ上げまゐらせ候。妾は正しく人生の岐路に佇づみ居るものにて候。正しき道に道標したまふは貴郎、愚なる妾にては候へども、やゝ覺るところもこれあり、御戒めのほどを胸に彫りて、永久に忘じ申すまじくと、覺悟いたし居り候へども、茲に又た妾が進め行かんとする道に當りて、そを妨ぐるもの現はれ申し候。

昨日の朝、通運會社の朱き車、妾が門に停りて、トランク二個、夜具の薦包一個を送り屆け來り候。異みて伯母に質し候ひしに、先頃申し上げ候靜岡の彼の人職を辭して上京し、來春は東京の學校へ勤むることなりと、今より五日の後には來るべしと始めて仔細を物語り申し候。亡き彼の人の法要の夜より、三日の間妾が家に宿りて、ひたすらに妾が歡びの心を迎ふるやうな活智なき振舞苦々しくも亦た怖しく、蛇と一緒に居る心地いたし候彼の人、亡き人とは血を分けし同胞ながら似ても似つかぬ其の容其の心、其の人が五日の後には、來りて久しく妾が家の客となるにて候。心顫き身體は震へ、唯だ〳〵悲しさに聲を呑むばかりに候

恨めしきは伯母の君にて候、双親なき後の母となりて、今まで育み呉れたる伯母ながら、勿體なけれど恨めしく又た恨めしく存じ候、斯くて妾が身の行末は如何なるべき、まこと妾が身の行末は如何なるべき。

淑夫さま。

伯母の心は明らかに妾の眼に映り申候、什麽にして咒はれたる妾が運命より解脱さるべき、恩の絆、義の足枷、妾は今や身搔きもならぬ鐵の獄のうちに血に泣く境遇と相成り居り候。

兄と思へ、妹と思ふぞと宣まひし貴郎、妾は唯だ貴郎の御手に縋るより外にせん術も候はず。

香蘭女史、昨夜も來られ候、一昨日お話しありし枯野行、若しお障りこれなくば御伴願ひ上げ候、スケッチに行くと申せば、伯母は何時にても出し呉れ申し候、靜かな處にて、この煩悶より解脱の方法をお敎へ下され候へば有難く存じ上げ候、貴郎一人、妾一人にてとは存じ候へども、日頃の御氣象に在しませば、お許し遊ばざるべし、香蘭女史を同伴いたし候へばあらぬ噂さの貴郎を煩はすことも候はじと存じ候。

吉左右の御返事を待上げたてまつり候。

淑夫様　　　友枝

待てども〳〵門に毎時の空氣草履の音も聞えず、午後二時まで詫しく宅に籠り居り候ひしが、斯ては遽かに障ることの起りしが爲めと猜し參らせて、媼に留守を賴み、携帶箱を肩にして例の一管をも腰に挿し、獨り刀根川へと志ざし、兩國より汽車にて市川へ、黃昏の頃、川添の唯ある旅館に投じ候。

お出のなきを小生は、決して〳〵お恨みには存じ申さず候、お手紙にてあれほど御つかへ遊ばされしお言葉を、無碍に破りたまふ貴女ならぬは深く〳〵信じ居り候、何か遽かに障ることありて、伯母の君へはそれと言ひ明したまふことも出來ず、定めの時刻を次第に過ぎて、切なき思ひに御胸を痛めたまふお姿の明々と眼に浮びては、何かは知らず私も心の顫くを覺え申し候、但しお家の御首尾は如何あらんか、これのみ御案

じ申上げ候。

昨夜泊りし其の旅館は、此の町の草分とかいふ古き家にて候ひき、靴脱ぎて階子を登れば水に臨みし長廊下の釘の頭はきら／＼と、歩む毎に蛙の啼く音に似かよひたる異き軋響を立て、角の座敷に導き入られて、踏めば足の痕凹ぼに印さるゝ古疊、川風の吹き來る毎に破れ障子は白き舌を吐いてざわ立ち、煤けたる天井は蠅の糞にて木理も分らず、雨漏の暈か鼠の尿か、奇しの斑點の寒山拾得の頭より浴せられたる繪襖子の、引手の金物疾うに失せて、眞黒な孔二箇、髑髏の眼のやうに人を睨むやうに見え、何ともいへぬ、陰鬱な室にて候ひき。

されど障子を明け放し候へは、流石は江戸川の眺は一入、冬の心は浩蕩と江に滿ちて、蒼涼の氣一入の鬢髮を吹き搖がし申し候、日落る邊は貴女の在すなる都の方なり、夕榮の雲、紅酣し朱燃えて半江の水に燕脂を流す、如何にして貴女はこの夕を送りたまふかと、坐ろ言ひ知らぬ寂寞しさを覺えて、愛撫の尺八を吹きて聊か思ひを遣り申し候。

早や何事も申し上げ候はず、唯だ／＼日頃申し上げ候事に御精進あそばされたく願上げ候。

友枝様　　淑夫

昨日の朝より夜を籠めて、如何なる思ひに悶へしかは、唯だ御推もじにお任せ申し候。

先頃より伯母は、一寸も妾が身より眼を離さず相成り候、咀はれたる妾は最早運命に抗らふ根も力も失せ去り申し候。

何事も哀れ／＼と思召し下されたく、一日たりとも如何にして過すやと妾を思ひ出し下さらば、唯だ／＼嬉しく存じ上げ候。

松波淑夫様　　杉野友枝





（甲賞）

みなし子

千葉　山口秋子

お座敷では孟事の稽古が有るらしい、夏樣も愈〻明晩は行くのだ、同じ樣に生れ乍ら、親のない食客の自分は何かに付けて見じめな者だと思ひつゝ、兩親の面影をおもふ樣に櫻の花を透して曇つた空を眺めて居ると叔母樣がお呼びなさる、急いで行くとにこ〳〵仕乍ら茶の間にひろげられたお嫁入の衣裳を私にも見て吳れよといはれた、私は一目見たばかり嘗つて覺えない悲しみが胸にせまつて目をうろませたまゝ口もきけない。そして、

お前の嫁く時にも滿更知らぬ顏は仕ないが、なるべく一錢でも心がけて嫁く仕度の方に……といはれた時には、たまらなくなつて、人目も恥ぢずなき伏した、

（乙賞）

白魚引

宮城　千どり

天氣は好いが風は寒い、濱に立つて居る漁師の手も足も皆眞赤だ、舟に乘つて居るものは數尋の網を水中に投げる、瞬くひまに輪をなした、陸では兩端をエーヤエーヤと引く、波が高いので皆必死である、親も引く子も引く、千草で織つた前掛は、波のしぶきでビシヨ濡れ、やがて獲物に充ちた網は砂地にあがつて、昆布、わかめ、藻蘚草などが、ワザヤワザヤしてゐる中に、何匹となく跳れてゐるのは小指位の白魚である、實にうつくしい、すきとほつてまるでとけさうである、こんないぢらしいものを漁師の手につかませるのは惜しい氣持がする、沖の方では鯨を生ませるほどの潮が岸に來てはこんなやさしい白魚を育てる波になるとは、實に造化の力ほど不思議なものはない、

（丙賞）

花壇の風

駿河　巴水女

楕圓形に盛り上げられた中央の花壇には、燃えるやうな虞美人草が、濃い綠の葉から艶かしくスイと頭を擡げてゐる、すぐ並んで男らしく、肱を張つてグンと背を伸してゐるは矢車草、それを取圍んだ方形、短册形の幾つかの花壇には、優しい櫻草、憐れげな雛菊、可愛らしい三色菫、鮮やかな金錢花、賑やかな金魚草、松葉菊などが隙間もなく地を蔽ふて我れ劣らじと競ふて咲いてゐる、正午に近い日脚に光つて、緩やかな風が花壇の中に湧く、總ての花が嬉しさうに身振ひすると、何とも云へない色々のかほりが息もつまるやうに立込んで、花壇の外に押し出されて來

る、他の木や草は、じツとして動かないのに、花壇の花は一樣に揺れて居る、誰も其風は、是等の花の息吹きであると云はないのであらう、西から北、東へと繞つてゐる山境の山口はすツきりと晴れてゐる、

或る夜

信濃　田中きん子

誠に靜な夜であつた、妾は懐しい女學世界から眼を離して、窓にもたれかゝつた、そして見るともなしに向をむいた、珍らしく向の寄屋の二階があかるい、妾はじつとそれに見入つて居た、すると急にランプの光で赤く輝いて居た障子が開いて黒い影が現れた、妾は未だ無意識で其の方を見つめて居た、そして其の手の動くのがぼんやりと見る事が出來る、妾は次第に自分に歸つて來て其黒い影が男であると云ふ事を知つた、妾は何とも言ひしれぬ恐い、いやな氣がぐつと胸に湧いて來て蛇にでもみこまれた樣にびく〱身震をして直と机の前に戻つた、そして又女學世界を讀みはじめた、けれども直ぐと頭は復た上を向いた、硝子窓は開いて居て暗い空が見える、そこには月もなく、雲もなく、風もなく、只冴冴した無數の星が、キラ〱と奥底も知れない深い〱澄みきつた濃い緑色をした沼の樣な空から光を落して妾を冷笑して居る、(秀逸)

大阪式の女

大阪　芳枝

チン〱と電車が停まると、待ち構へた客が雪崩を打つて這入る、女「一寸と貴郎、早う乘んなアれ、オヤ山谷はん、何處へ、アヽ然うたすか、今日はえらい人だんなア、どたい押し合いやわ、ア痛いツ、マアあんた人の足を踏んで、痛うおまへんがナ」、女は銀杏形とやら云ふ髷に松葉形の金簪を挿し、鼠がかつた縞お召に黒繻子の羽織を着て居る、色の白い痩形、淡色羽二重を首に卷き付けて、右の手を吊革に掛け、左の手にはオペラバツクを大切さうに抱へて居る、(秀逸)

妹の縁

麻布　ゆたほ

和やかな秋日和、暖かな青葉の蔭に恍惚と晴れきつた空を眺めて居ると玄關へ車の音、親友安子樣の御妹光子樣がお暇乞に來られた、何日も調子のよいに似ず碌々お話もされず俯向て羞かし氣なのが如何にも初々しくて麗である、お年は十九、古代紫の白茶の下着、鶉世木に若松の裾模樣、紅勝つた帯、漆黒な一筋亂らぬ高島田が白襟に映えて實に神々しい程美しい、あゝ此半分でもいゝから安子樣に分けて上げたい、女は矢張美しいのが徳だ、いくら秀才の才媛のと謳はれても、美には勝たれぬ安子樣とて別に醜い人ではないが降る程な光子樣の御縁談に引かへ稀れで、それも思はしいのがない、光子樣もよいがあの當世向より安子樣のしんみりしたのが私は好きだ、實によく妹樣のお世話を親切になさるので涙が滲く程感じた事もある、光子樣はお姉樣が後ではと隨分否まれたのを、何しろ先は家もよし、人物もよし、御兩親も大に喜ばれ、遂にはなれど最も人々の縁故といはれ、安子樣も又なき良縁を私へ遠慮の爲に外づしては殘念と無理にお勧めになつたとか、あゝ光子樣が花の樣にお立派な丈け一入安子樣が可愛想で同情の涙が止度なくこぼれる(秀逸)

嬉しさに醉ふ

播磨　小寺いさを

書籍を風呂のうちに出献したので、いさゝか誇りにける自分も、いよい

よ長崎に着いて見ると、先づ船の廻りを取りまいたはしけを見れば、皆日本の人計り、それがみな大きなこゑして日本語を話す、何となく今までと全く違ふので、妙な氣がしたが、忽ち嬉しさに元氣づいて、先きまで歌も上らなかつたのが、うそのやうに身がかろくなつて、いそ／＼と夫に誘はれてデツキへ上つて見れば、あちこちの山は皆なつかしげに自分たちを迎へて居るやうに見えて嬉しく、六年の昔この港をはなれた時の淋しさなど思ひ浮べて居ると、やがて船は又島と島との間をぬけて動き出した、もう自分は氣もそゞろになつて、何事も打忘れて、インランドシーの景色を見るに忙しい、あゝ長い間南洋の地に椰子樹の上にすむ月をながめては一人小さき胸を痛めて居たのも夢と過ぎて、今はまのあたり此悲しかつた景色を眺めつゝ刻一刻と身は故郷に近づいてゆくのであゝ、(秀逸)

海邊

小石川　きん子

静かな音をたてゝよせてくる波打岸を私は病み細りし姉様の手をとつてそろ／＼と歩いてゆく、「姉様が少しでも歩けると私うれしいわ」、「色色心配かけたわね」と淋しく笑ひ乍ら見渡しきれない海の面をぢツト見ていらつしやる、私はソツト横顔を見る、何とやせたのだらう、青白い顔に潮風が吹くと、枕で切れた短い毛がパラ／＼とかゝつてすごしいやうだ、

後の松林で誰だか笛を吹き初めた、よせばいゝにと思つて居ると曲も、あらうに亡くなつた兄様の大好な残月だ、姉様はハツトして耳を欹てる、困つたと思ふうち、姉様のお目の中は涙が一ぱい、私は氣の毒で／＼慰めるより自分の方が泣きたくなつた、

姉様はつひこの二ヶ月前に二十二歳で未亡人となられたのだ、(秀逸)

春雨

四谷　さくら子

友と二人、つみ草につかれた足を引ずつて漸く例の松原畷にかゝつた、先きからしと／＼と絹糸の様にふりだした雨は、だん／＼太くなつてきた、けれど西の空があいてゐるから、じきに止むであらうとやゝ大きい松かげに走せ入つて暫しの宿りを求めると、葉ごしに柔かい雫がぽたぽたと手にした菫や、又前かみの上に落ちる、あんまり菫がぬれてはとそつと袂でおほふてやる、やがて雲がはれて雨は止むだ、ホツと一息ついて松かげをでゝ、着物の露を拂ひながら、かみに手をやつてみると、忘れたりかざしの花、昨日お揃といつて從妹からもらつたばかりの白ばらが、しつぽりとぬれてゐた、

あはれ之をこそはまづおほふべきであつたものを、(秀逸)

まゝごと

札幌　伊佐敷清子

仲好の春ちやんと雄ちやん、夢中になつてまゝごとをして居る、一寸雄ちやんとよびかけて、あらお隣の奥様、お家に宅の坊やは参つて居りませんか、何處で遊でるのでしよう、はつが探しに出てまだ歸つて來ませんよ、はつかへ、坊や、まあ那處に心配したでしよ、お魚で御飯をこしばますに、これはお隣の奥様、まあお上り遊ばして、只今お萩をこしらえましたので、お坊様に、まあお珍らしい、いつも頂くばかりで、最四時過ぎお附木もそへません、怎うも有難う御座いました、どうぞ又御話に坊やお萩ですか、今御飯を頂いたのに、ぢや一ツ、又明朝のお目覚に、温和しくお休み、漸く坊やもねんねした、一針仕様と裁縫が始まつた、私は思はずお働きです事と言ふと、姉様笑つちやいやよとすまして居る。(秀逸)

湖面

牛込　平塚白百合

栗の花にかこまれた湖が一つ、遠く東に南に村が見えて、黒ずんだ森の上には五重の塔も小さく見える、ザブン、魚がはれた、湖の面に水輪が廣がつてゆくと、葦の根元から鶺鴒が尾を振りながら飛び立つ、湖の面が再び靜になつた、行春の雲はしづかに底を流れてゐる、(秀逸)

電車

四谷　銀波

「御順に奥にお進み下さい」と慣れなさうな車掌が云ふと、皆云譯ばかりにヘメ〳〵と一足づゝ進む、入口の處に立つて居るヨボ〳〵の老人に誰も代つてやる人がない、可愛さうなので「此處に御掛けなさい」と云ふと、大喜びで御辭儀の五遍もして居る、お酒の香のプン〳〵とする職人風の男が「込むなあ」と云ふと、相手が「本當によ。不景氣の中に電車ばかり旨まくやつてる、」とどなる、エヘ……と笑ひながら車掌が御乘かへは？と切符を切つて居る、(秀逸)

姉さんの日記

滋賀　野崎さみどり

姉さんは一昨年肋膜炎となり、去年肺病と變じて菖蒲咲く頃黄泉の客となつた、今で恰度一週忌、あの青白い面ざしを寢ても冷めても想ひ出して、時には夢幻の如くに枕もとに見えるのである、妾は一種いやな氣味にうたれた、があれ程妾を愛して下さつた姉さんだもの、死しても猶護つて下さると思へば有難い、妾は一日よき天氣を選んで姉さんの本箱をさらへた、去年から其まゝであるので、黴が生え、シミが現れてゐる、葉書や、手帖や、アルバムや、雜記帖等が混ざつて出て來る、底から一枚半紙に原稿として散文の清書したのが出た、何氣なしに讀んで見ると、それは去年姉さんの病氣の少し reconfirm かつた時、春の野に二人で花摘みに行つた記である、妾は思はず紙を落して疊の上に俯ぶした、(秀逸)

看病日記の一節

札幌　伊佐敷清子

御醫者様はあんなに仰有つたが、姉はもうおなほりにならないのかしらやつれはてしお顔をつく〴〵と打まもり居りしに、花ちやんこゝに居てくれたのと、凹みし眼を見開き、四邊を見やりつゝ、今敏夫様が入らしたでしようと、いはれる、いゝえ今日はお見えになりませんといふと、それでは今のは夢であつたでしようか、まああの夢がさめずにあれなりゆきたかつたわと、又もうと〳〵と寐入り給ひて、時々さびしき笑みをうかべ給ふ、あゝ姉様は今日まで一言も敏夫様の事を仰有らなかつたが、どんなにお慕ひになつて入らしたのでしよう、あはれ開きそめし二九の花明日をもまたで、夜嵐のふきもやせんと思へば、涙とめどなく、暫し枕邊に打伏しぬ、

若き娘

東京　夕ほし

先達岩崎さんからお島田のお寫眞を御送り下すつた、拜見した時には驚きと目新しいの「まあ」が一所に出た、風の便りに聞けば、絹枝様も意氣なお島田にお上げなすつたとか、歌子様のは雜誌の繪文で伺つた、今日も〇〇伯爵へ上つてらつしやる美世様をおたづねしたら、矢張り上品な高島田であつた、歸る道すがら急に何だか戀しくつて戀しくつて、堪え難くなつた、家へかへつてから凡そ一時餘許り夢中に

なつて泣きあかした、何故だか自分でもかうと明らさまにいはれない、

葉柳

本郷 齋藤梅子

姉樣が川對ひの新樓に嫁がれてからは戀しい悲しい時に河原に出て力一ぱい手を叩くと、屹度くつきり白い其のお顔が二階の窓から見えて手招きをなされたものである、其姉樣がどうして亡られたのであらう、今日晝下駄の儘枝折戸を出ると知らずノ\足が川原に向いた夕陽の名殘をとめた灰色の空に、明星の影が只一つ、其川上の櫻橋は僅に黄昏の中にほの見える、あゝお輿入の其夜が目に見える樣である、風隱な常闇のあの上を、幾つかの提灯が夢の樣に過ぎた光景を思ふと、まだ葉柳の門の中に懐しい人が居る樣に思はれてならぬ、私は哀愁に滿ちた胸を抱いて彼方の岸を望みながら人もない渚に立つた、

招魂祭

前橋 渡邊松子

三月二十七日十五聯隊の招魂祭は高崎の頼政公園で嚴かに式を行はれた、其時軍人遺族總代として彼の旅順の戰に花と散つた聯隊長たりし戸枝未亡人が十一二位な愛らしい令孃の手を携へてしとやかに忠靈に參拜されたのを見て滴過水を打つた樣になつた、俯向勝に進まるゝ未亡人の心中はどんなだつたらうと推し量られて思はずハンカチーフを絞つた、式が終つて茶菓や壺餉の折詰など頂き、樣々の餘興に眼を娛しませ心を慰められたが、場所が兵營地で、祭の主意が他と異なつてると思ふからか知らん、餘興を見て居つても色々な考が胸に浮ぶ、悲慘な戰爭の樣が偲ばるゝ狂水仙の霜に傷められた樣な戸枝未亡人の姿が心の眼に映じて居つて、一種の思は絕えず胸を往來した、

大附見物

姫路 しらつゆ

梅田に着くと、直に驛前に着いてゐた電車に恐るノ\乘つたが、乘り合してゐる人々が皆私をぢろノ\眺めるので、何だか恥かしくなつて、其邊にある廣告板ばかりを睨んでゐた、大阪見物だとて思ひ切り着飾つて來たのに、やはり私は田舍者と見えるらしい、

据風呂

静岡 大野たけ子

櫻の枝へ衣をかけて庭の据風呂へはいる、西の空はボーッと薄紫になつて、山寺の鐘が微かに渫つてくる、前の小川では弟が馬を洗つてゐる、ザーッと沈む、あつくもなくぬるくもなく、なんとも謂へぬ心持である、暮にならぬならこの儘沈んでゐたいほどだ、田圃から蛙の啼聲がしきりに起る、ふと見ると青葉の梢に朧月がかゝつてゐる、

むらさき帖

千葉 山口秋子

今樣の紫式部とやらん、自署仕給へる君の手帖．繙けば源氏物語の其れにも似通はぬ、亂れたる水莖の跡、石山寺の月に妙筆を振るひ給ひしかの君に問かれなば、美くしき眉をいかばかりよせ給ふか、薹式部と稱へたらん方ふさはしからん、こき瓣きの色のほどは知るよしもなけれど、いづれ紫には變り有るまじ、岩にさがり藤たよりないと美しい聲で唄ふ歌の意味は何となく弱わ弱わしけれど、芝居でする鏡山の岩藤扨てもにくらしき藤さだめし色も

幸々數岩につゝ立ちて咲きし藤ならん、美しき藤の花房のまゝなる文にそへて友の許より、優しき情の嬉れしきまゝに床の花びんに習ひ覺えし池の坊のくれらぬ姿――母様の眺め給ふなかへり見て藤の水上げむづかしくつてよと小さきほこりな笑みにかくして語り給ふ君の艶なる姿も偲ばれつ、

風の音

青森　漁夫の妻

風が吹く、ゴウ〳〵と、こゝ太平洋の片隅なる一小漁村もあはや奈落の底に沈まん計りに、空には眞黒い、巨人の如き雲が南へ、西へ、眞砂に渦卷く砂煙、見るも恐ろしきこゝの浦へ、思ひ餘つて彷徨ひ出でぬ。強い沖より、大濤小波が、荒れ狂ふ豺狼の如、白き牙を怒らして眞直らに押し寄せ來る、轟然巖につき當り、パツト飛び散る瀬の吹響に、いとどしう衣の袖を濕しぬ、

思ひ起す、三年の昔、縁あつて漁夫の妻となり、馴れぬ業なりも、いとしき夫、愛らしき子あれば、辛しとも思はず、相想ふ二人の胸は潮に濡る沖の石の、色は變らじ、變るまじと誓ひしことも仇なれや、一と日颶吹く夕まぐれ、漁る舟に吾夫は、沖に出でしは逝の果か、果なき數の人とはなりぬ、後に殘れる此子なば、吾身はたとひ女なれど、逝きにし夫のかたみ、及ばん限り育てんと誓ひし心は今尙かたし。

されどあゝされど、沖に風吹き波さわぎ、物凄き夕ぐれは、在りし昔の偲ばれて、やる瀨なぎさの捨小舟、其れにも似たる身のおもひ、あゝ吾は女なりしよな、風が吹く、ゴウ〳〵と、押し寄する女波、男波、親しげにもつれ〳〵て、又遠く眞砂路に、あとを殘して引いて行く。

我家の小猫

京橋　千代子

今日は家の小猫が生れてから丁度一と月だ、朝いつものやうにのぞいて見たらまあ驚いた、親猫が昨夜捕つて來たのであらう、大きな鼠が一匹、それを四匹してかはる〴〵喰べて居る、一昨日初めてお骨を少しと昨日御夕飯の時父様がお刺身を少しづゝ喰べさせたきり、まだ御飯の味も知らないくせに、ほんとに生意氣れ、それを喰べ終ると、今度は箱の中でちよこ〳〵飛び歩るきながら戲れて居る、其様がほんとに可愛いゝ、それに今度生れたのは皆毛色がよいの計りだから餘計に可愛いゝ、そして遊びくたびれると四匹重り合つて眠つて了ふ、私はいつでも猫を厭だといふ人には今日此頃の、我家の小猫の此有様を見せてあげ度い。

猫のいたづら

兵庫　松尾りつ子

私には今日やつと四つになる猫があります、涼しい黑目勝ちの眸、豐かな頰、苔の様な口もと、それは〳〵可愛い子です、それが大の腕白もので、前程も庭へ出た答のがあまり靜かですからそつと障子を開けると、猫の背の様に丸くなつて庭石のそばで何かして居るので、あまり可愛のでつひ何をして居るのかとそつと後からのぞき込むと、驚きました、竹ぎれを持つて一心に可愛想に何處から捕へて來たのか一羽の蝶々のヒゲやハネをむしつてそれを竹でついて居るのでした。

春窓

岩代　岸野常子

私は杼持つ手を措て窓を開けた、見渡す限り、菜花の黃は渺漠の青さに連り、彼方の堤には紫の菫、此方の畦には紅の蒲公英、色といふ色を集

めて、描き出された極彩色の春の景、薄絹の様な霞棚引いて、向の丘も、野末の杜も、宛ら淡き夢路に入たかのやう、何處ともなく鳥の囀りを持て來る和風は、窓近う咲き亂れて居る櫻の花片を、織りかけた絹の上に二片三片、私は此儘織り込みたいと思つた。

女の恨

四谷　大橋雪子

そりやあ私だつて家の様子を全く知らないぢやあ無いけれど、でも餘んまりひどい、「お前ももう十八に成つた、いつ迄學校通ひをして居ても限りが無い、それより早く歸つて家の手助けをしてくれ、實は今年中に取り定めたい事も有るのだから」、私は口惜しくなつて來た、今朝迄は思ひ出して樂しんで居た故郷の桃林も、遠くの街道から見える白壁の土蔵も、今は却つて苦痛の種子と成つた、二度とは來ない此青春の時代を、あんな山の中で暮さればならなくなるのかと思ふと、一その事東京へなんか出て來なければ良かつたと思つた、あゝどうして私は女なんぞに生れて來たんだらう。

忘れ形見

静岡　さく子

肋膜で長らく苦しんで居なすつた夫は遂に歸へらぬ人となつた、夫の生涯は實に短いものであつた、武雄が生れてやれ嬉しやと思ふたら束の間、杖とも柱とも頼む夫に死なれた、私のつらさ悲しさ、泣いて〳〵泣き暮して、もう涙さへ出ない、今朝も武雄が父ちやん〳〵と父を慕つて泣き叫ぶ、もう私は身を切られるよりつらい、乳を呑ませて、やつと寐せつけた、かわいさうに頰は涙で濡れて居る、見れば見る程夫に、いきうつし。

折にふれて

西多摩　内田禮子

今朝隣家の屋根の上に、是まで此邊で見た事のない、美しい小鳥が二羽、快々としきりに何か小話やいて居たから、どうするかと思つてヂツト見て居ると、一羽が垣の元の梅の木へ飛んで來た、すると後のが、すぐ、追かけて、同じ枝に止つた、そしてさも〳〵樂しさうにさえづりながら、一上一下方々の枝へ必ず一緒に飛びあるいて居る、多分あれは隣村からでも新婚旅行に來たのだらう、小鳥でもあんなに仲の好いのを見るとほんとに羨しい。

袷

愛知　小柳津しず子

私は重い袷をぬいて、單衣に更へた。其の單衣は私の年にはあまりはでなやうに見えた、私は此はでな着物と、年とを較べて見た。すると、若い無邪氣な頃が、胸に浮んで來た。私は、今迄自分ながら自分の年が、二十歳であるとは、どうしても思へなかつた。十六か七位のやうに思へてならなかつた。けれども、今日、此袷を着て、これが私にははで過ぎると思ふ程、年を取つたことを、知つた時に、何とも云ひ知れぬ淋しさを感じた。私は刻々死の門に向つて歩いて來て、それがもうすぐ、眼の前にあるやうな氣がした。

小姑根性

大阪　西戸政江子

私が家へ這入らうとする出合頭に今し外へ居らつしやる義姉さんと出逢ふた、「さあどうぞ」と遠慮すると、義姉さんも「さあお先きへ」と御遠慮遊ばす、暫く遠慮の仕合ひをして居たが、とう〳〵根負けして妾が先きへ這入つた、なぜあんなに他人がましう御遠慮遊ばすのだらう、あんなに遠慮しなくたつてと何だか、あきたらないやうな嫌な氣がした、がフト之れが小姑根性と云ふものだらうかと思ふて、何だか自分ながら羞かしい氣がした。

チン〳〵

東京　吉田定子

チン〳〵、「うごきまあーす」と車掌が云ひ終らない内に、ゴトンと急に電車がうごき出した、と思うと立て居た人達はばたくくと皆なしやうぎ倒し、「何していやがるんだ」と職人體の人が云うと、あとの方達もぶつぶつ云ひながら起き上る、そのひまに一人の紳士ふうの人が行きなりとびたりた、するとすみの方で「すりだ」と云うさけび聲、皆な吃驚して其の方を見たら、十八九のお店物らしい人が青醒に成て外へ出やうとして居る、電車は用捨なくはしつて仕舞ふ、お店物は今にも泣き出しさうな様子だ、私はお氣の毒で見て居られなかつた。

雨の庭

四谷　櫻子

しめ〳〵と絹糸の様な春雨は今朝からまだ小止みもない、讀書にもあきはてゝ何とはなくえん側にでゝみると、梅や柿やまだ小さい若葉がしつとりと露をおびて、みどりの色がいかにも美くしい、築山のほとりにややあせた牡丹がうつむき加減に咲いてゐる、池の面は波紋せはしく遊ぶ緋鯉のかげもみえぬ。突然音もなく倒れる様に牡丹で崩れた、と、まつ白な蝶々一ツ、つと逃び出て落ちた地上の花びらのまわりをじろ〳〵飛びまわる、うすいつばさが雨にぬれていかにも重さうにみえる。

告別

大分　桂木郁枝

明日は四月十日……、幾多の年月熱さ寒さを共にして來た、愛らしき兒女と別れ、馴し校内を後に見て、他鄕の人となる、妾が爲めには、最悲しき日である、今日は幸ひ土曜日とて、午後より、生徒一同、打連れて暇乞に來てくれた、妾は告別の辭を述べ、終に皆さん私を忘れないで下さるなら、時々手紙をよこして下さいと、後の一句を涙聲で云ひ終つて、ふと見渡せば、まだ振分け髮の幼子も、別の辛さを感じてか、室の彼方此方でしく〳〵すゝり泣きの聲、之を眺た私は、暗涙數行、吁どうして燐愍可愛子供を捨て、他に轉勤が出來ようか、と云へ是非もない……、明日は愈々數多の敎子に送られて、涙にぬれしハンカチ打振りつつ、此地を立退く身の上、吁今宵私は安らかに眠られやうか。

日記の一節

中河內　むら子

大阪から歸途、日はすつかり暮れて了つて少々心細くなつた時、折好く車があつたから、それにのる、車上で今日伯母さんの仰有た事を思ふて見る、今の職業をやめて華族様へ上つてはと進めて下すつたが、若し自分が華族様へ上つて、或時は園遊會で接待係をしたり、又御用事のない折などには廣い〳〵御庭でぢつと靜かな思ひにふけつたり、又は床に入つた時自分の過去半生の歴史を胸に浮べたならば、嘸かし感が深から

う、真一真にさう云ふ境遇になればほんとに自分の歴史は小説的だと喜ぶ気な妄想に四途の何物をも忘れてしまつた時、ふと気付くと、車はもう家のまへに止つて居た。

思出づる夕

麻布　加藤なつ子

青白いやつれた顔に、乱れるびんの毛をかき上げやうともせず、暮れ行く春の夕暮の花が二片三片散りくるを眺めてはハラ〳〵と涙を流してゐた女、艶なりし昔の偲ばるゝ面ざし、アゝ彼女の胸にはどんな秘密が潜んでゐるのでしやう　、私は今もなほ小雨そぼ降る淋しい夕には、哀れなる女の面影が胸に浮ぶのでございます。

朝月夜

大久保　天野文子

心地よき朝月夜、涼しい暁風に銀の乱れ毛戦れながら、先づ汲上ぐる釣瓶の水を盥にうけて、雙手の掌に掬ひ上ぐれば、はらりと散り込むだ一瓣につれて、水晶の滴の様な花の露が、ホロ〳〵と頬へ、まおと瞻仰げると、庭の入重櫻は露を含んでまだ夢から覚めぬ様、淡紅の彩、日も纔なるを、チラホラと嫩葉に見透く木膚の色の麗しさ、真い翠の葉も、美しい胡蝶もまだあの花かげに、安らかな眠に入つて居るのであらうよと、恍惚として眺めた暫くを又はら〳〵と零るゝ露の、うら若き花の香もこもれるをそのまゝ頬になすりつけた、せめて私もこの美しさにあやかれと。

瞻仰ければ早や麗しい空の化粧、朝風に銀の孤輪とりと朽木形の雲が静に燃えて、今日も上日和、霞んだ空にお日様のお出ましも遠くはあらじ、村役の光琳風の禿山に銀の鉾の様な月も落ちた。

三毛の物語り

山形　阿部英

家中誰一人私を可愛がらぬ人はなかつたけれど、わけて奥様は一番私を愛して下さいました、三毛や三毛やと人間も及ばぬ程、納屋箱團にも坐りましたし、牛乳の、玉子のと、ほんとうに勿體ない位でした、去年御嫁入り遊ばした美しい奥様、秋頃から始終病み勝ちでしたが、年末頃から少つとも御見えになりませんでした、旦那様も御隠居様も何か嬉し相に御相談遊ばしゝ事度々、小さい綺麗な衣服やお蒲團が出来る、どうするのかと不思議に思つてると、五月の始めに奥様御伴に召して御帰り遊ばした、見ると小さい御顔の赤い髪の黒い可愛い〳〵人形の様なお嬢様を抱いて御出でになりました、それから皆様中あはした様に私にはゆしもかまつて下さいません。

深夜

豊後　加納登代子

餘程更けたらしい、洋燈がヂヂと鳴る、目かしば〳〵して来た、夜の短い此頃は覚えず知らず時間が経つて了ふ、早く寝ないと又叱られると、そーつと書物を閉ぢる、ふと痒いので始めて気が附くと、腕に蚊が一匹血を吸つてまん圓くなつて動けなくなつて居る、ピシヤリと打つてつと立つて音のしないやうに障子を開ける、空は綺麗に晴れた美しい星月夜明日は晩度天氣であらう、と何處やらにホ、ホ。ホ、ホと句切つたやうなふくろうの聲がする、寂しいお茶の間で時計がチーンと一時を報じた。

黒馬

君代　結城子

穢を除つて、轡を外して「ホーラ」と片足を盥に持ちあげてやる黒馬は危なさうに盥の端に上げて見て、とんと入れた。作男は藁を束ねて腹から背、胴から足、残る限なくザブ／＼と洗つた、木立の葉越しに漏れる月の光がちら／＼と黒馬の背に落ちて、濡れた毛が滑々光つてる、水はもう汚れてるのに、盥の中には眠むさうな黒馬の顔が寫つてる、飼が秣桶を持つて來ると、腹の空いた駄々子の様にいきなり顔を突込んで、美味さうに喰ひ初める、體を右に寄せたり、後足を交る／＼蹴上げたり、尻尾を振つたり、一寸も凝妬としては居らぬ、泥を落す、湯あみと體を肥らす、夕 秣喰ふ時は黒馬の天國でしよう。

浮き夜

芳野谷　孤星

八時の出勤に四時の退けだけれど、今日は少し忙がしかつたので、もー五時近くになつた、やれ今日一日の公務も辛く濟んだと白衣を脱ぎすてて衣を着更へて、さて門とは名ばかりの村の病院を出て歸路についたがつく／＼と思へば、人の身の上程計られぬものは又とあるまい、あの賑やかな都に、數多の朋友と明け暮れを共にして、取りとめもない話をして笑ひ、みじめな話をして歎きして居たのは僅か一ヶ月許り前であつたが、ふとした事から煩多い都はうるさいもの田舎に引き籠つたならこんな苦しい思ひをする事もあるまいと、田舎といふものは飽くまでも清い仙神の國とでもいふ様な所と思ふて好んで來たのであるが、やはり浮き世の波風は立つてなる、都よりは却つて些細な事にまで刺戟が多い、こんな所で日を送らねばならぬ様になつた、自分の身が何となく情けなくなつて來た、こんな事考へていつの間にか我が宿についた、そして机の前にがつかりくづをれた。

友に

伊豫　山口たけ子

お別れ致しましてから、早五十日になりますれえ、かすみの衣はいつしかぬぎ捨てられ、自然は至るところうつくしい緑となりました、芳子様戀しうてなりません、あの山吹の美くしい庭！萩のうつくしい庭！あなた様と共に語つた庭や窓。あゝいつまでもいつまでもいつまでも忘る事は出來ません、二度とあんな嬉しい事に逢ふことが出來ませうか、こんなに西と東にかけはなれて……、けれども芳子様、私はあなたをおしたい申して居ります、あなたもいつまでもいつまでも妹と思つて下さい、そして嬉しい事もかなしい事も互にうちあけてれえ。どうか御身御大切に、さよなら。

名なし草

茨城　稲葉こん子

遠國の友からわざと名をかくして種子贈られた、妹と共に内庭に培つて蒔いたら、十日たつて厚い楕圓形の二葉が出て二十日位たつて心臓形の青葉が其の中間から出た、今は鬱金色の花が萎んで、豆程の白い筋の濃かな實がなつたが未だに名がわからずに居る、家のお祖母さんは東瓜だと言はれるが、隣家の姉さんは夕顔ぢやと申される、霖雨の晴れた夕方や、露の朝に代る／＼に見廻り、友の音信を待つて樂しんで居る、

思出

佐賀　江口靜子

かげろふよりもはかなしとは誰が云ひそめし辭なるぞ、松子の君のまたと得られぬ父上と別れさせ給ひし御心のほどぞいたはしき、四年前のわが父上のいまはの様など偲ばれてそゞろにあやしき露さへ結びぬ。



金子薫園選

一等

○　香川　千松さと子

暮の笛鳴れば工女は長雨にあかき日を見るごとくよろこぶ

評、明き暗きふた音を有せる人生一部の狀態が、こゝにその片影を示して居るかに見える。

二等

○　讃岐　春山とく

目ざめたる朝の窓のすきまより白き空見えうら悲しけれ

評、生きむが爲めに働かればならぬと云ふ苦しみの色が、空に閃いた。逆調の心持をよくあらはして居る。

三等

○　伊勢　服村ちよ子

あゝ悲しすや〳〵いぬる人々とひとしき胸をもちてありしが

評、やすらかな調の中に、若き日をおもひ出づる痛切の響が籠つて居る。

秀逸

○　信濃　御原喜美子

橘の夜明の香よりなつかしき御息の中に朝寝してまし

○　京城　厚野みゆき

行く春や我れは處女の名のもとにかなしき歌のかすかすを得ぬ

○　三重　なゝし草

この別れつく〴〵哀し又逢はむ日あらば石となりてあるべし

○　伊勢　多田小あさ

笙の笛弱き息もてをさな子が吹く音をきけば悲しうなりぬ

○　釜山　朱雀近子

日の落ちて再び空にかゝることなき國を見て涙流るる

○　牛込　平塚白百合

おとろへはわれにめぐりく夕ばえのやうにももえしこころなりしが。

○うつし身をこゝにのこしてわがたまの君にゆく夜は月おぼろなり　鍋島　湖山ふじ

○夢さめてわかき心は深林に日を追ふ程のさびしみを得ぬ　武藏　鈴木ゆき子

○ころも更へ華奢（きやしや）といはれぬわが肩の瘦（やせ）しゆゑよとすこしかなしき　神戸　石川まき子

○大紅蓮咲くや戀うる若人の何をかえたるほくそゑみして　尾張　小百合子

佳作

○山除やうめり地行けば足なづみ薔薇の香の胸わろきかな　若狹　津田汐汀女

○ふるさとの森に來ればしかすがに胸やはらぎて木の香するかな　下總　岩瀬不二野

○細雨にたゞなにとなくよりませる襲の香おぼゆフリヂヤの花　神奈川　あさみ

○みどり野に青き光の月照りて君懷しく夕風ぞきく　北豊島　櫻木やよひ

○そのあはき光りの中に路非の人こそ見ゆれおぼろの月夜　豊後　菅原芳子

○丘のかげ小鳥さへづる雜木の中にかくれて君をまつかな　宮城　鈴木ちとせ

○なにとなく淚ぞうかぶ夕ぐれの街のどよめききけるがまゝに　下總　小澤まゆみ子

○潮の音はさやにひゞけり背の兒の指さす方に月上り來ぬ　鹿兒島　別所とし子

○君が性かしこきはにあられども我が胸の奥みな知りたまふ　大阪　田宮蘇菊

○初夏や白き絹裁つ君まかり丘の家より靈の月見る　神戸　松下徳久子

○行く春の沈む香りに咲く薔薇の花うるはしき夕日の庭よ　松山市　河本虎子

○口笛は君がふくらし月はいま森をはなれて小うなりゆく　牛込　平塚白百合

○あゝあさまし若人あまたもだゆ見て我は勇者と誇りてありぬ　千駄ヶ谷　木之本千代子

○宮島や神の灯遠くまたゝきて夕べ冷しく潮の音する　出雲　長崎春子

○君きます宵よと白き花瓶につゝじの花をいそぎさすかな　豊後　吉良靜子

○　伊勢　多氣宮士子

あさ日さす温泉の廊はむらさきのしづくするなり音のなく

○　石川　吉川たつを

夢に似し白堊ならびて大木に夕月さしぬ野は蒼茫と

○　若狭　津田汐汀女

落日はむある子に一とつ〳〵さびしみなげて涙さそひぬ

○　長野　石上照子

沼の面の菱仄白（ひしほのしろ）き夜明りに棹さして来ぬ紬の少女は

○　東京　梨花

嫁く日なり行とはなしの物おぢに涙して居ぬ人なき室に

○　京都　木俣津夜子

水無月や乳母が家なる白川の草の戸にきく山ほとゝぎす

○　豊前　こずゑ

寝ざめて物憂き病日いくたびかほつれげ多き鬢いだきぬ

○　京都　いく

その師さ母がみ墓をたつれんと花束一つ多くつくりぬ

○　東京　小野漾子

山かげのしら藤さびし年若いし叔母が病のあつき日を咲く

○　讃岐　衣輪すゑ

荒き瀬をよろこぶ鮎のうら若きこゝろをもちて入巷に出ぬ

○　大阪　梅村薫花

病みあがり淡く化粧ひし姉君のみ手たすけつゝあやめ見るかな

○　牛込　百合子

いたつきにやせしと友の夢を見て文来ぬ日数かぞへても見る

○　下谷　高田ふみ子

紅白のいづれの色に染まるらめ嫁ぎよはりたる少女のこゝろ

○　美濃　細川たか子

君と二人すみれの花に占問ひてむしり散らせし昔戀しき

○　越後　田村鈴子

名なし草葉のかげにいぢらしう傘さしてゐぬ五月雨の朝

○　伊勢　岡部かく

語らむとひたすら思ふ此胸の君に對へば臆しがちなり

○　伊勢　服部うめ子

夕烟うすら棚引く青柳の君ます家のなつかしきかな

○　静岡　根岸貞子

かきつばたほのかに浮ぶ夕闇にしと〳〵雨の降るがふさへり

○　伊勢　岩田光子

肺病みてうせけるひとのすがた見ゆ梨の花さく夕べとなれば

○　播磨　森中かず

蛇いちごやすく眠れる花かげの小さきとかげを妬しと思ふ

○　栗鳴　片岡昌子

日傘して母と詣づる灌佛會山の御堂の紫の藤

○　小樽　大屋貞子

古き墓地やれし石碑のかたはらに白き花見る黄昏時に

○　長崎　天野春子

日の落つるその一時は殊により國離り住む友なしぞ思ふ

○　大阪　西戸政江子

たとふれば石にゑりたる人像のごとく冷たし君のつれなさ

○　同　同

偽りの笑を眞に受けたがひ歌の如き眼をする人に

○　大阪　ちさと子

双の手に組かき合せ黙念と柱によりて潮鳴りを聞く

○　横濱　嘉多紫濤

しるがれの流れの底に沈みたる珠はふたゝびうかび來らず

○　越後　齋藤宮

もの皆はとらはれたりし春の夜の靜かに渺とわが心なる

○　日本橋　早川いれ子

貧しげな巷あゆみて物思ふ戀に似つれ消えゆく灯影

○　足尾　栗林清子

美しく夕映すれど物悲し灰色の雲北へと飛べば

○　四谷　咲方こう子

あやかしは化粧のゆめに誘ひ來て血潮汲みゆく日々のおとろへ

○　下總　小澤よみし

萬貫の石のおもりを胸におく强きこゝろにおもはれてけり

○　仙臺　南もり子

戀しさを抱く我が身と夕雲と散る花片と春はさびしき

○　茨城　荒登代

夢ゆるめ見れば洋燈のいつしかにきえんとすなり涙あふるゝ

○　磐城　みとり

日は暮れぬ身はうみはてぬいかにせん心はやみになほもゆれども

○　伊豫　武田米子

垂乳根の情の袖はひろかりき涙を知らで處女をへにけり

○　豐後　菅原尾花子

夕雲のうするゝ中に若かき日のこの思ひたゞとはに秘めばや

○　信濃　吉川多美子

夜よ汝が冷たき暗き流よりわが悲しみは近よりて來ぬ

○　長野　榊原たづ子

沈丁花あまりほのかの匂ひよりあくとき昨の子を思ひ出づ

○　信濃　吉川多美子

悲しき夢のかず〳〵緒に貫きて白日の神の前にかざさむ

○　本所　まる子

火影みな戀にくもる目を擧げて我を見つむる夜のちまたよ

○　大阪　秋山かれば

うれしさに君がはかりしいつはりもことゝせざりしおろかさを悔ゆ

○　大久保　天野文子

夏草の深きが中にこもりたる夢もあらんを靜かなれ風

○　駿河　藤波響

はりつめし胸の悲しみ血涙となりて流れぬ寺に入りし日

○　福井　片山千里

春の日は歌に沈默の契のせてくだる野川の背にぬくう照る

○　神戸　水野輝代

初夏の强き光のわが眸にしむを覺えて外見るを得ず

○　愛知　明倉春子

我が思ひ溺れて立つらし陽炎の胸の吐息に搖ぎてぞある

○　青森　三浦愛子

この日われ丘に上れば大原の小山羊が背に春の雲浮く

○　京都　大石芳子

羽衣をわすれし天津處女いこゝ月すな濱にたゞずむ少女

○　長崎　まき子

世をすねて獨佗居の我なれど小雨ふる日は人の戀しき

○　群馬　林きみ子

同じ色の胡蝶なりけり菜の花の一むら風に散ると見えしは

○　静岡　花岑淑子

しと／＼と夕の窓に雨かゝり病む人つひに頭上げ得ず

○　大分　横山ゑい子

春を病みてひとりしあれば何となく笛の音までも怨じられけり

○　熊本　角田ます子

古りゆきて夢のかたりに入る花の人の朧さほのに似るかな

○　京城　竹下蝶子

折窄れて春の野山の花白く麦作の畑に雲雀落ち来ぬ

○　伊勢　光子

花白き炭やく山のうす煙何とはなしに懐しき日よ

○　大阪　梅村愛子

大橋を市路へ渡る花賣の少女うつくし五月雨ふる日

○　長野　野中泰子

聖ひとりそみおはす朝庭に白き牡丹はおごそかに咲く

○　松山　稲井せい子

病みて聞く行く春の雨何となく若き血しほの流るゝがごと

○　佐渡　田口繁子

岩れにはつゝじ花さき松がえに藤なみかゝる庭あはれなり

○　韓国　原野みどり

夕窓に旅の彼方の人戀ふるみだれ心地にくしき星見ぬ

○　伊豫　米子

落花うつ雨の音頬う実胸の扉におとつる淋しきあした

○　大阪　西戸政江子

木魚して朝静かなる寺の庭ほろ／＼と鳴く鳩のむれかな

○　大阪　西戸政江子

散る花は一片ごとに悲あり戀にやぶれし人の如くに

○　同　同人

吾が庭の梅に来て鳴く鶯の奇麗にぬれぬ朝の雨かな

○　大阪　木澤きよ

もの悲淡々としてうら寂し草のさやぎの墓原の逕

○　磐城　北郷てる

初夏やあさみどりなる樹の下に人あり君に似るうしろ影

○　長崎　西村春子

忘られし人のおもかげゆめにみてふるきなやみをくりかへすかな

○　下總　小出保花子

若人の胸のちしほのひとしきり燃ゆるに似たり夕映の空

○　美作　高畑みち子

うちかすむ野末に見ゆる青柳ののどかに春の風そよぐなり

○　牛込　塚原けん子

日長閑に菜の花小道あどなくもわが子は蝶を追ひ遊びゐぬ

○　麹町　吉田千枝子

行く春や思出多き白藤の御寺に入りて髪おろす人

○　大阪　今西春江

み佛に柄香爐さゝげ行く僧とみ茶もつ君が姿わらひぬ

○　鳥取　一色增子

夏木立朝露あびてしらゆりの花さくごとき湖を見しかな

○　神奈川　飯田白露子

唄ひ女の撥音ひく／＼聞ゆなり春雨にそぎ格子戸のうち

○　美濃　酒井とみ子

春雨や古りし都へ旅立ちし三年昔の其日を忍ふ

○　伊賀　淺沼花子

雪ふれる花の木かげにたびの子は都の春をまどひつゝあり

○　筑前　木村こま

春の雨人まつ宵のつれ〴〵に歌をおもへど歌は成らざり

○　信濃　赤津藤子

なつかしき君は逝けりと聞きしとき暴雲わきぬ我が胸の野に

○　洋子

おぼろげにかすむ夕日は落ち果てゝ漁火近くふなうた寂し

○　澁谷　小牧きつ子

いとし子は小蝶おふなりうちつれて菫つみてし少女をおもふ

○　伊賀　山村龍子

かく涙多き性とは知らざりきあまりに自己をつゝしみませば

○　神奈川　晶子

初夏や桑のそよぎは波にして海底にしもわれは居るなり

○　岐阜　井川松枝

戀ひわびて君ます方の大そらをふりさけ見れば時鳥なく

○　山形　れい子

若き日を病みてながめし三春のはての今日なり花ちりやます

○　北韓　紅鳳女

わが心やぶれぬ夢の窓により木蓮の花の散るを見し時

○　山口　松村智惠子

月夜よし杜の木の間に禰宜らしき白衣の人の物語る見ゆ

○　筑後　佐藤々枝

人妻となりにしほどの罪により花の香りをわすれはてけり

○　香川　新居滋江

何故の涙か知らす夕露にましぐゝ袖を、えそめたる

○　佐世保　古川しま

春の雲人知らぬ間に立ち去りて野は夕ぐれのけはひ迫れり

○　廣島　のぎく女

はら〳〵と散る櫻花ながめつゝ逝きにし人のことぞおもふ

○　肥後　大倉みつえ

桑摘みの歌れむげにもきこえきて長々し日の倦みごゝちする

○　紀伊　土井利子

今日もまた戀しき君のおもかげを花のもとにて思ひ見るかな

○　中河内　西村千代子

ふづくゑに向ひてひとり文よめば靜かに更けぬ春雨の夜は

○　山梨　一倉はまじ子

花もなき庭に胡蝶のすぎゆくを君としも見て涙するかな

○　周防　喜智子

心細う病めるこの身はたゞ君のおん歌にのみ生くとおぼせよ

○　本所　山田習子

ふみわたる道もあらればたゝずみてちりしく花をつく〴〵と見る

○　埼玉　大塚明惠子

ゑなやればむれくる鯉のくれなゐの背に日のさしゝうつくしき池

○　埼玉　一萬田あい

蛙つる子等はかへりてかきつはた咲ける野澤にうつる月かげ

○　仁川　柚尾花

宵闇のなにとも知らぬものゝ香に古き園をよびぬ悲しぬ

○　埼玉　船津千代子

花散りて青葉となれるこのごろをこもりておはすやかたの姫は

○ 岩内 窪谷姫子

くれなゐの夕陽と君が耻ぢらひの面といかゞ躑躅の花よ

○ 但馬 稲本かづ子

行き暮れて路問ふ僧に少女子が牛曳き止めぬそぼふる小雨

○ 四谷 中山榮子

打ちかすむ花の暮こそなかしけれ木の下かげにたゝずみ見れば

○ 鳥取 一色きく

にほやかにうてなに夕日さしてきぬ小手かざし見るふる郷の海

○ 福島 渡邊正子

唯一人夕の岡にイみてちぎれ雲見るゆふべさびしき

○ 大阪 阿以子

うらみますおん君よりもうらまるゝ我こそかくもつらかるものを

○ 佐賀 小田信乃子

むゆくばかりに泣かばこのおもひすこしは晴れむそを望めども

○ 神戸 中村かれ

夕風に袂吹かせて橋の上涼みにいづるころとはなりぬ

○ 牛込 重子

のごろは雨を欲りしぬ花さける池のほとりのあやめ草ゆゑ

○ 千葉 山口秋子

風ふけば胸のとびらのさゝなりて物をおもふが常となりけり

○ 神戸 稲本逸子

ちゞのおもひ吉野の山の花かげにかへさ忘れて夕べとなりぬ

○ 豊後 江口かをり子

夢の如き奈良の月夜をさまよひて、七年かみの君を見しかな

○ 岡山 下野照子

隣のやど春の長日のつれ〳〵になれぬ繪の具をまたときて見る

○ 神戸 比良多清枝

霧にかすむ小島を眺めつゝ君のいまさぬさびしさおもふ

○ 山形 れい子

わがむれは戀ひの糸のもつれつゝとくにとかれずなりにけるかな

○ 神田 門叶富美子

卒塔婆の法名かくし咲く香のけむりまつはる御墓の夕

○ 飛驒 道子

山門に夕日うすれて山鳩の聲はろ〳〵と巣にこもりなく

○ 長門 白石月代

藤つゝじ牡丹もさきてわが好む夏は來れりいで歌はゞや

○ 山形 白鳥折枝子

春の日の暮るゝ境に月出でゝ見かへりがちにたどる道かな

○ 栃木 露子

葉櫻のなかに赤らむ實も見えて夏のけしきになりにけるかな

○ 品川 鈴木うた子

青田吹く風をうれしみふと詠みし歌の多くもなれる朝かな

○ 長門 倉光英華

われ忘れず八とせの昔梅の朝みうたらし日ようぐひすなけり

○ 大阪 愛子

いざさらば涙をさめて別れてむかたみと見ませ白百合の花

○ 大阪 梅村愛子

道問へばたゞほゝ笑みて戸がくれぬ赤きたすきのひなの少女は

○ 香川 三村早子

よき少女紫衣して立つとなつかしみあした野に咲くあやめ草見る

○　横濱　吉川香都子

春の月ほのかにさしぬ胸とめて山櫻をる一瞬の人に

○　栃木　鈴木いつ子

知らぬ間に小さき野百合は萌え出でぬ我が戀ごゝろかくもありけり

○　宮城　齋藤なよ子

朝霧の中にほの〴〵故郷は見えぬうれしくかつは戀しく

○　宮城　阿部まし

春こゝに彌生來れば野に山にかげろふもえて人のどかなり

○　京都　恭子

ひらひらと散りくる花にわれ泣きぬ思ひ出多きこの夕べかな

○　京橋　安河いゑ子

月落ちてなほ暫しおる朧夜のあしたとなりし花曇かな

○　大阪　はな子

白き花ゆふべの雨にちらされぬあはれをこめて君に送らむ

○　播磨　山本鈴子

歸へらんと詩集を閉ぢてながむれば夕日匂へりから丘草に

○　四坂島　渡邊梅子

この春の笑は少女にゆづりおきて青葉のうれに蝶のねむれる

○　長崎　天野春子

木枯の音恐ろしうふきいでぬ病みます姉とあるに堪へぬ夜

○　後志　野呂春子

風ぬるう垣根の雪はむら消えて冬籠りせし鳥のなくかな

○　三河　高橋むつ子

こゝろせき野路いそげば夕闇に眠れる胡蝶ひら〳〵とたつ

○　茨城　鎌ヶ谷くに

子かたりつゝ風入る窓にたらちねと月待つ宵もありにしものを

○　水戸　中根雅子

おばしまに月を背にしてたつ君が高髷姿姉といはましを

○　埼玉　琴子

櫻花ちりし梢にけふもまた蝶の舞ひきて物思はしむ

○　牛込　さよ子

紫の霞にまがひて咲き匂ふ青葉の上の藤波の花

○　埼玉　宮倉歌子

十六夜の月や出づると打向ふ峰鳴き行けり今ほとゝぎす

○　越後　ふさ子

歌にせむ絵にせむものと思ひつゝ花野に迷ふ春の夕暮

○　熊本　雨森愛子

我が思ひ夕雲となり高のぼれ君めでまさむ夕燒すれば

○　函館　田本愛子

病む姉にもちてかへらん野の末にわすれな草の只ひともとを

○　青森　桂子

おぼろ夜や落花とともに行く春を葉櫻かげに惜しみけるかな

○　神田　山塚琴子

戀を受くる性にあらぬをひたさとり純なる身ぞとうつろに誇る

○　山形　さい子

はら〳〵と花ちりかゝる春の夜のともしのもとに歌合せする

○　四坂島　渡邊梅子

ながれ行く花にこゑある心地して山吹のせに鳴く蛙かな

令嬢倶楽部

○

「住めば都」とやら、實際自分の永住地となればどんな處でもよう御座いますわね。私は此神戸に十年餘り住で居りますが、一寸お國自慢を申しませうか。よく脚氣やリウマチの方が當地へ來て治つたと云ふ話をきゝますが、實際神戸は北は山、南は海に臨んで、町は餘り廣くありませんから、從つて空氣がよいので、御座りますよ、名所と申して多くは御座りませんが、山にはトウ〳〵たる布引の瀧、日本歷史で名高い楠公の靈社、十分ばかり汽車で行けば彼の源平の古戰場として有名な須磨、こゝはたゞに古跡としてのみならず風景の絕佳を以て世に知られて居ります、閉港場だけに諸外國人の多い事、居留地は海岸にありまして、多くは商館會社で、住宅は山手に御座います、名產は牛肉と瓦せんべい、副產物は閨の子。(神戸浪川嵐子)

○

私はね、十三の時から今まで每朝かゝさず冷水まさつを致して居ります、それは寒中のさむいさむい朝なんかずゐぶん辛くつて嫌ですけれど、つとめてやります、するとじきにポカ〳〵とからだ中が赤くなつてきて、それは暖かです、わけて夏の朝なんか汲き立てのまだお床のぬくみが殘つてゐるからだを、冷たい水でずうと拭きますと、淸々していゝ心地といつたらたとへ樣がありません、そして其せいでせう、風邪なんか、ちつともひきませんし、いつもピン〳〵して居ます、皆樣、試に此の夏からでも始めて御らん遊ばせ、おすゝめ申します。(四谷櫻子)

○

私ね卑怯な方は大嫌ひ……、まして男の方で女の雜誌に名を隱して出すなんて本當にいやですわ、投書がなさりたければ其の爲め男の雜誌があるぢやありませんか、其を何もコソ〳〵と空巢ねらひの樣に身をちゞめて女の處に出さなくとも立派に公明正大に御自分達の方へお出しになればよろしう御座いませう、若し男の方で女學世界にも投書なさらうとして讀むでお出でになる方がありましたら、其の方に御忠告致します、女の方と御交際がなさりたければ御自分のお名から御名のり遊ばして立派に手紙のやりとりを遊ばしませ。(四谷銀波)

○

大阪楠子樣私も園藝は大すきでございます、私は每日午前の八時より九時まで、午後の五時より六時までの庭めぐりが一番たのしみです、一昨年種子より丹精した、アネモネ、ベンウー、ダーリヤ、ロヤメリスなど、今年は愛らしく美しい〳〵花が咲いて居ります、今庭を飾つて居る物は玉蟲、つゝじなどとり〴〵に趣きがあります、私はいつもそう思ひます、草花など種子から丹精して一寸でも葉が出ると嬉くて〳〵早く美事な花を咲かせたいと土だらけになるのも厭はないで育てる心持は、丁度父樣や、母樣が私等を夜の目もねず育てゝ下さるお心持と同じやうだと思ひます。(小石川高木きん子)

○

本紙一月號にございましたわね、「枯るゝ花嫁、咲く花嫁」と題しました一文が、私に文章のことなど、とても分らないのですけれど、唯もう何といふ事なしに之が紙上に氣に入つて了つて、此上ない好きな面白いものゝ一つに數へて閑さへあれば繰り返して居りますの、一體どんな方がお作りに成つたんでせう、一度お目に掛つてお噺しでもして頂きたいやうな氣が致します、あり〳〵と殆とそこへ見えるやうな、すつきりとした千鶴子さん、其お言ひ廻しのうまさ

つたら、私はもう、身に沁みて、からだが顫えるやうで、目まで熱く成つて來るのです、懷ういふ方を一言でも、姉さまと呼んで見度うございます、そして終りの一節には、堪に堪え切れなくなります。(静田もと子)

○

あの黒柳樣の事務御取あつかひの光景は、電光石火の御働き振りとでも申さうか、實に目の前に見る樣で、ほんに御羨しい、それでも孤獨の淋しさを味ひなさるのですか、アームインアームの若夫婦を見給ふ意味深長なる御態度、大阪大商店主任を御相手のするどい取引の御對話、さては流行に就ての細密なる御調査、實におそれ入りました、とても及ばぬ事ながら私も黒柳樣のやうになつて見たい、流るゝペンを縱横に揮つて、こん限り活動して見たいと思ひます。(鎌倉ふみ子)

○

私は前號短文の中森中かず子樣の似し人をよんでふと感じましたが、似た人、これ位なつかしいものはなからうと思はれます、親に似た人、兄妹に似た人、友人に似た人、何れも〳〵なつかしからぬはありません、私は途中でかういふ人とすれちがふ時は必ずふりかへるのが常です、又ふりかへらずには居られませんもの。(尾張小百合子)

○

皆樣、私も度々短文や和歌を投書させて頂いて居ますが、私は一册手帳を作つて置きまして、いろいろ投書したのを書き記して置きます、たとへ誌上にのせて頂けませんでも皆樣のを拜見した度に自分のとくらべて大いにはぢ入り一生懸命勉强しますと、しぜん字も文もおけいこが出來、又後日出して讀みますと、下手ながらもなかなか面白く樂みで御座います。(三河桃花子)

○

大阪の楠子樣、私も園藝には深き趣味を以て居りますの、種子を蒔き、朝夕に水をやつてやがて愛らしい芽の出た時のこゝちはまあどんなでせう、おそらく、之ほどの愉快はないと存じますわ、椽に出てこの美しい草花を見ますといつしか自分の心は清くされて花のそれにもまして美しうなつた樣な氣がいたしますの、からだの弱き、私にとつては之が何よりの慰藉なのです。(牛込雅子)

笑話

○オヤ〳〵

麻布　百合子

門鈴が鳴つて玄關に人の氣配、障子を開けたら金線目鏡にフロックコート、客「御主人に一寸御目に懸り度う御座います」妻君「御名まへは何と仰しやいますか」、客「何一寸で宜敷御座ますから」、妻は奥へ行て、妻「貴郎に御目に懸り度といふ御方が」夫「どんな人」、妻「カイゼル式に金線目鏡でフロックの確か御役所の方でゝも御座いませう」と後から大島を羽織らせる、夫「ヤ」客「此れは始めまして御目にかゝります、私は○○孤兒院から參りました者で、御宅樣などでは御買置も澤山有りませうがセム、仁丹、清心丹、何れも一服二十錢づゝで……」、(河童)

理想

大阪　ヨシエ

妹「姉さん、先刻武田の姉さんと話して居た理想つてなアに？」姉「オヤ難かしい問ひねエ、マア一口に言へば斯う云ふやうにと思ふこと

よ」、妹「ちやア姿だつて理想はあるわ、」姉「然う、どんな？」妹「今日お母様のお土産が森永の西洋菓子なら宜いがと思ふ理想なの」、（秀逸）

家庭料理

京橋　平林はる

歸省女學生「お爺さんお婆さん今日は學校で覺えました家庭料理をして差上ませう」田舍の老婆「ソンナ固い料理なんちユうは年寄りの齒にア食へねエから柔けエのにしな」（秀逸）

名策

和歌山　保井けい

ゐはて者の紳士が汽車に乗つて、窓から首を出し、しきりに外の景色をほめて居ると、急に風が吹いてきて紳士の帽子をふき飛ばしました。友人達はびつくりして居ますと、其紳士は急に自分の名刺を一枚出して窓から後に投げました。友人は「君名刺をすてるのかい」ときくと先生大得意で「此の名案を知らないか！此の名刺が帽子と一所におちて居ると、拾つた人はぢきに帽子の持主まで屆けてくれるよ」

武ちやんの手柄顔

滑國　加藤みと

母「武ちやん、お前又壁へ落書きをしましたれ、あんな事を先生が敎えますか、」武「ウーン、あんな事ぐらゐ敎はらなくつても直ぐ畫けてよ」

猫が大變

東京　吉田さだ子

姉「君ちやん石灰をいじると手があれていけない事よ」と云ふと、君ちやんは目をまるく仕て、「そう？、さつきネ、猫が此の上をあるいて居たから、足があれてたいへんだわれ」

おしやれ

信州　貝野壽美

祖母「清ちやん、ふだんに其んないゝ着物きてしやれるものではないよ」

清「でもあたし母ちやんの子ですもの」

走りとは

三河　磯村孃子

今年六つになるおむかいの琴ちやん、「姉ちやん走りつて何」、と聞きますから、「何でも一番先へ出た物の事なの」と言ひましたら、「そんなら家の健兄様は走りだれ」

、、結婚

神戸　岸本きく

「今夜吉野様の御結婚だから私行くの」と申ますと今年四歳のみいちやんが

「姉ちやん私をつれてつて頂戴よ」

「みいちやんも結婚するのかえ？」

「あゝ」「何時？」

「御飯食べてから」

紹介書籍

△子供の研究

中島博士序
波多市松著

兒童を育つるに科學的の智識に依ると否とは其結果に大なる影響あることといふまでもなし本書は子供の日常の行爲を兒童心理學の教ふる處ろに基き理學に照らして精細なる觀察をなし平常尤も興味ある子供の行爲に就て通俗的の言葉を以て説明を與へ、兒童の心意の發達の順序を示し一々系統を正して記述したるものなれば家庭教育上、極めて有益の書なれば一般婦人又は初學者に益する處ろ多大なるべし定價七十錢實業日本社發行

△英文日記の書き方

國民英學會講師
今井信之著

英文を練習するに日常茶飯の事を利用するは極めて智慧ある方法なり本作は英文にて日記を認むる事を習ふ人の便に供しはしたるものにて一月より十二月までの間各方面の異れる人々の日記の模範を示し、英語を學ぶ人これに倣つて練習すれば知らず〱の間に興味を覺ゆると共に英文に熟達するを得べし定價三十五錢博文館發行

△會話と手紙

神田猿樂町建文館發行
マリーイーストレーキ著

是又英語を學ぶ人の便益あり、日常遣ひ馴れたる百般の事物を應用し會話と手紙にこしらへ是を尤も實際的に作り上げしもの故練習上益する處極めて大なるべし定價五十錢

△水底の王冠

山崎貞譯註

事柄に興味の多き物語を讀む時は感興の援けによつて記憶力を鋭敏にするの利あり、この利益を利用して語學を學ぶは又よき方法といふべし。この書は探偵小説家コナンドイルの作中の一を譯註したるものにて英文と和譯の間に註釋を加へ、其の意味、構造用法を叮嚀玩味せしむる樣詳述したるものなれば英語を學ぶ人のよき手引となり益する處多大なるべし定價四十錢建文館發行

△お伽テーブル

木村小舟編

巖谷小波氏を初めとし少年少女諸君に最も縁故深き十二名の諸氏の新作を各一編宛集めて一卷となしたるものにして、小波氏の笑地獄西村渚山氏の燕のマント、沼田笠峰氏の萬年花、押川春浪氏の猛獸實見譚、海賀變哲氏の助け合ひ等とり〲に面白し、定價金六十五錢博文館發行

△レデータイムス（第二號）

レデータイムス社

村上信子女史主幹の下に今回新に發行せられたる月刊婦人雜誌なり、菊版形二十頁許のものなれども材料豐富、趣味亦尠なからず、本號に掲げられたるものゝ中、村上女史の嫁入りてより今日まで如何なる經驗をなしたるか、モーパッサンの女の一生等は共に本誌の異彩とすべし一部十錢發行所下谷區南稻荷町六番地

△世界新おとぎ

兩谷一桑庵編

編者は暫く文筆に遠かりしが、今や其の彩筆を揮つて又本書を著はせり、本書に收むる所は

大男退治、銀貨の旅、マッチ賣娘等總て十五編にして、何れも外國の事柄を材としたるものなるが、之を一讀するに、此種の著書中一頭地出色の所ありて、お伽壇上新に一生面を開けるものあるを思はしむ。定價金五十錢、京橋區彌左衛門町十三番地武田文永堂發行

△世界お伽文庫第十一編 金色鳥

巖谷小波編

最も古き露西亞のお伽噺を集めたるものと稱せらるゝ千八百四十一年版のフオゲル氏の著書中の「シナル島と金髪の馬と及び灰色の狼」と云ふを題の如き其の下に紹介されたるものなり、内容の趣味深き事云ふ迄もなきが、中に挿入せる二十有餘の畫は橋本邦助氏の筆にかゝり是亦生氣の溢るゝを見る定價金十三錢博文館發行

△日本婦女寶鑑

竹内松治著

修身、齊家處世、育兒、衛生、禮法其他女道一とわたり事柄を記述し婦人智識の啓發と、德操涵養に資し未熟の婦女子をして善良なる一家の主婦たらしめんとの親切なる指導を趣意として編まれたるものなり、されば學校にありて學ぺる者の參考たるは勿論、學校教育を受けざる一般婦女子の讀物としても非常に有益にしてこの書を通讀してよく其の意のあるところを味へば智德の修養に益するところ至大なるべし卷末の先哲遺訓格言、才媛逸話、文藻、さては和歌俳句の事までも付け加へて趣味の開發に資したるは編者の用意周到なるとゝのへりといふべし定價一圓二十錢、京橋區南紺屋町印行社

△リンコルン一代記

内外出版協會

この書は米國近代の偉人リンコルンの一代記を子供に讀ませる樣極めて平易に譯述したるものなり、偉人の生立、家庭學校時代、愛讀書、勞働等より後日立身して政治家となり大統領に上りし事までを一部の物語として記したるものにて少年に向つて勤勉忠實、立志、自助、正義博愛等あらゆる美德をすゝめ人格の修養、立志の模範として讀むべき良書なり定價七十錢

△藤簍冊子（つゞらぶみ）

上田秋成作
宮崎三昧校

これは奇籍大觀の第一卷として出たるものなり、秋成は飄逸洒落の文士にして其一生は不遇失意に終りしもその文章は實に精金美玉にして歌文、和歌、隨筆、紀行、俳文等圓轉自在にして德川の中世に當つて光を放ちし一人なり、編者三昧道人は秋成に就て尤も深く研究されし人なるが今回其の歌集文集紀行隨筆中のすぐれたるもの數十種を校訂して藤簍冊子と題したり、雨そぼふりて心しづかなる日これを繙かば身は無何有の郷に遊ぶの思ひあるべし定價七十錢神田神保町日吉丸書店

△壯快競技 室内猛獸射擊

押川春浪案

冒險世界の主筆としてあらゆる壯快なる競技に練熟せる押川春浪猛士は今回表題の如き快活なる室内遊戲の妙法を新案せり、まづ一枚の盤面を射擊場と假定し、その面内に獸的數個を散點せしめこれを射擊して驅逐し或は敵の獲物を掠略する方法に擬へたるものにして勝敗の數頗る面白く少年少女の室内遊戲として破天荒の妙品なり、品は簡單なるボール製筒入にして一個の價三十五錢博文館發賣

読者文藝 懸賞募集（〆切六月十五日）

▲婦人盛裝の寫眞（結婚前後）

▲大家族の集合寫眞

▲婦人會婦人團體集合寫眞

▲才媛筆蹟

▲家庭重寶日用百事便

▲食卓日記

▲各地風俗の變遷

▲笑話▲短文▲和歌

▲令孃倶樂部（投稿隨意）

投稿規則◎笑話、和歌、短文、令孃倶樂部、百事便は端書に限る但し一枚の端書に二種以上は採用せず◎筆蹟は口繪の寸法に依る◎名宛は博文館内「女學世界」とし原稿に其種類を明記する事

▲賞品

△寫眞は甲參圓、乙貳圓、丙壹圓

△食卓日記、筆蹟は甲貳圓、乙壹圓、丙五拾錢

△和歌、短文、笑話、百事便、令孃倶樂部甲壹圓、乙七拾錢、丙五拾錢　秀逸參拾錢

△風俗の記事特七圓甲五圓乙參圓

毎月一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	金二十錢
四冊（三ヶ月分）	前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）	前金二圓八十錢

内（定刊數……十二冊　增刊四回……一、五、九、十一月價格同一）

郵税　一冊　二錢

廣告料

廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず

●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す

●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る

●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十二年六月一日發行（第九卷第八號）

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　博文館印刷所（東京市小石川區久堅町百八番地）

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　本局　三千百十三番、二千六百二十八番、三千二百二十九番

見よ数百萬の難病者を全治せしめたる

サンデン電氣帶

電氣帶發明者 サンデン博士之像



奇効可驚



登錄商標

主治効能 眼、耳、鼻、咽喉、船暈頭痛ニ奇効を奏す（説明書無代進呈）

アクチナ

●專賣特許 電氣美容器 は顔面皮膚を美麗ならしむるのみならず皮膚の諸病を治するに最も効力ある紳士淑女の最好侶伴なり

定價（特製金參圓半 並製金壹圓八拾錢（送料拾貳錢）

主治効能

神經衰弱諸症－腦神經衰弱－不眠症－胃擴張－胃腸病－常習便秘－消化不良－生殖器衰弱及無氣力－遺精－夢精－早漏－遺尿腎臓炎－糖尿病－其他一般内臓の衰弱諸神經痛－坐骨神經痛－頭痛－顔面神經痛－腕部及腰部神經痛－リユーマチス－腰痛－脚氣婦人諸病－ヒステリー－貧血症－月經不順－子宮病－憂鬱症－脊髓－中氣－產後及病後一般の衰弱症

●本具に依り慢性不治の難病を根治したる實證實に數百萬（説明書無代進呈）

定價

舶來品

三號帶	附屬共	金八圓
四號帶	同	金拾五圓
五號帶	同	金貳拾圓
六號帶	同	金貳拾五圓
七號帶	同	金參拾圓

和製品

戊號帶	附屬共	金五圓
丁號帶	同	金七圓
丙號帶	同	金九圓
乙號帶	同	金拾壹圓
甲號帶	同	金拾參圓

探見電燈



定價

大小四圓 形共參圓半 參圓

丙大形壹圓半 丙小形壹圓 送料十二錢

懷中電燈



定價

最上四圓 上等參圓半 並參圓

B形貳圓 替電池八十錢 送料十二錢

營業品目（電話、電鈴、表示器、電球電池其他電氣器具一式卸小賣）

△凡て代金引換のは前金貳割御送附を乞ふ

●本店（東京市京橋區尾張町二丁目 銀座通東側 電話新橋四一二二 振替口座東京一八四七三

●支店（大阪市東區心齋橋筋博勞町南入西側 横濱市相生町四ノ六三 電話一九三一

サンデン電氣商會

女（後付の一）

少女世界

第四巻第八號内容

六月一日發行

（口繪）

▼姉妹（彩色石版）……山村耕花筆

▼花その（同上）……荒井陸男筆

（記事）

▼ばらの花　▼針の運びと筆の跡

▼誌友の面影　▼八代と山口の少女會

◎少女唱歌　ほたる……田山花袋

◎お伽小説　雁の礫……巖谷小波

◎修養と雑巾かけ……東京府立第三高等女學校長　小林盈

▽第九回筆蹟……當選者

▽さゝらなみ……巖谷小波

▽おしつぼと白子……石橋思案

▽少女對話……西村渚山

▽少女小説姉……沼田笠峰

▽泉のほとり……山本迷羊

▽花子の懺悔……武田櫻桃

▽小説お伽無縫の衣……久留島武彦

▽おさな友達……生田嘉子

▽札幌愛讀者會

▽西洋話の種……松居松葉

▽白ゆりの巻……増刊豫告

▽少女笑話……安部しげ子外五名

▽筆蹟賞外佳作……高橋きい子外三名

▽少女美談

▽軍艦のお掃除……湖山人

▽蜘蛛の網……木村小舟

▽西行法師の歌……佐々木信綱

▽笙の秘曲……竹貫佳水

▽銀貨入の編方……大西矢枝子

▽さつき闇……沼田笠峰

▽新刊紹介……記者

▼少女會館

▲學藝室（文章、筆蹟、和歌、俳句）　▲談話室

▲娯樂室（考へ物、繪はんじ）　▲顧問室

●東京本町　博文館發行●

毎月一回一日發行

洋裝菊判本文紙數

百廿八頁　内十六頁二色刷

口繪…石版寫眞版挿入

正價一册拾錢

郵税一册壹錢

少年世界

毎月一回　一日發行

第拾五卷第八號　六月一日發行

洋裝菊判紙數一三六頁口繪如例
正價金十錢郵稅一錢五厘

口繪

坊が大きくなったならば（水彩畫）宮崎與平畫

世界の奇獸獅子牛（原色寫眞版）……西野猪久馬寫生

フランス大統領最近肖像（アート寫眞版）……

お伽小說 大蛇橋……巖谷小波

小松原文部大臣の少年時代……

新作お伽 光競べ……木村小舟

庭の隅……竹貫佳水

最近の出來事……（高等商業學校の騷動と代議士の拘引）

▼學藝

海の魔王　岸上理學博士

▼地理

北海の樂鄉　西岡英夫

▼歷史

山崎弔合戰　福田琴月

鎌倉最後の兵火　沼田笠峰

▼海外事情

トルコの新月旗　上田法學士

畫伯ムリロ　岡本文學士

▼趣味ある科學談

飛ばぬ口なき蟲　深谷若英

人間の口　內藤八郎

食物の味　松田綠

茶碗物語　日野蕨村

▼讀切少年小說

危なく絞首臺　雷晏

▼參觀記

名和昆蟲研究所　小舟

▼少年唱歌

花菖蒲　小波作　鐵笛作曲

其他

學藝顧問　少年文壇　少年會館　少年バック等……例に依って好材料紙幅に溢る

有益で而も面白い大懸賞問題提供……

女（後付の三）

東京本町　博文館　振替口座東京二四〇番

東京帝國大學文科大學講師 佐佐木信綱君撰

日本歌選

上古の卷

洋裝四六判總クロース上製紙數約三百餘頁 正價八十錢 郵税六錢

上下二千載、我が國文學の精髓として、國民が趣味好尚の中心たりし和歌は、その載籍の傳はれるもの凡そ幾千卷。その歌數に至つては無慮幾萬首。爲にこれを悉く涉獵せむこと、専門の士と雖も容易ならず。研究に志ある士をして、むなしく望洋の嘆あらしむ。佐佐木氏乃ち日本歌選の計畫あり。古來の選集家集はた諸書に散見するもの、うちより、各時代各作家を代表すべき作品を選出して、わが國歌の精髓を示さる。氏が該博の學識と、嚴密なる批評眼とは、よく傳統あり歴史ある我が二千年の和歌を縮撮し、選出し得て餘蘊なかるべし。茲に第一卷上古の卷。稿成りて刊行せらる。即ち上世歌史の第一期第二期、紀元前より天武帝までの歌謠を輯録す。而してこの兩期の作は其數少く、かつ普く諸書に涉りて採輯せるもののなきを以て、本卷は特に例外として、撰擇を用ゐず、紀記を始め風土記その他の古書よりすべて輯録せり。從つて本書は、上古歌謠を研究せむとする士にとりて最も完全なる資料たり。かつ卷末に、上世歌謠の概觀といへる論文を附し、第一に出處製作時代に就いて論じ、古來の假託の作を辨別し、第二に兩期の歌謠の性質とその變遷とを論じ、第三に祝詞壽詞語詞に就いて論じ、第四に兩期の歌謠研究の歴史を記述せり。又附録として、研究の參考書目、及び時代句數歌體等によりて分類せる表、時代と作者とによりて分類せる表等を添ふ。わが國文學を研究せんとする人和歌に志あり、歌學を學ばむとする人の爲に必須の書なり。

佐佐木弘綱翁遺著 佐佐木信綱君校訂

和歌 世々のあと

全一冊

洋裝四六判美本 紙數百四十六頁 正價二十八錢 郵税四錢

和歌世々の跡は明治の歌壇に多大の功勞ありし佐佐木弘綱翁の遺著にして、國初より近世に至る凡ての歌人の代表的短歌を、時代を追うて採録せるもの。專ら初學者の爲にとて、その選出に、或は戀歌を省き或は難解の歌を避けられたれば、和歌の小歴史として、作歌の模範として、獨習用に又高等女學校の教科書等に、最も適當なる書なり。

佐佐木信綱君著

歌學論叢

全一冊

洋裝四六判總布製 美本紙數五八〇頁 正價金壹圓 郵税八錢

歌學論叢は、佐々木氏が、數年前より帝國大學文科大學に於て、和歌の歴史を講ぜらる、其研究の餘材として成れるものなり。或は燃犀なる眼孔を以て「和歌と時勢」「和歌の將來」「歌學の根本」「上世の和歌」「歌格の研究」等に就て論究し、或は卓拔なる見識を以て、「人麿と赤人」「貫之」「西行」「實朝」「景樹」等を論評し、或は、「仙覺以前の萬葉研究」「戸田茂睡」等精細なる考證あり。或は「萬葉集の女歌人」「建禮門院右京太夫」等趣味津々汲めども盡きざるものあり。又「六人部是香」「大隈言道」「野村望東尼」等未だ世に知られざりし歌人歌學者を紹介したるが如き、國分學史上に一新事實を提供せるもの。其他「萬葉集私見」「近世歌人逸話」「家集のいろ〳〵」等すべて廿篇、五百八十頁にわたり、該博なる學識と清新なる文藻と相俟ちて、我國の歌學界に新生命を與へたる書と云ふべく、又上代より新世にいたる側面の日本歌學史と云ふを得べし。苟くも和歌に志あり。國文に興味を有する人々にとりて必讀の好著なり。

東京本町 博文館

女(後付の四)

文學士 大町桂月君新著

關東の山水

全一冊

洋装四六判上製美本
紙數約五百五十頁
（風景寫眞版三拾餘圖挿入）

正價金壹圓
郵税十錢

露を吮ひ霞を喰い飄々乎として行き悠々然として止まる高山の巓窮谷の底健脚到らぬ隈もなく靈筆縱横關八州の名所細大漏らさず文章山水渾然一致し高士紙表に躍動し雲烟机邊を撩繞し人をして遺世超俗の思あらしむ洵にこれ大町桂月先生獨得の文境加ふるに地圖あり數十葉の寫眞あり中村不折小杉未醒丸山晩霞高村眞夫先生の挿畫あり皆當代の逸品錦山花を添ふるの觀あらむ



行雲流水

全一冊洋装
菊半截頗美本
紙數三百餘頁
正價金三十錢
郵税六錢

大町桂月先生の近業數十篇を收む議論叙事抒情何くに往くとして可ならざるは無く高きを求めずして自から高く街はず伴らず風骨稜々として氣韻生動す行雲流水の趣は當代の文壇獨桂月先生の筆にのみ見らるべし

東京本町 博文館

文學士 久保天隨君著

古文眞寶新釋

古文眞寶前後兩集載するところ、凡そ四百篇、これを通覽玩味すれば、あらゆる支那文學に就いて、略ぼ類別體制の變を盡し、且つ歷代傑製の一斑を知るを得べく、まことに、文學に志あるもの丶必讀書たるに負かず。されば、この書、一たび我が邦に傳來せし後、笑雲、道春、遯菴、貞齋以下、箋釋相繼いで世に出で、僕を易ふるも盡きざらむとす、但し前後兩集を併せて一貫せしものは、未だ之あらず。天隨先生、こゝに慨するところあり、乃ち新釋を撰せらる。通篇用意周匝、解說簡明、さすがに、平生の蘊蓄を傾注して、前人に超越し、詳明完備、以て加ふるなし。今や前集刊成る、仍つて江湖の一讀を勸む。

全二册 菊判和裝美本

前集（紙數五五〇頁） 正價七拾五錢 郵稅拾錢

後集（紙數[illegible]〇〇頁） 正價八拾五錢 郵稅拾貳錢

東京日本橋本町三 博文館 振替東京二四〇番

澤田順次郎君著

雌雄進化論

破天荒の快著は來れり。其齎らす所何？是れ著者特得の筆に成れる雌雄淘汰の解說にして、動物界に於ける雌雄の起源、發達、關係を嚴密に生物學上幷に哲學上より論究したる本書の如きは、恐らく他に比類なかるべし、雌雄淘汰は動物の進化に大なる關係ありて「兩性に關する問題」の基礎たること言を俟たず。曩に發表したる「兩性の秘密」一名「人類性別學」は此の點に於て夙に其意を漏らしたれども、該書は人類を主とせるものたるにより、詳論の餘地なかりき。故に男女の差異及び關係を根本的に說明せんと欲せば勢ひ動物界に亘りて一般動物に於ける雌雄形質の原因に言及せざるべからず。これ「兩性の秘密」に次て本著ある所以也。凡そ世の博物學、哲學、社會學、教育學等を研究せんと欲する人は是非共一本を備へざるべからず。……

全一册

洋裝菊判上製
紙數百八十二頁
寫眞版精密木版圖挿入
正價四拾五錢 郵稅六錢

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇番

女（後付の六）

最新發明 肺病。肋膜

新藥に就きて

獨逸ドクトル 高平醫學博士（醫事週報二七號報告再錄）

新治療劑主藥の諸結核による熱度下降は可驚著効あり四十度を示す熱は本藥應用後は常温下に減じ患者は藥劑が無味なるを喜び之が服用を嫌忌せず食慾を増進す

右の外本劑の著効ある事は既に諸〔〕の試驗報告及賞賛により明らかなれども今本院服藥患者につき其成績を左に報ぜん

●金森某（總て上住所姓名を秘す）**兩肺結核**に陷り咳嗽たん盜汗
女子三年前發病途に末期重症の動悸呼吸不利。不眠。發熱激しく度々喀血し非常に羸痩す服藥壹週頑固なる熱を去り咳嗽喀痰を輕快す服藥貳週喀血やみ臥蓐せしもの屋外に出で日光に浴をとるに至る連用三十日病全く治し食慾進み體重を増加せり

●兵頭某 **肋膜炎**（喀血無し肺病初期の疑あり）胸痛み食不振身體倦
卅一歳男 意盜汗。咳嗽。頭痛あり身體羸痩を見る卅九度に至る發熱あり服藥五日奏効あり二週にして全治す僅々二週にて全治する如きは病輕症なるに因るとは云へいかに新治療劑が肺病。肋膜。肺炎。肺尖加答兒。氣管支加答兒。腹膜結核等の諸症に對し可驚効力ある全治藥なるを知らん以下病歴を細述する時は冗長に亘るを以て左の通略式とす

患者	性	病名	成績
三村	男	兩肺結核	全治
中川	男	肺尖加答兒	全治
〔〕信	男	結核性肋膜及腹膜炎	微効
笠井	女	肋膜炎	全治
上野	男	右肺結核及腸結核	全治

患者	性	病名	成績
籠谷	男	兩肺結核末期	無効
宮本	女	結核性肋膜炎	全治
岡田	男	氣管支加答兒及肺炎	全治
阿崎	男	右肺結核及腹膜結核	全治
神村	男	肺結核初期	全治

斯の如き好成績は從來の藥物に於て見る能はず我國藥劑界名譽の發明藥として報告する義務あるを信ず本劑は元藥一ポンド六十圓の高價藥なるに關らず一週貳圓二週參圓九十錢參週五圓七拾錢四週七圓貳拾錢に經濟の許す限りの價を以て分藥する者にて利益專一の賣藥に非ず又効力多大にして從來の醫藥賣藥の如き長き服藥無しで全治す殊に

喀血

と其豫防に可驚効あり又他藥と混服害なき故醫藥の傍ら服用妙ならん本藥入用患者は東京神田堅大工町十三番地療養院製藥所

村尾明治堂（振替口座東京壹四參壹九番）

へ右料金添へ申込あらば至急送藥す吾人は病者に向つて新治療劑は現今に於て完全なる發明藥なるを紹介し安心服藥せん事を勸むると共に醫師は自家患者に本劑を投藥せん事を勸告す

●又服藥希望なき患者も遠慮なく送料郵券二錢添申込あらば新治療法の書を無代貰ひ受け是非一讀あれ益する處多からん

新綠號

洋裝菊判本文二百四十頁
石版數度刷水彩畫二葉
寫眞版口畫六頁
正價金廿錢郵稅二錢

一、古今文學の新研究
萬葉集、源氏物語、枕草紙、西鶴、ゴンクール、フロオベル、イブセン、ツルゲーネフ、ゴーリキイ、チエーホフ、モウパッサン、ズーデルマン、其の他の諸家に對する諸文士の新印象錄也

一、名家の文話詩話

一、記者の文章講話

一、諸家の小品十篇

一、讀者の應募小品十數篇

博文館

女（後付の八）

◉淺川博士曰く

胃には消化の外肝要なる消毒作用があるから强壯なる胃液の作用に逢へば黴菌と雖も忽ち滅殺せらる然るに消化藥には此消毒力がないから根本より健胃の工夫が必要であると胃活或は胃活錠は即ち根本より胃の疾病を治し胃液を作り胃腑を活動せしめて消化消毒の兩作用を全ふせしむる絶大の効力あり

◉歐米に行はるゝ民間治療法

とは佐多博士の言はるゝ通り家毎に常に(胃活又は胃活錠の如き)健胃劑を貯へて置て所謂家庭の常備藥として男も女も老人も子供も時々服用するは勿論發病の際手輕に素人療治をする事である

(定價)

胃活 壹圓、六拾五錢、四拾五錢、貳拾五錢拾錢、

胃活錠 壹圓、五拾錢、貳拾錢、(取次店に無き時は郵送す)

注意

胃活錠は携帶には至極便利なり
胃活錠は飲むに湯水を要せず
胃活錠は旅行宴席等に缺可らず

藥は必ず思立たる時に買玉へ
藥は必ず高きものを買玉へ
藥は病の輕き間に買ひ玉へ

効能

胃弱◎溜飮◎胃加答兒◎胃痛◎胃痙◎腹滿◎胸痞◎食慾不進◎食慾過進◎食傷◎惡心嘔吐◎呑酸嘈雜◎宿醉◎大便不通等其他一切の胃病に奇効あり

陸海軍醫 合議製藥

胃病新藥



本舖 東京市銀座一丁目 山田安民藥房 電話新橋一三〇八番

發賣元 大阪南久寶寺町堺筋東 山田安民藥房 電話東千二〇八番

◉請賣所日本國內は勿論海外要所各藥店にあり

女學世界
（毎月一回一日發行）
第九巻第八號
（明治四十二年六月一日發行）（毎月一回一日發行）
（明治卅三年十二月廿五日）（第三種郵便物認可）

香氛紙 Perfumed Paper.

（一名匂ひ紙）

此廣告に依り御注文の方へは日用經濟家庭問答一部を進呈す

品切れ中の處夏季用として新荷佛國巴里より到着せり



一昨年初めて巴里の交際社會に現はれて大歡迎を博したる「ラーグチン」と稱する頗る高尚なる香氣を有し紙入れ、莨入れ、箪笥、書籍の間に入れ置けば一枚の香氛紙にて一ヶ月以上馥郁たる香氣を保ち烟草は一種いふ可らざる爽快の香味を加へ手紙の中に封入すれば床しき香りは文讀む友に一層の快感を與へん

十二枚入 一包 正價金參拾錢 送費金貳錢

東京丸の内
日本一手販賣 報知社代理部
電話本局壹六〇八番 參弐壹壹番
振替口座七三一八番

（定價金貳拾錢●郵稅貳錢）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版⑱
明治42年5月（第9巻第7号）、6月（第9巻第8号）

2009年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3733-6　C3321